
真・恋姫†無双 ～乙女繚乱 三国志演義～ 呉書 虎狼天下覇道の巻

アガギル・グレイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～乙女繚乱 三国志演義～ 呉書 虎狼天下霸道の巻

【Nコード】

N2707I

【作者名】

アガギル・グレイン

【あらすじ】

戦争が終わり、事後処理が一段落した主人公セツナ・フォーリングは研究の一環として次元転移の実験をすることになった。

次元転移は成功したものの、飛ばされた世界はなんと三国時代の中
国だった！？

次元転移の衝撃で気絶してしまったセツナが次に目覚めたのはベッ

トの上だった。しかも最初に話しかけてきた女性は三国志で有名な武将だった!?

名のある武将が女性である平行世界と悟るには時間が要らなかった。保護してくれた館の当主は保護条件としてとんでもないことを言うてきた!?

「種馬になりつつ、武将として働きなさい」

考えたあげく、セツナは「武将としてこの世界を堪能することに決めた!

激しい戦闘あり、女性と甘い時間あり、そして儂い別れの時もあり!?

元の世界で続いていた因縁の決着がついにつく!

セツナの体の秘密がついに明らかに!?

三国時代でセツナは何を思い、何を掴むのか!?

12月5日 一時的に更新を停止。再開は未定。

第一話 飛ばされた世界（前書き）

この小説は、制作時間の短縮、作者の構成力不足のため、本編をそのままコピペしています。ネタバレが嫌いな方はご遠慮してください。

また、作者のオリジナル小説とクロスオーバーしています。分からないことが多々出てくると思います。あと、主人公がかなり強めに設定してあります。そういうのが嫌いという方もご遠慮してください。

さらに作者の小説はパソコンのメモ帳で執筆しているため読みやすさ向上で一行ごとに改行をしています。そのため行間がとても不自然になっていますがご了承お願いします

意見、感想、質問などはドシドシ書いてください。

それではお目汚しですが、閲覧していつてください。

2010年2月20日 題名を変えました。自分勝手ですがご了承下さい。

第一話 飛ばされた世界

「じゃ、行ってくる」

そういつて、セツナ・フォーリングは最近修理が完了した次元転移装置パイロドライバーの中心にたった。

「本当に大丈夫なの？MSの介助なしでの次元転移って・・・」

不安そうに聞く女性、トウルク・スイーツは制御室からセツナを見る。ほかの研究者も不安そうな顔をしている

「理論上、可能です。今回の改良で時粒子で出来た膜を被験者の体に覆うことでワームホールを通過できるようになりました。むしろMSで実験が行えればいいんですが現状MSを出すわけにはいかんといわれました。」

説明している男、フェル・アンダーソンは自信気に言い放った。この男は次元学の権威であり、あらゆる論文でタイムワープが可能であることを立証した。

今回、口外しないことを条件にライティックスの極秘事項、パイロドライバーの修理を受け持ってくれることになった。

「大丈夫だって、トウルク！今までパイロドライバーでの実験は失敗したことがないらしい。つまり従来の物よりは遙かに信頼性があるって事だ。」

まだ不安そうなトウルクに向かって、安心させるために親指を立てる。少し安心したかトウルクの顔に笑顔がこぼれた

「大尉、いいですか？通信は極力使わないでください。年号によっては混乱を招くおそれがありますから。あとこちらに帰ってくるときは、リドライバーキューブを起動させれば帰ってくれますから。」

「わかった。無事に着いたら連絡する。」

リドライバーキューブとは、元の次元に戻るために、行きと同じように次元転移するためにワームホールを開くために必要な時粒子を

蓄えられる装置である。

行きの時に時粒子をためるため帰りの場合ただ転移した後を追えばいいだけである。そのため行きよりいくらか安全である。

元来MSに搭載しなければならぬほど大きかったが、原子メモリの技術のよりこぶし大にまで小型化が進んだ。

「では、始めますよ。電源ON。」

「了解。電源ON・・・すべての機器、正常に作動中・・・」

「時粒子チャージ、開始！」

「時粒子チャージ開始。コンデンサー、正常稼働。現在10%・・・」

実験室が徐々に淡い蒼い光に包まれていく。

「チャージ80・・・90・・・100%！」

「パイルドライバ起動。対閃光防御用意！」

「対閃光防御用意！フィルターかけます！」

制御室の窓に黒のフィルターがかかる。実験室の様子がわかりづらくなったがそれでもまだセツナの姿は確認できる。

「パイルドライバ起動！」

研究員がスイッチを押した瞬間、目を閉じていても網膜に焼き付くほどのまぶしさが実験室を満たした。

光が収まったときには、パイルドライバの中心にたっていたセツナはいなくなっていた。

「・・・結果は？」

「ワームホールが開いた痕跡があります。おそらく成功かと・・・」

「あとは通信待ちか？負荷はどれくらいになった？」

「想定値を遙かに超えています。おそらくあと一回しか耐えられませんが・・・」

「仕方がない・・・とにかく整備急げ！」

「わかりました」

そういつて、研究員達があわただしく動き出した。

「さて・・・どうなっている事やら・・・」

「もう春じゃというのに・・・少し肌寒いのぉ・・・」

広大な荒野で佇んでいる二つの影の一つがいった。空は満天の星空だが空気が少し冷たい

「そうね・・・気候が狂っているのよ？世の動きに合わせて・・・もう一つの影がいった。月明かりに移された肌は健康そうな褐色の肌であった」

「そうかもしれないませぬ・・・無能の州牧による圧政、盗賊の横行、さらに飢饉の兆候まで出ておる。世も末じゃな・・・まったく・・・」

少し頭を振りながら言うが、あまり関心がなさそうに見える。首を振るたびに月明かりに映し出される白銀の髪が揺れる。

「王朝では十常侍達が天子の名を欲しいままに好き勝手やっているし・・・自由に生きたいからって、盗賊になるやつのが持ちもわからなくはないけど・・・」

少し苦笑気味に笑ったが、これも友人のおもしろくないジョークを笑ってあげているような感じだった。月明かりに照らされた桃色の髪がまぶしく見える。

「真面目に生きるのが嫌になる、か・・・ここまでひどいと今にも乱が起きそうじゃな・・・」

「そうね。だけど大乱は望むところよ？乱に乗じれば私の野望も達成しやすくなるもの？」

そう言い放ち、不敵に笑う。影が陰りぱつと見サキユバスのように見えた。

「まったくじゃな！はっはっはっ・・・」

もう一人も釣られて、体を揺らしながら笑った。

「今は、袁術の客将に甘んじているけど、乱世の兆しが見え始めている今の内に独立しないと・・・」

笑顔が消え去り、目に凶暴な光が宿る

「堅殿が死んだ後、うまいこと我らの領地を取り込んだつもりだろうが・・・いい加減、奴らの下で働のもうんざりじゃ！」

不満をあらわにした声が、大気に響き渡る。近くに人がいたのなら何事だと振り向くほどの怒気がこもっていた

「まったくね・・・だけど私たちの力はまだまだ脆弱。何かきつかけがあるといいんだけど・・・」

「きつかけか・・・そういえば策殿？こんな噂があるのを知っているか？」

「何？どんな噂なの？」

桃色の髪を持つ女性が興味深そうに目を向けた。

「ふむ、黒天を切り裂いて、天の彼方から飛来する一筋の流星。その流星には天の御使いを乗せ、乱世をを鎮静す・・・官輅という占い師の占いじゃな」

「官輅って、エセ占い師で有名な？はなっから胡散臭いわね・・・」
興味がわいただけに、あまりにも胡散臭いため、落胆も大きかったのか肩をがっくりと落とす

その姿を見て、白銀の髪の女性はあらかた予想していたのか苦笑を返す

「そういう胡散臭い占いを信じてしまっくらい、世が乱れていると
いうのだろう・・・嘆かわしいことだ」

「縋りたいって気持ちはわからなくもないけど・・・でもそういう
のって、あんまりよくないわね。」

「妖言風説の類じゃからな・・・だが仕方なかのうて、明日を無事に
迎えることがわからない時代じゃからな・・・」

そういって、ため息をついた。まるで、何かをはき出すかのように・・・

「本当、世も末なこと・・・」

全然思っでなさそうな表情で白銀の髪の女性に明るくいった。

「まあ、その話はいいとして・・・策殿。偵察もこのくらいにして、
そろそろ帰ろう。もう夜もだいぶ更けている。」

「そうね。早く帰らないと冥琳にー」

そのとき、あたりの空気が急に動き出した。それに伴って、パチッパチッという音が辺りに鳴り響いた。

「・・・なに、この音？それに辺りの空気もおかしい・・・」

「策殿！儂の後ろに！」

白銀の髪の女性は、弓を構えながら桃色の髪の女性の前に守るように出る。その間も辺りの空気は不穏に動き、音も大きくなっていった。

「大丈夫よ。それより祭・・・気をつけて！」

桃色の髪の女性も剣を抜き、いつでも向かい打てるように構える。

「盗賊か、妖か・・・何にせよ。来るなら来なさい。痛くないように殺してあげるから・・・」

そういつて、目に冷徹な光を宿らせ、正面を見据える。

だが、いきなり辺りが昼になったように明るくなった

「なに？いきなり視界が・・・！」

「策殿！」

轟音とともに目も開けてられないような光に包まれた。

やがて光が収束し、元の静粛な夜に戻っていた。

「っ・・・元に戻った？」

「策殿！お怪我は？」

祭と呼ばれた女性は、急いで桃色の髪の女性に駆け寄ってきた。

「大丈夫よ。ありがとう・・・でも、今のはいったい？」

「わからん。妖か狐が我らを化かしに来たのか・・・」

二人は並んで周辺の状況を調べる。しかし目の前は荒野が続くばかりだった。

「どう？」

「いや、先ほどと代わりは・・・ん？」

祭と呼ばれた女性の視線が一点に注がれる。

「どうしたの？」

「あそこに人が倒れておる」

視線の先に、青と白が見えている。荒野の上にはあまりにも不自然

すぎる。

「うそっ？ホントに？」

「さきほどまでおらんかった・・・あやつが妖かの？」

「どうだろ？・・・行ってみましょう！」

言い終わる前に走り出し、人が倒れているところへ向かった。

「策殿、危険じゃ！・・・ええい、全く！昔から人の言うことを聞かんお人じゃ！」

そういつて、後を追いかける。しかし、相手が早いのかみるみるうちに引き離されていく。

策殿と呼ばれた女性は、すぐに人がいる場所にたどり着く。そして真っ先に顔を確認した

「・・・男の・・・人？」

顔からして、二十前後の男が倒れている。これは普通におかしい。この年ならば行き倒れにならない術ぐらい知っているだろうと思っ
ているからだ。

もっとおかしいのは、服装だった。前の閉じていない青色の服の中には黒地をベースに袖に白のラインが入っている物を着ている。その中にも黒地の物を着ているようだ。

ズボンは少し灰がかった白のズボンであるが、これもおかしい。こんなズボンは見たことないだ。

さらに目に付いたのは、腕だった。手首から下が銀色の手になっているのだ。これには素直に驚いた。

「・・・ふうん。何かおもしろそうね？」

もう少し調べようと、体を起こしたところで・・・

「はあ、はあ、はあ・・・策殿、あまり老いぼれをイジメんでくれんか？」

やっと追いついてきたのか、肩で息をしながら祭が話しかけてきた。自分的にはそんなに急いでなかったのだが、すこし速かったかなと、反省する。

「ああ、ごめん・・・体は大丈夫？」

「久々に走って、心臓が壊れそうじゃ！」

胸をさすっている辺り本当だろう、戦になると我一番と出たがる癖に、困った重臣だ。

「少し運動不足じゃないの？」

「そうかもしれない、最近まともに鍛錬も行っておらん。それにしても・・・この小僧、いったいどこから？」

祭は何か奇妙な物を見るかのような目で男を見ている。無理もないか・・・。

「さつきは居なかったのに、大きな音と光が収まった後には居た・・・あの光と音が原因としか考えられないわね。」

「光とともに現れた小僧か・・・官輅の占いの通りということか？」

「占いの通り、ね・・・じゃあ、この人が天の御使いつて事？」

嘘から出た真でもあるまいし、いまいち信じられない。だけど、目の前にあるのは・・・

「占いを信じるのであればな？確かにこの世とは思えない服装をしておるし、あながち外れではないかもしれぬ」

「そうね・・・本当なら、おもしろんだけどね？」

「この場では判断が下せん・・・策殿、いかがする？」

こういう輩は捨て置くのが一番だけど、何かおもしろそうだし・・・連れて帰りましょう」

「いいのですかな？こやつは妖かもしれませぬぞ？」

「それは大丈夫よ、この子は立派な人よ？それに・・・」

そういつて、男の体全体を見る。目で見るのではなく、気で見るとめに・・・

「この子の気、武人としてはかなりの者よ？一般兵あたりだと裸足で逃げ出すぐらいの気を醸し出しているのよ・・・祭もわかるでしょ？」

「それは・・・確かに。」

いったん男を寝かせ、祭と向き合う。これから言うことの覚悟のためにも。

「もし本当に天の御使いなら保護するし、民の害となるなら、私が殺してあげる。・・・一石二鳥でしょ？」

「名を上げるにはもってこいか・・・策殿の案に賛同しよう。」

「ありがと！それじゃ、この子の連行お願いね？」

「承った」

祭が男を背負った。がすぐに・・・

「・・・策殿、この小僧・・・少々重いのだが？」

笑える。呉でも随一の猛将が男一人持ったぐらいで根を上げている。こんなおもしろい場面をみすみす終わらすわけがない。

「運動不足なんでしょ？少しはがんばって！」

「・・・手伝うという気持ちは、起こらんのか？」

「これっぽっちも？」

「ぐぬぬ・・・少しは老体を労らんか！」

「あはは〜がんばってね」

そして祭と並んで歩き始める。祭はまだ文句を言っているが男を苦になく背負っている。私は男の顔をもう一度よく見た。

初めて顔を見たとき、私の勘がすぐにこの男を保護すべきと告げてきた。考えるまもなく私はすぐにこの男を保護しようと決断した。

それがまるで私の大望への第一歩であることを確信したかのような決断だった。私だって、ちゃんと物事は考える。

だけど・・・私のすべての勘がそう囁いたのだ。この男を保護せよと。

誰に何を言われようと・・・保護した結果がどうであろうと・・・

私は、この男を保護し続ける。そして、孫呉の役に立たせる。

少し前の祭との会話は、そういった覚悟をするための物でもあった。

少し歩いたら、城門が見えてきた。祭はだいぶ疲れているみたいで、ふうふう言っている。

「お帰り、雪蓮。」

城門の前で、黒髪の女性が心配そうな様子で待っていた。

「ただいま、冥琳。お出迎え？」

「帰りが遅かったからね。それに雷鳴も聞こえていたし・・・大丈夫だった？」

「そつちの方は大丈夫よ？それより拾い物してきたの。」

「拾い物？」

冥琳は怪訝そうに聞いてくる。私の拾い物ってそんなにやつかいな物が多いのかしら？

「そう、これ」

祭が背負っている物に指さし、教えてあげる。

「・・・なんなんだ、あれは？」

やはり、初めて見ると変な物を見るような目で見るか・・・軍師である冥琳はそれが人一倍強いし。

「官輅の占い、知ってる？」

「いきなりどうした？・・・確か、空を切り裂くような流星とともに降りてくる天の御使いがどうのこうの、という物だな？」

やっぱり知っているようだ。無論冥琳は端っから信じていないみただ。もしかして知らなかったの、私だけ？もうちょっと街の様子も知っておこうと反省する。

「そう。で、この子がそうかもしれない？」

冥琳は呆気にとられている。無理もないか・・・

「はあ？・・・雪蓮、熱でもあるのか？おまえが妖説の類を信じるなんて・・・」

確かに現実が見えている者なら、この手の話は信じない。せいぜい子供か、嗜好きな大人が信じるぐらいだろう。

「私だって、最初聞いたときは、与太話と思ったわよ！だけど、この子の現れ方を見れば、そうも言ってもらえないのよ？」

「どういうこと？」

「祭、説明お願い。」

男をおろし、息を整えていた祭がやつとこちらに振り返った。わたしは……めんどくさいからパス！

「うむ、まず辺りの空気がどこか一点に集まるかのようにうなり、薪が燃えるような音が鳴り出した。そして、いきなり昼になったかのように明るくなり、その直後に

轟音とともに目も開けられない光が我らを包んだのだ。轟音と光が収まった後にこ奴がおったという事じゃ。状況からして、光と供に現れたとしか考えられん！」

「……なるほどね。それで連れて帰ってきたと？」

冥琳のはまだ信じていない。実際に見ていないと信じないのは当然か。

「ええ、本物の天の御使いなら、孫家で保護するのは上策。害をなす者なら私が殺す。どっちにしる損はないでしょ？」

「ふむ……名を上げるには最適な生け贄か……分かったわ、扱いはどうする？」

「本物なら……孫呉に天の血を入れるわ！」

「血を？ どういう意味だ？」

「天の御使いの子孫……その風評を得るために、この子には悪いけど、種馬になってもらうわ。」

またも呆気にとられた冥琳の目を見て、言っちゃった。こうでも言わないと、保護できない。

「また突拍子もないことを考えたわね？」

内心動揺しているのだろう。動揺する冥琳は珍しいから腹の中でひとしきり笑った。

「孫家千年の大計のためよ？ 天の意志を孫呉に仕える武将達に宿す……庶人が食いつきそうな、いいネタになるでしょ？」

「本物ならね？……まあ、畏敬を持たせるための手段としては上策かもしれないけど？」

やつぱりまずは損得の目で見るか……断金の仲としては少し悲しいけど、軍師からしたら当たり前か……

「この子、きつと本物よ？私の勘がそう告げているもの！それに・・・冥琳も分かるでしょ？」

「・・・私も鍛錬はそこそこしているから、分かるわ・・・確かにすごい気ね？」

「そうでしょ？だから保護しようよ！」

「あなたの勘の良さは認めるわ。眼力も・・・だけど、全面的に賛成は出来ない。まだすべてが分かっているわけではないから・・・うーん、後一押しだがいい案が思い浮かばない。

「では、こ奴が目を覚ましたら、尋問するのはどうじゃ？扱いはそれから決めるのもよかろう？」

祭の案は一理ある。私も首を振って賛同する。

「・・・そうしましょう。黄蓋殿。すみませんが、この者を適当な部屋に。」

よし！運ばれた後、兵をだまして起きていたら話を聞きに行こう！

「・・・またこの小僧を背負うのか・・・まあいい、扉の前に二人、窓の外に二人、詰め所に十人ほど詰めておけばよいか？」

「それで十分でしょう・・・あと雪蓮？」

冥琳が釘を刺すような目で私を呼びかける。まさか・・・

「なに？」

出来るだけ平静を装って、返事を返す。でも・・・ばれるだろう。

「あなたは、明日までこの男に近づかないこと！いいいわね？」

くうく、やっぱりばれてる・・・

「・・・先読みしすぎだつて」

文句の一つも言わないと気が済まない。まったく・・・まあ、そこがいいところなんだけど。

「あなたの行動なんてお見通しよ？約束してちょうだい！」

「はあ・・・了解。じゃあ、二人ともこの子のこと、お願いね？それじゃ、お休み」

明日になれば、話が聞けるのだ。楽しみは後に取っておこう。いろいろあって、疲れたから早く寝よう。

「相変わらずなお人じゃな。」

雪蓮が部屋に戻った後、祭はあきれた感じで言った。

「後で、部屋に忍び込むつもりだったのでしょうか。油断も隙もない」
冥琳も、慣れてはいるがしょうがないという表情だった。

「爛漫娘のお守りも、大変じゃな？」

「ふふつ、あなたこそね」

「くはは、違くない！」

祭は豪快に笑い始めた。冥琳もそれに釣られて軽く笑う。

「では、公謹よ。儂もいくぞ。小僧を背負っていかねばならんし・

」

「ご苦労様です。雪蓮を入れないようにだけ、兵に徹底させてください。」

「わかつておる。」

祭は、男を背負い適当な部屋に運んでいった。それを見送った後、冥琳も自分の部屋に戻っていった。

「・・・っ！」

朝日がまぶたを通して入り込んでくる。意識があるということとは次元転移に成功したと言うことだが・・・

「・・・ここは？」

周りを見渡してみると、どうやら部屋の中だ。自分はベットの上で寝かせられていたのだ。

「気絶するなんて、聞いてなかったけど・・・まずは持ち物の確認からだ」

上着を脱ぎ、着込んでいた最新の防弾、防刃、防災機能があるスペクトラムK-?繊維の長袖も脱ぐ。着けていたガントレットもはずした。

拳銃、スペアマガ、パイルドライバー仲介型通信装置搭載のエージ
エントノート、リドライバーキューブ、練金手袋、翻訳機能搭載コ
ンタクト型ディスプレイとその電源装置

すべてあることに安堵し、すべてしまい上着を羽織り、ガントレッ
トを装着し、音響視力のタレントで周囲を調べる

（扉に二人、窓の外に二人、30メートル離れたところに十人ほど
・・下手に動かない方がいいな。こちらに向かってくる気配も・
・なし）

そう確信し、エージエントノートの時空通信機能を起動させる。

「こちらセツナ。次元転移に成功。聞こえていたら、年号とその年
代の30年間のデータを教えてくれ。どうぞ」

通信を送り、数秒待つ。すると・・・

「こちら、フェル。受信までのタイムラグは約6秒。ご無事ですか、
大尉？」

どうやらうまく機能しているみたいだ。テストもしてなかったから
不安でしろうがなかった。

「ああ、無事だ。それより早く年号とデータを教えてくれ！」

「わかりました。時粒子の跡をたどっていくと・・・大尉は今地球
時代の西暦184年の中国にいたことが分かりました。今から暦と
30年間のその大陸と他の所のデータを
送ります」

少し待つとノートの3Dディスプレイに現在地、今の時間、今の場
所についてのデータとそこあ30年間の歴史のデータが表示され
た。

「OK。データが来た。」

「では、これ以降通信は極力使わないようにしてください。帰ると
きには必ず人目が付かない場所で行ってください。そのときは連絡
を入れてくださいね？」

「了解だ。なるべく早く帰る。っていつても、設定は行ってから1
0分後につくように設定されているけどな」

「そうですね。では御武運を！」

そういつて、通信機能が終了した。あらためて、中国という場所のデータをみていく。

現在中国大陸は、後漢と呼ばれる国が大陸の三分の二を統一しているが、すでに朝廷と呼ばれる政府的なものの権威はなく地方の豪族達が幅を利かせているのが分かった。

セツナがいる場所は袁術と呼ばれる領主の一部で荊州と呼ばれるところであり、孫策と呼ばれる客将の城にすることが判明した。

（俺がいた世界とあんまり変わらんないんだな・・・運営の仕方が違えど、人の動きは変わらない。）

他のデータも一通り見た後、素性をどうやって誤魔化すか考えた。

（とりあえず服装が違はずだし、どこから来たと言えばいいのだろう・・・）

と、黙考している内に扉が開き・・・

「おっ、目が覚めたか、小僧？」

「・・・」

扉から現れた白銀の髪の女性を見て驚いた。なぜなら、かなり綺麗だったからだ。ここまで綺麗な人は俺が知っている限り、リローネか、ナナ叔母さんぐらいだ

「気分はどうじゃ？怪我はしとらんか？」

「ええ、気分は爽快です。怪我也打ち身ぐらいですし・・・失礼ですが、あなたは？」

「ん？儂か？儂の名は黄蓋、字は公覆という。以後見知りおけ」

「・・・黄蓋？」

さっき見たデータを思い返してみる。確か孫家の重臣で、孫堅が旗揚げしたときから仕えている老将である。確か男であるはずだが・・・

（・・・ああ、別の平行世界か・・・実験データにもまだASが出ていないはずなのにASが出てきたって言う話があったから。）

「そう、黄蓋じゃ。字は公覆。お主、ちゃんと言葉は理解できてお

るか？」

黄蓋と名乗った女性はこちらの顔をのぞき込んでくる。近づかれると少し緊張する。

「はい、言葉は理解できています・・・ここはどこですか？」
とりあえず場所の確認。デジタルだけでは信用できない。

「ならいい。ここは荊州南陽。我が主、孫策殿の館じゃ。」

場所も合っていた。黄蓋さんの主も孫策ということが分かった。ここが史実とは別の平行世界であることを確信した。

「そうですか・・・」

分かっていませんよという顔で返事を返す。真面目な顔で返すとややこしくなる

「ふむ、では儂からも、質問させてもらってよいかの？」

「どうぞ、答えられる範囲なら・・・」

「では、お主、名は？」

嘘の名前はすぐにはれるであろう。この人は眼力を持っているから正直に言おう。でも姓だけは変えさせてもらう。フォーリングって言う性は向こうでもあまり見ない。

「性はイグニス、名はセツナ・・・あなた達が名乗っている字はありません。」

「字がない？ふむ・・・ではさらに質問じゃ。昨日の夜、あんなところでおつた？」

「あんな所とは？」

「この街の外れじゃ。最近盗賊が出ると噂になっておる場所じゃ。」

「つてことは、俺はそこで気絶していたって事か。ここは無難な線で・・・」

「腹が減りすぎて、街が見えたところで記憶がない。」

「光と轟音と供に現れた所を我らは見たが・・・それはどうやって説明する？」

「ふっ！？」

次元転移したところを見られたか。これで行き倒れになった旅人・
・というシチュエーションは使えない。

「まあ、よい。お主の生まれは？」

生まれ、出身地のことか？聞かれるとは思っていなかったので、返
答に困ったあげく・・・

「・・・実は、この大陸の生まれではないです。」

もうちょっとましな返答があるだろうに、こんな返答してしまった。
親父達が聞いていたら泣くであろう。

「ほう？では、どこで生まれたのじゃ？はっきりとしてほしいの
？」

くっ、明らかにもてあそばれている。また返答に困っていたときに
また扉が開いた。

「おっ！起きてる、起きてる。おはよう、青年！気分はどう？」

扉を開くと同時に、気さくな声が部屋に響いた。

その声の主は、俺の世界にあるミスリルのような美しい煌めきを持
った髪を靡かせ、笑顔を浮かべていた。その笑顔もトウルクのような
無邪気なものではなく、リローネのような誘惑的なものでもない。
見たものを惹きつける魅力的なものだった。

だが、その笑顔とは別に瞳は、俺を射抜くように無遠慮に見つめ、
だいぶ鍛えたつもり的心をすべて見透かされる感覚にあった。

歳は、俺と同じぐらい。だが、歳と半比例してどっしりとした威圧
感を漂わせる。

（・・・師匠みたいな人だな。参った。）

自分の師匠である、無敗の武神・天空寺碎もこういう目をしていた
ことを思い出し、苦笑する。あの目だけは苦手だったため、揺らぎ
ない心を作ることに専念したんだが・・・

「それなりに、いいけど・・・」

「あら、その割には元気がなさそうじゃない？」

さっきのげんなり感が出てしまったか。俺もまだまだ弱い。

「ところで・・・あなたは、誰ですか？」

「私は孫策、字は伯符。この館の主よ。」

改めて、状況を把握する。どうやら俺は孫策さんに保護されたみたいだ。何もなかったらすぐに帰ろうと思ったのだが・・・おもしろくなりそうだ。

黙考していると、いきなりデコピンが飛んできた。

「いてっ！」

「いてっ、じゃないわよ！考える前に名前を名乗りなさいよ」

「それもそうだな。性はイギリス、名はセツナ、字って言うのはなしだ。みんなはセツナって呼んでいる」

「ふう〜ん、珍しい名前ね？」

確かに珍しいが、向こうではいい意味でも悪い意味でも知られている。一般人がその名前を聞けば英雄と崇め、パイロットが聞けば尊敬を抱き、

悪人が聞けば、震え上がる。その銀の拳から「白銀の戦士」と呼ばれるぐらい有名である。

「まあ、そうだね。」

「・・・質問したいことは山ほどあるけど、まずは・・・あなたの手、どうしてそんな風になっているの？」

そうくるか。普通どこから来たとか、どうしてあんな所にいたのか、と聞かれると思っていたのに・・・

「ああ、これ？手甲だよ。一応武器だから預けておくよ。」

片時も外すなと言われているが、今は身の潔白の証明の方が大切だ。外して身近にあった机の上に置く。

「指まである手甲って珍しいわね。どこで売っていたの？」

「この世でたった一つしかないものさ。俺用に造ってもらった。」

「すごい。こんなに精巧な手甲が造れるなんて、とてつもない職人よ！」

孫策は目をキラキラさせて、手甲に触ろうとするが・・・

「策殿、触らぬ方がいい。何が起るか分かりませぬぞ。」

「ちえ、これは後に置いといて・・・あなた、何者なの？」

さて、まずはどうやって進めていくか・・・こちらの手札は少ないだから・・・

「あんた達は、俺のことをなんだと思ってる？」

次元転移の場面を見られているなら、向こうがどう思っているかで手札を増やしていく。そうすることで・・・

「まだ教えてあげない。教えたら、それで話が進んでいきそうだし？」

早くもカードがつぶされた。やっぱり甘いか・・・

「そうだな・・・まず、俺はこの世界の人間じゃない。」

「この世界の人間ではないとは、どういう事じゃ？」

「この世界の人間じゃないってのは気になるわね。それって、どういう意味？」

そうなるよな・・・俺もどう説明しようか迷ってるのに、さて・・・

「・・・胡蝶の夢って知ってるよな？」

「確か、自分が夢で蝶となったのか、蝶が夢見て今自分になっているのか疑ったという。荘子が言っていた・・・」

「そう、今はそう思ってもらっていてくれ。俺は、孫策さん、そこにいる黄蓋さんを知っている。なぜかという未来の世界ではあなた達は歴史に名を残して、数千年の間

語り継がれているからだ。」

二人とも、驚いた顔で話を聞いていた。

「・・・続けて。」

「でも、俺が知っている二人は男の武将だ。だけど、あなた達は女性だ。これについては一つしか考えられない。」

あえて、俺はこのカードを切ってみる。下手すれば自分の首を絞めるカードを・・・

「史実とは別の平行世界に飛んでしまったのさ。これもあんた達からしたら荒唐無稽だし、俺たちの世界でもそんなものだ。」

ここで反応を伺う。黄蓋さんは全く理解できておらず、孫策さんに限っては・・・

「平行世界とかは分からないけど・・・つまり？」
もっと知れたそうに、話を掘り進めてきた。

「つまりは、この時代の人間ではなく、この世界の人間でもない。
気づいたらここにいたって事」

孫策さんは分かかったような顔をしているが、人がこういう顔をして
いる場合、大抵・・・

「ふうくん、ますます意味が分からないわ。」

「・・・そうだよな。やっぱり・・・」
これ以上どうやって説明しろって言うんだよ！心でいいながら、喘
いでいると・・・

「まあ、しかし。貴様が刺客や妖でないことは、十分分かった。」
意外にも黄蓋さんが助け船を出してきた。

「そうね。まあ、その気は別として・・・道端で気絶している間抜
けな刺客なんていないし・・・妖にしては結構まともそうね。」

「じゃあ・・・」
「まだ認めた訳じゃないけど、すぐに処断するってのはやめとい
てあげる」

孫策さんも認めてくれた。これでしばらくの身の安全は確保できた。
「だけど、しばらくはこの部屋に軟禁することになるから、そのつ
もりでね」

「まあ、それが妥当だな。あんた達から見たら、おれは全く素性の
知れない奴だからな。身の潔白を証明するためにも指示に従うよ。」

「よろしい。夜になったら、また詰問するから、それまでに今の状
況や、自分自身のことをしっかり整理しておきなさい？」

状況の整理って・・・意外に分かっているから、改めて確認するぐ
らいだな。後どうやって素性を誤魔化すかを考えないと・・・
「時間をくれるのか？悪いね。」

「あら、意外に落ち着いているわね？こういう経験あるの？」
新兵卒教練キャンプではこんなにいい扱いはなかったからな。一番
マシな奴でも、二、三発殴られて逃げられないように拘束、だから

な。ひどいものになると人権もくそ食らえな扱いを受ける。

「これよりひどい事されているからな。だいたいは慣れている。」

「ふう〜ん。そうなんだ。とりあえず、手甲は預かるわね？黄蓋は引き続き警備の指揮を。夜、公謹が戻ったら詰問も続きをするから承った。」

そういつて孫策さんは手甲を持って出て行った。目が輝いていたのでいじくる気満々だろう。

「ではセツナよ。夜までこの部屋を出ることはまかり成らん。廁に行きたいときはその鈴を鳴らすがい。飯の時も同様じゃ。くれぐれも変な気は起こさぬように。」

「わかりました。」

「夜の詰問でおまえの運命が決まる。まあ後悔がないようにな。」真顔で言ってくるから、一歩間違えればここで殺されるだろう。しっかりと考えよう。

「とりあえず、善処するようにならばよ。」

「それでよい。では儂も行く。くれぐれもおとなしくしておくのだぞ？」

黄蓋さんも退出しようとしたところで、何か忘れているような……そうだ！

「あの、すいません！」

呼び止められるとは思ってもいなかったのか、びっくりした顔でこちらを向いてきた。

「孫策さんに、手甲を丁寧扱ってくださいと言っておいてください……師からもらった大切なものなんです。」

黄蓋さんは、優しく微笑みかえしてきた。武人だから自分の武器を他人に触られたくないという気持ちは分かってくれるはずだ。

「よかるう、しかと伝えておく。」

「ありがとうございます。」

「では、他に用がないなら、儂は行くが？」

「それだけ言いたかったので。」

「うむ、それでは。」

黄蓋さんも部屋から出て行き、遠ざかっていった事を確認してから、大きく息をついた。

「ふう、危なかった。とりあえず上着脱ぐ。」

防弾使用のミルスペックジャケットをベットの端にかけ、布団を掛けて隠してあった拳銃もホルスターごとベットにかける。

「さて、これからどうしたものやら・・・」

まず現状の整理。自分の素性は端っから信じてもらってない。分かっていることは、ここは地球の古代中国で、俺は孫策っていう武将に保護されたこと。

次の詰問で自分の命がかかっていること。この三つだ。

「とりあえず別世界から来たって事を証明しないと・・・」

手元にある証明に使えそうなものは、拳銃、エージエントノート、リドライバークューブ、練金手袋、翻訳機能搭載コンタクト型ディスプレイとその電源装置ぐらいか・・・

拳銃はだめだ。隠しておいて取られなかったがこれも立派な武器だ。証明した瞬間、殺されるだろう。

かといって、コンタクトもだめだ。元来目にもものを入れる習慣がないため、証明は出来ない。入れたら入れたで、殺されそうだし・・・リドライバークューブもだめだ。こんな四角いもので証明できるはずがない。下手に渡して壊されたら帰れなくなる。

練金手袋は・・・目の前で錬成したらそれこそ、妖の術じゃ〜とか言われて殺されかねない。

やっぱりエージエントノートに頼るしかないか・・・

「でも、何を見せればいいのか？」

さっき見ていたデータか？いや、歴史を見せるのは良くない。史実をねじ曲げてしまうからだ。通信機能か？だめだ、極力通信するなと言われているし・・・

「エンターテインメント機能で3D動画を見せればいいのか・・・」
そうだ、それがいい。何か呪文を言っているわけではないし、動画

を見せれば別世界から来たことが分かるだろう。この時代には絵くらしいかないはずだ。

打開案が浮かんだところで、部屋を見渡してみる。意外に武器になりそうなものが多くあった。

「なめられているか、不用心なのか・・・もしくは侮っているか、だな。」

確かに、あの二人の気は尋常じゃないほどすごかった。まさに達人級の気を進っていたから、暴れてもすぐに押さえられるだろう。

「まあ、暴れるは最後の手段として・・・今8時か？」

起きたのはだいたい7時ぐらいで、詰問が始まったのは7時5分ぐらいだったから一時間近く話していたのか。

「腹減ったから、飯にしよう。」

一人でごちり、机の端にあった鈴をならした。

意外にあっさりしていたチャイニーズ料理に満足し、眠くなったので夕方になるまで眠ることにした。そのあと、もう一度食事をし、ざっとしか見てなかったデータを

頭にたたき込んだ。それでも多少時間が余ったので筋トレと膝抜きと転ばしの修行をしていると・・・

「あら、ずいぶんくつろいでいるわね？」

と、扉が開き、孫策さんがあきれた顔で言ってきた。

「やることがなかったんでね。とりあえず鍛錬で時間つぶしていた。」

「まったく、自分の命がかかっておるのに・・・なんてのんきなんじゃない。」

黄蓋さんも呆れている。どうせのんきですよ。じたばたしたって、状況が変わるわけでもないし。

「自分がどうなるか分からないって言うのに、よく鍛錬する気になつたわね？」

「さすがは・・・それほどの気を持っているだけのことはあるな？」
含み笑いと共に長身の黒髪の女性が前に出てきた。俺と同じぐらいの身長をしているので少しへこんだ。

「私は周瑜という。貴様の尋問官の一人と思っけてもらおう。」
「性はイグニス、名はセツナだ。よろしくな」

周瑜の目が一瞬で変わり、鋭い視線をこちらに浴びせてきた。正直かなり怖い。

「よろしくする必要があるかどうか、それを今から決めさせてもらう。」

一瞬布団の下に隠してある拳銃、カローンP21CQBを意識したが、すぐに意識をそらす。まだそのときではない。

「それもそうだな。答えられる範囲なら、質問に答える。」

「・・・では、まずおまえの生地を聞かせてもらおう。」

顔には出さないが、明らかに気分を害したようだ。嘘を言ったら、殺されるな。

「言っても分からないと思うけど・・・武練都市アバンデイスで生まれた。」

「武練都市？なんだそれは？」

「俺のいた世界では、少数の人が集まっただくらいでは生きていけないほど過酷な環境で、その為に城壁を造り、武力を整えて、大型の生物に備えないといけない。」

安全が保証されると人が集まってくるから、そこから都市といわれるのが出来ていく。俺が生まれたところは数ある都市の中でも、もっとも安全と言われているところさ。」

その為、武においても一番力を入れているから武練都市っていわれているのさ。」

「・・・ふむ、では次の質問に移ろうか？」

やはり疑っている。そもそも都市の定義なんて俺も知らない。

「二人より、貴様が未来から来た話や、別世界云々といった話を聞いたのだが、それを証明することは出来るか？」

「じゃあ、どういったものが未来や別世界から来たっていう証明になるんだ？」

「それは自分で考える。」

やっぱりそうだよな。どうせ期待しても無理だと思っていたよ。戦争だって期待のつづしあいさ。

「じゃあ、まずはこれを見てください。」

三人の前に、電源の入っていないエージェントノートを見せる。孫策以外は遠巻きに見ていた。なんでそんなに目をキラキラさせるんだよ。孫策さん！

「これは、携帯型量子端末といって、遠くの人と会話することが出来ます。他にもいろいろな機能が……」

「遠くの人と？では、今ここでそれを使って、遠くの人と会話して見せよ。」

会話して見せよって……通信は極力するなって言われているし、どうしたものか……

「やってみたいのは山々だけど……電波がきていないから、通話は出来ないんだ。」

このいいわけで逃れられるとは思っていないが、言ってみる。

「でんば？なにそれ？」

食いつくとこ、そこじゃねえって！孫策さん！

「なんて言えばいいのかな……目には見えない波動みたいなもの

「？」

「波動？気のようなものなの？」

「全然違う気がするけど・・・まあそんなところかな？」

そもそも。電波って言われてもピンと来ない。ニュアンスとしてはそんなに間違っていないはずだけど・・・

「出来ないのであれば、それは証明にはならんが？」

周瑜さんが刺すような目線で、問いただしてきた。まあ、焦るなって・・・

「そうだよな・・・じゃあ、これならどう？」

エージェントノートの電源を入れ、エンターテインメント機能の撮影機能を起動させる。

「おい、何をしている？」

「よし、じゃあ、誰が孫策さんが立っている位置からこの目の部分に向かって、少し挨拶してくれないか？」

「いったい何をしようというのだ？」

まあ、知らないなら疑問に思うよな。いちいち説明するもの億劫になってきた。

「今から、誰か挨拶するのをいつでも見られるようにするから早く

前に立ってくれよ。」

「じゃあ、私が！」

「伯符！うかつに話に乗るな！」

そくだよな。主を得体の知れないものに何かされるのは嫌だから、警戒もするよな……

「別にどつどつしよつて訳じゃないけど……どつどつするのっ。」

「やるやる！冥琳、ちょっと黙っていて！」

「黙ってはいられんな。おまえにもしものことがあつたらどつどつする
！」

「儂も、公謹の意見に賛成じゃ」

「むう……」

残念そうに肩を落としている。喜怒哀楽の激しい人だなあ……と
思った。

「そう拗ねなさんな。まずは、儂が毒味役をしよう。それで何もな
ければ、策殿もやってみればよいだろ？」

「はあ……わかったわ。祭がやってもらいなさい。」

「うむ。では、セツナよ。儂を好きにするがよい。」

好きにするがよいつて、別の意味に聞こえるんだけど・・・

「今、何かやましいことを考えておらんだか？」

「・・・ナニモカンガエテイマセンヨ？」

す、鋭い・・・。

「まあ、良い。それと、儂の体に変化があればすぐさまお主をくびり殺すからな？」

「・・・了解です。」

物騒な脅し文句と供に、黄蓋さんは少し緊張した面持ちで孫策さんが立っていた場所に移動した。そんなに緊張しなくても・・・

「・・・では、軽く自己紹介してください。」

「うむ、我が名は黄蓋。性は黄、名は蓋、字は公覆。荊州零陵郡の生まれだ。」

「では、使用する武器は何ですか？」

「一答一問になつてはいるけど、気にしない。未来から来たっていう証明の方が大切だ。」

「主に、弓を使用しておるが、武器は全般的に使える。」

「仕えている主は誰ですか。」

「孫策伯符殿だ。我が一生をかけて仕えると値するお人である。」

「……最後に、自分の信念を聞かせてください。」

「強きを抑えて弱きを助ける。これが儂の信念じゃ。」

ここで、撮影を終了する。何となくまとまっていたと思う。

「終わりです。ありがとうございました。」

「なんじゃ、もう終わりか？何も起こらんではないか。」

とりあえず、今の動画を保存して・・・

「じゃあ、さっきの自己紹介をもう一回見せるので、これを見てください。」

「さっきのって・・・無理に決まっている。」

周瑜さんは、さも当たり前のように言っている。驚く顔が見られそうだ。

「まあ、百聞は一見にしかず、です。では、見てみてください。」

さっきの自己紹介の動画を再生した。すると・・・

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

三人の顔がそろって口を開けて驚いていた。周瑜さんに関しては信じられないと言いたげな顔をしている。

「すごい。祭がいて、しゃべっている！」

「おお、僕はこんな顔をしておるのか……」

「……これは、妖の術ではないのか？」

周瑜さんは、驚きから立ち直ったみたいで、疑っている目で聞いてきた。

「ちがうよ。妖とかじゃなくて、科学の力、かな？」

なんか違う気がするけど……まあいいか。

「なんだ。そのかがくというのは……道術や仙術のようなものか？」

「どつちかっていうと……学問かな？俺がいたところは科学が進んでいて……」

それから、俺たちの世界にある惑星横断鉄道、成層圏プラットフォーム飛行船といった科学的なものと魔法や錬金術といった非科学的で神秘的なものを説明していった。

「ふむ……話は分かった。どれも荒唐無稽すぎるが、その板きれに黄蓋殿の自己紹介の時の時間があり、また黄蓋殿の体に変調を来していない事を考えれば、

貴様が言っていることはすべて否定できんな……」

板きれって・・・これ、強化プラスチック合金ガラスエキスポ複合素材で出来ているんだけど・・・ちなみに戦車がひいたって壊れないぜ。

「理屈っぽいわね。」

「それこそ、軍師の性というものよ。理と論を思考の中心に据えるのが軍師というものだ。」

俺にはその理念が分からない。一般兵にまで戦術理論が浸透している俺たちの世界では軍師という存在はいない。

「じゃあ、我らが軍師様。この子、どう判断するの？」

「・・・」

あれだけの証拠を見せて、まだ決めあぐねているようだ。周瑜さんは、心の奥を見透かすように、目を細めて俺を見つめてくる。

その瞳をグツと見つめ返してやる。俺だって、フォーリングの血を引いているんだ。恐れるものは、逃げようとする心、だけだ。

「・・・本当にこ奴が天の御使いかどうかは分からないが、少なくとも、我々が知らない国から来たということは確かだろう」

なんだかんだで、別世界から来たと言うことは認めてくれたみたいだな。

「それに確かに胡散臭くはあるが、人柄は悪くない。発している気も、静かで済んでいる。何よりまっすぐでいい目をしている。」

こういう輩は多少抜けているところがあっても、悪人にはなりきれんだろう。」

結構ほめられているような気がしたが、最後の方で軽くけなされているのは気のせいだろう。

「お眼鏡にかなったか。儂も、こ奴の度胸ぶりはたいしたものだと思っ。」

まあ、九死に一生を得るような戦闘を何回もやっていりゃ、度胸も自然と付くよ。きっと……

「なら決まりかな？」

「天の御使いとして祭り上げる資格はあるだろう。……雪蓮の好きにすればいい。」

「了解」

「……どうなっているの？」

なんか、俺を置いて話が勝手に進んでいっている。やばいことになるかも……

「貴様が、ここへやってくる前に、官輅という占い師が吹聴しておったのだよ。」

「官輅いわく、流星と供にやってくる者は、この乱世を鎮める天の御使いである、とな」

天の御使い？俺たちの世界でも天界があり、たまに天使や神が降りてくるし天で造られた道具も数多く落ちている。その最たる例はアバンデイスにある天宝具、アリギスだろう

「はじめは信じていなかったんだけどね。白い光と供にあなたが現れた。」

・・・そうか。人は目にした者を大抵は信じる。だから、俺を連れてきたのか・・・

「なら、あなたが天の御使いという存在・・・ちょっとちがうわね。そういう存在になれるって事。」

「・・・そういう存在になれる？ああ、そういうことか」

もしおれが天の御使いじゃなかったとしても、偽装できるって事が話を大きくして人を集める。選挙と一緒に。

「・・・分かったようだな？」

「一応程度はね。で、俺はこれからどうなるの？」

まだ身の安全の保証がされていない。気が抜けない・・・

「それは我らが主の意志による・・・どうする？」

「元々考えていたことを実行するわ。その為に拾ってきたんですもの。有効活用しないと？」

「ふむ・・・まあ、好きにすればよろしい。僕は特に反対はせん。
・・・何より、僕はこ奴が気に入った。」

がははつと、豪快に笑いながら黄蓋さんは、俺の肩をドンと叩く。
正直かなりいたかった。女性U・L・T・I・M・A・T・Eでも
ここまでの力を補助なしで持っている奴はいない。

「いてて・・・で、俺はこれからどうなるの?」

「その前に質問。あなたはこれからどうするつもりでいるの?」

たしかに・・・行く当てがない。リドライバーキューブで帰ること
は出来るがそれではおもしろくない。

「・・・特にないな。まあ生きる術は知っているからどうにかはす
るけど・・・」

「生きる術を知っていても、そんなの不安定よ。だったら、私たち
と一緒に行動しない?」

キター、この答えを待っていたんだ!内心喜びながら、顔に出さな
いようにしたがかなり苦勞する。

「・・・いいのか?」

「ええ、もともとそのつもりだったし・・・一人で生きるよりいい
でしょ?」

兵士でさらにMSパイロットだから孤独には耐えられるが仲間がい
た方がいい。

「そうだな・・・この世界のことについても教えて欲しいことがあるし・・・あんた達の提案をのむよ。」

「決まりね・・・ただし条件がいくつかあるわ。」

条件って・・・こっちは何も持っていないんだけどな・・・

「まず、一つ。あなたの知恵を孫呉の統治に役に立てて欲しいの。」

「知恵？政治に関しては、あまり詳しくはないが・・・」

初等教育を受けた後は、ハイスクールで機械工学を専攻して卒業したらすぐにライティックス士官学校スペシャリストコースに入ったから、政治のことはさっぱりだ。

「頭の善し悪しを言っているんじゃないの。あなたがいた別世界と未来の世界、まあ、どっちでもいいんだけど・・・そのどちらかで知っていることを、私たちに教えなさい」

ああ、そういうことか。それなら役に立てそうだ。ライティックスは災害時の救助活動などにも精通しているから大丈夫だろう。

「わかった。ほかには？」

「他には・・・私に仕えている武将達にあなたから率先して交流を持つこと。」

「なんだ。それならー」

「平たく言ったら、口説いてまぐわれってっことね」

「・・・はっ？」

今、口説いてまぐわれって・・・まぐわるって、あれのことだよな？

「突拍子もないことを言ってくれぬぜ。どうして、そんなことをしなくちゃいけないんだ？」

「あなたの胤を呉に入れるって事。そうすれば呉に天の御使いの血が入ったって事、喧伝できるでしょ？」

「つまり、俺は種馬になれって事か？」

確かに、天の御使いとかいう「なんか分からないけど、すごそうなもの」に対して、畏敬の念を呼び起こそうとしている事か。その血を入れたって事を民衆が知れば、その話

に食いつき、一目見ようと人が集まってくる。

「そういうこと・・・あ、もちろん嫌がる女の子に対しては無理矢理しちゃだめだからね？」

「当たり前だ。無理矢理犯すのは下朗のすることだ。」

「最低条件として、あなたが口説いて、女の子がいつて言うまで手を出しちゃだめ。わかった？」

「貴様も男なんだから、公認でやれてうれしいじゃろ？」

確かにうれしいが、俺は基本的に一人の女性に愛を注ぐ観念があるため、抵抗感がある。

「・・・そりゃ、健康的な男子だから、嬉しいんだけど・・・そんなのありなのか？」

「さっきも言ったけど、あくまでも合意の上でないためよ？」

「もちろんだ。嫌がる女の子とするのは、良心に多大な傷を受ける。」

「ならいいんじゃない？ちなみに、私はいつでもいいわよ？」

「俺もかまわんぞ？」

・・・レクトなら涙を流して引き受けるだろうけど、俺にはトウルクがいる。・・・待てよ？どうせ、監視はされていないんだし楽しまなきゃ損だな。

「わかった、その条件なら呑もう。」

「話が分かるじゃない！それと、もうひとついいかしら？」

「なんだ？」

「孫呉の武将として働いて欲しいの。無論俸給も出すし、あなたが嫌ならさっきの条件だけでいいんだけど・・・」

武将としてか・・・筋トレや鍛錬だけじゃ今を維持するくらいしかできないから、渡りに船だけ・・・死ぬつもりはないからいいか。

「分かった。武将として働くよ。」

「いいの？死んじゃうかもしれないわよ？」

「死ぬつもりはないし、あんた達も俺の気を見て言ってきたの
だろ？」

「あはは・・・わかっていたんだ。」

「まあ、そのことは追々正式に決めていくか。」

周瑜さんも承諾してくれたみたいだ。とりあえず実戦には出られそ
うだ。こちらの戦い方も吸収するいい機会だろう。

「じゃあ、決まりね。冥琳、通達よろしく。」

「はいはい・・・はあ、なんと行って説明すればいいのやら・・・」

「それを考えるもの冥琳の役目でしょ？」

「簡単に言ってくれる」

確かにあんな説明は他の人には出来ないし・・・どうやって説明す
るのだろうか？

「じゃあ、改めて、自己紹介するわね。性は孫、名は策、字は伯符。
・・・真名は雪蓮よ。」

「ほお、真名までお許しになるのか？」

「だって、体を重ねることになるかもしれない男なんだし。それぐらい特別扱いしてあげないと。」

「すまんが・・・真名ってなんだ？」

「真なる名と書いて、真名と読む。・・・私たちの誇り、生き様が詰まっている神聖な名前のことだ。」

「自分が認めた相手、心を許した相手・・・そういったものだけに呼ぶことを許す、大切な名前じゃよ。」

「他者の真名を知っていても、その者が許さなければ呼んではいけない。そういう名前よ。」

「そうなんだ・・・」

俺たちで言う異名のことか。一部のMSパイロットはそれを誇りにしているから、けなすと激怒するしな・・・その名前を俺に託すって事は・・・信頼されているんだな。

「責任重大だな・・・」

「そう思える？」

「まあな・・・相手から信頼されている証拠だし、信頼を裏切るよなことは出来ないな。」

「それじゃ、私のことは今後、雪蓮って呼んでね。」

「了解だ。よろしく、雪蓮」

雪蓮か・・・なんか綺麗な名前だな。

「我が名は黄蓋、字は公覆。真名は祭だ。」

「よろしく。祭さん。」

「応。よろしくしてやろう」

姉御肌な人だな。他に言い換えるなら気の強い母親かな？

「性は周、名は瑜、字は公謹。真名は冥琳だ。セツナよ、おまえには期待させてもらう。」

「知略の方はあんまり期待しないでくれよ？」

「ふっ、それは私が補ってやろう。」

ベルナデイスさんみたいな人だな。とにかく現実を突きつけてきそ
うだ。

俺は、頭を下げながら三人と握手を交わしていくと・・・

「孫策様〜。袁術さんがよんでいるみたいですよ〜？」

扉から、ほんわかとした声が飛んできた。目を向けてみるとほんわかとしたオーラを放っている女性が立っていた。正直かなり胸がでかいと思った。

「袁術が？用件は何？」

「さあ？またワガママでも言ってくるんじゃないんですかね？」

「まったく・・・私は、あいつの部下ってわけじゃないのに、こき使ってくれる・・・」

雪蓮から怒りがわき上がってくるのが分かる。相当袁術とかいうのが嫌いみたいだな。

「時が来るまでの辛抱だ。雪蓮。」

「わかっているけど・・・むかつくわね！」

ぶつぶつと文句を言いながら、雪蓮は部屋を出て行った。怒気からして、相当嫌々従っているみたいだ。

「とりあえず、現状を教えてくださいませんか？」

「ふむ、まずはそれから説明せんといかんな。」

「では、今の状況を分かってもらうために、我々の生い立ちから説明しよう。」

そんな前置きをあとにし、周瑜さんは自分たちを取り巻く環境を淡々と説明し始めた。

話を聞いていると、今、俺たちがいる荊州は袁術という太守がこちら辺一体を統治していること。

本来は雪蓮の母親、孫堅が統治していたのだが孫堅が戦死したことによって、孫家が衰退。

それに伴って内乱や逃走が相次ぎ、若くして後を継いだ孫策が仕方なく袁術の客将と言う立場に甘んじてでいること。

しかし、いつまでもその立場に甘んじるのではなくいつかは独立して天下統一を目指すと言うことだ。

平穏と無縁の生活になるから覚悟しておけと言われ、説明が終わった。俺たちもやっと戦争が終わり、復興作業に精を出していたころなので気は抜けていない。

「結構大変な時期にやってきたもんだな・・・おれ。」

「まあ、そうなりますね、あはは。」

「笑い事じゃないんだけどね・・・それより、こちらさんは？」

体が揺れるに伴って、揺れる大きな胸は正直核兵器の威力を誇っている。他の男が見たら悶絶ものだろう。

「穩、自己紹介せい。」

「わかりました。性は陸、名は遜、字は伯言・・・ええと、皆さんは天の御使いさんにとこまで自己紹介しましたか？」

「皆、真名を伝えた。雪蓮が認めた人物よ。」

「それなら、私の真名は穩って言います。穩とお呼びくださいな。」

御使用様」

「あ、ああ、よろしく。俺のことはセツナでいい。」

ほんわかといった、のんびりした雰囲気を持つ子だな・・・正直苦手だ。しゃっべっていると脳みそがとろけかけそうだがグッと堪える。

「二人とも年が近そうだから、セツナの世話は穩に任せる。頼むぞ」

「年が近い?・・・嘘だ!」

見た目からして三十路手前ぐらいに見える。

「ぶーぶー、その発言は失礼すぎますよ、セツナさん!これでも、ピッチピチなんですからね!」

「あ、そういう意味じゃなくて・・・見た目からピッチピチな事は分かるけど・・・」

「あら?スケベですね〜セツナさん」

そんな感じで言っつてねえ〜!つと心の中で叫んだ。けらけらと笑いながら、穩はぽんぽんと調子良さげに肩を叩いてきた。

「まあ、二人とも仲良くやれ。・・・では公謹よ。儂は部屋に戻るぞ。」

「わかりました。・・・セツナ、これからのことはまた明日二でも話し合おう。今はゆっくりしていればいい。」

「わかった。とりあえずゆっくりしておくよ。」

もう十分ゆっくりしたけど・・・まあいいか。骨休みと思ってゆっくりしよ。

「そうしろ。・・・穩、行くぞ。」

「はーい。では、セツナさん。また明日お会いしましょう。」

みんなが部屋を出て行った後、緊張を解いた。体のあちこちが強ばっている。

「ふう・・・。」

ベッドに腰掛け、拳銃を端にかけ直す。

「とりあえず・・・何とかなつたみたいだな。」

胡散臭いって理由で殺される心配はなくなつたけどもっと胡散臭い存在に祭り上げられた。

まあ、それはいいとしていつ帰るかを少し考えた。

転移して何年か時間がたつても設定してある帰還時間に帰ることが出来れば体もその時間に合わせて元に戻る仕組みになっているからいつまでいてもいいけど・・・

「今は・・・考えないでおこう。帰りたと思ったときに帰ればいいことだ。」

戦乱が終わるぐらいまではつきあってやる。この時代の武将達とも会ってみたい。どれほど強いのだろうかもかなり気になっている。

「とりあえず、寝よう。いろいろあつて疲れた。」

ベットに横になる。その際ミルスペックジャケットと拳銃は窓側の机に置いた。これなら盗ろうとしてもすぐに察知できる。

「さて・・・これからどうなつて行くやら・・・天のみぞ知る・・・か」

あれこれ考えている内に睡魔が誘惑しそして眠りの縁に落ちた・・・。

一方こちらでは・・・

「そなたの事情はよく分かった。私はあなたを保護します。あなたの名前は？」

ここ、陳留で少女、曹操孟徳が一人の男に会つてきた。

「はっ！ガラム・シヨフラといいます。」

「ではあなたの目的を私に教えてくれないかしら？」

「今この世界にいるであろう一人の男を捕らえ、連れて帰ることで

す。」

ガラムと名乗った男は頭を下げながら言った。見た目からしてオオカミのようだ。

「その為だけに、私に仕えらる？」

曹操は尊大に言い放つ。何かを試しているかのように・・・

「あなた様の器量の大きさに惹かれました。私が一生をかけてお仕えする人物と判断したまでです」

「おもしろいわね？では、今を持ってあなたは私の部下として將軍に任命します。以後私のことは華琳と呼ぶことを許すわ。」

「ありがたき、幸せ！」

さらに深々と頭を下げる。しかしその口元は意地悪くつり上がっていた・・・

一方桜並木が連なるこちらでも・・・

「我ら四人！」

「性は違えど、姉妹の契りを結びしからは！」

「心を同じくして助け合い、みんなで力なき人々を救うのだ！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずしても！」

「願わくは、同年、同月、同日に死せんことを！」

「乾杯！」

四人は一気に杯に入っていたものを飲み干す。

かの有名な桃園の誓いだが、三人ではない。もう一人、艶やかな黒髪を持ち、目の下に特徴的な赤の花の刺繍が掘ってある女性がいた。

「くうく、酒がうまいね！」

「これからよろしくね。エリナちゃん！」

「ああ、こちらこそ！三人の姉者のためにもこの命、惜しくもない！」

「もうそんなこと言って・・・さっき誓ったでしょ。死ぬときは一緒って！」

「そうだったね・・・はっはっはっ！」

エリナと呼ばれた女性は豪快に笑い始めた。それにつられて、劉備、関羽、張飛の三人も笑った。

しかし、一人だけ・・・エリナだけは笑いながら、目に凶暴な光を宿していた・・・

それから数日後・・・

「じつそうです。」

「あいよう！」

「結構食べたな・・・」

俺は後ろ手で、扉を閉めながら腹をさすった。教訓通り腹八分目に押さえてはいるが少し食べ過ぎた感がある。

「おいしすぎるからな・・・ついつい食べてしまう。」

今日は、長めに昼休みがとれたため頼んでおいた武器を取りがてら街まで足を伸ばしてみた。

入ったお店は、最近人気のある大衆食堂。安い、早い、うまいの三点がそろっていて、特に青椒肉絲と、回鍋肉がうますぎる。

頼んでおいた武器もとりあえず当面の間は使う武器、投げナイフと幅広なシャムシールを頼んでおいた。シャムシールの方はまだかかると、とりあえず投げナイフだけを五本、受け取ってきた。袖口に二本、足下に二本、胸に一本隠してあるからそう簡単に見つからないだろう。

「今度あそこに行くときは冥琳や雪蓮誘ってみるか？・・・つて、お」

噂をすればなんとやら、城に戻ろうとして歩いていると角を曲がったところで雪蓮を見かけた。

「お供もつけずに何やってんだらう？」

まあ、雪蓮なら心配ないけど・・・

よく見てみると老夫婦と仲良さそうに話している。何を話しているか少し気になったので音響視力を使って聞き耳を立てた。

「うふふ、おじいちゃん元気にしてた？最近あまり姿を見なかったから、心配したんだよ？」

「おお、おお、そりゃ悪かったね。爺ちゃんは元気にしてるよ。」

「ホント？なら、良かった」

「最近ば婆さんが、雪蓮ちゃんに会いに行くなって言うて、いつちよまえにヤキモチを焼いておってな？」

「まあ、お爺さんつたら！わたしや、そんなこと言ってますんよ。」

「あはは。心配しないで、お婆ちゃん。おじいちゃんを取ったりはしないから。」

「ふふふ、わかってますよ」

「そりゃ、おじいちゃんはとっても魅力的だけど？」

「ありゃあ、そうかい？こりゃ、まいったな」

ただの世間話か・・・あういう誰にでも気軽に話しかける性格が民の心を惹くんだらうな・・・俺も少しは見習わないといけないところだな。

「ところで、二人ともよそ行きの格好しちゃって、どこかへお出かけ？」

「おっ、そうじゃ！もしかすると雪蓮ちゃんならしつとるかもしれないのお。婆さん？」

「おじいさん。雪蓮ちゃんもいそがしいのに、」迷惑ですよ！」

実際の所、俺が見た限りかなり政務をさぼっているから暇なんだけど・・・「内緒よ？」と釘を刺されているので冥琳にはいつてない。

「なあに？私で役に立てることがあったら、何でもするわよ？遠慮しないでいつてみて。」

「でもねえ・・・」

「ええじゃないか。聞くだけ聞いてみようや・・・実は爺も婆もええ年だから、記念に絵姿でも描いてもらおうと思つてのお・・・」

「あら、素敵じゃない？」

「そうじゃろ？それでさっきまで、街で絵師さんを探しておつたん

「じゃが、これがなかなか見つからんのじゃあ」

「雪蓮ちゃん……誰か心当たりあるかねえ？」

「そうね……絵師、絵師……って、あら」

何気なく振り向いた視線が俺に向いた。どうやらこちらに気づいたようだ

「よっ！」

「セツナじゃない？何してたの？」

「武器取りがてら、街で飯食いにな。」

「武器？手甲はちゃんと返したでしょ？」

確かに大事な手甲「極」は雪蓮自ら返してくれた。今も装備している。けどこの先メンテナンスが出来るとは限らないから、疲労が蓄積しないようにこれだけを使い続ける訳にはいかない、そこで安易に隠せる投げナイフと千越寺流と犀牙流が応用できるシャムシールに白羽の矢が立ったのだ。本当なら刀を使いたいところだが、今の時代まだそのルーツは確立されてない。

「これだけじゃ、この先不安だから一応な？なぐに、雑兵ぐらいなら軽くあしらえる。」

「何使うの？」

実物を見せる方が早いので、腕からノーモーションでナイフを出す。

「この短刀と少し大きめの剣を頼んでいたんだ。剣の方はまだ時間がかかるから先に短刀の方をもらってきた。」

「でも、少し細すぎない？それになんかもろそうだし・・・」

「別にこれで斬り合おうとは思ってないからいいんだよ。基本的にこれは投擲用だよ。」

「ふ〜ん・・・そうだ！セツナ、初めてあつたときのことなんだけど、セツナの持っていた板きれみたいなのに、祭が自己紹介した時間が残るやつあつたじゃない？」

ああ、録画機能のことか。雪蓮達に俺が別世界から来たってことを証明するために撮ったときのことを思い出した。

「それが、どうかしたか？」

「あれで、おじいちゃん達のことも前みたいにやってみてよ。」

やってみてよって・・・録画機能はそのときのものを動画で撮るものだから写真とは訳が違う。

「あれじゃ、絵姿みたいにのこらないよ。絵姿の方が味があつていいと思うけど・・・」

「ぶーぶー」

いや・・・ただこねられても、残らないものは残らない・・・

「……のう、雪蓮ちゃん？こちらのかたは……」

「あっ、ごめん、ごめん！この子は私たちの仲間でセツナっていうの。よろしくね」

「よろしくお願いします。」

雪蓮に紹介してもらって、あわてて頭を下げた。

老齢の人とは基本的に軍でしか会ったことがない。彼らはアクセル中將をのぞいて、みんな保身派で頭の固い連中である。だからあんまり好きではない

女性将官はさすがに話が分かる人が多いが……

「……おう、おう、ほーか、ほーか。」

「まあ、まあ、あの雪蓮ちゃんがね……」

じいさんと婆さんが、慇懃無礼にしている俺の顔をのぞき込み、なにやら納得したようにうなずいた。

たぶん、とんでもない勘違いをされているな……

「あ……何か？」

「……僕の雪蓮ちゃんを任せるには、少タイカつい気がするが……」

「へっ？」

「何いつているんですか、お爺さん。感じのいい優しそうな青年じゃありませんか？」

ここまで飛んだ勘違いをされているとは思わなかった。まかせるって・・・つまり、あれだよな？

「あつ、あの？」

「あはははっ！残念だけど、セツナはそんなんじゃないのよ。本当に仲間の一人なの。」

・・・そうはつきり言われると、なんだかとても切ないんだか・・・

「今のところは、ね」

「っ！」

そういつて、雪蓮はウィンクを送ってきた。

今のところってことは・・・この先その心境が変わるって訳か！それはかなり嬉しいことだが、俺にはトウルクがいる。あいつは嫉妬心はかなりあるからばれた日には・・・

（ねえ・・・セツナ？あなた、向こうで女の人とテレテレしていたわね？）

（・・・シテイマセンヨ？）

（クインリー？心拍数は？）

(いつもよりかなり高いわよ。)

(そう・・・マナ。MSで斬っちゃっていいわよ？)

(待て！それはやり過ぎだろ！)

(あなたが悪いのよ？だから・・・死んでわびなさい？)

つてなんかんで殺されそうだ・・・。おお、こわっ！

「それより、おじいちゃん。絵師のことだけど？」

「おお、何か思いついたのかい？」

「うん。私が知っている絵師を今度おじいちゃんちに行かせるから、その人に描いてもらえばいいわ。腕は確かよ」

恐ろしい想像をしている内に、話が勝手に進んでいる。とりあえずエージェントノートの方は使わなくて良さそうだ。

「そりゃ・・・ありがたいが、雪蓮ちゃんの知り合いとなると、その・・・街の絵師よりずっと高いんじゃないのかねえ？」

「お代のごとは気にしないで。私から、いつもおじいちゃんとおばあちゃんにお世話になっているお礼よ。」

「でもね・・・そういうわけには・・・」

「じゃあさあ、またいつもみたいにおばあちゃんのとこ食べに行く

から、そのときにはごちそういーっぱい作って欲しいな。だめ？」

「そんなこと！わたしや雪蓮ちゃんが来てくれるなら、いつだって大歓迎ですよ。」

「じゃ、決まりね。また詳しく決まったら、知らせを送るから。」

「ありがとうな、雪蓮ちゃん。」

「本当にありがとう。」

「いいのよ。またね。おじいちゃん、おばあちゃん。気をつけて帰ってね。」

爺ちゃんとはあちゃんは、ぺこぺここと頭を下げながら帰って行く。

俺と雪蓮は、その後ろ姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

そして、俺たちも肩を並べて城の帰路についた。

「・・・雪蓮って、すごいよな。」

「へっ？なにが？」

「いや、ああやって親しげにしゃべって民の信頼を得る。あれは一つの才能だよ。」

言葉だけで票を得る政治家や、強さで民の信頼を得るアバンデイスの女王、アルシェイラ・アルニモスとはまた違った統治の仕方だ。だから、政治に不満を持ったものが武力を介して反発を行ったりす

ることが多いし、逆にアバンデイスでは女王暗殺や内乱が起こるってことは全く聞かない。(アルニモスが強すぎて、それらが出来ないという見解もあるが・・・)

「ちがうわよ。それもあるけど・・・お年寄りって、私たちが知らないことをたくさん知っている。話しているだけでとても勉強になるから、私は積極的にお年寄りに

話しかけるの。」

「そうか？俺の知る限り、年寄りには権力欲にまみれて戦争時には自分の保身ばかり考えて、現場の意見を全く聞かないで理不尽な命令を下してばかりでな・・・あんまり

好きな存在じゃない。」

「それは一部の人たちよ。お年寄りは本来、さっき話していたおじいちゃんやおばあちゃんのような人が多いのよ？あなたの祖父母もさっき言ったような人の類なの？」

「・・・」

祖父エドウィン・フォーリングはとつくの昔に他界している。歴史を調べてみる限り惑星間抗争を止めた英雄として有名だ。また惑星連邦が出来る以前の政府、思想強制連邦を崩壊させた張本人であり、惑星連邦黎明期を築き上げたとしても有名だ。兵達の間では未だ「地上最強のU・L・T・I・M・A・T・E」として誰にもその座を譲らず、MSパイロットからも同様の尊敬を集めている。さらに機械工学、特にロボット工学においても多大な影響を及ぼし、八面六臂の活躍を見せている。こちら側での犀牙流の創始者でもある。

祖母シュリル・フォーリングはまだ存命だ。もう七十にも届きそうな感じだが、まだまだ元気である。この人も惑星連邦黎明期を築き上げた一人として有名だし、惑星間抗争を生き残った猛者である。

エドウィンの方はセブン・ファントムの前身、フラッシュ・ファントムに所属して大戦を経験したせいかな、徹底した現実主義者だけど、基本的には悪をくじき、弱きを守るといった性格だったって聞いているし、シュリルも慈悲深いが時には厳しく接してくれる人だ。

「・・・ちがうな。俺が知っている年寄りとは、全く正反対の位置にいた人だ。」

「それに、あの人達がいたからこそ、私たちがあるんだから。敬うことが、私たちが出来る最大の恩返しよ。」

「・・・そっか、そうだよな。」

先人がいたからこそ、今の自分たちがいる。

その言葉が、俺の胸に響いた。静かに・・・だけど、とても重く。

偉大な偉人を祖父、父を持つ俺は、人々が尊敬するように俺も尊敬していた。しかし、どこかで祖父、父を畏怖している部分があったし、その人達を超えなければならぬという見えないプレッシャーに悩まされたときもあった。

遺伝子傷害で U・L・T・I・M・A・T・E でありながら、U・L・T・I・M・A・T・E の身体能力を持ってない俺にとってそれはとても苦痛だった。

「それに、誰しもいつ命を落とすか分からない世の中だからね。想いを受け継ぎ、それを伝えていきたいって、誰もが願ってることよ。」

「……まあ確かにな……」

父が死ぬ間際に残した言葉は今でも覚えている。その言葉の通りライティックスを運営しているし、信念にもなっている。

「もう、そんな暗い顔しないの。何か思い出した？」

どうやら、昔のことを思い出して、落ち込んだ俺の心を見透かしたのか、雪蓮は小さく肩をすくめて、クスリと笑う。

「ちょっとな、大丈夫だ。」

「セツナはまだ若いから。心配しなくても、もう少ししたらこんなことは身をもって、感じることになるわよ。……そんなことより。」

雪蓮の顔が不意に目の前まで近づいてきた。男としては、こんなに綺麗な顔が目の前にあるとつい赤面してしまう。

「城に戻ったら、絵師の手配、お願いね。詳しいことは冥琳に聞けば分かるから」

ただし、仕事の丸投げなどの台詞を聞くと一気にさめてしまうが……

「・・・へっ？」

「へっ、じゃないわよ。さっきのおじいちゃんの絵姿のこと、聞いてたよね？」

「そりゃ、聞いていたけど・・・俺がやるの？」

「そ。乗りかかった船じゃない。お願いね。」

待て！俺は戦闘は得意だが、こういったデスクワークはあんまり得意じゃない。それなら雪蓮の方が得意じゃないか！

「・・・乗るところか、片足を踏み出してもなかったと思うんだけど・・・」

「何よー！嫌なのー？暇そうだから、いいじゃない？」

「いやじゃないけど・・・暇そうってひどい。」

「じゃ、忙しいの？」

「・・・」

実際の所はまだ忙しくもない。兵も与えられていないため練兵は出来ないし、仕事って言ってもまだ何もなし、午前中は自分の鍛錬で時間をつぶせたが

午後からはすることがない。

「ぶつぶ。ほらっ、やっぱりー」

雪蓮は目を細めて、楽しそうにクックツとを鳴らした。意地が悪い……

「……忙しい訳じゃないけど、暇って訳じゃ……」

「ふふっ、あははは！」

そうしてひとしきり笑った。俺も釣られて失笑する。

「それにしても、セツナ。一人で街に出てくるなんて珍しいわね。武器取りに行く以外に何しに来たの？」

「そうか？俺は時間があったら、よく街を散策しているんだけどな？」

「散策？せつな、そんなことしているの？」

「うん。ここは雪蓮達にとって、慣れ親しんだ街だろうけど、俺からみれば珍しいものとか、珍しいこととか……」

そう。危険を冒してパイルドライバーを使うことはここにある。その時代の文化を直で見、いいところを吸収していく。だから俺はこうして街を散策し、いいところをレポートにまとめ、アルシェイラに渡す。そうしてアバンデイスはよりよい方向に発展出来ることに貢献できると信じている。

「この世界にはまだまだ、俺の知らないことがたくさんあるからさ。」

「

「そっか。楽しい?」

「ああ、かなり楽しいぜ!」

実際かなり実りがある。それにいろんな人と顔なじみになってきてもいる。

「ふふ、セツナっておかしいね。」

「えっ、なんで?」

そりゃ……どこかおかしいと思うが、そうはつきりと言われると傷つく。

「普通って、ひとりぼっちで全く知らない異境に放り出されたら萎縮しちゃうものだけど……セツナはそんなこと、微塵も感じさせない。どうしてなの?」

「そうだな……雪蓮はたった一人短刀一本で密林の中に放り出されたら、どうする?」

「えっ?」

質問を質問で返してみた。たまにはこういうのもいい。

「密林を短刀一本で一ヶ月生きてみろって言われたら、どうする、雪蓮?」

「それは……その。」

どうしても不可能といたくないのか、雪蓮は必死に答えを探している。あれはやってみたものでなければ答えが出ない。

「普通なら無理だ、雪蓮。日中は凶暴な動物が徘徊し、夜になっても、夜中に活動する動物が徘徊する。息の付く暇もなく、ましてやる暇もない。そんな状況だ。」

「・・・」

「俺はそれをこなしてきた。当たり前のように。だから俺はどんな劣悪な状況下にさらされても、困惑しないし、冷静に対処できる。それが答えだ。」

スーパーエリートコースは狭き門であるにかかわらず、五体満足で卒業できる生徒はわずかに割にも満たない超絶的なスパルタ教練を課す。U・L・T・I・M・A・T・Eには旧フラッシュ・ファントムの訓練カリキュラムを引用し、訓練は実剣、実弾を使用し、100キロ装備100走はジョキング代わり、壊れたパラシュートでHALOを行うのが、それは初歩的な度胸試しであったり、簀巻きにされて水中に蹴り落とされてもパニックを起こしてはならない、将来任務中に捕虜になるケースを想定して、人格を踏みにじられる理不尽な目にも遭う。これらはまだ基礎教練であり、基礎教練をすべて終えたときには、すでに7割弱の生徒が退学しているか、死亡しているかだ。残った生徒には、教官に認められ、適正テストの後その適正別に専門教練が課される。MSエースパイロットコース、スーパーアサルトソルジャーコース、ベルナデイススナイパー養成コース、戦場指揮官養成コース、烏忍者養成コースなど、専門教練があるが、一芸に長けていてもライティックスには入れない。それだけのコースでありとあらゆる技術をエキスパートレベルまで掘り下げる。入校してから2年、地獄のような日々を勝ち取ってきたも

のだけが卒業式に出られると言われる。しかし、卒業式も普通ではない。一週間前に式場から離れたありとあらゆる場所に運ばれ一週間までにたどり着いたものが卒業できることになっている。

そして、正式にライティックスの士官として任命されるのだ。(卒業できなかったものでも、セブン・ファントムへ入隊が許可される。また普通の士官コースでも入隊出来る)

が通信兵や整備員、二等兵からのスタートとなる)

セツナはその合間に父からワイヲリカ流無形と犀牙流の基本動作の修練も受けてきた。人の三倍以上をやっているにもかかわらず、すべて主席で。

だからこそ今の自分があると心の底から思っている(一緒に入校したレクトは次席で地味に卒業している。)

「・・・どうして、そこまでの？何があなたをそこまで駆り立てるの？」

雪蓮は少し引いている。まずい。ちょっとシリアスすぎたか。

「悪い。少し暗い方向に向いたな。忘れてくれ。」

「うん。話を振った私も悪かったわ・・・」

それっきり、話がとぎれてしまった。どうしよう・・・こういつつ雰囲気はあんまり好きじゃない。

私はセツナを改めて観察した。所々はねている蒼い髪、切れ長な目、顎下に付いた傷跡、引き締まった体・・・見た目は屈強な青年に見える。

だが、雰囲気は相応の年齢とは全く違う。ここまで静かな気は見たこと無い。いったい何をしたらこの年でこんな風になれるのであるう。

「・・・ねえ、セツナ？」

「・・・なんだ？」

とつつきにくい感じでぶっきらぼうに返事をしてきた。さっきのこととを気にしているのかもしれない。

「・・・最初の時、私たちのこと、どう思ったの？」

無性に知りたくなって、聞いてみた。気になってはいたんだけど、聞く機会がなかったから今聞くことにした。

「そうだな・・・まず祭さんは、母みたいな感じがしたな・・・」

「あはは、言えてる！」

確かに祭は、私たちの中では最年長だし面倒見もいい。感じからも母性が出ているから、そう思ったのだらう。

「冥琳は・・・俺の知っている人とよく似ていた。現実主義者で常に冷静で凄腕の狙撃手なんだ。」

「狙撃手？何それ？」

「そうか・・・まずこれから教えないとだめなんだな・・・」

そういつて、セツナは腰に付けている入れ物から何かを出してきた。

「このことは誰にも言わないでくれよ？これも立派な武器だからな。」

手には無骨な黒い筒みたいなものを持っていた。取っ手があるから弓みたいなものだろう。

「これは銃って言うて、弓みたいに弾を飛ばす武器なんだ。だけど弓の何十倍の威力があるし目に見えないほど速い。これを大きくしたものが狙撃銃になってそれを使う人が狙撃手ってなるんだ。」

「ふん・・・よくわかんないけど」

「わからないんかよ！」

つつこみを入れられた。機嫌もだいぶ直ってきたみたいだ。

「まあ、それは置いといて・・・雪蓮を初めて見たときは・・・」

「時は？」

これはかなり気になる。セツナが私のことをどう思っているか。

「そうだな・・・頼りになるお姉さんで綺麗な人だなぁっておもった。」

「あら、言ってくれるじゃない？何も出てこないわよ？」

「いや、本当に思ったんだ。こんなに綺麗な人は知っている限り二人しかいないからな。ド肝を抜かれたよ」

そこまで力を込めて言うから、本心で言っているのだろう。・・・嬉しいな、ここまで言ってくれるなんて。

「・・・セツナ、少し真剣な話してもいい？」

「なんだ？さつきみたいなのはいやだぜ？」

「・・・セツナって、時折くらい雰囲気になるわよね？どうしてなの？」

「・・・そんなことか。まあいいだろう。」

もつとセツナのことを知りたくなった。どうしても分からない。思ったら、口に出していた。

「・・・目の前で親父を殺されたからな。そのとき俺は何も出来なかった。後は、守れたはずの戦友を死なせてしまった。」

「それは・・・つらかったでしょうね・・・」

私も母様が死んだときは悲しかったし、泣いた。今後あんなに泣くことは無いだろう。

「他にも、数え切れないほど人を殺してきたし、死なせてきた。た

ぶんそれが影響しているのだろう。」

今分かった。セツナの奥深くにある黒い部分が。そしてこの雰囲気
の訳が今分かった。殺した人、死なせてしまった人に対しての贖罪
の気持ちがこの雰囲気を出しているのだ

さらに私たちと少し距離を置いているように感じるのは「自分の手
は血に染まっている。」と自覚しているためあまり関係を持たない
ようにしているからだろう。

セツナは人を心の底から信じていない。仲間意識はとても強いと思
うが、その枠の外の人には関係を希薄にして、接点を持たないよう
にしている。

かなりナイーブな面だと感じた。

「私は、セツナのすべてを受け入れるよ。過去にどんなことがある
うとセツナはセツナだもん！誰も代わりは出来ない。この大陸でた
った一人のセツナだから・・・」

私はそのことを証明するためにセツナを手をきゅっと握った。手甲
の上だったから冷たいけどとても落ち着く。

「・・・その、なんだ。・・・ありがとな。」

はっとセツナの方を見してみる。顔を崩して笑っていたがすぐに照れ
くさくなったのかそっぽを向いてしまった。

その時初めてセツナの素顔を見た私は思った。気持ちが伝わった
ことが嬉しかった。

「・・・なあ、雪蓮？」

「何？」

「・・・城にはいるまで、手、つないでいていいか？」

「ふふっ、いいわよ！」

こうして私たちは城に戻るまで手を繋いでいた・・・

「ふう・・・」

今日も街へ散策しに来ていた。主に市場の露天商を見回って食べ歩きをしていた。・・・最近食べることが多いな。

無論シヤムシールの方も見てきたがまだ時間がかかると言うことだった。あれって作るのそんなに難しいのか？

「まあ、西洋の武器だしな。しょうがないっちゃしょうがないけど・・・早く欲しいよな・・・」

城にあった剣は一通り使ってみたがどれもしっくり来なかった。たぶん重いからだろうか、型をこなしてみてもどこか流れている場所があった。一般兵クラスなら

全然気にならないが武将クラスになるとその隙をつかれることがあるからシヤムシールを頼んだんだが・・・

「おう、セツナじゃないか。」

考えていると、どこからか声がした。

「どこを見ておる。こつちじゃ、こつち！」

「ああ、祭さんか。」

「おう。」

俺が姿を見つけると、祭さんは機嫌が良さそうに笑って酒器を掲げた。

つて、こんな真つ昼間から酒って・・・

「どうした？はよう、こつちにこんか？」

「はあ」

どうせ暇だったし、俺は祭さんに招かれるままに席に着いた。

祭さんは、今でいうカフェのような店の前に並んだ机を陣取っていた。

机の上は十数本の酒壺と数枚の皿が置かれていた。それを見て俺は愕然とした。

「祭さん・・・昼間っからいったいどんだけ飲み食いしているんだよ・・・今日非番じゃないんだろ？」

「くっくっ……んっ……んくっ……ごっくっ」

人の話聞いていないし……あんまりにもいい飲みっぷりだからつつこむ気力も萎えた。

「はぁ……雪蓮や冥琳に限ったことじゃないけど、遜家の人たちって、ホント酒好きだな……」

あの二人もかなり呑む。嗜み程度にしか呑めない俺にとって見ているだけで酔ってくる。

「っん……ごっく……ふはぁあ……人生の伴侶は佳き食べ物と佳き酒。そして彩りとして少々の荒事があってくれば申しぶんない。そういうものじゃろ？」

「何が「そういうこと」か分からないけど、出来れば俺は荒事じゃなくて色恋沙汰の方がおもしろいと思うんだけど……」

「色恋沙汰か……確かにそれもおもしろいがやはり荒事の方がいいのぉ〜。」

「そうかな〜……そうだ！穩が探していたよ？」

城を出るとき、祭さんを探していた穩に出会い、祭さん知らないか、と聞かれていた。見かけたら探していたことを伝えるよって言うておいたのでいっておかないと……

「穩が？何か急ぎの用事か？」

「いや、見た感じそんなに急いでなかったよ。」

「その程度のことならば心配あるまい。儂が口出しするまでもなく、穏なら自分で最良の判断ができるじゃろうし。」

「そんなこといつているけど・・・ただ単に帰るのがめんどくさいだけじゃないの?」

「んぐっ・・・ぐっ・・・ぐっ」

また飲んでるし・・・酒に逃げるって卑怯ですよ。

「穏のことはいいとして・・・こんな真っ昼間からお酒なんか飲んで、仕事とか大丈夫なのか?」

「仕事?そんなもの、酒を飲みながら片手間でも出来るわ。どうと
いうことはあるまい」

「そんな無茶苦茶な!」

俺の感覚からして勤務中に酒を飲むことはあり得ないと思っている。
MSパイロット達はスクランブルがかかるかもしれないので、勤務
中は酒を飲まないし、時間外でも軽くしか飲まない。

「やかましいのぉ・・・つまらんことを言うたらんと、お主もつき
あえ!」

「はあ?」

「ほれ、早う受けとらんか。」

強引に祭さんが酒器を押しつけてくる。

「あのさ・・・おれ、そんなにつ」

「ごぼすなよ？せつかくの酒がもったいないからなあ。」

「はあああゝ・・・」

断る間もなく、なみなみと注がれてしまった。結構量が多いぞ・・・度数が強くないといいんだけど。

「さあ、飲むがよい。遠慮せずに、ぐいっと！」

「・・・これ一杯だけだからな。」

せつかくの好意を無にすることは出来ず、ぐいっとあおってみる。

だが、次の瞬間・・・

「むうっ!?!?」

液体がのどを焼く。通り抜けてもまだ熱い。かなり度数が高いんだろう。吐きはしなかったが一気に酔いが回った。

「なんじゃ？おきにめさなんだか？」

「きつすぎるよ・・・」ここまで酒は生涯に二回しか飲んだことがない。」

前に飲んだことがある惑星横断鉄道四等列車のバー名物「Hボム」より強く、魔法界でよく飲まれているバランスと呼ばれる酒とよく似ていた。あの二つは世界が一瞬で回った。

「きつい？この程度がか？」

祭さんはまるで水のようにグビグビと飲んでいる。なんでそんなに平然と飲めるんだ！

「なんなの？この酒？」

「知らんのか？白乾兎というものじゃ。」

「ぱいかる？」

「内地の方では白酒と呼ばれておるがな。穀物を醸して造る酒じゃ。」

「
そういつて、器に入っている酒を一気にやる。」

それを見ていた俺はふと自分の体の異変に気づいた。

（まつ、まずい！しまい込んでいる覇気がうまく隠せない！酔っているからか？）

徐々に辺りの空気がピリピリしたものに変質していく。それに伴って、周りの客は居心地が悪そうに席を立ち始める。

「おい、どうした？そんな気を出して？」

「・・・悪い。酔ってうまく制御できないんだ。害はないんだけど・・・この店には悪いことをする。」

言った瞬間、皿や酒壺に細かいひびが入る。・・・俺の覇気ってここまですごかったっけ？

「はははっ、おもしろいやつじゃな〜！酔って、自分を制御できないか！こりゃ、傑作じゃ！」

祭さんは、腹を抱えて笑い始めた。

「言っている。元々飲めないんだよ！」

「ふふふっ、この程度の酒、生まれたての赤子も飲んでおるぞ？」

「それは絶対にないって！」

どこの世界に赤ん坊に酒を飲ます親がいるんだよ！顔を見たいぐら이다。

「ふむ・・・さすがに赤子は言い過ぎたか・・・」

そういつて、酒器を口に運び酒をのどに流した。

つて、この人どんなけ飲むんだよ！いくら何でも飲み過ぎじゃ・・・

「・・・じゃあ、酔いさますためにおれ、そろそろ行くね。」

「まあ、待て。座りながらも酔いは覚ますことは出来るじゃろ。少しぐらい話につき合わんか？」

「この覇気をしまつには、酔いを覚ますしかないからな。行かせてもらつよ。」

「いいから、つき合えといっておるだろうが！」

立ち上がるうとしたところをぐいっと、上着を引っ張られる。

その反動でバランスを崩し、もつれるように倒れる。本来ならこの程度でバランスを崩すような体ではないが、今は酒が回っているため運動神経がバラバラになっていた。

しかも倒れた方向は祭さんの方だった。バスツと豊満すぎる胸の谷間に飛び込んでしまった。

「なんじゃ？そんなところに顔を押しついたりして。全く、男というものは、いくつになっても乳離れができぬものよのお〜？」

「祭さんが引っ張ったせいだろ！」

祭さんの胸から逃れるためにあわてて立ち上がる。べつに・・・名残惜しいとかそんなこと無い・・・ちょっとしか。

「やれやれ。軽く引っ張ったくらいで、簡単に重心を崩しおって・・・お主、鍛錬がたりておらんのではないか？」

「酔っているから、足下がおぼつかないだけだ。鍛錬は毎日欠かさずやっているよ。だけど・・・」

「相手がおらんから、張り合いがないといたいのか？」

「・・・よくわかりましたね。」

事実、相手がいないからどういう風に打ち込めば倒せるか、有効打になるかがいまいちつかめない。イメージだけでは限界も来る。

「そういうことなら、儂が相手をしてやってもいいぞ？」

「・・・祭さんが？」

「なんじゃ？儂では不満か？」

確かに祭さんなら、隙が無く緊張を持って打ち込めるが・・・

「いや、不満とかはないけど・・・祭さんが相手だと手加減なしで打ち込まれそうで怖いんだけど・・・」

「手加減ぐらい、出来るわ！」

「それでも、あなた達は人間離れしているから、相手をするのに覚悟がいるんだよな・・・」

「人間離れだと？儂のような可憐な乙女に向かって、なんと失礼な！」

「・・・自分で乙女って言うていたら、世話無いよ。」

「何か、言ったか！」

がばっと胸ぐらを捕まれた。恐ろしい怒気を放ってこちらを威圧し

てくる。

「……ナニモ、イッテイマセンヨ？」

「ふんっ！」

つかんでいた胸ぐらを放し、不機嫌そうに酒をあおる。

この人、だいぶ酔っているな。そりゃ、あれだけ飲んでいたらな・

・

「人間離れは言い過ぎだけど、祭さんはとてつもなく強いのは事実
だろ？拳一つで城壁を粉碎できそうだし……」

「それぐらい、武と気を極めれば、誰にだって出来る。」

「いやいや、普通は無理だつて！」

それが出来るのは世界でも一ダースぐらいの人間だけだ。俺が見てきた中でも天空寺碎師匠、千越寺江影先生、豪炎寺凱英先生、安祭
睨先生が出来そうな感じがするけど……

「やる前からあきらめてどうする。お主にその気があるなら儂が気
の扱い方ぐらい教えてやるぞ？」

「今更自分のやり方を変えないよ。気の練り方ぐらい習得している。
それに祭さんの場合、死ぬぐらいつらい特訓させられそうだし？」

「特訓をする前にまずは体力をつけるのが先じゃ。一日に十里ぐら
い走る位にならねば話にならん」

「はははっ、それくらい楽勝さ！」

一日に徒歩で100キロ以上移動しなければならぬときがあるライティックスでそれくらいでバテるやつはいらないとされている。

「ほほう、言うの？後でやっても吠え面をかくなよ？」

「まあ、体力には自信があるからいいとして・・・まだまだ武の道の途中にいる俺と遙か先にいる祭さん達とは全然違うんだ。扱いを同じにしないでくれ。」

そう。次元が違うのだ。この人達は俺が考えている以上に鍛錬をしている。そしてとてつもなく強い。本気で戦ったところで俺はたぶん銃だけりをつけることになるだろう。

「扱いどうこの問題ではあるまい。お主だってそこまでの気を出すまでに相当な鍛錬をしてきたであろう？儂らとて、同じじゃ。まだまだ道の途中にある。」

「でも・・・」

「お主が儂らと同じに見られたければ、身をもって証明しろ。あのほほんとした穏だって必要あらば九節根で戦うこともあるのだぞ？」

「嘘お？あの穏が？」

あんなにのんびりしている穏が？想像できない・・・

「穩はあれでなかなか筋が良くての。もつとも穩は腕っ節の強さではなく、知謀を認められて将となっておるがの。」

「知謀か・・・一応両方やれることはやれるけど、やっぱり武の方がいいな。」

「それほどの気を出しているのじゃ。後は証明すればいいことよ。期待しておるぞー！」

祭さんはにやつと笑い俺に酒器を掲げて見せた。まるで前途を祝福するかのようじに。

「わかっているよ。期待には応えてみせるのが男つてもんだからな。」

俺も形だけ酒器を掲げる。よくし、帰ったら型の見直しからしよ。

走決意を新たにしていると、また祭さんが酒を流し込む。本当に手が止まる気配がない。

「祭さん。そろそろ酒はやめにしておいた方がいいぜ？」

「・・・なぜじゃ？」

「明らかに飲み過ぎだ。飲み過ぎは体に悪いー」

ふと、妙に鋭い視線が俺の体を貫いた。視線の主を捜してみると・・・

「・・・」

(っ!？冥琳・・・いつからそこに・・・)

「なんじゃ？どうかしたのか？」

祭さんは酔っているのだろうか。自分の背後に佇む冥琳に気づいていなかった。俺は一気に酔いが覚め、覇気をしまった。

どうする？伝えるべきか？いや、たぶん流されてしまっただろう。しかし言っておくべきだ。

冥琳のあの顔は確実に怒っている。そうだよな、こんな昼間っから仕事しないで酒飲んでいたら誰だって怒るわな。

ここは祭さんが仕事に戻るように差し向けた方がいいかもしれない。

「あのお・・・祭さん。そろそろ仕事に戻った方がいいんじゃない？」

「仕事など、酒を飲みながらもできるといっておろすが。」

「っ・・・」

まっ、まずい。怒気がこっちにまで伝わってくる。

「だが、酔っぱらっていたら兵にも示しが付かない。冥琳にも何か言われるぞ？」

「冥琳？なあに、あんなひよっこに何言われようと気にせんわい！」

また、一気に酒を飲み干す。そろそろマジでやめといた方がいいと思っただけだな・・・

「そもそも周家のご令嬢殿は、今でことあやつてエヘンと威張っておるが、昔は泣き虫での。よくいじめられておるところを、儂が助けてやったものじゃ。」

ぴっ！

「っ！！！！！」

「あー・・・」

冥琳がだんだん近づいて来る。心なしか歩くたびに空気が割れているように感じるのだが・・・

「それがいつの間にもやらあのようになってしまうての、まったく、儂はあんな風に育てた覚えはないぞ！」

「私も育てられた覚えがありませんが？」

「・・・ん？」

祭さんは最初、幻聴か何かを聞いたとでも思っただろう。不思議そうに首を傾け、背後を向く。

それを待ちかまえていた冥琳は、皮肉たっぷりの笑顔で祭を迎えた。

「偉そうな物言いをするようになって申し訳ありません。これから気をつけるようにいたしますしょう？」

「なっ」

その瞬間、祭さんの顔が固まった。恐ろしさのあまりに固まったのだらう。

酔いも覚めてしまったようで顔から赤みが引いたようで、代わりに浮かんだ汗がたらりと顔を伝う。

そのまま、何ともいやな緊張感が包まれた時が過ぎる……いやだなこの緊張感……

「……のお、セツナよ？」

祭さんは恐ろしいものを見たかのような顔をしてこっちに問いかけてきた。

「なんですか？」

「僕はもしや……虎口に飛び込んだウサギか？」

「ええ、もうずっぽりと飛び込んで捌かれていますね。」

「くっ、もやは死にたいと言うことか……」

「……惜しい人を亡くしました。」

俺が冗談めかしている……

「さて、祭殿。そろそろ観念されましたかな？よろしければ、これ

から二三、お話ししたいことがあるのですが？」

冥琳は笑顔を崩さずに言った。目が笑ってないから、めちゃくちゃ怖い……

「いつ、いや、遠慮ー」

「出来るとお思いですか？」

出来るわけ無いよな……さんざんこき下ろしていたから……

冥琳は満面の笑みを浮かべて、祭さんの腕をがっちりと掴む。

「ここでは迷惑になるので、場所を変えましょう。」

「待て冥琳！離せ！離さんか！セツナよ、ぼうつとしておらんと、助けんか！」

「……さて、そろそろ鍛錬でもしに行くか？」

祭さん以上に冥琳を敵に回すと後々が恐ろしい……触らぬ仏にたたりなしって奴だな。

「この薄情者がああ〜!!」

叫びながら、祭さんは冥琳に引きずられていく。

本気で抵抗すれば振り払えることは出来るんだろうけど、仮に逃げたとしても帰る場所は同じだから結局は捕まってしまうのがオチだ。

俺はまた一人勇敢に散っていった兵のために最敬礼で見送って
いた・・・

こっやって日々がすぎていったのだった・・・

第一話 飛ばされた世界（後書き）

いかがでしたか？

真・恋姫無双をやって思いついたのですが・・・雪連、いい！

ここまでしっかり書いたのは初めてなので、なかなか時間がかかりました。

次回は第二話、始まる大乱です。

どうぞ、お楽しみに・・・

第二話 始まる大乱（前書き）

作者「こんにちはは、第二話からは私と愉快的仲間達で前書きをしていきたいと思えます。」

セツナ「はつきり言って心配だな。セツナ・フォーリングだ。」

雪蓮「ホントよね。責任感もあまりないし・・・孫伯府です。」

作者「お前ら・・・言いたい放題だな!? 創造主になんて口をきいているんだ!？」

セツナ「あんたが創造主なんて片腹痛いな。狙った女一人も落とせないのに・・・」

作者「ちよっ!? リアルな話を持ち出さないで!？」

雪蓮「それに、今まで星の数ほどフラれてきたんでしょ? 笑えるわね」

作者「やめろ! 俺の心の傷にふれるな!！」

セツナ「小説書くスピードも尋常じゃなくくらい遅いし・・・書くのを止めた方がいいんじゃないか？」

作者「う・・・うわあ〜んっ!! (ピューッン)」

雪蓮「あゝあ、泣いて走っていったわよ? いいの? ほっといて?」

セツナ「いいんだよ。打たれ強いし、立ち直りも早いから次の前書きの時には帰ってくるだろう?」

雪蓮「そうね じゃあ、始めましょうか?」

セツナ「そうだな。あまり読者を待たせるのはよくない。」

雪蓮「それじゃ・・・せーのっ!」

セツナ・雪蓮「真・恋姫十無双 ～乙女繚乱 三国志演義～ 呉書

虎狼天下覇道の巻 第二話 始まる大乱。どうぞ閲覧してください。
い。」

作者「次の前書きで覚えているよおおお〜!」

第二話 始まる大乱

俺がパイルドライバーで別世界の三国時代に来てからそれほど日にちがたつてないある日

館に駆け込んできたたった一人の使者によって、いよいよ戦乱の幕が開かれた。

俺たちの世界でも有名な黄巾の乱。各地で暴徒となつた農民が大陸全土で暴れ回り、世は阿鼻叫喚の時代になつたと使者が告げた。

それと共に、一通の書簡が孫策の手に渡つた。

それは荊州本城に居を構える袁術からの、孫策の召還命令だつた。

使者の話によると、漢王朝より各地の有力諸侯対し、黄巾党討伐の命令が下つたそうだ。

少し政治を知っているものならば、この状態がすぐにピンと来る。

すでに漢王朝には動乱を鎮める力も持つてないと言つことだ。

「・・・軍議と聞いてきたんだが、なんで俺が呼ばれたんだ？」

とりあえず来てくれと言われ来たんだが・・・まだ自分の軍を持っていないし知謀も自信はない方だしな・・・一体何の役に立つんだ？

「おまえを客扱いする道理もなければ、そんな余裕もない。それに保護をする際の契約の時に武将として働くとしっかり言ったのであるうっ？」

「確かに言ったけど、まだ自分の隊を持っていないんだぜ？それが武将といえるのか？」

「今回から雪蓮の副将として働いてもらう。それなら文句はないだろうっ？」

なるほどね・・・それなら前線に出られて、なおかつ隊を持たなくていい。新参者には隊をつけるのは利口なやり方じゃないしな。

「わかったよ。雪蓮の暴走も止めれるように努力するよ。」

「察しがいいな。雪蓮を止めるのは我々でも骨が折れる。」

「まあ、あまり期待しとりやせんがの。ただ、天の御使いとして頼もしい所を見せりゃ、女も惚れるじゃろ？がんばれよ。若造。」

祭さんは肩をバシバシ叩いてきた。だからいたって！

「そんな理由で戦いたくはないけど・・・でも軍議って結構重要だろ？なんでこんなところですか？」

軍議ほど人目を嫌う者はないというのに・・・実際にブリーフィングループでは厳重な盗聴対策、ダクトなどの設備の排除などを施している。味方がしゃべらない限り

作戦内容が漏れないようになっていく。

「ここが一番、他者の耳を警戒できるからな。」

「・・・なるほどな。ここなら見通しがいいから簡単に盗み聞きをしている奴を見つげられる。」

だが、ここまで厳重にする必要があるのか？

「私たちの周辺には、常に袁術さんの目が光っているんですよ。」

そうか・・・配下が反乱を起こさないための予防策としてスパイを忍ばしているんだ。

「密談をするようなことがあれば、逐一袁術に報告されるだろう。だが、普段からここで軍議をしていけば、いざ事を起こそうとしたときにでも、こそこそとせずに

堂々と相談が出来る。」

なるほどね。だから、外でするのか。・・・今俺を取り巻く環境もよく分かった。

「で、雪蓮は？」

「袁術に呼ばれて荊州の本城に向かっている。用件は十中八九、黄巾党討伐のことだろう。」

「まあ、この場合、それで間違いないだろ。俺たちはどうするんだ？」

「我らは準備ができ次第、この館を出て、策殿と直接合流する。」

「合流後、すぐに討伐開始か？」

「そういつことだ。」

「了解。で、こっちの現状は？」

まずは周りの状況からだ。状況が見えないと作戦の建てようがない。

「我々が抱えている問題は三つ。兵糧不足と軍資金の不足。そして兵数の問題だ。」

冥琳たちは、問題点の評細を話していく

黄巾党は北と南で二つの部隊に分かれている。本隊は北の方の部隊で俺たちが担当することは間違いないみたいだ。

兵数は多くて5000、多少無理すれば一万はいけるということだが、少ないみたいだ。

軍資金の方はあまり蓄えはないこと。街の有力者からの協力はあまり期待できないらしい。

そして、金がないから兵糧もまかなえないという悪循環に陥っていた。

・・・待てよ？そんな理不尽なことをやらせるんだったら、上から出させればいいんじゃないのか？

冥琳達の話が一区切り付いたところで俺はそれをいってみた。

「・・・なあ、それらすべてを袁術に出させたらどうだ？」

「ふむ、どういう事だ？」

「みんなの話を聞いていると、袁術は雪蓮達を本隊に当てたいんだろ？逆に言うと袁術は本隊とは戦いたくない。なら、本隊を相手にしてやる代わりにこちらの問題である

兵や資金、兵糧を袁術所から出せといえはいんじゃないのか？」

「拒否されたら？」

「今いる数だけで、袁術より速く南の部隊を撃破。そのことを荊州各地で喧伝すれば、いくらなんでも太守としての面子があるから、本隊討伐に軍を動かすだろう。」

俺たちの世界では、こうはならない。面子はつぶれても命が惜しいから保身に走り、下の者には何も与えず雲隠れをする。だから、自分たちで何とかする場面も多かった。

「ほお。・・・なかなかいい案ですねえ、それ。見直しましたよ。セツナさん」

「まあ、これくらいは誰にでも思いつくよ。」

「そう謙遜するな。我らでは思いつかなかったからな。現状それが精一杯の案のようだから、セツナの案を採用しよう。」

こんな感じでいいのかな？向こうでは通用しない作戦でもこちらでは案外通用するのかな。

「了解した。ならばすぐに伝令を発し、策殿に交渉をお願いするかの？」

「それがよいでしょう。」

「うむ・・・だれかあるか！」

祭さんが大声で呼ぶとすぐに兵が飛んできた。内容を伝え紙にしたためらせ、すぐに走らした。

その様子を見ていると不意にくすぐったい目線を感じた。その視線の元をたどっていくと冥琳がこちらをじっと見ていた。

「どうした？じっと見て。」

「・・・いや、雪蓮の言うとおり、いい拾い物だったと思ってな。」

「俺がか？」

「そうだ。なかなか鋭い洞察力を持っている。それもかなり鍛え上げられた物だ。」

「褒めたって、何も出ないぜ。長いこと戦争続いていりゃ、いやでも鍛えられるぞ。」

「・・・おまえの世界では、戦乱がよく起きるのか？」

「ああ、平和な時間は長く持つて10年が限度。戦乱は大抵は半年から一年で終わるけど、犠牲者がとてつもなく出る。」

「なぜ、そんなに戦乱が起こるのだ？」

「冥琳達の世界で言う朝廷がダラダラやっているからだよ。それに不満を持った他の国が反抗勢力が武力でその朝廷を倒して、自分たちの理想を成就するために起こすんだよ

戦乱を・・・」

事実、セツナやレクト、クロインズやナナ達は惑星連邦の絶対的中央集権政治が反感や不満を生む根本的な原因になっていると思っ
ている。

エリザ・バーランドが大統領に着任し、アクセル・マイヤー中將が副大統領になってからは、各国の関税の減額、自治権の確立、ダーレー財閥と手を組み、

世界規模の社会福祉と雇用情勢の充実を徹底したため、国民はこの二人を大々的に支持し、支持率も未だに95%をキープしている。

しかし、この政策は政治家にとって今までの手回しをつぶさされているような政策であるため、一部からかなり反感を買っている。

「・・・さて、とつと準備して雪蓮達と速く合流しようぜ？」

「・・・そうだな。世間話をしている場合ではなかったな。」

冥琳の目の色がなにより深くなったことが気になったけど、すぐに顔を背けられた。」

「方針は決まった。黄蓋殿、すぐに出撃準備を。」

「承った。」

「穏は、輜重隊の準備をしておけ。二刻後には館を出るぞ。」

「わかりましたあゝ」

「セツナは私と共に各部隊の作業状況の確認と今ある情報の確認だ。状況を確認しておかねば、的確に動けんדר？」

確かにそうだ。情報を知っておかないと動きようがない。

「すまないな。助かる。」

「それはお互い様だ。」

冥琳の言葉と共に軍議に終了し、俺たちはあわただしく準備に取りかかった……

「いよいよ戦乱の幕開けね……ふふっ、ゾクゾクしてくるわ。」

「……雪蓮を知らない人がそれだけを聞くと、危ない人だと勘違いするぞ?」

雪蓮と合流してから、北の黄巾党本隊に向けて進軍していた。雪蓮の副将として俺は先頭をみんなと馬で走っていた。

前々から馬に乗る訓練はしていたが、まだ慣れていないので少々危なっかしい。

「あらどうして？待ちに待った大陸の混乱なのよ？・・・この乱に乗じて、私たちの独立を目指す第一歩なんだし・・・」

雪蓮は唇を不敵につり上げ、醜く笑う。

「ゾクゾクしちゃうのも仕方がないでしょ？」

「気持ち分かるが・・・初陣の相手が黄巾党というのは物足りなさすぎる」

「まあ、勳を取り戻すにはちょうどいいとも言えるがの。」

「兵の練度を維持するために調練だけは欠かさずしていましたがねえ〜。やっぱり実戦を経験しないと仕上がりも分かりませんし・・・」

それは正論だ。訓練では分からないことを教えてくれるのは、実戦だけだ。

「そういうこと この戦いで私たちの強さを喧伝できれば、これからの戦いが楽になるでしょ。ここは最高の勝ち方をしないとね〜」

「ええ・・・セツナ、雪蓮の言葉の意味が分かるか？」

「えっ？」

馬に乗り慣れていないので、尻が痛くなったところさすっていたら急に声をかけられた。

「どうしたの？しかめっ面なんかして？」

「尻が痛いんだよ。馬に乗り慣れていないから。後、先に言っておくけど、戦の時は馬から下りて戦うから。」

「なんで？馬に乗った方が断然いいのよ」

「慣れていないんだよ。何かに乗って斬り合っつて事は。慣れるまでは降りて戦うよ。」

そっちの方がまだ危険が少ない。たとえ相手が騎馬隊でも踏みつぶされるへまをするなら今頃ここにいない。

「それはそれでいいとして、セツナ。呉、独立を目指すために、雪蓮が初陣でしなければならぬ最高の勝ち方とはなんだ？」

最高の勝ち方ね・・・被害を最小限に、戦果を最大限、なおかつ敵が恐怖するような勝利ということかな？

俺の考えをみんなに伝えると・・・

「よくわかったな。正解だ。」

「俺の世界でも、風評は戦局に左右することはあるからな。だが、その風評がこけ倒しだと一気になめられるから、行動で示す、口先

だけの奴は信頼なんか得られないし。」

「ふむ・・・良い答えだ。」

俺も口先だけの男にならないようにがんばらないと。それだけは勘弁だからな。

「なあに腹黒くやってんだか・・・そんなことよりさっさと黄巾党を皆殺しにするわよ。」

「まあ待て、策殿よ。セツナの言う通り、我らに大切なのは敵が我らと対峙するだけで恐怖するような圧倒的勝利じゃ。ならばそれなりの策を用意した方がいいじゃろう。」

「策？相手はたかが盗賊の集団よ。策なんている？」

「闇雲につつこんでも損害が増えるだけだ。雪蓮。無茶なことを言わないでくれ。」

いくら何でも策なしでつつこむのはただの能なしだ。少しは一般兵の心情も考えてくれ。

「圧倒的勝利とは、敵に与える損害が甚大なこと。そして、人々の心に残るような痛快さが必要な。たかが盗賊だからこそ、最も大きく損害を与え、もっとも痛快な

勝ち方をしなければならぬわ」

「ふん、で？」

雪蓮は明日の天気を聞くような感じで返事をしている。少しは作戦の大切さもわかってくれよ。」

「そうね・・・火を使うなんてどうかしら？」

「火を使って、黄巾党を焼き殺すの？」

「ええ」

「素敵ね、それ。真っ赤な炎って好きよ。」

「では、決定じゃな。」

「待て。火を使うのはあまりにも残酷すぎる。俺は反対だ。」

火を使って、敵を焼き殺す。確かに人の耳にも良く残るし、敵も恐怖する。だが、敵の士気を下げただけではなく、味方の士気も下げる場合もある。

無惨な焼死体の処理も時間がかかるし、何より時間をかけて敵を殺すため、怨嗟の声、苦痛の声が辺りに響き渡る。これが兵の心に深く残り後々トラウマになる可能性も

秘めている。

「セツナ、残酷だからこそ、名が上がるのだ。」

「そんな・・・」

「それに盗賊さん達はもっとひどい事を抵抗出来ない人たちにして

いますからね。天罰つてやつですよ。」

「そういうことだ。・・・戦う力もなく、いいように盗賊に虐げられる庶人の代わりに天罰を下す。・・・それが人気につながるのだ」

その言葉に俺は疑問を持った。天罰は神が人に罰を与えることだ。人が人に罰を与えることは間違っている。

そんな俺の疑問をよそに、話は進んでいく。

「だから、私たちは黄巾党を殺す。完膚無きまでに殺し尽くして、庶人の怒りや悲しみを解消する。」

「庶人が聞けば、大賛成な言葉だな・・・だがな・・・」

「ふむ、セツナは賛成できんようじゃな。」

「理屈を聞けば、軍人としての俺は賛成する。だが、人としての俺は賛成できない。確かに、庶人の恨みを晴らすことが出来たなら、人は恨みを晴らした人物の国に集まって

くる。集まってくるから、金が落ち、収穫量が増える。また、強者がその者に興味を持ち、その者の下で使えてくれる可能性も出てくる。いいことづくめだ。」

その国の軍隊は強い。強い。その周りは安全という感覚ができてくる。だから人が集まる。金も落ちる。これは一般人の自然の理だからだ。

「でしょ？ だつたらー」

「だが、いずれどこかで齒車が狂う。俺たちより強力な軍が攻めてくると、集まった庶人達は一目散に国から脱出する。内乱で国がぐちゃぐちゃになるかもしれない。」

なぜかって言うと、それは恐怖での支配をしているからだ。恐怖で政治している国は長くは持たない。だから、反対なんだ。」

「あのね、セツナ。私たちは別に恐怖で政をしようって訳じゃないの。そういう風には絶対しないから、分かって?」

「・・・」

何かが納得できなかつた。俺たちの世界であれば、人に対しては絶対的強さを持つMSがあるから、簡単に相手を降伏させることができた。この時代でもそれが出来ないかと

考えているから、賛成できないのだ。

「どこかで、甘さを見せると貴様が死ぬぞ。」

「戦闘では甘さは見せない。だから俺は死なない。」

「そついつている奴に限って、死ぬもんじゃ。」

確かに・・・だがそれだったら、俺はあの四大戦争でとくに死んでいたはずだ。甘さが出ていたらあの四方八方敵に囲まれた四大戦争開始時の時や

敵の畏にはまり決死の覚悟で揺動していたときのような絶望的な状

況の中からでも生還できなかつたし、最終決戦の時でもルアフに負けていたはずだ。

「セツナさん。盗賊達は弱い人からすべてを奪います。お金、衣服に飽きたらず、尊厳を奪い、命を奪う・・・飢えた獣だと思わないと?」

「そうよ。奴らは人間じゃない・・・いいえ、下は人間だったかもしれないけど、人としての誇りを無くし、賊に成り下がったことで獣に落ちたも同然。」

その言葉に怒りを感じ、頭に血が上る。しかし外に出さないように自分を律しているが、雪蓮の次の言葉でそれが吹き出した。

「しつめのなっていない獣は殺すしかないのよ。」

「・・・ちがう。」

「えっ?」

「ちがう!人間はどこまで墮ちようと人間だ。獣になれるはずがないんだ!どんな悪党にも心はある!今まで俺が対峙してきた敵で、どんなに極悪な奴でも心はあった。」

覇気を全開にして、雪蓮達にぶつけるように言う。みんなは面を食らって俺の言葉を聞いていた。

「それに、天罰を与えると云っていたが、それも違う。天罰は神だけが与えることが許される行為だ。人が人に天罰を与えるなんてどう考えてもおかしい!。」

肩で息をしていた。ここまで怒ったのは久しぶりだ。

「セツナ。それは理想論よ。それに最終的に決めるのは私だから、この策はどうやっても覆らないわよ。」

雪蓮は明らかにいらだっていた。唇の端がかすかに歪んでいるのを見た俺は、何も言えなくなった。

「・・・分かった。それだったら俺は何も言わないよ。雪蓮達の言うことも一理あるからな・・・だが、これだけは言っておく。俺は俺のやり方を貫く。そのことを忘れない

でくれ。」

「どうぞ、ご勝手に。」

この世界には、この世界のルールがある。俺はそのことを今痛感していた。

「今の私たちに必要なことは、どうしたいのか、どうなりたいのかを考え、それに向かってなりふり構わず進むことだ。」

「負ければ死・・・どんなきれいな事をほざいても死んでしまえばそこで終いじゃ。我らは我らの立場、そして状況を理解した上で、なりふり構わず生き抜かんとな。」

祭さんの「なりふり構わず生き抜く」という言葉に俺は、さっきまで死んでいた目に光が戻った。

犀牙流、千越寺流、凱影流、師匠の教えでも、信条は「生き続ける」だった。

生きていれば、負けても雪辱のチャンスが来るし、強さを磨き続けることも出来る。死んだら何もならないから、どんなにかっこわるくても死なないように生きる。

どんなことがあっても生きると、身をもって教えられた。

「・・・その通りだな。」

結局、さっきの考えは甘えだったかもしれない。俺もまだまだ甘いな・・・

そう思っていると、一人の兵士が雪蓮の下にやってきた。

「孫策様。前方一里のところに黄巾党本隊とおぼしき部隊の陣地を発見しました。」

やっと敵が発見されたか・・・そろそろギアを入れていくか。

「ありがとうございます・・・さて、久々の実戦ね。派手に決めましょ！」

「了解した。黄蓋殿、先鋒は伯符とセツナに取らせるので、その補佐をお願いします。」

「心得た。」

「私とは伯言は左右両翼を率い、時期を見て火を放ちます。」

「ふむ、公謹の合図と供に軍を引けばいいのじゃな。」

「ええ。」

とりあえず初戦はそれで行くことに決まったみたいだ。俺は馬から下りて、軽く体をほぐす。それからジャケットを馬に掛け、手甲をつけ直す。

「本当に馬に乗らなくていいの？」

「ついて行けるから大丈夫だ。この馬だけはちゃんとしておいてくれよ。」

「わかったわ。背中には任せるから。」

「それは祭さんの仕事だ。……まあ、気にはかけておくよ。」

「ありがとっ」

体もほぐれたところで、ギアが入る。覇気を全開しに、体の中で内巧を練る。

「策殿……くれぐれも暴走せんようにしてくれよ？セツナ、暴走していたら策殿を止めてくれんか？」

雪蓮が暴走……止めるのはかなり骨が折れそうだ。

「……止められるように努力するよ。」

「……そのときは僕も手伝うから安心せい。公謹と伯言は時期を

見失わないようにな。」

「了解していますからご安心を。」

「頼むぞ。では策殿。出陣の号令を。」

「了解」

雪蓮は、兵の前に立ち、号令を始めた。

「勇敢なる孫家の兵達よ。いよいよ我らの戦いを始めるときが来た！」

「新しい呉のために！先王、孫文台の悲願を変えるために！天に向かつて高らかに歌い上げようではないか！誇り高き我らの勇と武を！」

それは、とても腹に響く声であった。それでいて体の中に眠っているものを目覚めさせるような熱も持っていた。

「敵は無法無体に暴れる黄巾党！獣じみた賊どもに、孫呉の力を見せつけよ！」

「剣を振るえっ！矢を放てっ！正義は我ら孫呉にあり！」

言い終えた瞬間、兵達は雄叫びを上げた。すさまじい雄叫びは地を揺るがし、空気を震わせた。

「全軍拔刀せよ！」

鐃鳴りがそこから中で鳴り響く。兵達は突撃するその瞬間を待つように構えた。

「全軍、突撃せよ！」

雪蓮と俺を先頭に、兵達は突撃していった。

戦いの火ぶたは切って落とされた・・・

ドスッ！

大きく剣を振りかぶった敵より速くのど元を付く。敵は声を上げる暇もなく絶命した。

（前が開いた！今の内に！）

シラムシールを水平に構え、空間を穿つような突きを放つ

「犀牙流・・・究極闘牙・改！」

突きが螺旋状に固まり、相手に向かって飛んでいく。その螺旋に巻き込まれた相手は体の一部を失うか、斬られたことを知らないまま死んでいく。（通常、犀牙流究極闘牙は円上に形成され、中は空洞であり、有効距離もそれほど長くない。セツナの場合、斬撃系の剣技センスは皆無なのだが、突き系の剣技に関しては類を見ないほどのセンスを持っていた。それに伴って突き主体の千越寺剣技の習得

と基礎筋力の高さが相まって、通常の物より威力が数段高い物になっている。）

その余韻を隙だと思ったのか敵が一人こちらを斬りつけようとしていた。

（左からか・・・剣は振れないな）

左腕からノーモーションで投げナイフをとばす。そのナイフは敵の首下に刺さり大量の血を吹き出しながら倒れた。

右側からも敵が迫ってきた。槍でこちらを殺そうとしている。

（間合いが遠い！それならば！）

相手の突きを膝抜きと転ばしの体捌きでかわし、相手の間合いの内側に入る。その勢いを殺さず、裏拳を相手の顔面に打ち込む。

悶絶している相手の心臓を一突き。返り血が体に少しかかった。

そのときに気づいた。視界が少し赤く染まっていることに。おそらく血煙が目に入ったのだろう。

それに、吐き気もする。血のおいに酔ったのかもしれない。

（ええい、今はそんなことを気にしている場合じゃない！）

自分を鞭打つように頭を振り、喝を入れる。だが吐き気は収まらない。

周りの状況を確認してみると、敵は我先にと陣地に逃げている。そろそろ火を放たれるだろう。

「セツナ。後退しましょう。敵が退いていったわ。」

「そうだな。後退しないと火に巻き込まれる。」

俺は雪蓮の馬に相乗りさせてもらい、後退する。

馬から下り、陣地を見ている。火が放たれ瞬く間に燃え広がっていく。

所々で苦悶と怨嗟の音が響き渡り。吐き気がひどくなる。

「・・・セツナ？顔色が悪いわよ？」

「大丈夫だ。それよりももう一度突撃だから、時期をー」

吐き気がさらにひどくなり、もう耐えられなかった。

体の中のものをすべてはき出すかのように吐いた。

「ちょっと、セツナ！本当に大丈夫？」

「・・・少し血のにおいに酔ったみたいだ。もう大丈夫だ。」

体が震える。ここまで間近で白兵戦をしたのは初めてかもしれない。

MS戦、銃撃戦とはまた違う血のにおい、兵士たちの苦悶の声。すべてそれらでは感じるこのできないものばかりだった

俺は本当の戦場を知らなかったのだ。親父やベルナデイスさんの言葉は正しかったことを今思い知ったのだ。

「そろそろね。セツナ、無理だったら私の馬に乗っていいのよ？」

「もう本当に大丈夫だから・・・いけるよ。」

自分のいる場所は戦場だ。甘えは許されない。

「そう・・・無理はしないでね。全軍、突撃！」

号令とともに兵たちは雄叫びを上げ突撃をかける。

俺も雪蓮と共に残っている敵を掃討していく

程なく、掃討も終え、後方部隊と合流した後袁術のいる荊州の本城に向かい、意気揚々と引き上げた。

「あなたの望み通り、黄巾党の本隊を殲滅してあげたわよ？・・・これで満足かしら？」

「うむむむ・・・ご苦労じゃった。」

嫌々ながらもしっかりと報告する雪蓮にたいして、偉そうに返事をする袁術だった。

それを暇そうにみている俺だったが、なぜここにいるかというところ

蓮が一人で行くのがいやだと駄々をこね、冥琳がおまえも袁術をみておいた方がいいと無理矢理付き添いさせたからだ。手甲は祭さんに預け、返り血は水で洗い流してきた。

(これが袁術か・・・まだ子供だな。)

見た感じ、まだまだ子供の域を抜けていない。愛くるしい姿は平均よりは遙かに高いがわがままいっぱい育てられたような感じがした。

「それだけ？ 劳いの言葉じゃなくて、私がほしいのは約束の履行なんだけど？」

「約束？ 何のことじゃ？」

うわぁ・・・まさしく子供だな。雪蓮のこめかみぴくぴくしているぞ？

「・・・反故にしようっていつの？・・・時期が来れば呉の再建のために兵を貸すという約束を。」

「おおー。そういえばそんな約束しておったのぁ。・・・しかしな、孫策よ。妾にはまだ時期とは思えんのじゃが？」

その言葉に俺は相手の意図が読めた。無能で出世欲の強い上司が使える部下をダシにして、自分の功績にする図が浮かび上がってきたのだ。その部下はその上司から逃げたいのだが、上司がそれを許さない。部下が変に力をつけるのを防ぐため出る杭は叩くようにあらゆる方法でつぶす。この状況の場合、雪蓮が部下、上司が袁術、俺はほかの部署の社員、ってな感じかな。

「そうですね、それに今は黄巾党が暴れ回っているから、そんな余裕はありませんしい。」

「張勳の言つとおりじゃ。・・・ま、約束については追々考えて進ぜよう。それで良いじゃろ？」

張勳つて、呼ばれた女性がおそらく袁術の腰巾着なんだろうなっと思つたが、なんせ次の袁術の言葉がひどかった。

俺は怒りを感じ、ノーモーションで投げナイフを投げそうになるが、雪蓮に止められる。

「・・・まあ、いいわ。荊州に侵攻してきた黄巾党の本隊は殲滅した。分隊の方は自分たちで何とかしなさい？」

「言われんでも、すぐに殲滅してみせるのじゃ！」

「そうだ、そうだ。」

「あっそ、じゃあお手並み拝見と行くわ。」

雪蓮はあまり興味なさそうに返事を返した。たぶん、俺が思っている以上に袁術の軍は強くないのだろう。

「うむ。・・・それにしても孫策よ。隣の男は何なのじゃ？」

終わりそうなところをいきなり話を振られて、少し面食らってしまった。

「私の大切な仲間よ。ほかに用がないなら私たちは行くけど?」

「仲間のあゝ・・・しかし、それほど強く見えん輩を仲間と云っていいのやら?」

「っ!」

雪蓮は怒りのあまり、袁術に飛びかかろうとしたが俺は肩をつかんで止めた。

(何で止めるの?仲間を侮辱されたのよ!)

(俺のことはいい。ああいう能なしで地位の上のやつに逆上しても何の利益もない。)

(でもっ!)

(ここは俺に任しておけっ!)

俺は袁術の前に一步でて自己紹介しておく。

「私の名前はセツナといます。以後お見知りおきを」

「うむ。セツナとやら、余はなぜ孫策の元に仕えておるのじゃ?妾の元に仕えれば、俸給もそれなりに出すぞ?」

俺は怒りをこらえながら、頭を下げ丁寧に断りを入れる。あそこまで荒んだ戦争を体験していながらもセツナの言葉遣いは柔らかかった。

千越寺流を習得する際に礼儀もたたき込まれたためである。

「申し訳ありませんが、私は孫策様に一生の忠義を誓っておりますので……」

「そうか。それならば、仕方がない。これからも妾のためにがんばるのじゃぞ?」

もう限界だ。だが直接的な反抗はよくない。そこで俺は……

「かしこまりました。」

顔を上げ、去り際に一点集中の覇気を袁術に放った。

「きゆう……」

と袁術は頭をたれて気絶した。達人級が格下の相手に向かって使う「気当たり」だ。

「あれえ、美羽様?もうお眠ですか?」

張勳は気絶していることに全く気づいていなかった。あいつ……あほだろ?

「それでは失礼します。」

俺と雪蓮は袁術への報告を終え、みんなの元へ帰って行った。

「ふう〜・・・あぁっ！腹立つ〜！」

みんなのところに戻るなり、たまっていた怒りをはき出す。オーラまで立ち上ってくるほどだから相当だな・・・

「お疲れ様、それにセツナも・・・その様子では吉報はなかったよ
うね」

冥琳はさしも当たり前のように聞いてきた。日常茶飯事なのかな？

「ありゃ、だめだ。こっちの軍をこき使って、自分の軍は消耗させないようになっている。」

「ほう、よくわかっているではないか。」

「今までも何度も約束を反故にされてるんだろ？雪蓮の様子でわかる。」

「そつよ！むかつくったらありゃしない！」

うわぁ・・・マジで怒ってんな。袁術のことが相当嫌いなんだな。

「それにあれで、こき使って意図を隠していると思ってるらしいが・・・」

「みえみえ過ぎるだから、よけいに腹が立つのよ!」

「全くじゃ」

祭さんもあきれているようだ。今は楯突けない以上こうやって、陰口をたたくしかないか・・・

「しかし、腹が立つからといって、今、袁術に楯突くのは得策ではない・・・雪蓮、もう少し機を熟すのを待ちましょう」

「分かってる、分かっていますっば！でも・・・むかつくのは止められないのよ！」

はぁ・・・まったく、このご主人様は、厄介な人だな。こういうときは・・・

「雪蓮。こういうときは深呼吸と気分転換だ。」

「何で気分転換すればいいの？」

鋭い目でこちらをにらんでくる。おお・・・怖い怖い。

「そうだな・・・馬を全力で走らすのはどうだ？」

「・・・いいわね。セツナ！全力でついてきなさい！」

「そう言うと思ったよ。ちょっと待っていてくれ」

そうなると冥琳の許可も必要だし、護身用に手甲もつけないと・・・

冥琳の方をみると、無言でうなずいた。OKのサインだと読み、親指を立てありがとうという。

続いて、手甲を預かってもらっている祭さんの方に行くと、血で汚

れていた手甲が新品同様になっていた。

「すみません。磨かせてしまつて・・・」

「暇じゃつたから、軽く磨いただけじゃ。これはお主の体の一部なんじゃろ？ だつたら、綺麗にしとおかんな？」

祭さんつて、意外に面倒見がいいんだな。新たな一面を見つけた。

「本当にありがとうございました！」

「・・・うつ、うむ。礼をされるようなことはしとらんがな。」

白銀の髪を揺らしてそっぽを向く。・・・完全に照れているな。

手甲を素早くつけ、すでに馬に乗って待っている雪蓮の元へ向かう。

「遅いわよ！ 早く行きましょ！」

「わかつているよ・・・っと！」

まごつきながらも馬に乗る。俺の乗る馬は空雷と呼ばれている。気性はおとなしいが、勇敢で不慣れな騎手を先導するような賢い馬だと聞いた。

事実乗りやすく、不慣れな俺を何度も助けてくれている。

「さあ、行くわよ！」

雪蓮は車もびっくりなロケットスタートで、突っ走っていった。

「雪蓮！待ってくれよ！・・・頼むぜ、空雷！」

ヒューンと、返事をするようにいななき、雪蓮を追いかけるように疾走を始めた。

結構な時間を走り、俺たちは湖の近くに馬を止めた。

「うーん、気持ちよかつたー！」

雪蓮はとてもご満悦のようだ。一方俺は・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・、早すぎるぞ！雪蓮！」

ついで行くのがやっとで不慣れな俺は、肩で息をするほど憔悴していた。

「あははっ、セツナ、どうしたの？そんな疲れた顔をして？」

「馬に乗り慣れていない俺が、雪蓮について行くことがどんなに大変か分かるか？」

「全然」

・・・まったく、少しは人のことも考えて飛ばせよ。空雷もがんばってくれたけど、ついて行くのがやっとだったんだぞ！

「・・・で、少しは気分、晴れたか？」

「うん・・・まだ少し残っているかな？」

「だったら、少しやるか？」

剣を抜き、雪蓮の方に向ける。雪蓮はあきれ笑いしながら・・・

「そうね・・・いいわよ。」

雪蓮も剣を抜き、構える。

お互い間合いを計りながら、じりじりと詰め寄っていく。

「はああっ！」

雪蓮から先に仕掛けてきた。爆発的な瞬発力で地面を蹴り、天を断ち切るような斬撃を俺に見舞ってきた。

しかし、ワイヲリカ流無形を習得している俺にとって、その攻撃方は簡単に見切れるものだった。

余裕を持って受け、弾き返す。

「てやああっ！」

二合、三合と打ち合っていくが、すべて受ける。雪蓮もムキになって、さらに速く、強く打ち込んでくる。

十数合打ち合ったところで、俺から仕掛けてみた。受けたところを・

・

「はっ！」

体制を維持したまま、片手で剣を持ち、拳を打ち込んだ。雪蓮の顔を前で寸止めする。

「っ!!！」

「俺だつて、受けに徹底して後の手を取れば、雪蓮に勝てるさ」

「生言つてんじゃないわよ！」

激昂して、今までより数段速く打ち込み始めた。しかし、俺は受けるときは受け、避けれるときは避けて雪蓮の斬撃をかわしていた。

それから、何度かカウンターを決めると、いよいよ雪蓮も慎重になつてきた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「やっぱり疲れてきたか・・・」

「はあ・・・はあ・・・全然！」

いままでの攻防で雪蓮の実力はだいたい分かった。

雪蓮は、俺が出会った人の中で、トップクラスの強さを誇っている。この時代でも最強の武将の一人だろう。

攻撃の速さ、重さをみても、師匠や先生達のクラス、つまり達人級であることが伺える。その攻撃を受けに受けていたのでこちらのシヤムシールが何度おられるかと思っただことか。

「さて・・・そろそろ俺も攻めるか。」

体重を足裏に散らし、シヤムシールを霞下段に構える。重心を体の中心にまとめ、躍動の時を待つ。

片手で構えている雪蓮を見据え・・・次の瞬間、水面を歩くかのような足取りで雪蓮に仕掛けた。

「千越寺流剣技・・・千影突！」

無数の突きが雪蓮に襲いかかった。雪蓮は目を丸くしながら驚異的な反射神経ですべて受けきる。

しかし、無理があつたか体勢がわずかに崩れた。

その一瞬の隙をつき、顎下に剣を突いた。首を突く寸前で止めた。

「俺の勝ちだな。」

峰で顎を小突き、鞘に収める。雪蓮は信じられないという顔でこちらをみていた。

「どうして・・・負けたの？」

「・・・序盤から飛ばしすぎて、疲労していたところに、さっきの

攻撃を受けて時にわずかに体が揺らいだ。それが敗因だよ。」

持ってきた手ぬぐいを湖で湿らせ、雪蓮に渡す。びっしょり汗をかいている雪蓮は手早く顔や腕を拭いていく。

対して、じつとりとしか汗をかいてない俺は冷感を楽しみつつ、ゆつくりと拭いていく。

一息つくために、手甲をはずし腰に付けてあるホルダーにしまう。汗だくになっている手も綺麗に拭いた。

「飛ばしすぎって・・・私そんなに力入れてないわよ？」

「いいや、かなり力入れていたぞ？何度剣をおられるかと思ったか・・・」

「そんなに強く打ち込んでいたの？」

「ああ。」

「そう・・・ムキになってごめんね」

謝って、シユンとなつている雪蓮をみたら、ドキツときた。いつもの天真爛漫な姿からは想像できないアダルトな感じが漂ってきた。

「別に気にしていないさ。」

平静を装って、返事を返したが内心はドキマギしていた。

「ありがとう・・・ねえ、セツナ？」

「なんだ？」

湖で足をピチャピチャさせながら、雪蓮は話しかけてくる。さっきのような雰囲気はなくいつも通りの雪蓮だ。

「セツナの世界の話、してよ？」

「いいよ？ そうだな・・・」

とりあえず、昔話でも・・・と思ったが、ジュニア・ハイスクール以降は、ほとんど誰が聞いても楽しくない話ばかりだ。そこで、すでにいる都市の話をすることにした。

「俺の住んでいた都市は、とにかく武術が盛んなんだ。雪蓮みたいなのがわんさかいて、日々鍛錬しているんだ。それで星の数ほどいる強者の中から、頂点に選ばれた12人とそれらを統括する都市長の女王がいるんだ。頂点に立つ12人はこの世とは思えないくらい強さを誇っているし、女王はまさしく化け物だ。」

「武術が盛んで、私みたいなのがわんさかいる・・・ゾクゾクしちゃうわ。」

雪蓮は恍惚として、その世界を想像していた。・・・ちょっと怖い。

「それに、とにかく治安がいいんだ。だから、住民も安心して暮らしている。食べ物がつまいし酒もつまい。とにかくいい都市なんだよ。」

「そうなんだ・・・いいところね。」

雪蓮は返事を返しながら、少し思い詰めた顔をしていた。またドキッとしてしまった。こんな顔に弱かったっけ、俺？

「……今日の戦場でどうして吐いたの？恐怖で吐いたの？」

ああ、そのことか？なぜ今になって出てくるかは分からないけど、心配かけたみたいだな。

「ああ、あれは血のにおいに酔っただけって言っただろ？心配するなって」

「それならいいけど……セツナは戦場が怖くないの？」

「……怖いって言えば怖いよ。だけど、そんなことを言う、感じたりしたら一瞬でやられるのが戦場だ。……雪蓮は怖くないのか？」

「うん。怖いって感じたことがないの。」

前屈みになり、雪蓮は自分の肩を抱く。そこから、ぼつりぼつりと言い始めた。

「わたしね……子供の時から、母様の側で無理矢理戦場に出されていたの。そのときは怖くてね、母様から片時も離れなかったの。」

そのときを思い出しているのか、湖面をポーッと見つめていた。

「何度か出ているうちに、突然恐怖を感じなくなったの。それから人も殺せるようになったし、罪悪感を感じなくなった。」

話を聞いている間に、俺も靴と靴下を脱ぎ、湖面に足をつけ雪蓮の隣に座る。冷たくて気持ちよかった。しかし話の内容は暗く重いものになっていく。

何かがおかしい。雪蓮の顔を見てみると・・・

「はははっ、こんな女、誰も近寄ってこないわよね。殺しても何も感じないって・・・おかしいじゃん。」

その言葉を聞いたとき、雪蓮の顔に、深い自虐の笑みが浮かんでいた。その笑みは恐ろしいほど死のにおいを感じ取れた。

おれには、なぜそこまでの死のにおいを立ち上らせるのかが分かった。

王の孤独。そして、自分が他者とは明らかに違うというコンプレックスがそうさせているのだ

アルシェイラ様のような人なつっこい女王は例外であり、大抵は厳格で公平無私であり、神格化されることが多い。

それは王としては理想的だが、同時に悩みもつきまとう。

まず、親しくしゃべることができない。常に敬れるため、その雰囲気を持しなければならぬし、利潤目的でよってくる輩も多くなる。

それは常に孤独で、ストレスがたまる環境である。

雪蓮の場合は、冥琳や祭、一部の庶民とも親しくしゃべっているため、その症状は軽いと思っていたが、過去に、想像するのが難しくない無惨な仕打ち受けたのだろう。

「だから、セツナも私のことを化け物だって思ってもー」

もう聞きたくなかった。俺は衝動的に雪蓮の肩を抱き、自分の方に引き寄せる。

「あっ……」

「もういい。何も言っな。」

「でも、私は、殺しても何も感じないのよ！おかしいじゃない！いくら王だからといっても！」

雪蓮の声が震えている。顔が見れないので分からないが涙を流しているのだろう。

俺にもその気持ちが分かる。あれは、ライティックス士官学校スーパーエリートコースの一年目が終わりに差し掛かる頃だった。

そのころになると、一通りの講義が終わり、後は実戦で体得していくという方針が変わっていく。

その初めての任務の時に、市街地での凶悪犯グループとの戦闘後にちょっとした事件が起こった。

順調に凶悪犯達を追いつめ、最後の一人を追いつめ、命乞いをされたとき発砲するのを躊躇ってしまった。

その場に立ち会った教官は、「お前の手で楽にしてやれ」と命令を下してきた。

実際に、凶悪犯は腹部に重傷を負い、今から病院に運んでも助かるかどうか微妙なところにあった。

結局のところ、最後には発砲したが、とても後味が悪いものだった。

同僚達は、「気にするな、忘れる」と声を掛けてきて、レクトも「忘れることに専念しろ」と言ってくれた。

しかし、俺は殺したときの感触が忘れることができず、強い自責の念にかられていた

そのことを父に、相談してみたところ・・・

「俺も、同じようなことで親父に相談したことがあるな・・・そのとき親父はこうやっていつてくれた。「殺したことは忘れる。しかし、その者に対しての懺悔と贖罪の気持ちは忘れるな。俺の親父・・・アルティ・グレスはそう言ってくれた。俺たちの家系は「不殺」を根本的な考えに据えている。だから、必要な殺しの時には、必ず懺悔と贖罪の気持ちで望め」ってな。お前にもその言葉をそっくり言っておくよ。」と、言われた。

その時に、自責の念は解かれ、懺悔と贖罪の気持ちを持ち、前を向けるようになった。

今なら、あの言葉が分かる。生きるために踏み台にされたものは意味もなく、死んでいく、殺されていくでは、忍びない

そこで、その者に懺悔をし、意味を持たせることで、報われるということなのだろう。

答えは、感じた本人によって違うはずだ。

それから以降、俺は戦闘中は贖罪の気持ちで、戦闘の後には懺悔をし、その戦闘に意味を持たせるようにしている。

雪蓮の場合、幼い頃から戦場に出され、敵は殺すのが当たり前という感覚が備わってしまったのだ。

そのことを同世代に言われるというひどい仕打ちを受けて、強いコンプレックスを生む原因となっただと思っ。

そして、それが違つと分かりだした時に、悟ってしまったのだ。

自分は、化け物だ・・・普通の人とは違つのだと悟ってしまった。

今でこそ、その事を表面に出さずにいるが、昔話になるとでてしまつのだらう。

・・・なんて悲しく、辛い現実なんだろう・・・

俺に出来ることは一つしかない。それらを含めてすべて受け入れると言つことだ

「全部受け止めてやる！俺は雪蓮の味方だ！どこへも行かないし、守つてやる！」

安心させるために手を握り、思いを伝える。ごめん、トウルク。こ
つちでも大切な人ができてしまったよ・・・

「本当？私を受け止めてくれるの？こんな私でもー」

抱きしめる。今は言葉より、行動で示す方が納得してくれると直感
した。

「ああ、ずっと受け止めてやる。」

「セツナ・・・」

雪蓮の顔が上がる。涙に濡れた顔がとても艶やかで美しかった。

「雪蓮・・・」

俺たちは、どちらともなく顔を近づけてキスを交わした・・・

「もう落ち着いた？」

「ええ、もう大丈夫よ。」

身支度を調べ、馬にまたがる。あれから、結構長い時間キスをして
いたから、早く戻らないと。

「さあ、早く戻ろう。みんなが心配している。」

「そうね。冥琳もカンカンだわ。」

一緒に、馬を走らせる。少し前にセツナを行かせる

（惜しい事したな・・・この子を連華にあげるって事・・・取り消せないかな・・・）

孫家に天の血を入れるって事とは別に、異性として、セツナを意識し始めている。

正直言えば、セツナのことは大好きだ。あんなに惨い過去をも受け入れてくれる器の大きさ。そして、生来の優しさと勇敢さ。何より仲間を大切にする信念に惹かれていた。

誰にも渡したくない。誰にも奪われたくない。自分だけのものになりたい。

だが、冥琳たちに言うてある言葉は、覆らない。絶対に・・・

（はぁ・・・どうにかしないとね・・・この気持ち。）

先のことが見えない以上、まだ何ともいえないけど、とりあえず今は押さえておくことにしよう。連華の気持ちもどうなるか分からないし。

そのことを考えながら、冥琳たちが待つている場所に帰っていった。

案の定、カンカンだった冥琳と祭に怒られたが、それほど長くならず、終わり次第、すぐに床に入った・・・。

それから、館に戻って、政務も平行しつつ、自分の鍛錬もしているある日・・・

日中も体を動かしたがそれでも少し体が動かし足らなかつたので夜だが、鍛錬することにした。

中庭には誰もいないだろうと思つたら、少し大きめのたいまつが立ってあつたのでびっくりした。

しかし、辺りを見回しても誰もいない。疑問に思いながら、備え付けのベンチに水と上着、ホルスターと手甲にズボン置き、裸足になり、中庭の真ん中に立つ。ちなみに今の服装は、半袖、半ズボンである。

足裏に体重を散らし、自分の中で重心を一つにまとめる。もはや、習慣化しているワイヨリカ流無形の立ち方の稽古だ

ただ、立つ。

これだけのことだが、ワイヨリカ流無形にとって、足捌きの奥義である。つま先立ったり踵を浮かせたりせず、足裏を常に地面と水平に保ち、体重を均等に分散させて立つ。移動する際は、足裏を地面と水平に保つたまま、垂直に浮かせる。

じっと立っているだけならまだしも、このように体重を偏らせずに

足を上げるのは至難の業だ。

手っ取り早くつま先で地面を蹴って移動したくなるのがふつうだが、なぜこのような面倒くさいことをするのか？

それは、至近距離の攻防において体を移動させる際に、最も速く動けるからだ。

そのため、父がその習得に十年以上の基礎をやらせ、時折剣仙ハーン先生に見てもらい修正してもらった。

それがあつたからこそ、この若い年でここまでの体捌きができるようになったのだ。

セツナは前後左右に気配なく、前触れなく、自在自由に。それはまるで、体ごと滑っているように見える身ごなしだ。

体が、ほぐれたのか、同じ立ち方から、ふつと膝の力を抜いて体を捌く技法の稽古に移った。これも速く、突然動く。

いずれの身体操法にも加速時間がなく、すべて、いきなり技を繰り出せる。だからこそ、雪蓮の攻撃を受け切れたのだ。

30分ぐらい稽古を続け、そこからはフラッシュ・ファントムCQ Bをさっきの稽古と連動して行っていく。

さらに三十分、いったん汗を拭き水分を補給する。少し休憩してから、左手を前に出し、右手をいつでも打てるように柔らかく引く。

犀牙流徒手格闘において基本になる構えだ。

そこから、右の掌底を打ち込む。すぐさま戻し上に膝を抜いて、相手の顔当たりに回り蹴りを放ち、足が地に着いたらさらに左で追撃。さらに下に膝を抜き回っている相手に向かって、腹、胸、顔に同時に拳と蹴りを見舞う。

犀牙流徒手格闘の迅消の型である。貫徹で相手の動きを止め、飛燕脚で顔に二撃、そこにワイフリカ流無形の無重剣で仕上げる。昔はとどめは洞貫撃だったが、セツナはこちらにかえてある。

そこから、一時間。犀牙流徒手格闘のいくつかの型を入念に繰り返していく。

やっと納得がいったのか、ベンチに腰をつけようとするが、先客がいた。

「こんばんは、セツナ。」

「雪蓮、いつからそこにいたんだ。」

ベンチに座っていたのは、雪蓮だった。横には酒瓶と少々つまみがおいてあったので、さっき来たのだろうか。

「ずっとよ。木の上で月見酒していたら、セツナが来て鍛錬を始めたから、降りようと思ったけど、ちよつと見ていたんだ。」

「だが、一度水を飲みに来たときはいなかったぞ？」

「その後に、ここに降りたのよ。綺麗な型だったわね。」

酒器を一気にあおり、また注ぐ。状態からして、結構飲んでいるみたいだ。

にしても、たいまつがあつた理由に合点がついた。雪蓮が居たから、分かりやすくするように焚いておいたのだろう。たぶん近くには見張りの兵が居るはずだ。

「綺麗な型、ね。鍛練を積んでいるから、そう見えるだけさ。」

雪蓮の隣に座り、上着にしまつてあつた専用のタンブラーをだし、酒を催促する。雪蓮は快く酒を注いでくれた。

「でも、あれだけの型を正確に覚えているからすごいわよ……あれ？セツナって、お酒飲めないんじゃない？」

祭さんから聞いたみたいだな。今から別の酒に変えるって。

「まあ、見ていなくて。それと、今からやることは誰にも言つなよ？」

上着にしまつてある練成手袋を着け、両手を合わせる。そして、タンブラーに手をつけると、周りは青い光に包まれる。練成反応である。

本来練成陣を書かなければならないが、すでに手袋に書いてあるため、両手を合わせるだけで錬金術が使える。

やがて反応が収まる。

「なっ、何が起こったの？」

「さて、うまくできているかな？」

この手の錬金術は明確なイメージが必要だから、よく失敗するんだけど……

タンブラーの中には、黄金色の液体が入っていた。周りに水滴ができ、持ってみると結構冷たかった。匂いもイメージしたとおりだ。

一口飲んでみると……

「ああ、俺の知っている酒だ……」

「ねえ、何が起こったか教えてよ！」

「ああ、悪い。酒の種類を変えたって、言えばいいかな。俺にもよく分からないんだけど……飲んでみる？」

「？。わかんないけど、飲んでみる。」

タンブラーを渡し、雪蓮にも飲ませてみる。みるみる顔が驚きの色に染まっていく。

「おいしい！甘いけど……お酒って感じがする！なんて言うお酒なの？」

「蜂蜜酒っていうんだ。そんなにきつくなくて、甘いから飲みやすいんだ。俺はいつもこれを酒の席で飲んでいるんだ。」

その味を確かめるようにまた一口飲む。結構いい飲みっぷりだな・

「どうやって作るの？」

「作る気かよ！？・・・悪い。知らないんだ。欲しいんなら、錬成してやるけど？」

「別にいいよ。これより、白酒の方が好きだし。」

タンブラーを俺の方に返し、自分の持っていた白酒をまた飲み始めた。・・・この人ってみんなこうなのかな？

俺も、蜂蜜酒で唇を湿らせ、一息入れる。夜風が体の熱を心地よく無くしてくれる。

「で、セツナは何でこんな夜中に鍛錬なんかしていたの？」

「少し体を動かし足りなかったからな。こんな時は夜眠れなかったりするから、動かしておくんだ。」

「ふうん・・・」

だいぶ酔っているのか、こちらの方に頭をコテンをおいてきた。髪からは甘い匂いがしてくる。

「どっした？酔っているのか？」

軽く頭をなでてやる。撫でるたびに甘い香りが鼻孔を満たす。

「酔っているかな？なんか無性に甘えたくなったの……」

気持ちよさそうな顔でこっちを見てくる雪蓮にドキッと胸が高鳴った。

「……政務とかで、何かあったのか？」

「ううん。何もなかった。すべて順調よ。」

満足したか、頭を起こし、元の体勢に戻る。撫でていた髪感触が名残惜しい。

「セツナはどう？政務とか慣れてなさそうじゃん。」

「問題ないよ。文字は読めるけど、字が書けないから穩が付きつきりで教えてくれている。それ以外は慣れているから、大丈夫だ。」

事実、ライティックスでも俺が懸案する事項はとてつもなく多い。戦争時には免除されるが、平時は基本的に定時まで演習などの予定を入れない限り、デスクワークが続く。

読む分には、翻訳機能搭載コンタクト型ディスプレイをはめているから読めるが、いざ書こうとすると全くだめだった。そこで穩が教師をしてくれることになったのでそれなりにかけるようになっては来ている。

「穩が？……何か無かった？」

雪蓮の態度が急に変わる。なんかどす黒いオーラもでてくるような

それに、穩とは・・・ごめんなさい。何度かやってしまいました。

だって、あの人・・・本読むと興奮するんだもん。それであの胸と体で誘惑してくるから、男としてはたまらないよ・・・

「・・・ナニモアリマセンデシタヨ。」

「嘘。目が泳いでいるわよ。さっさと吐きなさい?」

雪蓮は襟首をつかみ、自分の方の引き寄せる。・・・しまっているって!それに目が怖いよ。

「ごめんなさい。何度かやりました。」

「そう・・・やったの?」

「・・・はい。」

雪蓮は、俺を解放しにらみつける。だから、怖いって!

「穩は、厄介な性癖を持っているからしょうがないけど・・・何で、私に相談しなかったの?私も字、書けるんだけど?」

「雪蓮じゃ無理だろ?だからー」

ものすごくにらまれたので、説明も付け加える。

「時間的にって意味だよ。雪蓮は孫呉の王だから、俺に付きっきりって訳にはいかないだろ?」

「そんなの、いくらでも作れるわよ。」

「……冥琳が聞いたら、めっちゃ怒るだろうな。まあ、教師の件はもういいからな。」

「そうね。今更どうにでもなるって訳じゃないし……」

雪蓮はむすつとした顔で返事を返してきた。さっきまでの雰囲気はどこへやら。俺は逃げるように酒を飲む。

待てよ？何で怒っているんだ？公認でヤツていっていったのは他でもない雪蓮じゃないか？俺が怒られるのは筋違いもいいところだ。

「なあ……もしかして妬いてるのか？」

「だっ、誰が！」

うわぁ……めっちゃ顔真っ赤だし、たぶん凶星だな。

「だって、公認でヤツていっていったの、雪蓮じゃないか。俺が怒られる通りはどこにも見あたらないぜ。」

「うっ……」

「それを忘れていたなら、しょうがないけど、それはないな？だって、天の血を孫呉に入れるって言う最重要事項を孫呉の王である雪蓮が忘れるわけ無いもんな？」

みるみる雪蓮の顔が困り顔に変わっていく。その反応を酒の肴にし

て、楽しんで酒を飲んでいく。

「それは……あゝっ、もう！」

いきなり、酒瓶をつかみ一気に飲み始めた。かなりの量を飲んでや
つと酒瓶を置いた。おいおい、そんなに飲んだら体に悪いぞ

「そうよ。妬いているわよ！穩の話を知っているだけで自分でも押
さえられないほどの嫉妬が私の体を焦がしているのよ。」

「しえ、雪蓮？」

まずい！完全にスイッチが入ってしまった。目が据わっている
よ！

「ふふふっ、そうだ。今から、セツナを私のものにすればいいのよ。」

「おい、何を言っているんだ。って、酒飲むのやめろ！」

また酒を飲んでいると思ったら、次の瞬間、視界が急に狭まり、唇
に柔らかな感触が伝わってきた。

「んっ！！」

「……んはあ……ちゅっ……ん、ふう……ちゅく」

キスされているのだと気づいたときには、口に何か唾液とは違うも
のが流れ込んできた。

(これ・・・酒じゃんか!のっ、のどが焼ける!)

「はあ・・・ちゅっ・・・んっ、ふっ・・・ん・・・はふっ・・・ちゅっっっ」

雪蓮は、問答無用に酒を流してくる。はき出すと後が怖いから飲む以外の選択肢はなかった。それでもこぼれた酒は口元を伝って顎に垂れた。

「ちゅぶ・・・んっ・・・むう・・・ぺろっ・・・ちゅう・・・ぶはあ。」

ひとしきり口の中を蹂躪したら、離れていった。こぼれた酒をなめる姿はとてつもなく美しく、そして淫猥なものだった。

度数の強い酒のせいで、思考能力が一気に低下していることもあって、俺は何も抵抗できずにいた。

「さて、こっちの方は・・・やる気満々じゃない?」

雪蓮は股間に手を当てて、男根の大きさを確かめるように握っている。

「ふふっ、大きいわね?これが私のものになるってことを想像するだけで・・・濡れてきちゃうわ。」

体をずらし、ズボンに手をかけたところで・・・

「雪蓮、やっと見つけたぞ・・・って、何をしている?」

ここで意外な助け船がやってきた。

「あら、冥琳？どうしたの、こんな夜中に？」

「雪蓮に見て欲しい案件がいくつか残っていてな……まずは、そこからどいてもらおうか？」

しかし、雪蓮は止まらない。……今ズボンをおろすのはまずいつて！

「はなれなさいって……言っているでしょ！」

冥琳は肩をつかみ、俺にまたがっている雪蓮をどかす。ふう……助かった。

「あぁん。いいところだったのに……」

「雪蓮？連華様にあわせるまでは手を出さないようにって言わなかったか？」

「ええ、何のこと？」

「はぁ……セツナ、さっきの状況を説明してくれ。」

とりあえず、今の状況になったことを説明していった。話を聞いていくうちに、冥琳の顔が苦笑いに変わっていく。

「まあ、今の状況になってしまったということだ。やっぱり酒を飲ますの止めた方が良かったか？」

「そうだな。状況を聞いている限りはとめたほうがよかったな。だが、この子がそこまで深酒をするなんて・・・」

状況を説明している間に雪蓮は寝てしまった。今は穏やかな寝息が俺の肩越しから聞こえる。

「まあ。雪蓮は何もなかったって言っていたけど・・・何かあったのか？」

「いや、難しい案件をいくつか文句を言いながらも、こなしていたし、午後の町の視察も嬉々として回っていた。おそらく・・・嫉妬からだろうな。」

「そうだよな。穩の話聞いてから、なんか雰囲気が一変して険悪なものになった事を見れば、間違いないな。」

残っていた酒を一気に飲み干す。その後持ってきた水ですすぎ、錬成手袋を外す。寒くなってきたので、上着も着る。

「この子は、自分の欲望に正直だからな。それにこの前のこともあったから、行動に移してしまったのだろう。」

「知っているみたいだな。この前のこと。」

「雪蓮が自慢げに話してきたよ。」

そこでひとしきり二人は笑った。

「さて、私はこの子を起こしてから帰るから、先にかえっていいぞ。」

「

「わかった。それじゃ、お休み。冥琳」

「よい夢を。セツナ。」

冥琳は雪蓮の頭を持ち、俺を動けるようにしてくれた。私物をまとめ、ズボンを穿き部屋へと戻った・・・

「ついでに日々が過ぎていった・・・」

第三話 孫呉の仲間たち（前書き）

作者「どうも。前回心の傷にグリグリ塩を塗り込まれた作者です。」
セツナ「どうせ、一晩で完治したんだろ？セツナ・フォーリングだ。」

祭「お主の打たれ強さは皆が知っておるぞ？黄蓋じゃ。」

作者「うっ、なんかデジャブが・・・まあ、治ったんだし、更新のスピードもまあまあ速いだろ？」

祭「確かにそうじゃな・・・ん？これは？」

作者「あぁっ！？それは・・・」

セツナ「・・・前から、書き終わっていたものを投稿していたみたいだな。」

作者「・・・だって、投稿しだしたの最近だし、これ書き始めたの半年前だし、書き溜まるのは当たり前だよ！」

祭「しかし・・・半年でたったこれだけとは・・・」

セツナ「まったく・・・やる気があるんだか、無いんだか・・・」

作者「やる気はある！だけど、書く気が起こらないだけさ！」

セツナ「祭さん・・・こいつ、締めましようか？」

祭「奇遇じゃな？儂もそう思っていたところだ。」

作者「えっ？ちよっ！？まっ・・・ギャニヤアアー！！！」

あまりにもひどい制裁を受けているため、読者にはお見せすることは出来ません・・・

セツナ「ふう・・・すつきりした。」

祭「まったく・・・少しでもいいから毎日書くことができるのか？」

作者「・・・（ピクツ、ピクツ）」

セツナ「失神しているようですね。次回までには起きますのでほっときましょう。」

祭「そうじゃな。では、タイトルコールといこうか！？」

セツナ「分かりました・・・ではっ！！！」

セツナ・祭「真・恋姫十無双」乙女繚乱 三国志演義」 呉書
虎狼天下覇道の巻 第三話 孫呉の仲間達。どうぞ閲覧してください。
い。」
作者「……次は絶対まともにする！」

第三話 孫呉の仲間たち

荊州に攻め込んできた黄巾党は、孫策たちの活躍によって撃破された。

しかし、それは黄巾党の暴走の中でも、一地方での出来事ではなかった。

大陸各所に飛び火した黄巾党の暴乱は、弾薬庫に迫撃砲を撃ち込んだように、次々と爆発していった。

暴乱が暴乱を呼び、暴力が暴力を呼ぶ。そんな阿鼻叫喚の地獄絵図と化した大陸の大地は、明けることを知らないまま、多くの人命を吸い取っていった。

そんな暴徒を鎮圧しようと、朝廷は大動員をかけて官軍を形成し、黄巾党と対決したが・・・

黄巾党の数の多さ、そして、官軍の目を覆わんばかりの弱さによって、黄巾党は各地で勝利を謳い、その規模をいよいよ膨らましていった。

しかし、欠片の役にも立たない官軍に変わって、各地の諸侯たちがめざましい活躍を見せる。

許昌に本拠地を置く曹操、袁術の従姉にして、河北を抑える袁紹や幽州の公孫瓚が活躍すれば、義勇軍を結成し、各所で連戦連勝している劉備が頭角を現す。

そんな英雄たちの活躍により、黄巾党の勢いも次第に衰えを見せ始めた。

そんな中、前の戦い同様、再び袁術の使者が孫策を尋ねてきた。

黄巾党本隊と決戦し、撃破せよ・・・そんな無茶な命令を携えて・・・

「はあああつ！」

渾身の突きを放つ。打ち終えたときには周りの空気が打った方向に急激に流れていく。

突きこそ千越時流総合格闘術剣技の基本。突き系のセンスがある俺にとつてまさしく突き主体の千越寺流総合格闘術剣技はうってつけの剣術だった。

師匠から言われたことだが、お前の斬撃はどうあつても達人クラスのものにはならない。どう頑張つても達人の一步手前で止まるらしい。

事実、凱影先生や千越時先生と切り結んでいるときは簡単に見切られていた。

そこをワイヨリ力流無形の転ばしと膝抜きを駆使して、技の出を早くし相手が受ける前に斬撃を到達させる方法で何とか切り結ぶ事が出来ている。

とはいっても、やはり達人にとつては遅いもので、結局拳や突きに依存してしまう癖がある。

何度も確かめるように空間を突く。もちろん、相手を想像しながら

「ほお……たいした突きじゃな？さっきまでさんざん弓を撃つておつたのに……」

突きを放っているセツナの足下には、弓が置いてあつた。剣やナイフ、拳だけでは少々心細かつたので急遽弓を使つてみることにした。先ほど祭さんに手ほどきをしてもらい、30射程度でコツをつかみ、その後は100射ちよつとして切り上げ突きの素振りをすでに500回以上している。

しかし、足下に置いてある弓は普通の弓とはかなり違って見える。まず大きさ。普通の物は1メートルないし1メートル半ぐらいであるが、この弓はそれらを遙かに超える3メートル強はあつた。そして何より素材である。時代的に木に動物の皮などを貼り合わせるのだが、この弓はすべて銀色で染まっている。

それもそのはず、すべて鉄よりも弾力性があり強度の高いシルキウ

ス鋼でできているからだ。弦もチタンで出来ているため利用すれば斬撃にも使える。

さらに中心から折りたためるため、持ち運びも便利である。矢ももちろんシルキウス鋼で出来ている。

ここまで大型化するとすさまじく取り回しが悪いのだがそれを無視するかのようにセツナは使っていた。

祭さんですら、引くのがやっとのこの弓をセツナは軽々と使い、そして命中率もかなり高かったのである。

「しかし、あれほど力のいる弓は初めてじゃぞ。どこで作ったのじゃ？」

「それは・・・秘密だよ。」

実は、昨日のうちに錬成したのだ。装飾までは無理だったが結構うまくいった方である。

しかし、あれほどの弓を軽々引けるのには自分でも驚いた。こつちに来てから基礎筋力がさらについたのだろうか？

素振りを終え、用意してあった手ぬぐいで手早く汗を拭いていく。

「・・・雪蓮、まだ帰ってこないな。」

「ふむ、おおかたむちゃくちゃな命令に抗議しておるのだろう。徒労に終わるだろうがな・・・」

雪蓮は現在袁術の元に出向き、命令の内容を受け取るためだ。

「しかし・・・俺たちの戦力で黄巾党本隊を殲滅するのは不可能だな。」

「ふむ、せめて呉の旧臣たちが集まってくれたらそれなりに数は集まるんじゃないか・・・」

現在俺たちの戦力は一万ちよつと。対する黄巾党本隊はどう少なく見積もっても20万は超えると冥琳がいていた。

そこまでの戦力差で勝とうというものなら、圧倒的強さを持つものが何人いても無理だ。

・・・とことん馬鹿だな。あの嬢ちゃん。自分でしとめた方が名譽や糧食も得られるのに他人に任せるなんて・・・

結局はわがままいっぱいの小娘つてところか。

上着を着直し、手甲を外す。剣を鞘にしまつていると・・・

「あっ・・・孫策様が帰ってきましたよ。お帰りなさい」

ベンチに座っていた穩が、立ち上がって手を振っている。どうやら雪蓮が帰ってきたみたいだ。

「ただいま・・・ふう」

疲れたように深いため息をついている。まあ・・・だいたい予想できるけど袁術に何かしら言われたみたいだな。

「お帰り。その様子だとまた何かむちゃくちゃを言われたようだな。」

「帰ってきたことを察したのか冥琳も中庭にやってきた。」

「黄巾党の本隊を叩けだつて・・・無茶いつてくれるわよ。ホン

ト

「本隊じゃと？・・・話にならんな。大賢良師が率いる本隊は、噂で20万とも30万とも聞く。敵うわけが無い。」

案の定、無茶な命令か・・・俺は自前の弓を片付けながら話の流れを聞いていた。

「普通ならそう考えるだけだね・・・あのバカ二人、そんなこと考えてないみたいね」

「あ・・・あのお二人つて正真正銘のお馬鹿さんですからね・・・」

「

うわゝ、穩にまで言われているよ。まあ、あの二人はそれくらいバカだからしょうがないか。

「迷惑な話じゃな・・・それで、策殿はどうするおつもりかな？」

「とりあえずみんなを呼び寄せてから考えるわ。」

「みんな？ということは、袁術は旧臣を集めることを承諾したのか？」

「ええ。ばかよね・・・ホント」

「だがその馬鹿さ加減ありがたい・・・これで軍備が增強できるといふものだ。」

よし、軍備を増強できるのはありがたい。これからの戦いは少しは
まともに戦えるようになるだろう。

「ふむ・・・先を見据えて動くか・・・時期が来るとお考えかな
？」

「漢王朝の統治能力はもはや無いも同然。それに都合よく起こった
黄巾党の乱。その先に割拠の時代がくるのは明白でしょ？」

割拠って事は、何人もの有力者が政府に変わって自分たちの土地を
好きなように統治することだな。つまり戦いが増えるって事だ。

「同意だ。ではすぐに使者を出し、各地に散っている旧臣たちを呼
び寄せよう。」

「興霸ちゃんに周泰ちゃん、孫権様に尚香ちゃんにも連絡をしない
といけませんねえ」

その名前を聞いてやっと思つたと言葉に合点が突いた。周泰とい
う名前は、データベースの中で確認していたし、興霸は確か甘寧の
字だったし、孫権と尚香は雪蓮の家族ってことも名前を聞いて思い
出した

「尚香はだめよ。まだ連絡しないで・・・これから先は賭になるん
だから。」

「・・・尚香様さえ残っておれば、孫家の血は絶える事もない、か。
儂は賛成じゃな」

「ふむ、では尚香様にはしばらく待機しておいてもらおう。」
いろいろと大変だな。この時代も・・・俺たちの時代じゃ考えもし
ないことだな。だが・・・

「賭になるほどの戦いなんてこないよ？」

おおそれたことだが、何となく、いつておきたいことと思つた。

「俺がいる限り、賭になるような戦いにはならないぜ？」

「ふふつ、せいぜい期待させてもらうぞ。セツナ」

「まあ、恥をかかんようにな？」

「はいはい。頼りにしているわよ？」

皆あきれ顔で返事を返してきたが、どこか楽しそうに笑っていた。

「・・・で、出陣はいつにする？」

「すべての準備が整うまでは出陣しないわ。・・・袁術にも伝えてあるからしばらくは何もいつてこないだろうし。」

「それはありがたいですね。では私は使者の選定と兵站の準備に取りかかりますね。」

「では、軍編成に関しては儂がやろう。策殿と公謹には軍略の決定を頼もうか。・・・セツナは、弓を撃っておるがいい。」

「ええっ！」

それは願ったり敵ったりだが、俺は何もしなくていいのか？

「あら、セツナって弓も使うの？」

「昨日、作っただ。剣と拳だけだと、何となく心細いからな。」

「そう・・・で、祭？使えそうなの？」

「儂でも引くのがやっこのものを使っておるが筋はいい。二、三日もすれば実践で使えるじやろう。」

結構なお墨付きがでているな。弓は主に騎乗の時に使おうと思っ
ているんだけどな。

「じゃあ、今度の戦でセツナは祭の副将にでもしようかしら？」

それは困る。本格的に使うならまだしも、あくまでも予備武装だから基本は剣と拳で相手につっこんでいく方がいいに決まっている。

「ふふっ、冗談よ。心配しなくてもセツナは私の側に置いてあげるから。」

心を読まれるように笑ってごまかされた。雪蓮のことだから本当にしかねない・・・

「話を戻すけど、部隊の合流は行軍の途中で行うから、そのつもりで居なさい。」

「分かったわ。では、軍の編成が終わり次第、出陣しましょう。」

雪蓮は満足そうにうなずき、体をこちらの正面に向ける。

「ええ。・・・いよいよ独立に向けて動き出せる。みんな・・・力を貸してちょうだい。」

神妙な声で雪蓮は言ってきた。みんなは姿勢を正し、再確認するか

のように返事を返した。

「当然だ。」

「うむ」

「はい。」

「今更、なにいつてんだか・・・」

そして、各々の役割に分担して散っていった。

孫策が袁術に呼ばれて、十日が経過した。

みんなが出陣準備に勤しんでいる傍らに、俺はとにかく弓を撃ちまくった。

時折時間の空いた祭さんに見てもらい、アドバイスをもらう。日に日に上達し騎乗射もこなせるようになった。もちろん他の鍛錬も怠ってない。

そんな時、俺は冥琳に呼ばれ、おまえにとって戦いとは何だ？と聞かれた。

俺はこう答えた。

「理不尽な暴力から平和を守るため。そして、自らが生きるため。」
その答えに、冥琳は満足げにうなずき、用件はそれだけだった。

そして、出陣の時を迎える。

目指すは冀州

黄巾党主力部隊との決戦である

「穩。蓮華たちはいつ合流するって？」

現在雪蓮たちは孫権たち旧臣と合流するために冀州に向けて行軍している。セツナは別件で席を外している。

「兵を集めてから合流するらしく、少し時間がかかると言うことでした。」

「そう・・・ならば初戦は私たちだけね。」

「連れてきた兵は多くない・・・いきなり敵本隊と戦うことは出来ぬのお。」

「こちらは現在一万ちよつと。まともに戦うことすら出来ない。」

「敵本拠地周辺では、諸侯の軍も動いています。まずは出城に籠もっている黄巾党を処理しましょう。」

「その後、諸侯と足並みそろえて本拠地に迫れば、この兵数でも何とか出来るとおもいますよ。」

「確かに足並みがそろえば、今の戦力でも戦うことは出来ると思うが戦果が少なくなるのは目に見えている。だが他に方法がない。」

「ふむ。なら方針はそれで行きましょう。」

「了解した。」

「では、そろそろ軍を止めて昼にしようかの。」

「わーい、お昼、お昼。」

「穏は今にも踊り出しそうなほど喜んでいる。それほど嬉しいのだろうか？」

「それじゃ、私はセツナのところに行ってくるから、後よろしく。」

「ああ、・・・あんまりからかうなよ？」

「それは出来ない相談よ。じゃあね。」

「すぐさま馬をセツナがいる方に走らせる。なぜか無性にいたくなっていた。」

「セツナのことかよほど気に入ってるようじゃな。」

「雪蓮が去っていった後、祭が嬉しげに言った。おそらく自分も気に入っているのだろう。」

「それもありますよ、おそらく蓮華様のことを伝えるつもりでしょ。」

う。」

「でも・・・セツナさんのこと、蓮華様は受け入れるかなあ〜？」

「その心配はないだろう。セツナの器の大きさは蓮華様も認めるだろう。」

祭がここまで認めていることを本人が聞けば、マジで照れているところだろう。

「まあ、変なところで優しさを見せるところがあるが、そこを補えばやつは英雄の気質を十分に備えている。」

「はっ！ 違うじゃないわい！」

祭が鼻で笑い飛ばし、昼飯を食べるためにみんなは散っていった。

「ふう・・・」

のどかな青空の下、支給された弁当を自分の天幕の場所で食べた。正直あまりうまくなかったが、かまわない。まずい飯は慣れているししばらく銃の整備をしていなかったたので、解体し始める。 그리스 や歯ブラシ、ヤスリがなかったたので軽く錬成する。

整備を始めて、しばらくすると・・・

ポヨンッ

背中に何か柔らかい感触が乗ってきた。おそらく・・・

「・・・雪蓮、冗談でもそういうことはやめてくれ。」

「あはは、ごめん、ごめん！」

謝っているが、背中からどかない。・・・おっぱいって柔らかいんだな、ってちがう！

「で、ご飯はおいしかった？」

「うまくもないし、まずくもない。俺の中では上等な飯だったかな。」

実際、MSに常備されているゲル状レーションは栄養価だけを重視して味は全く考慮されていない。どの軍でもレーションはおいしく

はない

「そう？口に合わなかったの？」

「はつきり言うと、塩味が足りないんだ。まあ、舌が味付けの濃いものになれているから、そのうち慣れるけど・・・で、雪蓮こそ、何のようだ？」

「えっ、分かる？」

「雪蓮が珍しく当たり障りのない話から会話が始まったんだ。いつもと違うから何かあるんだろうなって、感じ取っただけ。」

大抵雪蓮は、用件をはきはき言っただけでその後雑談といった感じだからな。

「うん・・・あのね、セツナを保護するときの条件として、呉の武将たちを口説けっただけでいいけど・・・」

「まあ、そっちの方は俺なりにのらりくらりやっているけど・・・実際のところ、何もしていない。なぜかみんな俺のところへ寄ってくるのだ。そう言えば、クインリーもそうだったよな。他にも女性隊員から結構告白もされたし・・・」

「それでね・・・もう少しすればさ、私の妹が合流するんだけど・・・」

「妹？ああ、孫権のことか？」

「そ。あれ・・・説明したっけ？」

すでにデータベースで確認済みだ。孫策の後を継いで三国の一つ、呉を建国する張本人だ。

「いや、何も聞いていないぜ。そう言う知識があったただけだ。」

「それもセツナの世界の知識ってやつ？」

「ああ」

「ふん・・・まあ、いいや。それで妹のことなただけ？」

いいのかよ？もうちよつと食いついてくれたって・・・

「ちよつと真面目すぎだし、カタブツっぽいところもあるけど、とってもいい娘よ。可愛いし、おっぱいは大きいし、おしりの形は最高だし。」

「そんなのはどうでもいい。俺の見るところはもつと別のところにある。」

「えっ? どういうこと?」

俺は雪蓮の目をしっかりと見据え、自分の信じていることを言う。

「信頼できるかどうか。俺はただそれだけを見て、仲間と判断する。後は、使えるやつかどうか。だな」

「それなら、あったときにこういう事をしてみたらどう?」

雪蓮は俺の耳に口を寄せ、ゴニョゴニョと内容を伝えてきた。

「・・・いいのか? 性格聞いた限りだと、確実に怒ってくるぞ?」

「いいわよ。私が仲裁にはいるから。おもしろそうでしょ?」

「まあ、それで判断できるならおもしろいな。やるよ」

「ありがと。おもしろそうなものが見れそうだわ。」

めっちゃ笑顔だな。それほどおもしろいことになるのだろうか?

「まあ、話がずれちゃったけど。私の後継者は孫権になるの。だから、セツナはどうにかして孫権を孕ませること。・・・約束よ?」

「・・・まあ、それが保護されたときの条件だからな。がんばってみるよ。」

「ふふ、これからの呉のためにがんばってね。期待しているわよ、セツナ」

雪蓮は伝えることを伝えていって、風のように去っていった。相も変わらず天真爛漫だな・・・

「いったい何だったんだ?・・・まあ、いいや。」

俺は、銃の整備に戻り、一人の世界に物耽っていた。

「何じゃ、どうした、セツナ。ブーツとしおって?」

銃の整備も終わって、横になって、考え事をしていたら、祭さんが声をかけてきた。

「ブーツとはしていないけど・・・いや、そんなことよりも祭さん。雪蓮に何かあったの?」

「ん？」

雪蓮とのさっきの会話の顛末を祭さんに伝える。

「なるほど、これからの呉のために、か」

「いいたいことはわかるけど・・・でも、俺はまだ孫権にあってもいないんだぜ？いきなりあんな事言われても・・・」

「そこは、ほれ。おまえさんの実力でなんとかせい。」

かくつと肘が滑る。実力でなんとかせいって・・・そんな無茶な！

「それが策殿と交わした約束なんじゃろうが？・・・約束を守らん男に何の価値もないぞ？」

「そうだよな。男は黙って有言実行！っていいたいけど、事が事だからな・・・」

「・・・わかりました。俺なりにがんばってみるけど、相性つてもがあるから、がんばっても無理って場合もあるぜ？」

「なあに。相性なんぞ関係ないわい。性根のしっかりしたおまえさんは、ただ感じたこと、思ったことを真っ正直に口にすりやいいんだ。そうすれば、自然と女はついてくる。儂が保証してやろう。」

ほめられているのか分からないけど、何となく気分が上に向いてきた。

「そこまで言われると照れるな。俺なりに精一杯がんばってみるよ。」

「有無、しっかり口説いて、胤を注ぎ込めよ。役得と考える、役得と・・・うはははっ！」

ばしばしと俺の肩を叩いてくる。ほっ、骨がミシミシいつている！当然ながら痛い。

「痛いって！祭さん！」

「何を言つとる。気合いを注入してやったのだぞ。むしろありがたいと思え。」

「・・・ありがたく受け取っておきます。」

乱暴だが、じんわりと祭さんの励ましが温かさとなって体に染み渡っていった。

それは祭さんの信頼の証だろう。その証に答えたくもあるが・・・
女の子を口説いて孕ますと言うことは・・・結構難しいぞ・・・
「今は考えるのをやめよう。戦いが終わってからだ。」
そう。明日にはなくなるかもしれない命なのに未来のことを考えるのはやめた方がいい。ゴチャゴチャ考えるのはすべてが終わってからだ。

再度横になって一時間後、俺たちは再び行軍を再開した。

「弁当が口に合わなかったらしいな？」

馬に揺られていると、今度は冥琳が話しかけてきた。今日はよく声をかけられるな・・・

「雪蓮から聞いたのか？」

「ああ、もつと塩味をつけさせなきゃと言っていたので止めておいた。・・・塩は貴重だからな。」

「・・・わるい。考えなしに言ってしまったな。俺、」

俺たちの世界のように、簡単に塩が手にはいるわけではない。すべてが人の手によって作られているのだから。

「別にかまわんよ。・・・文化の違いというやつは、厄介なものだからな。」

そう。文化の違いはどの時代でもあるのだ。人とU・L・T・I・M・A・T・Eが合間見れないのも同じようなことだ。

「それより、セツナ。この大乱が集結したら、貴様にも部隊を率いてもらおうと思っている。」

「・・・いいのか？新参者の俺が部隊なんか率いても？」

「この前の戦いでおまえの実力は証明済みだ。大局を見据えて行動しているし、とっさの機転も利く。部隊を任せるには十分だ。」

確かに部隊は率いたことはある。しかし、俺が隊長だった第7最精鋭部隊はみんながエースで自分で考えて行動していたため、率いて

いたと言いはない。

だが、将来のために、こういう事も必要だ。その経験が俺を大きく成長させ、いざというときに役に立つはずだ。

「わかった。部隊運営は俺独自のやり方でやるけど、いいか？」

「好きにしてくれ。我々が強くなる運営の仕方なら、大歓迎だ。」

よし。お墨付きももらったことだが、帰ったら、構想を考えないと・・・

「そろそろ、斥候が戻ってくる。セツナは今回も雪蓮の副将として」

言い終わる前にいち早く帰ってきた伝令が、息を切らしながら、冥琳の元にやってきた。

「前方に黄巾党の分隊を発見しました！敵もこちらに気づいているようで、城を出て布陣するつもりなのですが、孫策様が・・・」

「孫策がどうした？」

雪蓮のことだから、だいたいは予想つくけど・・・少しは考えてくれよ。

「前線部隊を率いて先行してしまつて・・・！」

案の定だ。多々闇雲に突撃すりゃいいつてもんじゃないんだぞ。つたく。

「総大将自ら先だつていくとはな。ご立派なことだよ・・・」

「そんなこと言っている場合か！全く、世話の焼ける・・・穩！すぐに戦闘準備だ、セツナ！雪蓮をすぐに追いかけてくれ。」

「はい。」

「全く、おてんば姫は世話の焼けることで・・・」

空雷も分かっているよ、つてかんじに首を振りながらいなく。そしてすぐさま駆けだした。

すぐに先行部隊の殿を見せてきた。横から、一気に駆け上がり雪蓮の隣に並ぶ。

「止まれ、雪蓮！作戦もなしに、むやみに突撃をかけるな！」

「無理だつて！一度走り出した兵を止めたりしたら、せつかくの突

進力が無駄になっちゃうでしょ？」

「だがな！」

雪蓮はうざったそうに手を振り、こちらにっこりと微笑みかけてきた。

「大丈夫だつて！黄巾党なんてすぐに蹴散らしてあげるから。祭、行くわよ！」

「心得た。」

すでに追いついてきた本隊から、祭さんの部隊が先行部隊を囲むように布陣した。

「つたく！どうなつても知らないからな。」

俺も、折りたたんだのである弓を広げる。今回はこれで戦闘準備は完了だ。

「結局止められなかったのね・・・突進する孫策隊と黄蓋隊を補佐する。左右に展開して、敵を包み込む。」

冥琳の指揮も飛んできた。その声には一種のあきれた感が漂っていたが、今回はしょうがない。

「行くぞ。孫呉の勇者たちよ！我らの英雄、孫策を守れ！」

荒々しい雄叫びが、そこら中からこだまする。そんな中、祭さんが俺の方によつてきた。

「セツナ。今回は弓を使用するのか？」

「ああ、実戦で使わないと自分のものにならないからな。それに今回は雪蓮の補助に徹底するよ。」

「わかった。弓を射るときは常に心を静かにな。」

「了解。」

祭さんは元の位置に戻っていく。俺も矢筒からシルキウス鋼製の矢を抜き、敵にめがけて、目一杯引く。

そして、放つ。矢は音速を超えるような速さで敵めがけて駆けていった。まずで童話で出てきそうな銀の矢のように・・・

「敵が崩れた！」

崩れた隙間を広げるように矢を放っていく。速射は期待できないものの、一発一発が濃く、敵は多大な被害を被っていった

もちろん雪蓮の援護も忘れない。背後や横から忍び込もうとする敵を片っ端から、撃っていた。

援護に徹底していると、不意に横から荒々しい声が聞こえた。

いつの間にか横から忍び込んできた敵に、引き斬りの要領で弓を振り下ろす。

チタニウム製で出来ている弦は、鋭利なワイヤーと大差ない。血しぶきを上げながら敵は体の半分を横にずらされた。

しかし、雪蓮も祭さんも突出しすぎだ。まあ、雪蓮の考えも分かるがな。

王として、指導者として勇敢なところを見せなければならぬ。そう考えているだろうけど、あながち間違っではない。

だが、それを示そうにも、敵の質が悪ければ、ただの蛮勇として終わってしまう。こんな雑兵相手では、全くの無駄に終わってしまう。

勇敢と蛮勇は全く違う。それによって人の価値も変わってくる。そして、何よりおそれていることは、雪蓮が傷つくことだ。

王がこんなところで死んでは元の子もない。戦場では何が起こるか全く予測できず、つまらないことで死ぬことも多度々ある。

これは・・・帰ったら、冥琳にめっちゃ怒られるだろうな・・・

「雪蓮！！」

「うわっ、こわっ！」

案の定、冥琳の雷が落ちた。前に出すぎたことを相当怒っているみたいだな。

今回は雪蓮が全面的に悪いので、俺は仲裁には入らない。知らぬ顔をして支給してもらったシルクの布で弦を拭いていた。麻などで拭くと、自分の手を落とす羽目になる

しかし冥琳の剣幕に押された雪蓮は、あわてて俺の背中に隠れる。

・巻き込まないで欲しいんだけど。

「総大将自ら軍の先頭に立って突撃するなんて・・・項王の真似をしているつもり？」

「ごめんなさい・・・でも、やっぱり兵士たちには私の勇敢な姿を見せないといけないんじゃない？」

「時と場合によるわ。いくら強大な敵だからといっても黄巾党は所詮賊・・・賊相手に、いくら勇敢なところを見せても、それは蛮勇にしかないわ。」

「そうだぞ。それが原因で死ぬって事も多いんだぞ？今度からは気をつけてくれ。」

背中越しにいる雪蓮の様子は分からないが、絶対に反省はしていないだろう。

「うん・・・今度からは気をつけまゝす。」

「・・・よろしい。次からは私の指示に従ってもらいます。セツナも極力雪蓮を止めるように努力すること？いいわね？」

「はぁい・・・」

・・・賭けてもいい。この人は絶対にまたするだろう。だって・・・雪蓮だもん。やらかすに決まっているじゃないか・・・

「穩。一隊を黄巾党の陣地に向かわせ、物資を確保しておけ。その他の部隊は蓮華様たちとの合流地点に向かう」

「はい」

さすがに切り替えは速い。てきぱきと指示を飛ばしていく。あれ、何か忘れていたような・・・

「黄蓋殿は部隊をまとめ、被害の報告を・・・その報告の後、雪蓮

を止められなかった言い訳をしていただきます。」

「うぐっ・・・分かった。はぁ・・・」

「どのような言い訳を聞かせていただけるか、楽しみにしておりますよ。」

あ、祭さんも責任があつたんだ。そりゃ、一緒に突撃していたからな。ご愁傷様な事で・・・

「セツナも！言い訳を聞かせてもらうぞ？」

背筋がぞつと凍った。冷や汗がたらたらと出始める。

考えてみれば、俺にも責任はあつた・・・

「・・・分かりました。」

にやりと笑った冥琳の顔は、まさに獲物を捕らえてほくそ笑む様子そのもの。怖いったら、ありやしない。

こうして、初戦を何とか乗り切った俺たちは戦利品などを確保した後、孫権たちと合流するために、さらに北へと軍を進めた。

余談だが、先頭を走るセツナと祭さんの顔はげっそりとやつれ、生氣というものが感じられないほど憔悴していた事は冥琳たちにしか分からなかった・・・

合流地点に着いた俺たちは、孫権の部隊がくるまで小休止をとることにした。

冥琳の説教ですっかりげんなりしていた俺も少しは回復し、少々ばかり、祭さんと酒を飲み交わしていた。

「ふう・・・冥琳の説教は本当につらいっすね〜」

「そうじゃな。まったく・・・下手に出ていれば長々としおってからに・・・」

祭さんは、酒器を軽く傾ける。さすがに酒瓶というわけにはいかないので、いっぱいだけにしてある。

俺も蜂蜜酒で唇を湿らせる。もちろん錬成したものである。祭さん

にも白酒を振る舞っている。

祭さんには秘密で持ってきたと言っている、錬金術のことはばれていない。・・・ばれたらばれたで、忙しくなりそうだけど・・・それより、孫権ってどんな感じなんですか？」

「ふむ、一言で言ってしまう、カタブツだが、孫家の人間としてがんばっておられるお方じゃよ。器の大きさは策殿より大きいと僕は思っておるがな。」

「カタブツ、ね・・・つまり、根はいいやつなんだな？」

「そうじゃな。誰にでも優しい方だが、おそらくよそ者のおまえさんには、きつく当たってくるかもしれんな？」

ああ、俗に言う線の内側と外側ってやつか・・・やれやれ、初対面で雪蓮の言っていたことをやるとんでもないことになりそうだな。軽く雑談を交わしながら、不意に強い気を感じた。

すぐさま弓をとり、立てる。そして陣幕の外に出て、弓をいつでも打てるようにしておく。

「どうしたのじゃ？弓なんぞ持って？」

「どうしたの？セツナ？」

外にいた雪蓮も俺の方に駆け寄ってきた。俺は目もくれず気が感じる方向を見続ける。

(強い気だ・・・しかし、どこかで感じたことのあるような気だな・・・)

徐々に気がちかずいてくる。これは敵かもしれない。それも歴代の武将クラスがいるかもしれない。

「強い気を感じる。敵かもしれない。」

「どっちの方角から感じる？」

「あっちの方角からだ。」

と、セツナは東側のほうを指さした。よく見ると微かにだが砂塵がまいあがっているような・・・

「ああ、それならー」

雪蓮が何か言おうとしたときに穏が、パタパタと雪蓮の元に駆け寄

ってきた。

「雪蓮様、四時の方角から砂塵を確認、の報告を受けました。きつと孫権様たちですよ。」

「さすがは蓮華様だ。蒼天中央に日輪が至る刻に・・・という合流時間をしっかりと守ってくれているな。」

「どうやら、孫権が来たみたいだ。敵じゃなくてよかった。」

弓を折りたたみ、矢も矢筒に戻す。ついでに手甲も外し、みんなの元へ向かう。

肉眼で確認できる牙門旗は俺たちの部隊の前でぴたりと止まり、二つの人影がこちらに向かってきた。

「お姉様！今、報告で聞きました！単騎で敵陣に突入するとは、どういう事ですか！」

「うわっ」

「あなたは孫家の家長にして呉の指導者！それがこんな戦いで蛮勇を振りかざしてどうします！まったく・・・少しはご自分の立場をかんがえてください。」

「あなたは我らにとって大切な・・・大切な王なのですから！」

孫権の剣幕に気圧されているのか、さすがの雪蓮もしょんぼりしている。

「ごめんなさあ〜い・・・」

しかし、それだけでは満足しないのか、さらに説教を続けている。

「・・・見た目通りのカタブツだな？」

「あれは雪蓮を心配しているからこそ怒っているのだ。ご自分の身分をわきまえ、且つそれを誇りに思っておられるのだろう・・・本来の蓮華様はお優しいお方だぞ？」

「そう言われるも、全然優しい姿が想像できない。・・・ツンデレってやつ？」

「・・・そうなんだ？ふう〜ん。」

「なんじゃ？口説き落とす自信が無くなったとでも言うのか？」

「おれは、仲間として信頼できるかどうかだけを見極める・・・口

説く、口説かないなんてその後だ。俺は俺として接するだけだ。」
そう。仲間としてやっていけるか。その一点につきる。

「それで良いさ・・・お、いらっしやっただぞ」

孫権がこちらに来たみたいだ。後ろの方では雪蓮がげっそりとしていたが、こちらにウインクをしてきた。あれをやれっことだな？

「・・・貴様が天の御使いといわれている男か？」

（これが孫権か・・・）

顔を合わせてみて、やはり雪蓮と似ていることが分かる。しかし雪蓮のような天真爛漫の雰囲気は全くなく、生真面目でカタブツな感じが漂ってきた。

「そうでゲス。セツナというのもでゲスウ。よろしくダス。」

孫権の目には驚きが、周りにいた武将たちはずっこけた。しかし、その中で雪蓮だけがただ笑って事の成り行きをみていた。

我に返ったのか、孫権は蔑む目で俺をにらんできた。

「・・・お姉様？どうしてこんな低俗な輩を天の御使いなどと、思っているのですか？お眼鏡違いも甚だしい・・・」

「でもね、蓮華？この子はー」

「お姉様も堕ちたものです。妖言風説の類を信じて、こんな痴れ者を武将として迎えるなんて・・・」

その言葉を聞いて、頭に血が上った。俺がどういわれようと関係ないが、雪蓮が言われるのは許せない。ましてや、家族に罵倒されるのは、もっと許せなかった。

全開の覇気を孫権めがけて放つ。

「っ！！」

さすがに衰術みたいには、気絶しなかったが明らかに腰が抜けたようだ

「言ってくれるじゃねえか、世間知らずの嬢ちゃんがよ。雪蓮の目は狂っていない。狂っているのはあんたの目だな。俺の気も読むことが出来ないなんてな？」

「っっ・・・」

「雪蓮や冥琳、祭さんは俺の気を感じて、そこから内面を読み取ってくれたが、あんたは言動だけで人を判断した。王と名乗るには到底無理なほど」

孫権は激昂したのか、剣を抜き今にも斬りかかりそうな勢いで構えた。

「それ以上言ってみろ！頭と胸が永遠に離れるぞ！」

「やれるもんならやってみな？あんたみたいな甘ちゃんか、人を殺せるかな？」

「っ！無礼者が！」

斬りかかってきた。だが振りが大きく、避けることもたやすいが、急に孫権の動きが止まる。切りかろうとした剣も中途半端に止まり顔が戦慄と驚きで染まっていた。

「・・・あんた、今ので死んだぜ？」

いつの間に抜いたのか、鞘に収まっていたシャムシールがセツナの手にあり孫権の喉元に突きつけていた。

(・・・うまくいってよかった・・・)

ワイヨリ力流無形の抜刀術によって神速の抜刀が可能になっているが、抜刀術は苦手の分類だから、加減が聞かないときもある

・・・加減が聞かなくて、孫権が死んでたら、今ここで死んでいるだろうな・・・俺。

「・・・どうやって、いつ抜いたのだ？」

「蓮華様！貴様っ！」

後ろに控えてきた黒に近い紫の髪を持つ女性が腰に帯びている巨大な曲刀に手をかけるが、それも途中で止まる。

「はい。一回死んだな。」

額の寸前で投げナイフが突き出されている。その顔には恐怖と戦慄が走っているのか、目が大きく見開かれていた。

「はいはい。そんなぐらいで良いでしょ？セツナ。」

雪蓮が仲裁に入ってくれた。それを合図に、シャムシールを鞘に収

め、投げナイフも腕に戻した。

孫権は屈辱で体を震わせているし、おそらく甘寧と思われる人物は今にも斬りかかってきそうだが、雪蓮のにらみに制されて渋々ながら、従っている。

「で、どう？この子たちは？」

「うん。腕も立つし、優しい顔持ちだしな・・・まあ、自尊心がありすぎるのが玉に瑕だが、そう言うやつは信頼できる。」

「でしょ？何たって私の自慢の妹だからね！」

雪蓮はエヘンと胸を張って妹を自慢してくる。孫権は顔を真っ赤にして照れている。

「さつきはすまなかつたな。あれは雪蓮に言われてやっていたんだ。」

「くくくええっ！」「くくく」

そう。さつきの一連の騒動はすべて雪蓮が提案したものである。まず会うときにはとにかく頭を低くし、哀れっぽく見せ、蔑ませる。適度に罵倒が入ったところで

態度を一変し、蓮華に斬りかからせる。そこで俺の実力を見せつける。

・・・雪蓮曰くおもしろくなると言うことだが・・・たぶん、ギクシヤクな関係になるだろう・・・

「まあ、そう言うことだから。改めて自己紹介しなさい。」

「雪蓮、俺は最後に良いよな？」

何気なしに言った一言が何かの導火線の火をつけた。

「貴様！なぜ姉上の真名を口にするっ！」

孫権から批難が飛んできた・・・出会い頭があんなだったから、相当嫌われているみたいだな。

「いいの。セツナには真名を呼ぶこと、許しているもん。私だけじゃなくて、冥琳や祭、それに穩もね？」

「なっ・・・」

絶句しているようだ。おそらく内心では「どうしてこんな輩に・・・

「とても思っているのだろう。」

後ろに控えている二人も、とまどいが感じられた。・・・ん？二人？さっきまで一人だったのに？

「・・・それほどの人物なのですか？確かに武はすごいものですが、人格はどうか・・・」

「胡散臭いとかじゃないですけど・・・公謹様たちが真名をお許しになったことに、少し違和感があります・・・どうということでしょう？」

後から来たと思われる長い黒髪を持つ少女が観察するかのようにつちをみてる。・・・そんなにみられると恥ずかしいのだが・・・
「ふむ。まあ、そうだろうな。だが・・・こやつはおまえたちの夫になるかもしれない人物だ。」

「・・・ええっ！」「」「」

俺を含めた四人が驚きの声を上げた。そんな話、聞いてねえぞ！

「あ、あの・・・どうということでしょうか？」

「そうだ！どういう事だ！」

納得がいかない。俺にはトウルクが・・・

「んー。セツナは管輅の占いに出てきた天の御使いなの。そんな貴種の血を孫呉に取り入れることが出来たら、大きな力になるでしょう？」

「少なくとも、孫呉に天の御使いの血を引く人間がいる。・・・という評判につながるだろうな。」

「そういうこと。だから、セツナを保護するときに契約したの。孕ませろってね。」

「・・・いや、俺の知りたいのはそこじゃなくて・・・さらに質問をしようとしたが先に憤怒の形相で雪蓮に駆寄ったものがいた。」

「な・・・なんたる浅慮！お姉様は私たちの意志を無視するおつもりですか？」

「無視するわよ。特に蓮華、孫家の人間であるあなたの意志はね。」

「っ!!！」

「雪蓮。それはいくら何でも・・・」
ギロツ!

口出ししようとした俺に対して、雪蓮は人も殺せそうな睨みをきかせてきた。みたこともないような睨みだった。

「セツナ?あなたは黙っていて?」

「・・・分かったよ。」

おそらく血筋の問題だな。それだったら俺が口を出すような問題じゃない。

「いい、蓮華?孫呉が強国に天下を取るために兵がいる、金がある・

・それを得るために必要なのは、庶人の口から放たれる風評の矢。

「(・・・正論だな。)

人の口から放たれる風評ほど効果の大きいものはない。一つの情報で一つの大部隊が壊滅することもあるのだから、情報は大きな武器となっている。

例としてなぜアバンデイスに人が集まってくるかということ、福祉情勢と原生種からの安全が他の都市と比べてずば抜けて高いからである。大々的に世界に宣伝している事も

あり、浮浪者や腕自慢の武芸者がかなり集まってくる。しかも、未だに都市面積の拡大も行っているため、セントラルをのぞいてはトップクラスの都市面積を持っている。

「母様の夢、孫呉の宿願・・・呉を独立させ、天下統一に乗り出すために、セツナの力が必要なのだ。」

なるほどね。そこまでの思いがあったのか・・・そう言えば、呉は孫家三代が基礎を作り上げたものだったな。

それを聞いた孫権は悔しそうな顔をして、自分の肩を抱く。

「・・・ずるい。ずるいですよ、お姉様・・・母様のことをいわれたら、私は何も言えなくなるではありませんか・・・」

「知ってる。だから母様の名前を出したの・・・だけど安心しなさ

い。強制ではあるけれど、本気で嫌がるのならは無理はさせない。」
雪蓮はその場にいた三人を見渡し、優しく説き伏せるように言う
「それはセツナにも言ってる。．．．まずはお互いを知り合いなさい。それが第一よ」

「．．．」

渋面しきった顔を作って、孫権はこちらをみてきた。．．．たぶん、しばらくは仲良くは出来ないな。

「興覇、幼平。二人とも良いな？」

「．．．はっ。」

渋々返事をする甘寧。

「はっ、はい！」

あわてて返事を返す幼平と呼ばれた少女。．．．なんか納得できていないようだな。

「まあ見た目は胡散臭いかもしれんが、なかなかどうして骨のある奴じゃから、皆、安心せい。」

「うんうん。こう見えても結構頭も良いですし、とっさの機転も利きます。優しさもありますし．．．まあ、たまに暗くなるところもあります。いい人ですよ。」

セツナさんは。

二人が一生懸命フォローしてくる。意外に認められているんだな．．

・俺。ちよつと自信がついた。

しかし、肝心な孫権は．．．

「．．．ふんっ！」

ギロツと俺をにらんだ後、心中の不満を隠そうともせずにとつばを向いていた。

隣からため息が聞こえてきた。見てみると雪蓮が首を振りながら嘆息している。

「．．．とにかく。三人はセツナに真名を預けなさい。」

「はっ、はい！あの．．．性は周、名は泰、字は幼平、真名は明命です！セツナ様、よろしくお願いします！」

「これからよろしくな！セツナ・フォーリングってのが俺の名前だ。」
手甲をつけていない素肌の手を差し出した。しかし、明命は少しとまどっているようだ。

「・・・あ、えと」

「握手だよ・・・だめかな？」

「いえ！では・・・僭越ながら」

少しカタカタな言葉遣いだが、おずおずと手を差し出し、握手をする。

「未熟者だが、これからよろしくな」

「はいっ！」

元気いっぱいに返事を返してくれる。こういう奴は嫌いではない。それに明命から発する気と言葉遣い、そして手のぬくもりからこの子はとても良い子だと直感する。

「・・・我が名は甘寧。字は興覇。・・・王の命令により真名を教えよう。思春と言う。」

「これからよろしく。さつきは悪かったな。」

「よろしくするかどうかは孫権様次第だな・・・さつきのことはいれっぽっちも気にしてはいない。」

絶対根に持っている・・・はあ、先が思いやられる。

握手しようと差し出した手も一瞥されただけで、思春は孫権の後ろに下がってしまった。

「・・・どうやら思春は、忠義一徹ってかんじの武将だな。現代では滅多に見ないタイプだ。」

「わかった・・・なら孫権さん」
「なんだ」

まだ機嫌が直っていないな。まああれだけ虚仮にすればな・・・仕方がないか。

現代ならそれなりに笑い話になるようなことだが、こちらではそう言ったジョークが通じない。

「さつきは悪かった。あなたを試すようなことをして・・・」
膝をつき、非礼をわびる。雪蓮が言ったことだが、やったのは俺だ。
謝るのが筋つてもんだ。

「ちよっ・・・」
とまどっているが、詫びる。それが俺が出来る最大限の誠意だからだ。

「俺が気に入らないなら別に良い。君の立場から見れば、俺が胡散臭いってのが十分にうなずける。そんな男に、真名つていう大切なものを預けるのはいやだっという気持ちもよく分かる。だからまずは俺のことを見て欲しい。」
言葉ではよく伝わらない。伝わらないのなら人は次に何をするか。それは行動で示すことだ。しかしそれでも伝わらないことが多度々ある。

なぜかというと言葉と行動が一致していないからだ。
だから、信用を得るのが難しいのだ。

しかし俺はそんな事は絶対にしない。何が何でも言葉と行動を一致させる

言葉を尽くして、行動でも示す。それが祖先であるアルティ・グレスのカリスマ性のすべてであり、フォーリングの家訓でもある。

「今は、胡散臭いっという先入観があるから、俺の言動、行動、存在がすべて嫌悪が先立っていると思う。だがしばらく観察してくれていれば胡散臭さも少しはマシになると
思うから」

いったん言葉を句切り、孫権の前に立つ。
そして、握手をするために手を差し出す。

「仲間・・・ってまだいえるような信頼関係じゃないけど、それでも俺は雪蓮たちを支えたい気持ちはみんなと同じだ。そこだけは認めてくれないかな？」

孫権はこちらを見て押し黙っている。たぶん俺の言葉を整理しているな・・・

「……だめ、かな？」

「……合ったばかりの人間の気持ちなど、見透かすことは出来ない。だけど、冥琳たちが私に嘘をつくはずがない。だから……間接的に認めてやろう。」

俺が差し出している手をちらちら見ながら、孫権は言葉を続ける。

「握手はしない。その……そう言うことには慣れていないから……」

そう言った孫権は、俺が差し出した手を取らず、すっと後ろに下がっていった。

差し出した手のやり場に困ったが、これはこれで良いのかもしれない。

とりあえず雪蓮を支えたいという気持ちは伝わって、認めてくれたのだ。あんな事があった後ならこれで十分だ。

後は行動で示して行くのみ。

「さて……と。自己紹介はこれでおしまい。部隊の再編成をした後、すぐに出発しましょうか？」

「そうしよう。……興覇、幼平。おまえたち二人は黄蓋殿の下につけ。」

「はっ」

「はい」

これで前線の攻撃が厚みが出るな。二人とも近接攻撃タイプみたいだし、最前線に出るにはうってつけのタイプだ。

「では二人には部隊の再編成を行ってもらおうか。……真ん中は僕の部隊じゃ。二人は僕の両翼につけ。」

「了解しました。後曲はどのように配置しますか？」

後曲って事は、後詰めの子隊のことか。広範囲に追撃をかけられる部隊が適任だが……

「後曲中央に雪蓮の部隊を。右は私の部隊が取る。左は穩が取れ。」
「待て、では私の部隊はどうするんだ。」

「蓮華様は後曲の後ろ。輜重隊を護衛すると共に、遊軍として待機

しておいてください。」

「・・・わかった。」

孫権は悔しそうに返事を返すが、俺はなぜ悔しいのかが分からなかった。

輜重隊をやられるとそれだけで、味方の士気がガクツと下がる。だからこそ、輜重隊の護衛は重要なものになる。

それに遊軍としての機能も担っているのだから、自由に動いて、敵を攪乱することも出来る。

「セツナは私の側にいてね」

「わかった。背中は何しておけ。」

「うふふつ、頼りにしているわ。」

とりあえずこの戦乱の間は雪蓮の副将をつとめる。それが俺に課せられた使命だ

「・・・」

ふと視線を感じて、振り向いてみると孫権が、なにやら勘ぐっているような目でこちらを見ていた。

・・・まさか、妬いているのか？

そんなわけではないと、思いつつ、手甲をつけ直す。

「では部署割りが終わったところで、再編成に移る。一刻後には出発するぞ。」

「応」

「はっ」

「はいっ！」

「はい」

全員は返事を返し、それぞれの仕事をするために散っていった。

一刻後再編成が終わり、黄巾党の本拠地に向けて進軍を再開した・

三時間もかからないうちに部隊はいよいよ黄巾党の本拠地の傍にまでやってきた。

堅牢そうな城壁が目の前に広がり、その周りには数多くの諸侯の軍が陣を展開して攻撃の時を待っているのだ。

「おお・・・壯観だな、これは・・・」

ライティックスにあるガンダムタイプが並ぶだけでマニアならもう死んでもいいと言っくらいだし、俺でも気持ちいいくらいかいっかいと思っっている。

それに引けを取らないほど、すごいと思った。これほどの人が一つの目的のためにいるって事が心の琴線を動かしたのだろう。

「曹、袁、公孫、それに劉・・・いい感じに集まっているわね。」

「計算通りだな。これだけ集まっていれば、敵と互角に戦えるだろう。」

「じゃが、儂らが参戦する場所がなければ、功名も立てられんぞ？」

「おいしいところをかつさらうために、他を利用しながら抜け駆けをするって事も難しい問題だな。」

俺たちはただ単に敵を倒しに来ているわけではない。名声がもつとも物をいうこの世界では大きな戦果ほど名が上がる。これは自然の理だ。

しかし、あまりに苛烈なのは、逆に反感を買うため適度に苛烈な戦果が良いといわれているので、そこら辺の調整も難しい物だ。

「祭やセツナのいう通りね。諸侯の軍勢が集まっている以上、時間をかけるわけにも行かないし・・・」

「かといって、力攻めだけでは落ちんじやろ？」

「そうよね・・・どうする、冥琳？」

時間をかければかけるほど、大きな戦果は遠のいていく。短期決戦に持ち込みたいところだが、情報が少ない今はまだ判断は出来ない。

「ふむ・・・穩。確か城内の地図があつたはずだが。」

「ありますよ」。元々太守さんの持ち物だったお城でしたからね。はい・・・これです」

「すまん・・・」

全員が広げられた地図の周りに集まり、大半は深いため息をついていた。

「ふむ・・・厄介な城だな」

俺ものぞき込んでみると、ため息の理由が分かった。

まず、堅牢な城壁がそびえ立っていて、左右の城壁の長さはそれほどでもない。

これは正面にしか大軍を展開できず、横から攻めようにも少数で攻めることを強いる構築の仕方だ

しかも、後ろは絶壁の断崖であり、それを上り、上から奇襲をかけるようにすることも不可能だ。

守りは容易く、攻めるは難解と言った、まさに教科書通りの城だ。

俺たちの戦法が出来るなら、まず工作隊にデモリッション・ウエポンで城壁を破壊させ、小回りのきく部隊を突入させる。

もしくは、対空防御を沈黙させてから、ストーム・ヴォルク タイプ ドラゲーンでMSを空輪させて、城の上に落下。

一気に制圧する物だが、そんな戦法が出来るわけが無い。

なら、今はみんなを意見を聞いておくべきだ。

「攻めづらく、守りやすい・・・まさに教科書のようなお城ですね」。

「全軍を展開できるのは正面のみ。左右は狭く、大軍で攻めるには無理がある、か。」

「後ろには絶壁がそびえていて、回り込むことは不可能でしょう。まさに思っていた事がみんなの口から出てくる。それほどに攻め方がない城だと改めて実感した。」

「めんどくさいから、真つ正面から突入しちゃおうよお。」

「うむ、策殿に賛成じゃ」

「本気か！？こつちに被る被害がとてつもない物になるぞ！冗談で

も言わないでくれ！」

「そうですね！何を馬鹿なことを言っているのです、二人とも。たちの悪い冗談を言っている場合じゃありません。」

意外にも孫権と意見があつた。孫権の方に顔を向けると一瞬だけ目があつたがすぐにそらされた。

「結構本気なんだけど・・・」

「なおオチが悪いです」

一言で斬り捨てられて、雪蓮はしょんぼりと肩を落とした。俺はその姿を見て頭が痛くなった。

この状況下でマジで言っているのが、本当に考えられない。少しは考えてくれよ・・・

「セツナ・・・」

「ん？」

「おまえの意見も聞かせてくれ。」

「そうだな・・・」

「思いつくままで良い。何か気づいたことがあれば言ってくれ。」

改めて地図を見る。しかし、間取りは分かるが、それがどういった建物が分からない。

大体の作戦は見当がついているんだけどな・・・

「・・・この真ん中にある建物は何なんだ？」

「本殿だ。この城で中心的な建物になる。」

これが中心とすると、周りには必ず倉庫か宿舎があるはずだ。

「この等間隔に並んでいる建物は？」

「それは、多分倉か何かでしょうねえ」

「じゃあ、こここの反対側にある建物は？」

「それは宿舎ね。使用人たちが住んでいるところよ」

よし、予想通りだ。これなら、考えている作戦を実行できる。

しかし、軽く困難がつきまとう作戦だ。これを冥琳たちが承認していくれるか。

言ってみるしかない。それ以外は結果が分からない。

「ここら辺の倉は、おそらく死角になっているはずだ。」

「あ、そう言われれば・・・そうですね。」

「黄巾党がこの城を本拠地に行っている以上、兵糧や武器は倉の中に保管していると思う。・・・となると、ここを狙うぐらいしか考えられない。」

兵糧を攻撃すれば、敵の士気もガクツと落ちるし、難攻不落の城に潜入されたとなると、動揺も激しいものになる。

そこに一気に攻め立てるのだから、敵にとっては驚異の他に何もない。

「でも、一体どうやって？」

「夜襲を仕掛ける。足の速い部隊を潜入させ火を放つ。・・・定石だけど、一番効果的だ。・・・可能かな？」

「・・・出来るな。祭殿。諸侯の軍が引き上げた後、部隊を正門に集結させてください。」

とりあえず、あの周公謹に作戦が認められた。俺の作戦立案でもこの世界では意外に使えるんだな。

「ふむ、それはよいが・・・夜襲をかけるのか？」

「掛けるフリで結構。奴らの目を正面に引きつけるのが狙いです。」

「なるほど。囷になる訳か」

囷という言葉聞いて、俺は啞然とする。

そこまでは考えつかなかったのに冥琳はいとも簡単に思いつく。

これが、戦略の上っ面しかなくていない者と後世に依然と名を残す大軍師との違いか・・・

盗むべきところは多いな。

「ええ。その後、興覇と幼平の部隊が城内に侵入。放火活動を行います。それに合わせて、祭殿は雪蓮と合流し、混乱する城内に突入する・・・これでどうかしら？」

「良いんじゃない？ワクワクしちゃうわ。」

ワクワクって・・・まったく、このおてんば姫は・・・

「し、しかし・・・絶対に成功するという保証が無い以上、お姉様

が前に出るのは反対です！」

「蓮華。戦に絶対はない。それくらい・・・分かってるでしょ？」
そう。戦いに絶対という言葉は存在しない。俺は絶対に負けない、死な
ないと言っている奴ほど、簡単に死ぬ。歴戦の猛将も新兵にやられ
ることもある。

戦いで絶対にあるのは、死、のみだ。死は公平にやってくる。

そして、死を操っている死神は臆病者と不幸な奴が大好きだからそ
いつらに死を送っている。

それを知っている俺は、孫権の言葉にアホ臭さを感じる。

やっぱりまだまだ甘ちゃんなんだな・・・雪蓮とは対照的だ。

「しかし・・・母様が死んだときと、状況がよく似ていて・・・」

・・・少し見解を変える。孫権はただ純粹に雪蓮のことを心配して
さっきの言葉が出てきたんだ。

祭さんたちが言っていた優しさはこういう事なのか・・・

「城攻めの時に私が死ぬかもって？無い無い。・・・私が指揮する
のは突入部隊だけ。城攻めの指揮は祭に任せるもの。」

「うむ。承った。」

「ね？だから安心して私の背中を見ておきなさい。孫呉の王の戦い
ぶりを・・・」

「・・・」

孫権は雪蓮の言葉にコクツとうなずく。それでもやはり心配なのだ
ろう。

矢でも飛んできたら、死ぬ可能性もある。俺もそこは心配している。

「聞き分けのいい子は好きよ。・・・じゃあ、蓮華は後方に下がっ
ておきなさい。」

「はい・・・」

「思春、明命。二人はすぐに精鋭部隊を編成し、作戦を検討してお
いて。」

「「御意」」

この二人が任されたところを見ると、隠密部隊の類を率いているの

だろう。

・・・この時代から、隠密部隊があつたことに少し驚きを感じた。

「穩は、蓮華様の補佐を」

「了解であります。」

「セツナは祭殿と一緒に城攻めを・・・できるな？」

今回は城攻めか・・・市街地戦みたいなものだから、出来なくはないけど・・・

「ああ。俺が発案した作戦だ。責任は持たないと・・・」

現実に、俺の言葉が戦いにつながり、人が死んでいく。

その事實は、いくら言葉を飾ったところで隠しようのない事実だ。

「責任ね・・・どうやってとるつもり？」

「勝つ。勝つと信じて、俺は勝つまで拳を振るい続ける。それが俺に出来る最大限の努力だ。」

勝つということは雪蓮たちを守ることもつながる。

しかし万が一負けるようなことがあれば、みんなが死ぬ。

それだけは自分の心が絶えられない。もうジャルダを死なせた時みたいに自分の無力さを痛感するのはごめんだ。

「ふっ・・・それで良いのだ。セツナ。」

「うむ。自分の能力を最大限に発揮し、最大限の努力をする。そして結果を出す。それが人を指図する者の責任の取り方じゃ。」

冥琳たちの言葉を聞いて、決意を新たにす。

俺は、自分のためではなく、みんなを守るために拳を振るう。

それこそが、グレスの血を受け継ぐ者の天命・・・かもしれない。

今は自信を持っていえないが、おそらく曾爺ちゃんや爺ちゃんもそうやって思ってたんじゃないと思う。

「努力した過程など、結果が出さなければ何も足しにもならないから・・・だが、勝敗は兵家の常。ならば、我らに出来ることはただ一つ。」

冥琳が俺の方を深い目の色で見てきた。

「勝つための努力を放棄しないということだ。」

「ああ、そうだな。今ならその言葉が分かる。それにその覚悟も持つことが出来る。」

「・・・そう。ならその覚悟、しっかりと見せてもらいましょう。」
「しっかりと見ていてくれよな。」

おどけていつて見たが、内心は不安だらけだ。

しかし、今俺に出来ることはただ一つ。

勝つと信じて、自分の出来ることをやるだけだ。

それから、すぐに作戦準備が始まり、陣地を構築した後、夜を待った。

作戦開始まであとちょっと。

俺は今の気持ちを整理するために、一人岩に座って月をボーツと見ていた。

曾爺ちゃんに当たるアルティ・グレスはこういうときにどうしていたのだろうか。

おそらくいつも通りに作戦決行の時を待っていたはずだ。

いつもなら、普通に出来るのだが、なぜか今はひどく落ち着かない。作戦の責任を持つ。

今まではそんなことは考えたことがなかった。

この機会を機に少しは考え方が変わると良いのだが・・・

「ああいつたのはいいいんだが・・・不安になるな。」

その兆候として手に震えが来ている。

まるで自分の体ではないかのように震えているのだ

その震えを止めるかのように拳を握る。

しかし震えは止まってはくれない。むしろひどくなる一方だ。

(どうしたんだ！俺の体！)

肩を抱き、縮こまる。戦いの前にこういう体勢をとったのは、初めてだった。

フロレンティアとのアルクルスト最終決戦の時さえ堂々としていたのに・・・

「・・・一人で何をしている」

ふと、後ろから声が飛んできた。ぞんざいな言い方だから多分・・・
「ちよつと考え事かな？」

向きを変えて誰なのかを見てみたら案の定孫権だった。

なにやら神妙な顔をしているがどうしたんだらうか？

「何を考えていた？」

「作戦の責任つて奴をさ・・・これを機によく考えていたんだ・・・

」

「そうか・・・」

「・・・」

お互い話す話題がないため、沈黙が訪れる。それも気まずい沈黙だ。

・・・まずいな。何か話すことはないかな。でも、相手にされなさ

そうだし・・・

それより、手の震えを止めたかった。

「・・・怖いのか？」

意外に優しい声で孫権が心配してきた。

おそらく手の震えと縮こまっている姿から思ったのだらう。

「ああ。正直怖いさ。戦場では何が起こっても不思議じゃないからな。」

「そうか・・・ふつ、男のくせに軟弱な奴ね。」

いつもはそう言った罵倒に腹を立てるが、今の自分の状況からではそれが一番似合っている言葉なのかもしれない。

「そうかもな。いつもだったらこんな風じゃないのに・・・一体どうしたんだろ、俺・・・」

そう言つて月を見上げる。始めて生の月を見たが何の感情もわき上がってこなかった。

「だから、月に願っていたのさ。早く元に戻れってね・・・」

「そうか・・・」

何となく孫権の声も固い。かすかに緊張も混じっている気がする。

「孫権はどうしてここに？」

「わ、私は、その……」

声もつわぶり始めた。……大丈夫か？

体勢を楽にして、孫権の言葉を待つ。気分は先ほどより少しマシだ。

「……これが、私の初陣なんだ。緊張して何が悪い。」

「……なるほどね。」

拗ねたような孫権の口ぶりに、俺は唐突に冥琳の言葉を思い出した。王者たらんとして無理をしている……初陣を迎えて緊張している孫権の言葉につながった。

初めがあんな感じの出会いであったため、少々取っつきにくい娘かと思っていたが……

境遇は俺とよく似ているかもしれない。

初陣が近づき、周囲からの期待が大きかった俺はとにかくつらかった。

孫権もそんな感じなんだから……

そう思うと、笑いがこみ上げてきた。

「ははっ……」

「な、何を笑っているんだ！無礼な！」

「悪い。だが馬鹿にするつもりで笑った訳じゃないんだ。たださ、始めてあったときがあんな感じだったから……緊張しているって聞いてなんだか親近感を感じたからさ」

「ふんっ……」

照れているのか、そっぽを向かれた。

意外に可愛いところがあるじゃないか……

「……お互い無事でいられるといいな。」

「……盗賊ごとき下郎に遅れを取るつもりはない。おまえも安心しておけ。」

「えっ？」

「……おまえは私が守ってやる。」

まるで照れ隠しをするかのように、孫権は明後日の方向を見つめながら言葉を紡ぐ。

俺はその言葉に、少し笑いを感じながらも感謝する。

しかし、孫権が俺を守るって・・・普通は逆じゃねえか？

「うーん・・・」

「なんだ。私に守られるのが不満なのかっ!？」

「いや、そう言う事じゃなくて、普通はこういうときは男が女を守るって言うのが普通だからさ・・・少し複雑で・・・」

女に守ってやるっていわれるのは嬉しいけど・・・男としてはどうかな？

・・・かんがえると、かなり、いや、完全にメンツをつぶされているよな？

「おまえは俺が守ってやるよ。お姫様。」

「・・・ふっ、無理はせん事だな。」

さらに顔を真っ赤にしている。こういう言葉には弱いのか？

「まあ、おまえも無理をしないことだな。あんまり肩肘張っているといつか滅入るぞ。」

ん？こういう事がふつと口が出るようになったって事は・・・手をしてみると、まだ若干震えがあるもののだいぶ収まってきた。

気持ちもいつもの臨戦態勢になってきている。

さっきの言葉が出てきたのは、明らかに昔の俺と同じ感じが漂ってきたからだ。

孫権は、雪蓮に少しでも近づこうとして、背伸びをしている。

それはそれで良いことだが、何かの拍子につまずくともろく崩れてしまうほど儂いものだ

一刻も早く、雪蓮とは違うと気づき、自分は自分と思えるようにならないといけないのだが、これは他人がどうこうできる問題ではない。

セツナ自身も、父親に追いつき追い越そうと必死で頑張った。しかし、初陣で敵による試作モビルスーツの奪取を阻止できなかった。

父ならば、出来たという声がそこから中から聞こえて来た。

そんなプレッシャーに押しつぶされ掛けていた俺を救ってくれたのは、ベテランパイロットのベルナデイスさんとクロインズさんだった。

背伸びをするな、自分の持ち味をしつかり把握し、それを生かしていけ。

その言葉一つで、俺は変わり、父に追いつくという考えは捨て、自分の持ち味を探し、努力することを決意した。

俺もそうだったように、孫権もまだまだ青いつて事か・・・
つて言っても、俺も最近分かるようになったがな。

「心配するな。それに・・・私は呉の王族のはしくれとして、兵たちの上に立つ。そして兵たちを守ってみせる。」

孫権の顔は真剣そのものだが、どこか脆そうな感じがしてならなかった。

やはり、王たらんと無理をしているな。今はまだそこまでがんばらなくてもいいのに・・・

「ひいては民を守り、国を守ることに繋がる。・・・私はそう信じている。」

(一人で出来る事なんて、たかがしれているのに・・・)
グツと拳に力を入れて目を睨みながら独白する孫権の姿。

その姿は、青白い月光の光を浴び、ただならぬ決意を感じさせるが、やはりどこか、無理をして作り物めいた感じだった。

それはおそらく、無理をしている孫権の中からあふれ出す痛々しさから来るものだろうと思った。

「・・・だめだな。」

「えっ？」

「やっぱり孫権は俺が守る。」

俺と同じ過ちを犯さないために、孫権を支えていく。

それが呉のためにもなるし、孫権自身も大きな成長を期待できるであらう。

「・・・き、貴様に出来るのか？」

照れ臭さからか、ぞんざいな言い方で挑発してきた。

・・・強がるなよ。

「すでに実力は証明しているだろ？だから・・・」

立ち上がり、孫権の肩を軽めに叩く。

「もつと肩の力を抜いて、今の自分の出来ることを精一杯やれ。出来ないところは俺やみんなが補っていく。そうやって守っていくからさ。」

「ふ、ふんっ！」

つんけんした言い方でそっぽを向いたが、これも照れ隠しだろ。

耳まで真っ赤にして・・・

「じゃあ、俺はもう行くから。話せてよかったよ。孫権。」

あれほど強ばっていた体が、嘘のようにリラックスしている。手の震えも止まっていた。

これなら、戦闘は可能だろう。精神の状態も申し分ない。

自分の場所に帰ろうとして歩き出すと・・・

「・・・気をつけてね。」

「ん？何か言ったか？」

「な、何でもない！バカ！」

といって、孫権も帰って行った。

「案外分かりやすい性格をしているな。すぐ顔に出るし・・・いい子だな」

ほんの数分、話ただけだったが、大体の人物像はつかめた。

しかし、まだすべてが分かったわけではない。それはこれから徐々に分かっていけばいいことだ。

だが、確信できたことが一つあった。

孫権はやはり無理をしていることだ

あれではいつか、絶対に何かにつまずき、立ち直れなくなる。

雪蓮のようにはなれないと、気づくには何かキツカケが欲しいところだが・・・

(今は考えてもしょうがない。とりあえず目の前の戦闘に集中しよう。)

歩き始め、自分の場所に戻り、時が来るまで体を休めることにした。

「作戦を開始する。興覇、幼平、行け！」

「はっ！」

冥琳の号令と共に二人の部隊が動き出した。

夜になって、諸侯の軍が引いているため、周りは孫呉の部隊しかない。

これは予定通りだ。

「黄蓋殿は孫策と共に正面へ。後は作戦通りに頼みます。」

「任しておけ。策殿、セツナ、行くぞ！」

「了解。蓮華・・・行ってくるわね。」

「はい。お気をつけて・・・」

心配そうな顔で返事を返す孫権。その後、こちらを見てきた。

目を見てすぐに分かった。俺のことも心配してくれている。

孫権に向かって、親指を立てると、照れくさいのかすぐそっぽを向いた。

その反応に満足した俺は、馬を雪蓮の方に向かわせる。

雪蓮はにっこりとこちらを見ている。何があっただが感づいているよ
うだな。

さて・・・最初の武器は何にするかな。

確か最初に陽動を掛けるから、弓でチマチマ打っていた方が陽動に
なるな。

その後は、城内の敵を掃討していくから、小回りのきく拳を使って
いくのがベストだな。

腰に掛けてある弓を掴み、広げる。弦の張りもいつも通りだ。

(よし、いける！)

再び雪蓮の方に向き、うなづく。

OKの合図を受け取った雪蓮は、剣を突き出し号令を掛ける。

「孫策隊、出るぞ！」

「応っ！」

いい返事が響き渡り、軍は進軍を始めた。

「黄蓋隊も続く！皆、儼についてこい！」

「応っ！」

祭さんたちも平行して進軍を開始した。

後ろの方からは冥琳の号令が聞こえてくるが、はっきりとは聞こえない。

突撃は雪蓮が指揮を執り、城内への攻撃は祭さんが指揮を執るか・

俺はただ弓を拳を振るえばいいことだ。いつも通りに行けばいける。体の調子もいい。精神状態も最高だ。

弓を構え、いつでも打てる状態にしておく。これもいつも通りの動作。

すべてがいつも通りのルーティンで回っている。後は号令を待つのみ。

少し待つと、後ろから腹に響き渡るほどの鬨の声が上がった。

陽動が始まったのだ。城門の上ではすぐさまかがり火がともされていき、時折黄色いものがチラチラと見えてくる。

作戦を立案した責任を取る。今はこれを思っておく。そしてそのためにも勝つ努力を最大限にする

自分の吐いた言葉を翻したくはない。

城内から火の手が上がる。これこそが合図だ。

すぐさま祭さんと横並びに併走し、城門を開くのを待つ。

その間は敵を片っ端から討っていく。

それが今俺が出来る勝つ努力だからだ・・・

「敵大将旗が倒れました！」

「よし！今こそ決戦の時！皆の者、雄叫びと共に猛進せよ！」
周りから、ものすごい雄叫びが雪蓮の号令に答えるかのようによ上
った。

もうすぐ開門だな。弓を折りたたみ、手甲を締め直す。そして馬か
ら下り、息を吐く。

ワアアアッ！

ひととき大きい雄叫びが上がり、城門の方を見てみるとこじ開けた
ようだ。

黄巾党は破れかぶれに出てくる奴と、城の立てこもり必死に抵抗し
ようとする奴らに分かれている。

今回俺の担当は後者の方だから、城門目がけて走る。しかし、門の
下には向かわない。

なぜなら侵入してくる敵を少しでも減らそうと矢が雨のように降り
注いでいる。

そこを無傷で通り抜けようと思ったら、虫がよすぎる。

だから、城壁を利用してもらう。人が作った物だから、隙間や、
少々の段差があるはずだ。

ワイヲリ力流無形の転ばしと膝抜きを駆使して、城壁を駆け上がっ
ていく。

予想外の方向からの侵攻に、相手は戸惑いがあるものの、一人だと
見くびって、無造作につっこんで来る。

突っ込んできた相手に拳を一閃。敵は顔に拳を食らいながら勢いを
止まることなく後頭部を床にぶつけた。そのときにはすでに絶命し
ている。

そして、そこからのセツナの戦い方は、まさに鬼人そのものだった。
向かってくる相手を一撃で殺し、同時に来た場合は同士討ちを発生
させ、乱戦になれば相手の武器も利用する。

城壁の敵を一掃したところで、下におり、今度は自分から突っ込ん
でいく。

そのころには体も温まっている。さらに体のキレが増し、技も冴え

ていく。

本格的に技を引き出し、精度を確かめていく。今セツナの中では、戦いという感覚ではなく、殺戮が織りなすこの場所は自分の技を再確認する実験場になっている。

しかし、そのときはすぐに終わりを告げる。

「皆の者、勝ち鬨を上げよ！」

オオオオオッー！

そこら中から聞こえてくる鬨の声に、はっと周りを見渡す。

どうやら、作戦がうまくいき、俺たちの勝利のようだ。

しかし、いつもなら気配で戦闘が終わるときが分かるのに、今回の戦闘ではそれが感じられなかった。

それほど、熱くなっていたのだろうか？

だが、作戦はうまくいったのだ。雪蓮たちを守ることは出来たはずだ。

周りが歓喜の声を上げている中、俺は人知れず安堵のため息を吐いた。

戦いに勝利した俺たちは本拠地に向かって凱旋の途につく

その途中、夜も深く兵たちの疲労もあるため、野営がもうけられ、朝まで休憩ということになった。

「ふう……」

俺はまた、岩の上に一人で座り、ブーツと月を眺める。

傍らには、先ほどまで血まみれになっていた手甲が見事なまでに磨かれていた。また弓も綺麗に磨かれている。

戦闘の興奮は未だに収まらない。体が熱い。

いつもの俺ならば、戦闘時でもクールに動けるし、戦闘後もすぐに興奮が収まる。

しかし、今は戦闘で循環しきれなかったエネルギーが体の中を駆け

めぐっているように感じる。

あまり余ったエネルギーを少しでも減らそうと、型をしてみる。しかし、一向に熱は収まらない。

いつもとは違う自分に混乱しているそんな時に・・・

「あきれた・・・あれだけの戦闘をしてもまだ体を動かしているなんて・・・」

「孫権か・・・」

型をやめ、噴き出した汗を袖でぬぐう。

声を掛けられた方を見てみるとなにやら神妙な顔をした孫権がこちらに向かつてきた。

「・・・また一人で考え事？」

「まあ、そんなところかな。」

「・・・何を考えているの？」

今考えていたのは、今回の作戦が成功し、俺はきつちりと責任がとれたのかを考えていた。

こればかりは他人に聞いてみないと分からない。ちょうどいい機会だから聞いてみよう。

「さっきの戦いで、みんなが言っていた「責任」って奴、とれたかな？って考えていただけ・・・」

「だから、浮かない顔をしていたのね？」

型をしているときは基本的に無表情のはずなのだが、無意識のうちに深刻に考えていたのか・・・

「なあ、孫権？俺、責任って奴、とれたのかな？」

正面から向かい合って、聞いてみる。こればかりは他人が感じていることを聞かなければわからないことだから・・・

「・・・今日のあなたの戦いぶりをすっかり見せてもらったわ。」

孫権は昼間とはまるで逆の穏やかで優しい声色で話してきた。

これが、孫権の本来の姿か・・・綺麗な声だな・・・

「みんなを守りたい、守るために勝つって気持ちがとても強く感じられたの。だから・・・」

一呼吸置いて、こちらをしつかりと見据えて来る。碧眼の瞳は吸い込まれそうなほど美しいものだった。

「十分すぎるくらい責任を果たせていると思うわ。」
静かに優しく微笑んでいつてくれた。

それを聞き、目を見た瞬間、体の熱は一気に冷めた。興奮も収まっ
ている。

そうか・・・心の底で誰かに言っ
て欲しかったんだ。ちゃんと責任
はとれていると・・・
体を解すかのように伸びをする。体内に残っていた熱も深呼吸をし
てはき出す。

「そうか・・・とれていたか。よかった・・・」

「ふふっ、安心できた？」

「ああ・・・それより孫権はどうしてここに？初陣で神経が高ぶ
って寝れないのか？」

「ううん。違うの。」

首を振って、否定してくる。それになんだか急にしおらしくなった
「あなたに言っておきたいことがあったから・・・」

「俺に？」

コクツと、小さく頷きそのまま孫権は黙り込んでしまった。

なんだろ？戦闘が終わってから孫権にあつてないし、ちよつかいも
掛けていない。雪蓮たちとも事務的なことしかしゃべってないし・・・
心当たりがないな？

「んっ・・・言っておきたいことって？」

「今日のあなたの・・・その・・・戦いぶりを見て、あなたが言っ
ていたことがはっきりと感じられたわ。・・・少し見直した」

そりゃよかった。少しでも俺のことを認めてくれたんだ。

どうやら典型的な堅物って訳じゃなさそうだな。

「それで、その・・・失礼なことを言ったことに対して謝罪しよう
と思っ
て・・・」

「謝罪？良いよ、別に。孫権が言っていたことだっ
て当然のことだ

と思うし。」

「いいや。私が悪かったのだ。おまえは悪くない。」

「いやいや。孫権は悪くないって！俺もそんなに気にしていないし！」

「むう・・・そんな風に言われてしまうと、謝ることが出来ないじやない。」

「何が何でも謝っておきたいらしいな。俺はもう気にしていないのに・・・」

律儀な奴だな。悪いと思ったことは悪いと認め、謝る。

そういう性根を持っている奴は、後から大成する。

クロインズさんが言っていたことだ。

「謝らなくて良いんだぜ？・・・孫権は孫家の一員として、王となるべく人間として、気を張っているんだって知っているんだから・・・」

そう。たかが、英雄の親父を持ち普通に生きている俺と、若年ながら大きな宿命を持つ孫権では、背負っているものが違いすぎる。

感じるプレッシャーも違うはずだ。だから、こんな些細なことを気にしていたら、そこをつけ込まれる。

「最初にあつたときの言葉も、俺は気にしていないし、当然だと思っっている・・・だから、謝らなくても問題なし！だろ？」

「・・・」
やはり納得はしていないようだ。堅いな〜！

レクトやアフアロさん、リック達は、ここら辺で納得してくれるんだけどな・・・

そこが男と女の違いって奴か・・・

「な？だから孫権も気にしないでくれ。気にされていたら、俺が悪いみたいになっちゃうからさ・・・」

「そんなことはないと思うけど・・・気にしないでくれって言われて、そうかって納得できるほど私は薄情じゃない。」

月明かりに照らされた孫権の顔は、いつもの王であるうとしている

ものではなく、年相応の少女の顔をしていた。

なるほどね・・・これが孫権の本当の顔か・・・

「だから・・・私の気の済むようにさせて欲しいの。だめかしら？」

「・・・本当に気にしなくても良いんだけどな？」

「それでは気が済まないの」

「・・・わかった。なら孫権の好きにしてくれ。」

「ありがとう」

微かに微笑みを浮かべた孫権は、ゆっくりとした動作で手をさしのべてくる。

「私の真名は蓮華という・・・この名、おまえに預けたいと思う。」

おっと。これには面食らった。まだまだ教えてもらえるものではないと思っていたからだ。

孫権は、ジョークを言うような子じゃないから、本気なんだろうな・

「・・・いいのか？会ってまだ、数日もたつてないのに・・・」

「ああ・・・これが私のケジメの付け方だと、思ってくれ。」

ケジメね・・・。

考えてみたら、向こうでケジメをつけなきゃいけないことがたくさんあった。

ルアフ達の店に顔を出すこと。

親父の墓に戦後報告。

トウルクとの婚約。

「・・・まあ、良いか。今はこつちのことだけ考えるようにしよ。」

「・・・わかった。じゃあ、謹んで真名を預かるよ。」

手甲を外し、素肌の手でしっかりと握手を交わす。

「じゃあ、改めて・・・セツナ・フォーリングだ。・・・よろしく、蓮華」

「よろしく。セツナ・・・」

俺の瞳をじっと見つめ、月明かりに照らされた柔らかな微笑みを浮かべた蓮華の姿に、俺は言葉を発する事も忘れ、ただただその姿に

見惚れるしか術がなかった・・・

第三話 孫呉の仲間たち（後書き）

今回は、文字数がとても多いので戦闘パートと拠点パートを分かれていますが

ご了承ください

閑話 姫君との鍛錬（前書き）

作者「どうも。致命傷から何とか回復した作者です。」

セツナ「あれぐらいの傷が致命傷って・・・セツナ・フォーリングだ。」

冥琳「まあまあ、作者は一般人なのだから、仕方がない・・・周瑜という。」

作者「冥琳だけだな・・・ここでまともに俺を庇ってくれるのは・・・」

冥琳「あれだけ、されるところを見ていれば同情したくもなるよ・・・」

作者「うう、感動だ・・・さて、今回は文字数が一話で5万文字という事になったのでパートを分けることにしました。」

セツナ「文字数の把握くらいしておけよ・・・」

作者「・・・お前、これから辛い運命が来るように設定するわ。」

セツナ「何！？ちょっと待ってっ！」

作者「二話続けてあんな仕打ちをしたんだから、当たり前だ！よし、創作意欲がわいていた！（ガリガリ）」

セツナ「何書いてんだ！？やめる！」

冥琳「はあ・・・落ち着いて、前書きをすることは出来ないものか・・・仕方がない。今回は私一人でタイトルコールをしよう」

冥琳「それでは、真・恋姫十無双　乙女繚乱　三国志演義　呉書　虎狼天下覇道の巻第3　5話　狼の休日日記。どうぞ閲覧してください。」

セツナ「おい、それはひどすぎるぞ。消せって！」

作者「やっだよ。これはこれでおもしろいんだ！」

冥琳「まったく・・・少しはおとなしくできないものか？」

閑話 姫君との鍛錬

「ふう〜っ。」

荊州に凱旋してから次の日。俺は早速部隊の構成に取りかかった。

帰ってきて冥琳は、早急に4000人をあてがうと言ってきたので、午前中いっぱいまで構成を考えていた。

しかし、なかなか勉強になる。四大戦争中期でライティックス再建の際、部隊細分化案を考えたのは俺だったけど、煮詰めていったのはベルナデイスさんや姉さん達だった。

ここまで、詳しく考えたのは初めてだった。今回の部隊構成は四つに分け、何か一つに特化させる方法で行こうと思っているけど・・・
まずは選抜方法からだな。間違えた選抜をすると隊全体がだめになるから、しつかりしないと・・・

・・・まあ、今は食休みだ。ゆっくりしよ。

ぶらぶらと中庭を散歩していると・・・

ガキインツ！

鋭い剣戟の音が前方の木陰から聞こえてきた。

誰か、鍛錬でもしているのかな。

気になって、そちらの方に足を向けてみると・・・

「はあっ、はっ、はっ・・・はあ！」

「・・・」

思春と蓮華か・・・少し見ていくか・・・

裂皐の気合いと共に放たれる斬撃を、思春は表情を変えずに受け流す。

「闇雲に切り込めばいいというものではありません。蓮華様。」

「ええい、その余裕・・・今日こそは打ち崩してみせる！」

一年間以上、達人達の修行を見てきた俺は、この二人のレベルがそれとなく分かる。

「やあ・・・！」

そういう目から見ての感想は・・・

思春は現時点ではトップクラスの強さを誇っている。さすがは呉の武将であることはある。

一方、蓮華は・・・

「熱くなるのは、蓮華様の悪癖です。それで剣捌きが多少冴えたとしても、心の方が乱れます。」

「言わせては・・・おかぬっ！」

流麗な身のこなしは・・・そのものが舞蹈のようだ。踏み込みから袈裟懸けの一撃、さらに剣先を翻しての鋭い突き。

(所々、体が流れているな・・・あれでは次の動作が遅くなる。)

さつき舞蹈のようだと表したが、悲しいかな。舞蹈の領域を出ない。

相手のわずかな隙をつき、一手一手自分に勝利を近づけていく。それが戦いなのだが・・・

蓮華の場合、熱くなって、思春のわずかな隙を見逃している。あれでは勝てるものも勝てなくなる。

だから、蓮華はまだまだ発展途上なのだ。叩けばのびるが、時間がかかる。

「それです。・・・それを諫めているのですが・・・」

「・・・ちっ」

三回っ！

肩、首、腹に掛けて、目で追ってしまうフェイントを蓮華は一瞬でかけやがった。

しかし、剣の切っ先だけで掛けているため、簡単に見切られてしま

もつと、目線や肩の動き、動きを予測させるステップインなど織り交ぜないと斬り込めない。

だから、思春は悠々と受け流すことが出来る。

蓮華もそれが分かっているから、舌打ちをしている。

お互いに距離を取って、間合いを計っていると・・・

「それが孫呉の血、孫呉の気性・・・私の目には時に危つく映ります。」

「・・・子ども扱いなどはさせておかぬ！」

怒りと焦りに身を震わせながら、蓮華が一步踏み込む。

おそらく思春からのプレッシャーも相当なものだから、前に出るだけたいしたものだが・・・

もう一つ欲を言えば、ただ前に出るのではなく、何かあると匂わせる出方が理想的だ。

思わせることによって、今度は自分がプレッシャーをかける側になれるからだ。

「ふう・・・」

思春も、分かっているため、あきれたため息が出ている。

「呆れたな！その余裕が私を苛立たせるのだ！」

怒りに突き動かされて、蓮華はさらに早く斬撃を繰り出していく。しかし、客観的に見たら、ただ単に振り回しているようにしか見えなくなった。

もっと冷静になって、一つ一つ相手の動作を注意深く見ていけば、わずかな隙を見つけることも出来るのに……

軽々と受けている思春を見て、少し疑問が生じた。

あれほど隙のある蓮華をなぜ打たないのか？

そんな疑問をよそに、蓮華の斬撃はさらに苛烈さを増していく。

その顔には明らかに苛立ちが現れていた。

「思春！いつまで余裕を見せている……打ってこい！」

「私の守りを崩せぬ苛立ちが、顔に出ていますよ。」

「うるさい……！」

「では、思春……参ります。」

攻撃すると宣言して……次の瞬間！

「くっ、く、ぐ……！おのれ、この」

とたんに蓮華が劣勢になる。あんだけ振り回していたら当たり前だ。

受けるのが精一杯の蓮華は、思春の猛攻にジリジリと後退していく。それにしても、あの大型の曲刀を短刀のように操る思春もすごい。流れるような斬撃は、蓮華に息をつかせる暇を与えない。

「死中の中に活を見出すのが孫呉の剣！食らえっ、はあああ……っ！」

「……むっ！」

何とか思春の斬撃の雨を打ち払い、前に踏み込む蓮華。

落ち着いて対処しようとする思春。

お互い、体が密着するほど至近距離に入っている。

（俺なら、コンパクトに脇腹を腰の回転と体重移動で振り抜く。それで終わりだ。）

それを思った瞬間……

「小さく、腰の回転で振り抜け！蓮華！」

「……！？」

声が出ていた。正直見ていられなくなった。

こちらに気づいた蓮華は、数瞬動作が止まる。

パキイン！

その大きな隙を思春が逃がすわけがない。

蓮華の剣は弾かれて・・・回りながら蓮華の背後、5メートルくらいのところに突き刺さる。

おいおい。真剣でやっていたのかよ。下手したら即死だぞ？

まあ、その方が緊張感が出て、鍛錬にも身が入るけど・・・

「・・・見ているくらいなら、声をかける。」

「悪いな。邪魔しちゃいけないと思ってよ。」

「そうか・・・ところで、さっきの助言は何だ？」

「正直見ていられなくなっただけ・・・ついつい・・・」

思春は、こちらをきつく睨んでくる。

蓮華のことについては、よけいな口出しは無用・・・って、訴えていると思う。

これ以上いたら、気まずいな・・・

「・・・邪魔したみたいだな。俺はもう行くから、鍛錬を続けてくれ。」

「待つて、セツナ。」

「ん?」

蓮華が引き留めてきた。あいつも変わらず思春はこちらをにらみつけてくるが・・・

「さっきの鍛錬を見てたんでしょ?」

「まあな。途中からだけどな」

「だったら、少しあなたが相手になってくれないかしら?いろいろな人と鍛錬するもの勉強だと思っし・・・」

蓮華と鍛錬か・・・そう言えば、今日はずっと部屋に籠もっていたから、体を動かしてないや。

息抜きにもちようど良いし・・・よし!

「・・・わかった。相手になるづ。」

「ホント?じゃあ・・・」

蓮華が正眼に構えてきた。

「行くわよ?」

構えから来るプレッシャーは、まだまだ弱いものの、雪蓮と同じ感じがしてくる。

俺もボクサースタイルの構えを取る。相手の力量を見るのもってこいの構えだ。

まずは、受けと避けだな……

「しかし、蓮華様……」

思春はなにやら心配しているようだ？手加減はするつもりだが……

「いいの、思春。私は強くなりたいの。だから、やらせてくれ！」

「……わかりました。ご武運を……」

そう言って、あっさり引き下がった。

「……さあ、やろうか？」

覇気を全開にする。辺りの空気が徐々に重くなっていく。

「……っ！？」

蓮華の構えが若干ゆるんだ。これくらいでゆるんでいたら、実戦ではすでに死んでいる。

今蓮華は、俺のことをかなり大きく見えていることだろう。

極限のプレッシャーの中でどう踏み込んでくるかで、蓮華の武芸の底がはつきりと分かるはずだ。

踏み込みが浅いのは論外。踏み込んで勢いがなかったら、センス

がないし、隙が出るような踏み込み方もだめだ。

隙なく、自分の間合いで戦える奴ほどセンスを光らせる。

凱影先生の話で出てきたことだ。

(さあ、見せてみる・・・おまえの底を！)

ジリジリと詰め寄っていく。

「・・・はああ！」

蓮華は、自分の間合いに踏み込んで右から袈裟懸けを仕掛けてきた。

しかし、俺は何事もないように、左に膝を抜き、軽く突きを放つ。

力が入ってない分、スピードは速い。

すがさず、蓮華も剣を返し剣の側面で拳を受ける。

キンッ！

金属と金属がぶつかり合う甲高い音を散らして、お互い距離を取った。

「ぶはっ・・・はあ・・・はあ・・・」

わずか一合打ち合っただけで、蓮華は息を荒くしている。

それほどまでに緊張感のある攻防だったのだ。

(迷わず、踏み込んできたな・・・思い切りの良さは雪蓮と一緒にだ)

そう。わずかな攻防で俺は確信した。

蓮華は強くなる。おそらく雪蓮を超えるほどに・・・

(なら、その潜在能力を引きずり出すのは、俺たちの仕事だ！)

様子見の構えを解き、いつもの構えを取る。

後ろ足に重心を置くボクサースタイルが守りのスタイルなら、重心を均等に足に散らす犀牙流徒手格闘鋼牙の構えは攻めのスタイルだ。

いかに迷わせるか？

鋼牙の構えにはその意味がある。半身になっている体と攻め手と死に手になれる拳があるだけで、どのような攻撃をしてくるかが分からなくなる

「どうした？打ってこいよ？」

手招きして挑発する。

すると、蓮華の顔がカッと赤くなった。

「言われなくても！」

鋭い突きが飛んできた。先ほどの袈裟懸けより剣筋が冴えている。

首を振り、避ける。引き際に合わせて一気に間合いを詰める。

「なっ!?!」

「甘い!」

引き際を狙われるとは思ってもいなかったようだ。

しかし、引き際ほど隙が出来るものはない。

拳を使うインファイターの俺にとって一気にクロスレンジに詰め寄ることが出来るほどの隙である。

詰め寄ったダッシュユカをそのまま、アッパーに乗せ、蓮華の顎目がけて打つ。

蓮華も必死に、避けようとするがタイミング的に微妙だ。

(・・・避けさすか。)

タイミングを軽くずらす。むろん当てるためではない。

その前にあのまま入れていたら、蓮華の頭は吹っ飛んでいたはずだ。

・・・想像するだけでも恐ろしい。

風切り音が遅れて、唸りを上げる。間一髪で蓮華はかわしていた。
・・・むろん、避けさせたのだが・・・

「でえやっ！」

こいつ！この至近距離を剣で斬ろうとしているのか！？

しかも、後ろに体重が流れている体勢からだ。俺は啞然とする。腕力だけではどうにもならないのに・・・

よく見てみると、片足を引き、上体を反らして避けている。ステッブして避けていたのではなかった。

しまった！誘いだ！

起こしてくる反動で、こちらを斬りかかってくる。

体重ものり、至近距離なので避けようがない。

腕をクロスさせ、ガードをする。

耳障りな音を発しながらも、受ける。

その体勢から、間合いを取るために・・・押す！

押されて、よろける蓮華は体勢を立て直そうと必死になっている。

その隙を見逃さず、技の間合いを取る。

「犀牙流徒手格闘！」

手を合わせ、蓮華の体に押さえつける

「狼後背衝撃！」

蓮華は、際どいタイミングで体を離し、剣でガードをした。

が、次の瞬間！

「ぐっ！」

ガードを貫いたかのように後ろに飛ばされる。

すぐに体勢を立て直すも、膝が笑っている。

「げほっ、げほっ・・・なんだ、さっきのは？」

「・・・わりい、説明できないんだ。」

「・・・なら、続けるぞ！」

まだ膝が笑っている蓮華が容赦なく襲いかかってくる。

さっきの技は、中国拳法でよく使われる発頸に似たものだ。背中与背中に近い内蔵にダメージを与える技である。

ただし、隙が大きく威力もあまり高くはないので、たまにしか使われないが、安祭睨先生を支持していたことで、頸を習得したセツナの技は、飛躍的に威力が上昇している

鋭く跳躍して、上から振りかぶってくる。

しかし、足に力が入っていないのか、跳躍に躍動感がない。

最短距離で詰め寄り、流すように剣を払いのける。

手加減を入れたの、突き。

「がつ！」

蓮華は呻き声を上げながら後退。手を抜いているがダメージは大きい。

すがさず、連打を入れる。

「くっ、はっ、やぁ！」

素早いガードで蓮華も応戦しようとしているが・・・

連打のスピードを上げる。一気に顔が曇り防戦一方なったようだ。

（そろそろ、ケリをつけるか・・・）

蓮華もだいぶ息が上がってきている。いったん休憩を取らせないと・・・

左の突きを顔に向ける。

だが、今までの突きとはスピードも迫力も違う。

「っー！」

蓮華も受けようと試みるが・・・

スウン・・・

気配だけが蓮華の顔を撫でた。

「何!?!」

驚愕の顔をこちらに向けてくるが、時すでに遅し。

「犀牙流徒手格闘! 失爽双連撃!」

意識が入っていないかった足に向けての技。

一撃目と二撃目は、トントンと感触を確かめるように触り、三撃目に・・・地を払うように押し込む。

「キヤア!?!」

「蓮華様!」

一発でバランスを崩し、転げるかと思われたが・・・

トスツ。

地につく寸前、押し込んだ力をそのまま利用して回り、蓮華の体を片足だけで支える。

「勝負ありだな。ほら・・・」

手を差し伸べる。手を抜いていたとはいえ、俺に誘いをかけてくる

とはな・・・

なかなかいいセンスと勘を持っていやがる・・・

「ありがとう・・・」

手を取って、立ち上がらせる。

息も荒く、相当疲れているようだな。

「蓮華、少し休憩しろ。思春、ちょっと付き合ってくれないか？」

「誰が貴様のようなクズと・・・」

言葉がきついよ。それにクズって・・・

「ちょっと待て！私はまだやれるぞ！」

やれるってな・・・説明してやるか。

「蓮華・・・俺はお前を気遣って休憩しろっていつてる訳じゃない。

」

「何っ？ならば同情か！？」

同情って・・・たかが鍛錬なのに・・・

「違っつて！・・・手首を見てみる。」

蓮華は、怪訝そうに手首を見てみると・・・

「あっ……」

「俺の拳は、一発一発が重い。受けているだけで手首に疲労がたまってくるから、手首が腫れてくる。それに足も腫れているし、精神的な疲労もある。いったん間をおいた方がいいぞ。」

「しかし、お前は戦場で疲れているものに休めと言うのか？常在戦場の心持ちでなければ、鍛錬にならないではないか！」

「なら、お前は疲れているものに死ぬまで戦えとでも言うのか！」

面を食らって、驚きを顔に表す蓮華。

しかし、そんなことを気にせず、言葉を重ねていく。

「疲れているところをさらに動けと言うのは、死ぬと言っているようなものだ。疲れて体は徐々に動かなくなり、隙も大きくなってくる。つまり、死が待っているという事だ。休ませるときは休ませ、戦うときは死なないように戦わせる。それを判断するのは、俺たち武将だ。」

「そうではっ、は、話をすり替えるな！」

「すり替えてはいないように聞こえますか？」

「思春まで！？わたしはまだやれるとっ」

かぶせるように、思春が口を開く。

「実戦のための鍛錬ならば、心身共に充実した状態で、身の入った鍛錬をした方がためになる・・・という私も同意します。」

おっ、意外なところから助け船が。珍しい・・・

「本来ならば、このバカとやらせる前に私が強く休憩をお勧めすべきでした。申し訳ありません。」

「総出で私を甘やかそうとするな！」

「無理をして、怪我でもしたら、元の子もありませんよ。」

「そうだ。行き過ぎた鍛錬は、怪我の元だぞ。」

「ええい！休めばいいのだろう、休めば！」

言い負かされた蓮華は、やっとベンチに腰を落ち着ける。

しかし、思春が俺に助け船を出してくれるとは思わなかった。今は蓮華より思春に視線を向けた。

「なんだ？」

「あ、わりいな。・・・まさか思春が俺の肩を持つってくれるなんて・・・」

「人物の好き嫌いで、持論まで変えはしない。」

嫌いなものは嫌いって遠回しにいつているよな・・・つまり、俺のことは嫌いだと？

素直に喜ばしてはくれない……

「それより、思春……いまからちよっとっ」

「断る。」

「いや、まだ何もっ」

「断る。」

……とりつく島もないのかよ！正直きつすぎるぜ……

「思春！なぜお前はセツナに限ってそこまで刺々しく当たるのだ！」

「やましいものが見え隠れ……いえ」

今ので、大体言いたいことがわかった。……俺って、そんなにやましいものがあるのか？

自分の胸に聞いてみる。……正直全く見あたらなかった。

「セツナよ。お前はまだ鍛錬がしたいのдар？」

「まあな。さっきので大体体がほぐれたし……」

「なら、思春。お前にセツナの鍛錬相手を任せる。それぐらいなら出来るであらうっ？」

蓮華からの命令か……これなら、相手をしてくれるだろう。

しかし、次の言葉で俺の顔に戦慄が走った。

「・・・蓮華様の命令であれば、聞きますが・・・事故が起こって
も知りませんか？」

事故＝殺す

今の思春の言動から、そんな凶式が簡単に浮かび上がった。

鍛錬にかこつけて、マジで殺しにかかってくることは間違いない。

・・・気が抜けない鍛錬になりそうだ。

「お前の腕ならば、事故など起こらないであろう。相手になってや
つてくれ。」

「分かりました。・・・おい、そのクズ。」

よく、そうポンポンと人を貶せるものだな。

そんなことを、おくびに出さず、気持ちを入れていく。

「ちょっと、待ってくれ。」

ふと、蓮華が手持ち無様だったのを見て、懐から水の入った竹筒を
取り出す。

「蓮華、これでも飲んでおけ。疲れが和らぐ。」

「・・・ありがとう。」

凜々しい笑顔で、筒を受け取り一気に煽る。

その笑顔に、今から行われる鍛錬に立ち向かう勇気ももらった。

「それとな・・・人の鍛錬を見るのも、一つの鍛錬だ。だから、今からしっかりと見とけよ。」

「・・・ぶはっ、わかったわ。」

剣を抜き、足裏に重心を散らして霞み下段に構える。

「さて・・・やるか？」

「・・・本気で行くぞ！」

思春も曲刀を構える。

二人は距離を保つての睨み合いが始まった・・・

私は、もう一度筒に口をつけ、二人の行動を注意深く見てみた。

セツナも思春も、にらみ合ったまま全く動かない。

どちらも緊迫した顔で、いつ動くかを探っている。

さらにお互い気迫で、プレッシャーを掛けあっている。

(あそこまでの気迫を思春相手に出すなんて・・・すごい)

徐々にセツナから、じりじりと間合いを詰めていく。

「・・・はあっ！」

思春から、切りかかる。右斜め上から小さく、鋭く曲刀を振る。

私からしたら、あの攻撃は正解だと思う。低く構えているセツナは、上からの攻撃に弱いと思うからだ。

しかし、セツナは、その斬撃を左に滑るように避けた。

(あれほど速い思春の斬撃を見えているというのか!?)

私では受けるのが精一杯だ。

セツナはそのまま詰め寄る。地を這うよう水平切りを足に仕掛ける。

しかし、飛んで避けながら、思春は上からまた攻撃をかける。

さっきの避け方は無理なのか、しかし、背を向けながら、攻撃を受けた。

体勢を立て直し、距離を取ろうとするが、思春はさせない。

一気に攻め込まれ、防戦一方のセツナ。しかし、その顔は冷や汗一つかいていない

（あんなに攻め込まれているのに、どうして冷静でいられるの！？）
わたしなら、ただ受けるだけで精一杯になる。冷静でいられるわけがないのだ。

しかし、セツナは冷静でいる。その視線を見てみると・・・
ほとんど動いていなかった。視線をわずかに動かして、攻撃を受けている。

（なぜ、剣を見ない！？そうでなければ受けようにも受けられないではないか！）

実際にセツナは、思春の肩や、わずかな腕の動き、足捌きを見て、相手の行動を予測している。

武器本体に視線を向けると相手に対する注意が散漫となるため、隙が出来やすくなる。

熟練者達はそのわずかな隙も嫌い、相手の動作や、気迫の濃淡で次の行動を予測して、その間を縫うように攻撃する。

セツナは、まだ気迫をしつかりと読むことが出来ないのです、相手のわずかな動作と一年間で磨いた観の目を駆使して、予測している。
焦れつたくなったのか、セツナは自分の真正面で攻撃を受けた。今までは結構ぎりぎりのところで受けていたのに・・・

しかし、次の瞬間、思春がたたらを踏んで後退をした。いや、させられたと言った方が正しいか。

何があったのか、全く分からなかった。思春の顔からもそれがよく分かった。

あったとすれば、ほんのわずかな時間、鏝迫り合いがあった。そのときだと思う。

「犀牙流・・・居合い！」

セツナが何かを叫んでいる。それに合わせて剣を納刀した。そしていつでも抜けるような構えになる。

（なぜ剣を納める？あれで終わりなのか？）

次の瞬間、その予想は簡単に裏切られる。

「鬼竜！」

瞬く間に、思春の横を通り抜けた。

シャキン・・・

剣を納刀する音だけが聞こえてきた。さっきの間に攻撃を繰り返したのか？

「ぐうつ！？」

「・・・ちつ、受けられたか。」

思春はなぜか攻撃を受けた後のようだ。しかも受けるのが難しい攻

撃だったようだ。

セツナは、思春を肉迫し、嵐のように攻め始めた。

その攻めは、とにかく早く、まるで舞踏をやっているかのようだ。しかし、あくまでも武術の域であり一つ一つの攻撃に殺気が込められている。

思春は打って変わって、防戦一方のようだ。あの思春があれほど押されるとは・・・

反撃を試みているようだが、後の手を取られて、全く手が出せない状況に陥ってしまっている。

「はぁぁっ!」

またも鏢迫り合いに持ち込んだ。そして次の瞬間・・・

「ぐううっ!?!」

思春が大きく体勢を崩した。何が起こっているのか全く分からない。

体勢を崩したところに、強烈な一撃が思春におそった。

「くっ!?!」

かろうじて受けるものの、体勢を崩しているところに、さらに力を加えられて、思春は地面に倒れた。

起きあがるうとするも・・・

「はい。俺の勝ち・・・っと。」

顔に剣を突きつけられて、勝負は決した。

セツナは、気を抜くかのように息を吐き、表情を弛緩させる。

「お疲れ様。どうだった？」

筒を渡し、先ほどの鍛錬の感想と聞く。あれほどの攻防は見たことがないので気になった。

「さすがは、呉の武将だな。はっきり言って強い。正直何度か殺されかけたしな・・・」

セツナの額から、汗に混じってたらりと冷や汗が流れた。

・・・思春、本当に事故ですまそうとしたのだな・・・。

「すまないな。セツナ。」

「いや、いいさ。緊張感があっていい鍛錬だったよ。それよりも・・・」

筒を傾け、水を飲むセツナ。何となく目を見てみると・・・

凍えるほどの無色の目をしていて。ここまで、無色の目をしている人物は始めて見る。

「セツナ・・・目が・・・」

「ん？・・・ああ、生死のやり取りに近い鍛錬だったからな。じきに収まるさ。」

筒から、口を離し、私の隣に腰掛けてきた。確かにだんだん瞳に青みが増しているようだ。

「それよりも、さっきの俺たちを見て、どう思った？」

「・・・すごいとしか言いようがないわ。私なら最初の攻防で終わっているもの・・・でもセツナは違った。あの状況から一気にひっくり返すなんて・・・何か特殊な事でもしたの？」

「ああ、あの鏢迫り合いか・・・少し幼いときに覚えたことをやっただけさ。あれはな・・・」

そこからセツナの説明が始まった。

なんでも、鏢迫り合いの時に方向の異なる複数の力を同時に作用させることによつて、相手がどちらに押されたのか全く分からなくなり、押し返すべき方向も分からず、力の込めようがなくなってしまう。その結果、相手は簡単に体勢を崩してしまうと言つただ。

「これを実践しようと思つたら、新しい武術を一からしなくちゃいけないから、教えてもらおうと思つなよ？」

「・・・そつなの？」

「ああ、長い年月をかけて、培つていくものだから小手先だけでや

ると、痛い目に遭うぞ。」

「・・・わかった。時間がかかるなら、いい・・・」

少し残念だった。私が少しでも強くなれると思ったのだが・・・

それに、少しだけセツナと一緒に鍛錬が出来ると思ってた期待がマッた。

「その代わり、すぐに使える戦闘術をいくつか教えるから、それで勘弁してくれないか？」

「本当？では、早速教えてくれ！」

はっきり言って嬉しかった。セツナの優しさが・・・

横から思春が目で「あまり関わるな！」という目をしているがそんなのは無視だ。

私はすぐに立ち上がって、剣を抜く。

セツナも少し遅れて立ち、私の前に来る。

さっきは漠然としか見ていなかったの、改めて、セツナをしっかりと観察する。

精悍な面構え、屈強そうに見える体。

背は少し高いくらいだが、これより大きい男は数多く見てきた。

しかし、セツナほど強いと感じる男はいなかった。

「まず、さっきの思春との鍛錬を見て思ったことだが・・・」

「うん。」

「全体的に振り回しすぎ。」

「うっ。」

「周りが見えていない。」

「むう・・・」

「守りが堅いと、焦れったくなくて、攻撃が荒くなる。」

「それはっ!」

「まだまだあるが、大事なのはこれくらいだな。」

「・・・」

まだまだあるって・・・私にはそんなに欠点があるのか？

人から見てもらっただけでここまで違うとは・・・

「まず振り回すところだが・・・これは論外だ。」

「しかし、それではっ」

「強い奴ほど、鋭く、小さく、隙をついて斬り込んでくる。逆に強く攻撃しようとして、大きく振り回すとどうなる?」

「・・・相手に攻撃を読まれるし、隙が大きくなる・・・ってこと?」

「そうだ。だから、攻撃は常に冷静に、熱くならず、鋭く、小さく相手のわずかな隙をつく。これが基本だ。」

「・・・」

戦いの最中、常に熱くならず冷静に居るって事は無理じゃないのか。

それに私は孫家の王として、勇敢なところを見せなければいけないのだ。

これで熱くならずにはられない。

「言うておくが雪蓮のような真似はするなよ?」

「どうしてお姉様の真似はだめなのだ? 戦闘時などいい模範ではないか!」

あれほど強く、勇敢に戦えるかは未だに私には分からない。だから、お姉様のような戦いぶりを模範としているのだが・・・

「雪蓮の戦い方は、天性的な勘と超人的な武術の才能によって成り立っているんだ。あれは真似しようと思っても真似が出来ない。蓮華は自分の武術を磨いていった方が

いいで。」

「でもっ！」

「雪蓮は雪蓮、蓮華は蓮華だ。他人になろうとしても無理だ。だから……」

いいながら、セツナは剣を抜く。その抜き方がなんと美しいことか・

「お前は、お前の道を見つける。俺たちがその手助けをしてやる。」

正眼に構えてきた。その構えは何年も前から構えているかのように微動だにしない。

私も構え、セツナを見据える。ものすごい圧力を感じるが、ここで怖じけていては先には進めない。

「……じゃあ、しっかりと吸収しろっ！」

セツナが踏み込み、斬り込んできた。それもすさまじい速さで！

ここでひるんだら、瞬間終わる。私はしっかりと受けに行った……

「はい……今日はここまで。打たれたところはしっかりと冷やしておけよ。痕になるからな」

突きつけた剣を納め、手甲を外す。ここまで打ち込んだのは久しぶりだ。

一方蓮華は、仰向けになって天を仰いでいる。それに肩で息をしているし、所々ミミズ腫れになっている。

結構峰で打ち込んだからな・・・残らないといいんだが・・・

後ろの方から、人を殺せそうな視線で思春が睨んでくる。その様子、まさに死神のごとく。

「はあ・・・はあ・・・はっ・・・一撃も入れれなかった・・・」

「確かにそうだが、だいぶよくなったぞ。これからは暇があったら、見るようにするからな。」

「はっ・・・はあ・・・すまない」

未だに息が整えられない蓮華。すぐには立ち上がれなさそうだな。

「じゃあ、俺は仕事が残っているから、思春、後は頼んだ。」

「貴様に言われなくても・・・」

思春が蓮華を介抱しに行く。俺とすれ違うときに・・・

「・・・いつか、このツケを払わせるからな！」

つと、宣言していった。・・・恐ろしい奴

俺も、上着を持って、自分の部屋に戻る。廊下を曲がったときに意外な人物と出会った。

「雪蓮かぁ……」

「……」

雪蓮に会えたことに少しうれしさを感じながら、近寄っていくが、いつもと雰囲気が違う。

「……どうした？具合でも悪いのか？」

「……悪いけど、政務が残っているの。そこ、どいてくれる？」

「あ、ああ、すまない。」

ドスのきいた声で、言ってきた。こんなことは初めてだ。

憤りを感じながらも素直に横にどく。

雪蓮は声もかけないで横を通り過ぎ、自分の部屋に戻っていった。

「……一体、何なんだ？」

いつもと違う雪蓮を怪訝に思いながら、部屋に戻る。

戻って、書簡の山に愕然としながらも、机に向かう。

……自分の仕事と平行して、この量はないよ。冥琳……

一人愚痴をもらしながら、書簡の山をやっつけていった・・・

部屋に戻り、私は、目の前にあったいすを思いっきり蹴った。

それだけでは足らず、剣を抜き、滅多斬りにする。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

バラバラになった椅子の破片を蹴り飛ばしながら、寝台に腰掛け、肩を抱く。

自分の中に渦巻くどす黒い感情を押し殺す。そうでもしないと今にもセツナのところに行きそうだ。

今はまだ我慢の時。

最終的に選ぶのはセツナだもん。

でも、もし蓮華を選んだら？

もし、他の武将を選んだら？

私は耐えられるのだろうか？

いや、絶対に無理だ。

その場で選ばれた子を斬り殺してでも、セツナを手に入れる。

しかし、そんなことをしてまで、セツナは私を受け入れてくれるのだろうか。

絶対に受け入れてくれない。

「っ！」

どす黒い感情がまた私の体を蝕んでくる。爪が食い込むほど肩を抱き、必死に耐える。

「ずいぶんと……悩んでいるようだな？雪蓮。」

「冥琳……」

いつの間にか、冥琳が扉の棧に寄りかかっていた。

「その椅子、高名な職人に作らせたもので、結構値が張ったんだがな？」

「ごめんなさい……」

悪いことをしたようね。後で自腹斬らないと……

「まったく……そこまで荒れるほど何があったのだ？」

「……」

「おおかた、セツナのことだろう？蓮華様や思春達は分かってないと思うが、祭殿や私には分かるぞ。」

どうやらすべてお見通しのようだ。さすがは、幼いときから一緒にいることはあるわね。

「お前はセツナのが好きだな・・・それも自分のものにしたくなるくらいにな・・・」

「ええ・・・接していくうちに、だんだん好きになっていた。いや、始めてあったときから好きだったかもしれない。」

今日の蓮華達を見て、羨ましい気持ちと同時に嫉妬もわき起こった。

私は、セツナに惹かれているのだ。それを思い知らされたときでもあった。

「そうか・・・では、雪蓮はどうするつもりだ？」

「最終的にはセツナに選ばせるわ。誰を娶るかは・・・」

「そのときに、お前以外の武将を選んだ場合、雪蓮はどうするつもりなの？」

「・・・素直に身を引くわ。」

上辺だけはこうしておく。そうでないで孫呉の王として成り立っていない。

男に気を取られるようでは、王としてやってはいけない

「・・・そうか。それでいいなら、いいが・・・」

冥琳は、去り際に重く、深い言葉を残していった。

「自分の気持ちに正直にならないと、後々取り返しのつかない事になるぞ。」

「・・・」

扉が閉まる音だけが重々しく響く。

怒り疲れた私は、そのまま寝台に横になる。

このまま寝ようと、目を閉じるが瞼の裏に浮かんでくるのはセツナのことばかり。

最初始めて話したとき、戦闘時の時や町であったときの顔や、そのときに本当に見せた笑顔。

それらのことしか、浮かんでこなかった。他のことは一切考えられない。

「・・・自分の気持ちに正直にか・・・出来たらどんなに楽か・・・」

ひとりごちながら、私は睡魔の闇に落ちていくのであった。

「ふう・・・大体こんな感じだな。」

翌る日、今日も俺は部隊構成について細かいところを考えていた。政務と、鍛錬、それにたまに蓮華の鍛錬を見ることを平行しながらやってきたことだが、八割方固まってきた。

猛将ほど、デスクワークはできない。

ある高名な將軍の言葉を、ここ数日で実感した。

冥琳に始めて報告書を見せた後から一気に仕事が増えた。

おそらく、報告書の出来がよかったのでこれぐらいならと、仕事を増やしたのだろう。

・・・はっきり言って迷惑であったが、やりがいもあった。

残りの書簡もあとわずか、夕食までにはできあがるだろう。

「・・・一息入れて、体を動かすか？」

そう思って、立ち上がろうとしたときに・・・

「セツナー!!」

祭さんが息を切って、俺の部屋に飛び込んできた。

あまりに急いできたのか、肩で息をしている。

「どっしました!?!」

「すまんが、少々手を貸せ！」

よほどの緊急事態だろう。普段なら、祭さんほどの武将なら俺の手を借りずとも解決できることが普通だからだ。

「何があつたんです！？緊急事態ですか？」

「事は道中で話す、いいから来てくれ。」

と、ものすごい力で祭さんが俺の腕を掴み引つ張っていく。

「ちょっと、待ってください！準備ぐらい・・・」

「その時間が惜しい！問答無用！」

と、引つ張る力をさらに込めてきた。

部屋を出る間際、今日はたまたま壁に掛けてあつた手甲を手に取り
ていく。それだけが精一杯だった。

連れてこられたのは街の中央広場だった。

いつも人通りが多いのだが、今日は祭りの日のような人だかりが出
来ていた

さすがにここからでは、何が起こっているか分からないし、音響視
力を使つても聞こえてくるのは人の喧噪ばかりだ。

「祭さん、一体何が・・・」

「しい！・・・こつちじゃ」

祭さんは人差し指を唇に当て静かにしろって合図を送りつつ、そろそろと人混みに紛れ込んでいった。

俺もその後についていく。ついて行きながら、音響視力で周りの状況を調べる。

喧噪は、息の詰まるような感じがするし、所々で怒気が籠もっている。

・・・喧嘩か？なら祭さんがでなくても・・・

「ここなら大丈夫じゃろう。覗いてみい」

「了解。」

「ただし、見つからんようにな。」

「それは、どういっつ」

俺は祭さんに倣って、建物の陰から、人混みの原因をのぞき見た。

・・・先ほど言っていた意味が分かった。

「・・・人質を放しなさい。」

「離せと言われて、はいそうですかって聞けるかよ！」

「……しえ、雪蓮ちゃん……」

「うう……」

黄巾の残党らしき数人の男達と雪蓮一人が真正面から対峙していた。

しかも残党達は、町人らしき老夫婦を人質に取っている。

「あれは……雪蓮の知り合いのおじいさん達じゃないか!？」

この前町で雪蓮と親しそうに話していたところを思い浮かべる。

……あの後ちゃんと、絵師は手配したぞ。

「そうなのか？そりゃ余計にまずいのお……」

「一体、どうしてこんなところになっているんですか？」

「それが儂もよく知らんのじゃが、話を聞く限りどうも残党どもが街中に潜んでいたところを策殿が見つけたらしくての。当然引つ捕らえようとしたのだが、残党どもは、捕まるくらいならと自棄になつて……」

今回は雪蓮の勘の良さが悪い方に作用したか……まさに野生児だな……

「人質を取ったという訳か……しかし、この状況下で人質を取つても……」

何のメリットもない。退路もなく、策もない以上、人質を取っても罪が重くなるだけなのだが……

「お前達はこの状況で、人質を取って、どうするつもりだ？」

「どっ、どっつて？」

やはり何も考えていなかったようだ。逆に状況を悪くすることも考えていなかったようだ。

「まさか、人殺しがしたい訳じゃないでしょう。」

「うっ、そっ、そんな口聞いていいのかよ？俺たちには人質がいるんだっ。いつでもこうして剣を動かせば……」

残党どもは剣をお爺さんの首筋に当てる。

「ひいっ！」

お爺さんの顔がみるみるうちに青ざめていく。

「でも、殺しちゃったら、あなた達の大事な人質がいなくなっちゃうわよ？意味くない？」

「あっ……」

考えもしなかったと顔に表し驚く残党ども……

「……やっぱり分かっていたいなかったのね。阿呆の相手は疲れるわ。」

「
なっ!?!」

同感だ。アホの相手は疲れしか残らない。

しかし、雪蓮はここからどうしていくつもりなんだ？妙な動きをすればすぐさまお爺さん達の首が飛ぶだろう。

「ねえ、二人を離せば、命だけは助けてあげる。どう?」

なるほど・・・交換条件を出して、お爺さん達を無事に救い出そうという訳か。

いささか、甘いところがあるが悪くない選択だ。

「・・・」

残党達もその言葉に結構揺れているようだ。

しかし、今ひとつ解せないところがある。

雪蓮から歩み寄っているのに・・・異様な殺気が放たれている。

・・・分からない。

「このまま何事もなく終わればいいが・・・」

「何事もなく、か・・・。難しいのう」

「それはなぜ？」

「……まあよい、わしらはわしらで出来ることをやるとしよう。」

祭さんは俺の質問に答えないまま、城から連れてきた兵達に指示を開始する。

「よいか。絶対に残党にバレぬよう、町人達に紛れ込むのじゃぞ」

「はっ。」

指示を聞きながら、俺は黙考した。

なぜ何事もなく終わるのが難しいのか

普通なら、人質を放したら即加害者を確保。離さなかった場合でも遠距離からの狙撃で加害者を殺せばいいこと。

しかし、ライティックスの場合可能な限り人殺しは避ける傾向があるため、殺すのは最後の手段とされている。

無血解決を目指し、現場では神経をすり減らす努力が絶え間なく行われているのだ。

しかし、ここは古代中国。

力が支配するという風潮が色濃く残っている時代なのだ。

さらに長距離から狙撃できるものは弓だけであり、また狙撃ポイントも少ないと来ている。

となると、正面からの加害者の説得しか選択できない。

「……ふう、うまく事が運べばよいのじゃが……」

「それはつまり、交渉がうまくいくってことじゃなくて……」

「……そうじゃな。話し合いで解決するのは、難しいだろうな。」

「……それはわかるな。奴らはもう引けないところまで来ている。」

人質を取ってまでの暴行をしているのだ。

人質を解放し、無事に逃げるなんて保証など、どこにもない。

「あやつらはすでに罪を犯しておるの……そう言う意味でも、何事もなく終わらせるのは、少々困難じゃ……。しかし、心配するな。さつきも言つたが策殿なら、必ず何とかして下さるじやろう。しかし……それにはキツカケというものが要るからのお……」

「……きっかけねえ……」

確かに、この拮抗している状況を破るには何かしらのキツカケは必要だ。

相手に一瞬の間でも出来れば、雪蓮なら何とかしてくれるだろう。

腰に保持していた手甲を装着し、路地裏から出ようとする。

「何をする気じゃ？」

「まあ、見てなって。そのキツカケを作ってやるよ。」

と、残党達の前に一步踏み出した。

「おい！！」

覇気を含ませながら残党達に声をかける

ちなみに、手甲は袖で隠し、手の方は腕を組んで完璧に隠している。なぜ隠しているかというと、最近街で俺についてのある噂を聞いているからだ。

相手はその噂を知っている可能性は高い。だから、手甲は隠しているのだ

「・・・なんだあ、おまえは！？」

少しもひるみがなかったので、しっかりと返事を返された。

多少武術に心得がある奴は、これで怯むんだが・・・こいつらほど素人だな。

「！！」

予想外のことだったのか、雪蓮の顔から驚きの色が現れた。

その顔にウインクで返す。落ち着かせる意味と別の意図を送ったつ

もりだが、分かってくれたのだろうか。

「何だっって言われると、答えづらいんだが……その孫伯符の關係者だ。」

「この女のお……？」

「ああ、彼女の側近だ。」

「……」

怪訝な顔をしながらも、雪蓮は俺が考えている意図を読み取ってくれたようだ。

「それでだな……俺の方からも提案なんだが、ここでお互い睨み合っているも仕方がないだろ……俺たちだって、お前達が人質を解放するまでは、ここを動くわけにはいかないんだ。」

「じゃ、じゃあ、どうしろって言うんだよ？」

「だから、さつきから言っているじゃないか？人質を解放すれば、命は保証する。どこへなりと逃げればいいさ。」

「くっ……誰がそんな話、信用できるかってんだっ……！」

「どうしてだ？側近の俺が言っているんだぜ？孫策様も、ここで無用な血を流すことは望んではいないはずだ。なあ？」

「……ああ、当然だ。」

慄然とした態度で返事を返してくれる雪蓮。

どうやら意図をちゃんと理解してくれたようだ。

「う……」

雪蓮と対等に話す俺の言葉には、結構な説得力があるのだろうか。

よし……残党達の心はかなり揺れているぞ。ここでもう一押しだな。

腕組みを解き、手を見せつけるように垂らす。

「おい、あれを見てみるよ！」

「俺、聞いたことあるぞ！銀の手を持つ奴って……」

「江東の白銀の修羅だよ！？何でこんなところに……」

残党達にさらなる動揺が走った。それと同時に徐々にあきらめに近い空気を醸し出し始めた。

そう。噂とは、江東には銀の手を持つ修羅がいるという噂が街の中でされていたのだ。

当然残党達の耳に入っている可能性も必然的に高くなる。

そこをつければ……と思っただけで試してみたのだが、予想以上の効果が上がった。

よし。このまま戦意を喪失させて、投降させれば……

「セツナ、礼を言うぞ！」

次の言葉を紡ごうとした矢先、雪蓮は前に出て……

「はあっ！」

ドシユツ！

雪蓮の振るった切っ先が人質をとらえていた残党の首をはねた。

「うわあああああ！！！」

「っ！！！」

残党達は恐怖で悲鳴を上げた。それを機に周りの野次馬からも声上がる。

血しぶきが飛び、鈍い音を立てて、血だまりの中に人の頭だった「モノ」が転がり落ちた。

「よくやった、セツナ。うまく隙を作ってくれた。」

「え……隙って……おれはそんなつもりじゃ」

祭さんが俺のところまでに来て、褒めてくれた。しかし、なぜ褒められるのが全く分からなかった。

キツカケといっても、それは無血で解決しようという考えから、投

降を促すようにするモノだった。

あと少しで、それが出来そうだったのに……どうして、こんな事に……

「早く、人質を！」

「はっ！」

惚けている俺とは関係なしに事は急速に進んでいく。

祭さんが配置していた警備兵達が飛び出し、人質となっていた老夫婦の元に駆けつける。

爺さんも婆さんも、目の前の光景に青ざめガタガタと震えていた。

「さ、こちらへ」

「お、おう……ありがとよ」

「ちっ……逃がすかよ！」

「くっ……！」

周りを取り囲んでいた残党の一人が武器を構え、爺さんと婆さんに背後から襲いかかる。

警備兵が人質を背に庇い応戦しようとするが、これでは間に合わない。

「くそつたれが！」

仕方がない。ここは正当防衛だ。

非戦闘時でも常備している懐の投げナイフを取り出すと同時に投げようとすると・・・

「はあぁっ!」

ザシュッ!

それよりも速く、雪蓮の振り下ろしで残党は胸から引き裂かれた。

その後雪蓮は、爺さん達のところに駆寄り・・・

「大丈夫？おじいちゃん？」

と、いつもと同じように声をかけたのだ。

血みどろの剣を手に、雪蓮は爺さんにとっこりと微笑みかけていた。

この場にはとても似合わないいつもの口調といつもの笑顔の雪蓮。

はっきり言って怖気が走った。

人を殺しているのに、なぜそんなにはつきりと切り替えが出来る？

訳が分からなかった。

「……………(コクコクッ)」

爺さんはぼかんと、言葉を発することが出来ない様子で、ただ首を縦に振っていた。

残された黄巾の男達もその容赦ない凄惨な光景にわずかしが残っていないかった戦意も刈り取られたようだ。

背を向け逃げ出す者、腰を抜かしその場に崩れ落ちる者など、様々だ。

「さて・・・と」

爺さん達の安否を確認した雪蓮は、いつもの口調で残党達に振り返る。

その目は、無色に染まっていた。あれは人殺しをする目だ。

爺さん達に話しかけていた時の雰囲気は消え、今は悪党達を成敗するという気迫しか感じられなかった。

「ひ、ひいっ！お、俺たちが悪かった！もうしねえ！もうしねえから、勘弁してくれよ」

「あら、そうなの？残念。」

「ああ・・・っ、ほ、ほら・・・な？」

男達は、地面に武器を置き無抵抗の意志を見せる。

これで雪蓮も剣を納めると思ったが、その様子もなく逆に剣を握っ

ている手の力はさらに増しているようだ。

「ふうん……」

一歩踏み出し、そして……

ザシュツ！

袈裟懸け気味に無抵抗の黄巾の男の首をはねた。

「なっ!?!」

「ひ……!!?!?!?!」

「もう、言うことはないかしら?」

返り血を浴び、残党達に話しかける姿は、あまりにも凄惨だが、同時に美しいとも見えた。

「ふっ、二人を離せば、命だけは助けてやるって……そう言ったじゃねえか!」

「……離せば、ねえ。結局あんた達、最後まで解放してくれなかったと思うけど?」

「うぐっ……だ、だけど、もうおれたちゃこうして降参しているんだし……あんた、無抵抗の人間を手に掛けるのか!?!」

「あんたがそれを言うの?」

凍えた声で、剣を突きつけながら言い放つ。

そこにはいつもの雪蓮はいない。ただ、民を救い、悪しき者を罰せんとする王としての雪蓮がいたのだ。

その姿を見て、俺は正しいと思いながら、どこか納得がいかないところもあった。

悪しき者を罰するだけなら、捕らえて拷問でも何でもして罪を償わせるだけでいいはずだ。

しかし、なぜ殺す必要がある？なぜ、殺さなければならぬのだ。

人間がこんなに簡単に死んでもいいのか？

人の命はすべて等価値であるはずなのに・・・

「・・・ひ、卑怯だぞ！！、だ、だってさっき側近とやらが・・・」

ズシュッ！

さらに言い訳しようとする黄巾の男の首を飛ばす。

「はっ・・・つまらん。もういい」

心底つまらない様子で、残党達に詰め寄る。

「お前達は、一度、人としての仮面を脱ぎ捨て、獣に落ちた。」

その言葉に胸がズキリと痛む。

人が獣になれるはずがない。しかし・・・今の時代、そう言った方が正しいのだろう・・・

「二度と、人に戻れると思うな」

剣を振りかぶり、黄巾の男の一人を頭から両断する。

「・・・」

その処刑人のような所行を、雪蓮はさも当たり前のように行っている。

「あわっ・・・あわわわあー!!」

ドシュツ!

一人が逃げ出そうとするが、それよりも早く雪蓮が斬る。

「ひいいい!!」

ドスツ!

腰を抜かした者には頭に一突き。

「ゆ、ゆるしてくれえ・・・!!」

ザシュツ!

許しを請う者にも問答無用。容赦なく斬りつける。

その光景から目を離せず、呆然と見ていた俺は、誰かに肩を捕まれ無理矢理その輪から、外された。

「セツナ」

「祭さん・・・」

目の前の光景に言葉を失い、呆けていた。

ふわふわとどこか、宙に浮いているような感覚。

・・・人を始めて殺したときと同じ感覚。

こういう光景は幾度となく見てきた。そして、幾度もなくそういう目に遭ってきた。

しかし、どこかで、「自分の知人はこんな事をしない」と夕力をくくっていた

しかし、今、それがあっけもなく崩されたのだ。

祭さんに肩を掴まれ、輪から外されて、やっと周りの世界が現実感を取り戻してくれた。

「驚いたか？」

「・・・いや、それほど驚いてはいない。」

事実、それほどは驚いてはいなかった。

ただし、雪蓮に対するわがまりという棘を心に刺されたこと以外は・

ここまで俺と接してきた雪蓮は、少しわがままで自由奔放なところがあるけれど、元来人を包み込む優しさを持つ女性だ。

その事実が、今の出来事で否定されるとか、消えてなくなるとかは全く思わなかった。

けど・・・

「ここまでする必要があったのか！」

自分でもよく分からない感情が大声となって吐き出される。

人がこんなにもあっけなく死んでいく。それは仕方がない。

だが、それをただ呆然と見ていた俺に腹が立った。

「人質を助けるためだ。」

祭さんは事実だけを突きつけてくる。

普段は、現実主義の俺だったが、今回ばかりは受け入れたくなかった。

「最後は無抵抗だった・・・なのに！」

「策殿だって、斬りたくて人を斬るわけではない・・・ただ、罪は

誰かが罰さねば、このようなことがいつまでも続いてしまうことになる。・・・悪事を働けばこうなる。

そう分らせることが大事じゃろ？」

「ああ・・・」

たしかに、こうすればこうなるという威力行使を行えば、それに対して強力な牽制になる。

だが、それでもこういった犯罪行為をやめない奴が星の数ほどいる。ならば、罪を分らせるために捕まえたほうが、いいのではないか？

「それに今回は、黄巾の残党が相手なんだ。もし生かしたまま仲間のところに返してしまえば、どうなるか・・・憂いは立っておかねばの」

「・・・」

俺は黙って頷く。

祭さんの言っていることは誰もが理解できる正論だ。

しかし、残党達を捕らえて、仲間を呼び寄せ、一網打尽にすることだって出来る。

前者と後者の意見でもっとも効果が期待できるのは前者の方だ。

前者は、即効性もあり効果もそこそこ期待できるものだ。

しかし、後者は遅効性で、効果こそ大きく期待できるが、待ちの作戦になってしまったため効果自身出ない可能性も出てくる。

しかも相手は黄巾党でその残党であるため、簡単に裏切ることも考える。よってこの作戦の成功率は限りなく低いわけだ。

「・・・終わつたみたいじゃな。」

顔を上げると、残党達はすべて雪蓮の手によって処断されこの事件は終わりを迎えたようだ。

処理に追われる警備兵の間を抜け、雪蓮がまっすぐこちらに向かつて歩いてくる。

「おい、雪蓮・・・」

「・・・」

呼びかけるが、無視して俺の横を通り過ぎようとする。

聞こえていないはずがないのだ。

「おい、雪蓮！」

あわてて振り返り、肩を掴んで引き留める。

無理矢理止められた雪蓮は心底ウザそうな顔をしていた。

「・・・何？私、早く城に戻って血を洗い流したいんだけど？」

声からも苛立ちを感じ取れた。

ただ引き留めただけなのに、なぜ苛立つのか分からない。しかし・

はつきり言っつてむかついた。

「なぜ殺す必要があつた！」

「奴らは罪を犯した。私はそれを裁いただけよ。」

何当たり前のことを聞いているの？つて言いたそうな顔をこちらに向けてくる。

「だが・・・何も殺さなくても捕まえればよかつたっ！」

言い終わる前に、乱暴に肩を掴んでいた手を振り払われた。

「捕まえて・・・何？それが民のためになるつて言うの！？捕まえて罪を自覚させたところで獣はまた同じ事を繰り返すに決まってるわ！世の中の害になるくらいならいつそ殺した方がいいのよ！」

怒りを露わにして、言い放ってくる。

その目は、無色でありながら、極度の興奮に彩られたものであつた。

雪蓮は城に戻ろうと踵を返す。その間際・・・

「・・・セツナの優しさは分からないわ・・・」

と、言い残していった。

一人取り残された俺は、振り払われた手を見下げるだけしかできなかった。

(・・・雪蓮に拒絶されたか・・・)

そう感じるには時間は要らなかった。

悔しさと無念さがみるみるうちに胸を満たしていく。

それに耐えられなくなった俺は、拳を握り額を思いつきり殴った。

額が割れ、血が出てきたが構わない。

「・・・どうして、こんな事に!？」

俺はただ、無血で事件を解決しようとしただけなのに・・・

・・・いや、あの状況から誰も殺さずに解決しようなんて虫がよすぎた。

すべてのものを殺さずに戦っていきこうなんて聖人が神しかできないことだ。

事実、俺は幾万人の人間を殺しているのだ。

拳で、剣で、弓で、銃で、MSで。

殺すたび、撃墜するたびに贖罪の気持ちがわき上がってくる。

だが、その気持ちがあるからこそ今の俺のアイデンティティーが保たれていると言っても過言ではない。

それがなければ、ただの殺戮兵器と化してしまう。

「……俺は誰になんと言われようとも、自分の言葉を曲げない……」

一人でそう決意する。たとえそれが袂を分かつものであっても……

「セツナ……」

祭さんが心配そうに声を掛けてきた。

「……人を切り捨てた後は感情が高ぶるもの。それをお主には見られなくなかったのだろう。だからあれほどまでに荒れていたのだ。」

「分かっています。それを承知で言ったままでですから……それよりも大丈夫なんですか？いつもとかなり様子が違いましたけど……」

今思えばあれほど荒い雪蓮は見たことがなかった。

戦闘が終わってもあれほどまでに興奮はしていなかった。

「珍しいことではないからな。今はそっとしておくのが一番じゃ。」

「そうですね・・・」

俺よりも遙かに長く雪蓮と付き合っている祭さんが言うんだ。

納得するしかない。

「・・・分かりました」

と、言い、頭を垂れる。

考えが違っただけどこまで対立するのか・・・

そのことを今痛感した。

「ふう・・・」

雪蓮のことが心配で心配で・・・しかし助けることも出来ない。

助けようとしても拒絶されるだけだろう・・・と考えしまっ。

そんな無力な自分を呪った・・・

城に備え付けてある井戸で手早く血を洗い流した私は、急ぎ足で冥琳の元に向かった。

体が溶けるように熱い。

人を斬った感覚がまだ手の中に残っている。

セツナを突き放した感覚も・・・

だが、そんなことを考えられないほど体が火照っていた。

目的の冥琳の部屋につき、勢いよく扉を開ける。

「雪蓮か・・・残党を発見して片付けたと報告を受けたぞ。」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

冥琳が何かを言っている。しかし何を言っているのかあまり聞き取れなかった

それよりも早く、この体の火照りを静ませたかった。

私は無言で冥琳に近づき、その唇を容赦なく奪う。

「・・・んっ・・・はあ・・・っ、んん・・・むう・・・。」

むしろ貪るように唇に吸い付いた。

どれくらいしていたのだろうか・・・分からないくらい口づけをしていた。

二人の間には名残惜しげにかかる銀色の糸がエロティックに繋がっている。

「・・・どうした、雪蓮？いつものお前ならここまで強引に迫らないはずだが？」

冷静な言葉だが、所々甘い響きになっている。それに頼もすでに上気している。

「……」

「はぁ……また、セツナのことか？まったく……」

呆れた様子でため息をつかれた。

その光景を見て、帰り際に反論してきたセツナの顔を思い出す。

その顔を思い出して、苛立ちを感じ荒っぽく反論してしまう。

「……あんな奴、関係ないわよ。それより……しましょ？」

血の付いた服をすりと脱ぐ

すべてが完成された肢体を惜しみもなくさらけ出す。

「……なら、いいのだが……全く、しょうがないな。」

と、冥琳も服を脱ぎ捨てた。

二人は抱き合い、雪崩れ込むように寝台に倒れる。

それから二人は、明朝になるまで熱く、激しく愛し合ったのだった。
・
・

「じつじつ田々は畑を焼いてしまった・・・」

閑話 姫君との鍛錬（後書き）

今回初めて対立するシーンを書いたのですが・・・難しい！

どういったところでそういう雰囲気を持って行くのかが分からないのでいまいち感覚がつかめていません。

日々、精進ですね。

次回は、第四話 対立、対面をお送りします。

どうか、温かい目で見てください。

第四話 対立、対面 【前編】（前書き）

作者「どうも・・・更新スピードがとてつもなく遅い作者です。」

セツナ「・・・こればかりは同情するよ。セツナ・フォーリングだ」

蓮華「作者は他には気が多いからね・・・孫権だ」

作者「しょうがないじゃん！みんな面白いんだよ！！」

セツナ「そんな事だから更新スピードが遅くなるんだろ！？少しは読者のことも考えろ！」

作者「・・・この小説を読んでも読者なんて・・・いないよ？」

蓮華「そ、そんなことないわよ・・・二人くらいはリピーターがいると思うわ？」

セツナ「蓮華・・・それはフォローになっていないぞ？」

作者「いいんだ・・・どうせ、自己満足の世界だから・・・」

蓮華「・・・ごめんなさい。それより、なんで更新が遅れたの？」

作者「ラグナロクやっていたり、戦国ランスやっていたり、学校が忙しかったから・・・更新が遅れた・・・」

セツナ「・・・蓮華、締めちまおうぜ！？」

蓮華「そうね。一度死んだほうが作者のためになるわ。」

作者「あれっ？なんか、デジャブが・・・ギヤニャーッ！」

読者には見せられないほど凄惨なリンチのため、割愛させていただきます。

蓮華「ふう・・・それでは、タイトルコールしましょうか？」

セツナ「そうだな。」

セツナ・蓮華「それでは、真・恋姫十無双 ～乙女繚乱 三国志演

義～ 呉書 虎狼天下覇道の巻 第四話 対立、対面【前編】どう

ぞ閲覧してください。」

作者「更新スピード上げるように頑張ります・・・」

第四話 対立、対面 【前編】

黄巾党の首領、大賢良師率いる本隊を撃破した雪蓮の勇名は、大陸全土に広がった

江東の麒麟児と噂されるようになった孫策の下には街の若者達が集まるようになっていた。

それと共に有力者たちの援助が入り、俺たちの軍勢はその規模を大きくしていった。

そうなれば当然、袁術の目と耳を気にしなくてはいけない。

俺たちは今まで以上に周囲に気を配り、袁術に悟られないよう気をつけていた。

やがて一月が立ち・・・

独立に向けて水面下で動き出していた俺たちにとっての吉報が、この大陸を駆けめぐる。

それは、漢王朝滅亡の足音・・・後漢王朝第十二代皇帝、靈帝の死去の報だ。

黄巾の乱によって、無策ぶりと無能ぶりを存分に発揮してしまった後漢王朝。

大將軍何進と十常侍の確執から始まった混乱劇は、やがて靈帝の後継者たる小帝弁の暗殺に続き、最後には地方領主である董卓の手に

よって劉協という皇太子が献帝として祭り上げられるに至った。

その内乱の最中、大將軍何進は十常侍に暗殺され、十常侍も何進の副将であった袁紹に暗殺され・・・そして十常侍の筆頭であった張讓は董卓に殺され・・・と血で血を洗う暗殺劇が繰り広げられていた。

馬鹿らしく、滑稽でもあるその政争も董卓によって一応の鎮静を見たのだが・・・

権力を欲する人間がいる限り、権力争いはどこまでも続き、大陸に嵐を巻き起こす。

数千年後もこれとレベルが同じくらいの政争が行われているのだから、人間はつくづく進歩がないとも思ってしまう。

大陸全土に吹き荒れたその嵐・・・反董卓連合の檄文は割拠し始めている諸侯の心中にある、野心という名の炎をあおり立てる

そして、それこそ俺たちが望んだ混乱。

独立するための絶好のチャンスだった・・・

「はっ・・・」

納刀されると同時にスパツと小気味のいい音を立てて吊されていた葉っぱが二つに切れる。

「わあ、すごいですねえ」

「今ので35枚目か・・・確かにすごい・・・」

雪蓮の帰りを待っている穏や冥琳は暇つぶしに俺の鍛錬を見に来ていた。

「斬線はしっかり見えているようじゃな。しかし・・・よく集中力が持つな？」

最近指導役が妙にはまっている祭さんも認めてくれている。

「そんなに気張って集中はしていませんよ。心を落ち着け、斬る瞬間だけ集中力を極限まで高める・・・それぐらいのことしかしていませんから。」

今、斬線を確認する鍛錬をしていたところである。

軽く、柔らかい木の葉はどれだけ、鋭く、速く斬ろうとしても斬れない。

斬線を見つけ、剣でなぞること始めて斬れるのだ。

散らばった木の葉を片付け、クールダウンを始める。ちなみに先ほどまで連華と思春と明命もいたのだが、いつの間にか消えてしまった。

時々剣戟の音がこだましているので三人で鍛錬でもしているのだろう

「なんじゃ？もう終わりか？」

「そろそろ雪蓮が帰ってきますからね・・・素振りは夜に回します。」

「そうか・・・時にして、セツナ。あれから策殿と仲が悪いように見えるが、大丈夫か？」

残党の一件以来、雪蓮とは事務的な会話しかしていない。

俺から近寄らないようになったし、雪蓮も俺に近寄らなくなった。

おそらく・・・嫌われたみたいだな。いつ解雇されるかも分からない状況になってきたな・・・

「そう言えば、ここ最近雪蓮はずっと不機嫌のままだぞ。わたしが「セツナと何かあったのか？」って聞くと、激昂してくるが・・・一体どうしたんだ？」

「・・・何でもないよ。」

ぶっきらぼうに返事を返し、ストレッチを再開する。

あの後、祭さんの家に招かれて、割った額の手当をしてくれた後、手料理を振る舞ってくれた。

意外に書棚が多く本がぎつちりと詰まっていたことに驚いた。そのことを言ってみたら、怒られた。

無論、酒も何壺も出され、俺はそれを浴びるほど飲んだ。嫌な気分を酒で打ち消したかった。

ベロンベロンに酔って、とにかく愚痴った。過去のことから今のこ
とまですべてを祭さんに吐き出した。記憶にある限り、祭さんは時
々相槌をうちながら、

返事を返してくれた

途中から記憶がないが、目が覚めたときには祭さんと一緒に寝台に
向かっていた。

記憶があやふやだが、夜明けが近い時間だっただろう。

寝台に着くなり、俺は祭さんを抱いた。

すでに祭さんとは一回やっていたので、それほど抵抗はなかった。

貪るように祭さんの体を舐め、吸い、突き、褐色の肌を真っ白に染
め上げた。

出すだけ出した後、爆睡に入り、起きたのは太陽が少し西に傾いた
頃だった。

幸い祭さんと俺は非番だったため、何の咎めもなかったが、俺の中
には押しつぶすような自己嫌悪と罪悪感が生まれた。

あれほど自分勝手に女を抱いたのは初めてだった。いつもは多少な
りとも愛がある抱き方をしようと心がけていたのに……

起きてすぐに祭さんに全力で謝ったが、帰ってきた返事は……

「別に気にせんでもよい。女を抱いて発散したいときもあるじゃろ？わしらも、その様なときがあるからな。・・・儂としては、昨日のお主は雄々しくて、よかったぞ。」

・・・と、思っていたこととは反対方向の返事が返ってきたのだ。

まあ・・・それで少しは気分が晴れたのだが・・・それ以降から、祭さんという時間が長くなった。

だが・・・それと比例して雪蓮と一緒にいる時間が短くなっていく。

なんか・・・もやもやするな・・・

ストレッチも終え、体もすっかり疲労が抜けている。

クールダウンを終え、上着を着始めると・・・

「ただいま」・・・ふう

悩みの種の人物が帰ってきた。

「お帰り・・・首尾は？」

「上々・・・上々すぎて拍子抜けしちゃったわ。」

「どういう事だ？」

確か・・・河北の袁紹から手紙が来てそれを報告しに袁術のところに行ったのだが・・・いまいち意図が分からない

「・・・初めは袁紹が発起人ってことで渋っていたんだけど、皇帝になれるかもっていっただけで、あっさり参加を決めちゃった・・・バカ過ぎるわ。」

渋々ながら、雪蓮は俺に説明してくれた。最近では会話するだけこんな感じだ。

お互いに敬遠しているのだ。無理もない。

「さもありなん。強勢を張っているとはいえ袁術はまだ小僧でしか無いからの」

「そうだけど。でも、もう少し張り合いが欲しいんだけどね。・・・復讐する対象なんだから」

(ついに動き出すのか・・・)

そう。袁術を倒すことによって、孫家の復讐が終わり、新たな道が始まる。

こういう場面に立ち会えることに俺は少しばかりの感動を覚えた。

「相手が愚かであればあるほど、それだけ楽が出来るというものよ。」

「それは分かっているけど・・・でも、私の魂が満足してくれないの！」

駄々っ子のように、言い返す雪蓮。

・・・俺的にはどうであれ、復讐を終わらすべきであると思う・・・

「贅沢なことを言わないの」

冥琳も呆れながら、雪蓮をなだめる。

「はあくい・・・ま、袁術がバカなおかげで、独立の好機が巡ってきたのは、僥倖ってやつかな。」

「・・・いよいよね」

「うん、いよいよ・・・ううん、ようやく孫呉独立に向けて動き出せるわ。」

「・・・ようやくですね」

耐えに堪え忍び、時期を待っていた孫呉。

辛いときもあつただろう、どん底の時もあつたであろう。

それらが今すべて報われるときが近づいてきているのだ。

出来る限り、俺も協力はする。

それが何より、みんなを、大切な仲間達を守ることに繋がると直感で悟った。

「ええ。だけどまだまだ・・・反董卓連合に参加し、諸侯の動きを見極める必要があるわ。」

「この戦の後にくる割拠の状況によって、我々の取るべき道も変わる、か」

「そういうこと。．．．皆、ここからが正念場。頼りにしているわよ」

「応っ！」

「はっ！」

「はいっ！」

「はいっ！」

「はいっ」

「任せておけ」

みんなが一同に決意がこもった返事を雪蓮に返す。

「．．．やっぱり、いい軍隊ほど結束力が高いんだな．．．勉強になる。」

「じゃ、各自出陣まで各々の準備をしっかりしてちょうだい。．．．解散！」

高らかに宣言されると、みんな一斉に散っていった。

「．．．さすがに行動が早いな。取り残されちった。」

一人スタートに出遅れた俺は装備をまとめて、自分の指揮する隊に向かおうとする。

あいつら、すっかりやっているかな？一応、訓練のメニュー表は渡してあるけど……

装備を背負い、考えながら歩き始めたとき……

「セツナ、少しいいか？」

っと、冥琳に呼び止められてしまった。

「なんだい？」

「今回の遠征から、お前の軍も同行させようと思っているのだが……」

「はつきり言って無理だ。まだ実戦で使える段階じゃない。出したところでむざむざ死に行かせるようなものだ」

隊が出来て、まだ一週間ちょっとしか立っていない。速成訓練でもここまで早くは出せない。

実戦出せるレベルになるまで最悪でも一月は必要だ。

「ただ単に、自分の手駒を減らしたくないだけじゃないの？」

横から、かなり耳障りな言葉が、聞こえてきた。

「……今、なんだった？雪蓮」

怒りを露わにして、雪蓮に詰め寄る。

身長は俺の方が少し高いので、目線がかち合う

「あんたの手駒を減らしたくないだけって言ったのよ？それが何か？」

反省どころか、さらに挑発してくる。

その態度に、怒りが激しく燃え盛る。

「俺はあいつらのことを手駒とかそういう風に考えてはいない。戦友と思っている。その戦友を無下に死なせたくないだけだ。今戦場に出すのはただの自殺行為になる！」

「じゃあ、あんたもここに残れば？セツナがいないところで、あたし達はきつちり戦果を上げてくるし、ここでガタガタ震えてその戦友達と一緒にあたし達を待っていればいいんじゃない？」

「貴様つ……！」

二人は、目線をそらさず睨み合う。今は不仲であるために一歩も引かない。

二人とも、分かっている。どちらももう意地を張っているだけであると分かっているのだ。

だが、どちらも引き下がらない。

相手が先に引き下がるまで絶対に引き下がらない・・・極端なまでの負けず嫌いな二人の気性が物語っている。

俺は一步踏み出し、ノーモーションで袖にある仕込みナイフを投げようとしたときに・・・

「二人とも、いい加減にしないか！」

冥琳の一喝が二人に降り落ちてきた。

「セツナ！いちいち雪蓮の言葉に突っかかるな！雪蓮も軽々しく挑発をするな！」

二人は渋々引き下がり、間合いを取る。

しかし、気と睨みで互いを威嚇し合っている。

「ふ、た、り、と、も!？」

「ちっ・・・」

「ふんっ・・・」

威嚇をやめ、同時に目線をそらす

冥琳は呆れて、ものいえない顔をしている。

「事情は分かった・・・今回の遠征にお前の軍を連れて行かないように考慮しておこう。」

「すまない・・・休んだ分はしっかり取り返すから、勘弁してくれ」

「使えない軍なら即刻解体するけどね？」

「雪蓮！やめないか！」

懲りずに挑発してくる雪蓮をなだめる冥琳。

昔からこういう位置関係なんだなあ〜と思いつつも、雪蓮の態度にいらついでくる。

「ちっ・・・胸くそ悪い・・・用件はそれだけか？」

不快感をあらわにして、冥琳に問い返す。

「はあ・・・もう行っていいぞ。」

装備を背負い直し、今度こそ歩き出す。

雪蓮の奴・・・なんてうざったいんだ！

と、胸の中で繰り返してみるが・・・

言葉とは全く反対の楽しかった出来事しか思い浮かんでこない。

・・・はあ、自分の気持ちにはとうに気づいているんだがな・・・

本音を言つと、さっさと仲直りをしてまた一緒に街を歩いたりしたい。

しかし、意地が邪魔してなかなか謝罪の言葉が出てこない。

・・・悪循環だな。

今度の遠征から帰ったら、ちゃんと謝ろう。

それできっと、万事解決のはずだ。

セツナが去った後、雪蓮と冥琳は話していたことを煮詰めるために雪蓮の部屋に向かっていた。

「・・・雪蓮、一ついいか？」

話が一区切りしたところで冥琳が神妙な顔で問いかけてきた。

「何？改まって？」

「どうして、セツナをあれほどまでに邪険に扱う？あそこまでの必要があるか？」

「・・・前に、ちょっと・・・ね。」

そう、前の残党の一件から、セツナのことは嫌いになった。

無論、人物的に嫌いのではない。考えが根本的に違うから嫌いになったのだ。

セツナの考えは、極力人の命を奪うな、という考えで私たちは、まるつきり違うのだ。

・・・悪党なんて殺して当然。世の中の害にしかならないのだから・・・百害あつて一利なしつてね。

「まあ、その話は今は関係ないでしょ？早く部屋に行つて、反董卓連合の事、煮詰めるわよ？」

「それもそうだが・・・しかし」

まだ追求してくる冥琳にヒラヒラと手を振り、止めさせる

「はいはい、それは私の問題だから、冥琳は口を出さないでね」

「はあ・・・わかった。」

それから、部屋で話を煮詰めていく。それに伴つて、軍の編成や兵の数などの細かいところも大まかに決めていく。

大体の議題に決着がついたのはすでに月が中天に達する頃であつた。

「じゃあ、今日はここまでね。」

「そうだな。後は穩達とさらに煮詰めていくわ。それと副将のことだけど・・・」

副将・・・ねえ、今更必要とは感じないけど今回セツナは単独で出させるわけにはいかない。

いつ後ろを襲われるか分からないしね。

「いきなり変えるのもあれだから、いつも通りでいいわよ。・・・
気にくわないけどね」

「・・・わかった。それじゃ、前と同じということでもいいな。」

「ええ。」

冥琳は書簡をまとめ、部屋を出て行く。

まだ仕事も残っているのだろう。ホント、ご苦労なことだ。

長い討論でくたびれた私は寝台に倒れ込むように横になる。

「・・・まったく、何で突っかかってくるのかしら！？あのバカは
「！」

独りごちながら気にくわない奴と、胸の中で繰り返す。

しかし、瞼の裏には言葉とは反対のセツナと一緒にいた楽しい時間
や、自分を受け入れてくれたときのことが描かれる。

「・・・気づいているわよ、自分の気持ちくらい・・・」

本音を言うと、さっさと仲直りをしていつも通りに二人で話したり、
街を歩いたり、甘い時間を過ごしたい。

それにセツナが他の子と喋っているところをあまり見たくない。嫉
妬心がまた燃えてきそうだから・・・

しかし、意地が邪魔をして謝ることが出来ない。

・・・遠征中、機会があったらちゃんと謝ろう。

それで、すべてが解決しいつも通りの日常に戻れるのだ。

いい加減に、セツナに突っかかる日常には疲れてきた。

そう考えていると、私はゆっくりと闇の中に沈んでいった・・・

第四話 対立、対面 【前編】（後書き）

更新スピードを上げるために分割しました
これで更新スピードが上がるとは限りませんが、
温かい目で見てください

第四話 対立、対面 【中編】（前書き）

作者「どうも。現実世界でちょっとへこんでいる作者です。」

セツナ「とりあえず・・・元気に行こうぜ！セツナ・フォーリングだ」

雪蓮「まあ、もう慣れっこじゃない！孫策です。」

作者「・・・それでも、心が痛いもんだぜ。あゝあ、セツナはいいよな。立派な恋人がいて、それで今も周りは華だらけと来ているもんだ。」

雪蓮「あら、作者って上手ね。おだてたって、何も出ないわよ？」

セツナ「・・・全て、お前が考えているんだろ？いいって・・・」

作者「セツナ・・・これから、お前の恋はグツチャグチャのドロドロになるように設定するわ」

セツナ「はあ！？てめえ、道連れか!？」

作者「・・・カップルなんて、この世から消えちまえばいいんだ！（ガリガリ）」

セツナ「今回だけは許せねえ！でやあ!!」（ヒュッ）」

作者「・・・^{トレス・オン}投影、開始！（ガキンッ!）」

セツナ「おいつ！何他作品からパクってんだよ！？なんか、いろいろ問題になるぞ！」

作者「今の俺を止められる奴はいねえ！」

セツナ「俺が止めてやる！」

二人はその場で、見るも絶えない争いを始めました・・・

雪蓮「はあく、二人とも何やってんだか・・・長引きそうだから、さっさとタイトルロールやっちゃうわね!？」

雪蓮「それでは、真・恋姫十無双 ～乙女繚乱 三国志演義～ 呉書 虎狼天下覇道の巻 どうぞ閲覧してください！」

作者「どうした!?!その程度か!?!セツナ!！」

セツナ「調子に乗ってんじゃねえ〜!！」

この後、二人はお互いに過労で倒れるまで戦い続けたとさ・・・

第四話 対立、対面 【中編】

いよいよ独立に向けて動き出せる。

その嬉しさを静かに噛み締めながら、皆は出陣準備に明け暮れる。

敵は洛陽を制圧し、欲しいままに権力を振りかざしているという噂の董卓だ。

諸侯は董卓を追いつめようと必死らしいが、俺たちにとってそんなことはどうでもいいことだ

この乱を足がかりにして、独立の準備を行う。それが俺たちの基本方針だ。

俺は、出陣準備を手伝いながら、暇があれば自分の隊の訓練に精を出していた。

始めて与えられた自分の軍、総勢4000人は、屈強な男もいれば、ひよろひよろして使い物にならなそうな者もいた。

4000人という大人数を俺一人で指揮するのは難しい。そこで、まず選抜試験を行いその結果で1000人ずつに分け、さらにそこから一人の部隊長と三人の副隊長を選出するという部隊細分化方法をとった。選抜試験には祭さんや冥琳、穩が手伝ってくれて大助かりだった。

それぞれ力、速、射、防、といった特徴を持たせる事でスムーズな指揮が執れるようになるはずだ。

部隊名は、豪力隊、これは軍の中核を担う部隊で装備は重装備で固められ、武器も豪槍、豪弓などの大がかりな物になっている

主に騎馬突撃や攻城戦の城壁壊しなどの力で制圧するような攻撃に特化した部隊である。

次に迅速隊、速度に特化した部隊で、装備は軽装、格好は忍びのよくな黒鎧であり、主に夜襲や豪力隊が討ち漏らした敵の掃討が主な分担となる。

三つ目は、蒼穹隊、弓や弩の運用に特化した部隊であり、基本的には馬上からの援護射撃、又は攻城戦時の城壁の弓兵掃討などの射撃が主な分担となる。また手先が器用な者が多く、設置型の攻城兵器の組み立ても行う。

最後に鋼盾隊、防御に特化した部隊であり、もともと死傷率が高くなる部隊でもある。体を覆い隠す盾と長槍を装備し、敵の突撃をその身をもって受け止めるのが主な分担となる。撤退時や、時間稼ぎしたい時に敵の進行を止める事が多いが、その盾を武器にした突撃し、線上に制圧していくことも可能である。

人数が増えれば増やしていくが、一部隊最大3000人で止め、それ以上増えてきたら、第二部隊と分けていくつもりだ。

すでに隊長と副隊長には戦術のイロハと俺の考えた陣形を講義しており、残りは全体的な熟練度が上がるのを待つだけだ。

最初の一ヶ月は基礎体力と基礎筋力を養う訓練を重点的にやり、全体訓練は陣形の確認とスムーズに動けるように体に覚えさせる事で

とどめる。

早ければ三週間で実戦に出せるレベルまで上がり、一ヶ月で正規軍と遜色ないくらいの上がりになるはずだ。

忙しくても充実した日々がすぎていき、やがて・・・

出陣準備も一通り整った頃、袁術より出陣の命令が下った。

雪蓮の勇名を募って、各地からやってきた屈強な兵士達で編成された、さしずめ孫呉軍団Ver.2を引き連れた俺たちは、反董卓連合が駐屯している合流地点に向かっていた。

「冥琳、反董卓連合に参加している諸侯って、どれくらいいるの？」

澄み渡った空をボーッと見ていた俺の耳に雪蓮の質問が飛び込んできた。

参加している諸侯か・・・確かに気になるな。

俺は馬を寄せる。その際、雪蓮の方には寄せず、冥琳の方に馬を寄せた。

「発起人である袁紹と、その尻馬に乗った袁術を筆頭に、北方の雄公孫瓚。中央より距離を置きながら着々と勢力を延した曹操。前の乱で頭角を現し、平原の相、劉備。そして我らが主な軍勢となるだ

ろうな。」

「他にも涼州連合や、喬瑄さんに張貌さんといった太守さん達が参加していますね」

・・・数的には相当な物になるだろうな。

「なるほどね・・・大なり小なり、野心を持つ人間が集まってきている・・・といった所か。」

だが、お互い自分の利益だけで集まってきた者達だ。そう簡単に統制がとれるわけがない。

「さもありません。・・・すでに後漢王朝が死に瀕している今こそ、飛躍にはもってこいの時期だ。」

天下分け目の時って奴か・・・

そういうキツカケになる戦いに多く携わってきた俺は、いまいちピンとこない。

直接自分で手を下すわけでもないから、あまり関係のないことだと考えているからだ。

「ただし、全員が飛躍出来るとは限らないけどね。・・・さてさて、一年後まで生き残っていられるのはどの諸侯かしら。」

雪蓮の言葉に、歴史を知っている俺は軽く思い返す。

最初に倒れるのは、公孫贇。袁紹の圧倒的な戦力の前に何重にもし

た城壁は砂の城同然だった。

次に袁紹、曹操を40万という兵力で攻めるが、策を弄し、徹底的に兵糧を攻めた曹操が100年かかると言われた戦をわずか一年で終結させた。

このときにすでに、三国の基礎はできあがっている。北の曹操、南の孫権、西の劉備に分かれているのだ。

そして、劉備の作り上げた蜀は倒れ、孫家三代で築き上げた呉も、魏の司馬炎によって、潰される。これで三国時代は幕を閉じ、晋という統一国家が生まれるのだ。

無論、この平行世界がこの通りに行く保証はない。すでに三人の未来からの来訪者によって、少しずつ歴史が変わっているのだから……
・
……いまとなつては、後の祭りだし先のことは考えたつてしょうがない。

とにかく、この乱を生き抜くことだけ考えよう。

「有能な人もいれば、無能な人もいる……なかなか予想がつきませんねえ。」

「まあねえ。……冥琳はどう見てる？」

「ふむ。……」

話を振られた冥琳はしばし黙考して……

「まず一人。人材、資金、兵力・・・すべてを潤沢に用意している曹操だろう。次に我ら孫呉だ。資金も兵力も充実の兆しを見せているし、人材も揃い始めている。」

「ふむ。・・・袁紹や袁術ちゃんはどうなの？」

「確かに袁紹の兵は強大だ。しかし、北方に公孫賛という強敵を抱えているし、率いる人材をうまく使いこなせていないように感じるな。」

冥琳はいったん間をおいて、目に不敵な光を走らせる。

「袁術は・・・我らが倒すのだろうか？」

「もちろん」

屈託のない笑顔で返事を返す雪蓮。

仲違いしていてもその笑顔が綺麗だと思った。

「なら、一年後、我々の天下取りの道のりを邪魔するのは、今の所曹操のみということになるな。」

「なるほどね。・・・けど、私はもう一人。気になる子が居るわ。」

「劉備か？」

「そ。義勇軍の大將だったのに、いつの間にか平原の相に成り上がっている。天の時を得ているわ。そして配下には勇将、知将が揃っ

てるって噂。・・・人の和もある。」

さすがは勅の鋭い雪蓮だ。人を見る目がある。

事実、ここから劉備は成り上がっていくのだ。潰せるなら今の内に潰しておきたいのだが・・・

(・・・さすがに歴史が変わるか・・・やめとこ・・・)

歴史はむやみに変えられるものじゃないし、変えてはいけない。

「後は地の利か・・・今の所、地の利だけが劉備にはないな。平原の東には公孫贇や袁紹。南には董卓と曹操・・・これでは領地の拡大はできん。・・・しかし、気になる

人物でもある。英雄になる人物かもしれん。」

「ふむ・・・なら一度、話してみましようか？」

「それがよいかも知れん。」

「じゃあ、時期を見て、接触しましょう。」

そこで話がとぎれ、また静かに進軍が始まった。

俺は、進軍の間、反董卓連合と董卓との戦いについて、考えた。

今回の戦いは、どっちが勝ったとしても動乱の時代にはいるのは明白だ。

反董卓連合が勝てば、後漢王朝はすでに必要なしと判断されてしまう。董卓が勝っても、そもそも後漢王朝が存続することは出来ない。つまり、国の要がなくなると言うことは確定しているのだ。

その中で、俺たちはどうやって独立に向けて動くか。

まず、今の大陸の状況は、かなり特殊な状況になっていると思う。

大陸全土を巻き込んで陣営の二極化が起こっている。

董卓と、董卓を味方する人間、反董卓連合を組み、董卓を排除しようとしている人間。

そして、この戦いに参加していない諸侯の目も、董卓と反董卓連合との戦いの成り行きに注がれている。

そのため、周りの目が中央に注がれている今こそ、独立に向けて仕込みをするのに絶好の機会だということだ

すでに動いていることを冥琳から聞いている。

祭さんと連華が独立に向けて健業に向かっているらしい。

そこは、元々孫呉の本拠地で、孫呉に関係のある人間が多く、協力を仰ぐにはもってこいの場所だ。

本来ならば、この戦ではあまり出しゃばらず次のために兵力などを温存したいが、袁術に二心を疑われないようにしなくてはいけない。

さらに、前に出たとしても知勇兼備の軍隊という風評を得なければいけない。

兵力も温存したいところ、非常に難しいところである。

しかし、俺はやり遂げなければいけない。

なんせ、冥琳達がしっかりと期待してくれているからだ。

期待に応えてこそ、漢つてもんだ！

一時間ほどで、合流地点に着いた。

合流地点には、黄巾党討伐の時よりも多くの勢力が陣を張っていた。前見たときよりも大きな陣になっていたので、ちよつとばかり感動を覚えた。

「おおつ・・・さすがに凄い。黄巾党の時と比べると、さらに規模が大きくなっているな。」

「当然だ・・・公孫贛に袁紹、曹操・・・野心ある人間ならば、勢力拡大に力を入れるさ。」

「だが、少し早すぎないか？・・・前回の戦いの時よりも二倍くらいの数になっているが・・・」

前回の黄巾党の時は、集まりが悪かったが今回はすでに10程度の諸侯が集まっている。

目的がはっきりしている分、利も見つけやすいのである。

利益を見いだしやすい場所に人が集まり、見いだしにくい場所には集まりにくい……いつの世も同じということだ。

「それだけ風雲が近付いているって事でしょ。それより、冥琳、軍議に行ってきた。」

雪蓮が、気怠そうに馬から下り冥琳に用件を丸投げした。

うわぁ……本来なら軍の代表者が顔合わせを兼ねて行くもんだろ……

「軍の代表が出るべきだと思うけど？」

冥琳もそのことを指摘する。

しかし、このおてんば姫と来たら……

「却下、興味ないもの」

と、来たものだ。呆れてものも言えない。

「はぁ……」

冥琳も深いため息で呆れている。

「冥琳はそうやって溜め息つくけど・・・どうせみんなが主導権を握るために、腹の探り合いをするの、目に見えているんだから。そんなところに行きたくないわ。」

「私だっけ行きたくないわ。」

無駄だと分かっているても一応程度の反論をしておく冥琳。

こういう時の雪蓮には何を言っても聞かないだろうと、少しの間しか付き合っていない俺でもはっきり分かった。

「でも、行ってくれるんでしょ 冥琳、優しいし」

飛び抜けて明るい声と笑顔で返してきた雪蓮。

それがいい所でもあり、悪い所でもある。

「・・・貸し一つよ。」

「了解・・・今度、閨で返しましょうか？」

「嘘おっ！」

聞いて・・・あれのことだよな？

勘弁してくれよ・・・レズはごめんだぜ！

と、一人苦悶に走っていると・・・

「セツナ、変な想像をするな。」

釘を刺された。今のは俺が悪い。

「なんで？健全な青年だから、妄想の一つくらいいいじゃないまあ、したら首が飛ぶけどね？」

うおっ！強烈な言葉だな・・・おい。

「・・・言つてなさい。じゃあ私は軍議に出る。穩！部隊の指示はお前に任せる。」

「は〜い では、皆さん。天幕を張っちゃいませよ〜」

相変わらずほんわかとした口調で、穩は兵士に指示を出して陣地設営に向かった。

兵士達はてきぱきと天幕を張り、みるみるうちに陣地が設営されていく

セツナは、密かに連れてきた各隊の隊長四人に指示を出した後、軍議に向かう途中の冥琳を追いかけた。

「冥琳！」

「何だ？私は軍議に行きたいのだが・・・」

急ぎたいのか、少しきつめの口調になっている。

しかし、臆することなくセツナは話を進めていく。

「俺も軍議に連れて行ってくれないか？」

「ほお？して、その理由は？」

他の武将の顔を知っておきたいのが一番の理由だが、雪蓮とあまり一緒にいたくないという理由も少なからずある。

冥琳には、このことは黙っておこう。あまり心配を掛けるのも何だし……

「他の武将の顔を知っておきたくてね……いいだろ？」

「……まあ、いい。つまらないがいいのか？」

「いいさ、そういった軍議はよくしているから、慣れているよ。」
出撃前のブリーフィングなどはしっかり聞くが、作戦内容などのブリーフィング、デブリーフィングはいつもあくびをしながら聞いている。

つまらないものは、つまらないと思うのがセツナの性格でもある。

「わかった。お前を連れて行くことにしよう。何か聞かれても私の副将とでも答えておこう。」

含みのある笑顔をこちらに向け、了承してくれた。

「悪いな。いつか、おごるよ。」

「ほう、その時はすっかりご馳走してもらおうか？」

言葉を交わしながら、肩を並べて歩く二人。

端から見れば、お似合いのカップルにも見えるであろう。

話が盛り上がり、一区切りがついたところで冥琳が真剣な目を向けてきた。

「ん？どうした？」

「セツナ・・・雪蓮となにがあったのだ？二人の中を見ていると、何かあったとしか考えられん。」

「・・・ふう〜」

バリバリと頭をかき、言うか言わないか迷った。

その間も冥琳は真摯な目をこちらに向けてくる。横目で見てみると澄んだ真っ直ぐ目をしていた。

鼻の頭をかきながら考えたあげく、正直に言うことにした

「前に、残党の事件があっただろ？その時についてカツとなっちまっ
てな・・・思想の違いから言い合いになって、それからだな。二人
の距離が遠ざかったのは・・・」

「やはりな・・・全く、すべてを受け入れてこそ王なのに、毛嫌い
するほどまでに反論したなんて・・・」

「だがな・・・俺にも意地つてもんがっ」

冥琳が急に立ち止まる。つられて、俺もあわてて立ち止まる。

「こつちだ、セツナ。話は帰りにでも聞かせてもらおう。」

と言い、冥琳は陣地の前にいた兵士に話しかけ始めた。

話を途中出来られたセツナは、キョトンとしながらもすぐにピンと来た。

ここが軍議の場所らしい。

門には、袁とかがかれた牙門旗が掲げられており、主に黄色を使った鎧を着た兵士達が多く見受けられた。

軍馬にも、黄色の鎧甲冑が着せられてあり、それが何百体となるとまぶしく感じられる。

(明らかに、目立ちたがりだな。)

セツナは、鎧や立てかけられている武器の装飾を見てそう判断した。

「セツナ、手続きが出来た。中に入るぞ！」

「つと。ああ、今行くよ」

あわてて駆け出し、冥琳を追いかけるセツナ。

先ほど思った目立ちたがりと言う感想は、今から会う人物を見てみ

るとあなたがち間違えではないだろう。

しかし、そんなことを知るよしもないセツナであった・・・

「おーっほっほっほっ
」

甲高く、そして耳障りな笑い声が軍議の場に響き渡る。

現在、集まった各軍の代表者が円を囲んで座っている。一段と高い段には今回連合軍の発起人になった袁紹が座っている。

豊かに巻いた髪を揺らしながら、体を反っている姿にイラッと来るが、ここはぐっと堪える。

代表者の集まる場所で問題を起こすのは、後々の怨恨になりかけない。

「では！皆様が集まったところで、自己紹介と行きましょう！まず、私から参りますわ！」

一度間をおき、ポーズを決め、自己紹介を始めた。

「誰もが存じているのですが、私は、四世三公を輩出した名高き袁家の当主、袁本初ですわ！おーっほっほっほっ
」

自信とプライド、そして世間知らずといったメッキで塗り固めた感じがぶんぶん漂ってくる。

(なあ、冥琳?)

(なんだ?今は軍議中だぞ!?!?!軍議とはかけ離れているがな)

冥琳もバカな自己紹介に苦笑している。

そりゃそうだよな。あんだけ家柄を鼻に掛けた紹介をされても、知らないものには苦笑しか出てこない。

(三公つて、なんだ?)

(そうか、お前は知らないんだな。三公とは、司徒、司空、太尉の事で、袁紹の家は四代にわたって三公を輩出したため、最高の名門といわれている。当の袁紹はこの通りだが。)

なるほどね。名門だから威張りちらしているんってわけか。。

あんなのが、発起人だなんて。信じられないな。

「では、右回りにしてもらいましょうか?」

袁紹の一声で、右回りに自己紹介が始まった。

張?、鮑信、孔融、陶謙といった歴史に名を連ねる武将が次々に名乗っていく。

ふと思ってみると、こういった武将は男であることが分かった。

・・・おそらく、それほど有名ではなかったり、重要ではない武将

は史実と同じようになっていたのだろうか。

なんて、都合のいいパラレルワールドなんだ……

「西涼の太守、馬騰だ。よろしく頼む。」

豪快な言葉とは裏腹に、とんでもなく美人な武将もいた。

髪は明るめの茶色で、眉は太く、中性的な顔立ちをしている。服装も胸元を大きく開け、際どい服装をしている。

女らしく振る舞えば、とても綺麗に見える存在なのだが、気性と感じる覇気がそれを台無しにしている。

曰く、男勝りであることは確かである。

「北平の太守、公孫贇だ。よろしくお願いするよ。」

これも、女の武将だ。

しかし……これといった特徴もなく、感じる覇気も普通で、よく見ていないと消えていきそうな存在に見えた。

はっきり言って、地味の一言しか出てこない。

「では、そのあなた達にしてもらいましょうっ？」

ついに俺たちの出番が回ってきた。

少しながら、緊張が走り始めた。

(そんなに緊張するな。自己紹介するのは私だ。)

と冥琳が耳打ちをして、立ち上がる。

「揚州の刺史、孫伯府が主の周諭だ。以後お見知りおきを・・・」

「あら、江東の麒麟児さんの部下なのですか？これは大きな戦果が期待できますねっ！おーっほっほっほっほっ」

周りもザワザワし始める。雪蓮の勇名が、大陸に轟いている証拠だ。

「それで、となりにいる男は誰なのですか？従者ですか？」

指さしてこちらを指名してきた。セツナは、グツと堪えながら沈黙を保った。

「その銀の腕はどこかで聞いたことあるような・・・名乗っていただけです？」

「・・・孫策が主、セツナ・フォーリングです。よろしく願います。」

内心が憤っていても、あくまで礼儀正しく、腰を低く自己紹介をする。

「はて？どこかで聞いたような・・・斗詩さん？」

袁紹は隣にいたおかつぱ頭の女性に、説明を求めた。どうやら、彼女は袁紹の側近らしい。

「はい、確か・・・江東に麒麟児と白銀の修羅あり、麒麟児は戦いにおいて、勇敢且つ苛烈な戦いをし、白銀の修羅を従える。修羅はその銀の拳で敵を葬り、麒麟児の守護に徹している・・・という噂をよく耳にしています。」

「そう、それですわ！まさか、白銀の修羅さんも来ているなんて！これはさらなる戦果が期待できますわねっ！！おーっほっほっほっほっ

袁紹の高笑いと平行して、ざわめきも少しばかり大きくなった。

多くの視線が、こちらに注目し座っているセツナにばかり向けられる。

(よくもまあ・・・そんな二つ名が付けられたものだ)

セツナ自身はどうでもよかつたらしい。噂を立てば、それはそれでやりやすいと思っところがある。

利用できるものは利用する。軍人気質なところが混ざったものである。

「では、続けていきましょうか!？」

呑気なひと言で自己紹介が再開された。

多くの諸侯が紹介されていく中・・・

「陳留の刺史、曹孟徳よ。よろしくね。」

まだ少女の面影を残した女性が、あの破格の英雄曹孟徳と名乗った。その姿からは、想像できないほどの自信と、巨大なオーラが体から立ち上っている。

しかし、セツナが気になったのは曹操ではなく、そのとなりにいた男性にあった。

年は24、5歳あたりだろう。特徴的な金髪と漆黒と形容していいほど黒い外套を羽織っている。

何より、目がすごい。鷹のような鋭い目でまるで、すべてを見透かすような力を持っているように見える。

(・・・どこかで見ることがあるような・・・)

記憶にあるのだが、思い出せない。確か、四大戦争初期あたりに会敵しているような・・・

・・・思い出せない。どこかで見ることがあるのだが・・・

男は、こちらをじっと見ている。その目はまるで獲物を品定めするようである。

まあいい。敵として出会うときにも思い出すであろう。

こうして考えている間にも、自己紹介は続いていく。

「平原の相、劉備です。よろしくお願ひします!」

丁寧に挨拶をしたのは、後に蜀を建国する劉備玄德と名乗る女性だった。

その姿は、すべてを包み込むような雰囲気と慈母の固まりである事が伺えた。

その両隣には、関羽と張飛とおぼしき人物が立っており、さらにその後ろには、少女と・・・

「っ!？」

暇そうに座っていた女性は燃えるような赤い髪で、目の下にはバラの花の入れ墨が彫られている。

服装も、男を誘うように大胆に胸を明け、ダメージが入っているホットパンツを穿いている。

「どうした？セツナ？」

冥琳が、セツナの態度が変わったこと気づいたのか、声を掛けた。

しばらく劉備の後ろにいる赤髪の女性をにらみ付けていたセツナは、冥琳の呼びかけでやっと視線を戻した。

「いや・・・何でもない。」

バツが悪そうに座り直すセツナ。

頭の中では、さっきの女性のこと頭がいっぱいだった。

彼女は・・・セツナの父を殺した張本人である。

父が殺された直後、セツナ自身の手で敵を討ったはずなのに、まだ生きていた。

憎しみがセツナを支配し始めるが、すぐに収まっていく。

(敵として、出会ったら真っ先に討ってやる!!)

そう心に誓うセツナとは別に、時は回っていく。

自己紹介も佳境。最後の一人となった・・・

「南陽の太守、袁術じゃ。よろしくたも。」

わがままいっぱいの小娘の紹介も終わり、これで全員の紹介が終わったはずだ。

改めて見ると結構な数の諸侯が集まっていることが分かり、それぞれ20万近い兵力を保有しているはずだ。

おそらく百万を超えるであろう大軍を一体誰が総大将となり軍を操っていくかだ。

「さて、皆さん！我々が連合軍を動かすにあたり、たった一つ足りないものがありますの！」

自己紹介も終わり、早くもグダグダ感が漂ってきた軍議の場に袁紹がただ一人喋りに喋りまくっている。

「兵力、軍資金、装備・・・全てにおいて完璧な我ら連合軍。しかし、ただ一つ足りないもの・・・さて、それは何でしょう!？」

この場で思いつきり大声で言いたかったのは、「場を弁える聡明な総大将」であった。

しかし、はっきり言ってめんどくさいし、そんなところを言ったところであのタカピーなお嬢様の袁紹が聞いてくれるわけがないし、聞かないであろう。

あくびを噛み締めながら、椅子にゆったりと座りなおすセツナ。

もう寝るつもり満々である。

「まず第一に、これほど名誉ある目的を持った軍を率いるのは、相應の家格が必要ですね。そして次に能力。気高く、誇り高く、そして優雅に敵を殲滅できる、素晴らしい能力を持った人材こそがふさわしいでしょう。そして最後に、天に愛されているかのような美しさで誰しもが嘆息をもらす可憐さを兼ね備えた人物。・・・そんな人物こそ、この連合軍を率いるに足る総大将と思うのですが、如何かしら?」

・・・要するに自分が総大将になりたいんだな。しかも自らは名乗り上げず、他人の推薦を得てなりたいというわけだな。

目をつぶって話半分に聞いていたセツナは、大きなため息をもらした。

タチの悪いってどうか・・・頭の悪い策だな。しかも自覚症状がな

い分、呆れてものも言えない。

「・・・で？あなたの挙げたその条件に合う人間は、この連合の中にいるのかしら？」

曹操の言い分はもつともである。袁紹は自分しか居ないと思っているだろう。

見た限り、適任といえば曹操と劉備だろう。曹操は全てを兼ねそろえているし、劉備は、多少知力と武力が落ちるがそれは劉備の仲間達が補ってくれるであろう。何よりうまく軍をまとめてくれそうだ。

馬騰は難しい。あれだけ豪快な覇気を持っているものは決まっがさつである。戦闘に対する知識はあるだろうが、全て攻撃に関するものに回されそうだ。

公孫賛も難しいところがある。全てが平均であり、どれでもそつなくこなすことが出来るが、だからといってこれといった印象が残ることはない。この場でそういったことは勘弁してもらいたい。

直感で動いている雪蓮は言わずもがなである。

「さあ、それは私が知るところではありませんけど。でも世に名高いあなた方ならば、誰かお知りなんじゃありませんの？」

「そうね。案外身近にいるかも知れないわね？」

皮肉たっぷりに曹操が目が笑っていない薄ら笑いを浮かべながら、袁紹に言つが・・・

「ええ、そうですね。そうですね。おーっほっほっほっ

皮肉を皮肉と受け取らずに袁紹は高笑いをしながら言い放った・・・

(はあく・・・)

マジで眠くなってきた・・・はあく・・・

三流のコメディを見るかのようにセツナはため息をつきながら袁紹達の応酬を見ていた。

さっさと帰って、体を休みたいのだが・・・それはわがままというものだろう。元はといえば、自分から言い出したことだ。最後までやり遂げるぞ。

しかし・・・早く軍議、終わってくれないかな・・・？

と思ってしまうセツナであった。

そのころ、セツナ達が軍議に行っている間、雪蓮は暇そうに野営の中で寝そべっていた。

「ふう・・・つまんない〜!〜!」

ひとりごちてみるも、誰も答えてはくれない。

普段通りだったら、セツナなり冥琳なりが話し相手になってくれるのだが冥琳は軍議に行き、セツナもどこかに行っている。

謝ろうと機をうかがっていたのだが、なかなか来ない。

冥琳がいないこの時が好機と思っていたのだが、当のセツナはここにはいない。

まったく・・・世の中、自分の思ったとおりにはいかないものね。行っていたら、今頃袁術を倒しているだろうしね。

ふと周りを見回してみると、みんなとは違う見慣れない袋があった。

「?・・・誰のかしら?」

ごそごそと無遠慮にかき回してみると、結構いろいろのもので出てきた。

セツナが見せてくれた拳銃というもの、印の入った手袋に小さな箱が二つとかが入っていた。

内容からセツナの荷物であることがわかった。時間がなかったのか、ここに置いていったのだろう。

セツナの荷物を漁れることから少し好奇心を感じながら漁っている一枚の紙切れみたいなものが出てきた。

その紙切れには腕に包帯が巻かれているセツナと・・・

「・・・女の人?」

短めの髪に人なつっこい顔をした女の人がセツナにぴったりと寄り

添っていた姿が映っていた。

・・・天の人か・・・私とは全然違うわね。

人前でここまで露骨に愛情表現はできない。王である自分ではどう
てい無理である。ましては、寄り添うなどできるはずがない。

ふざけて抱きついたりするものの、意識してやろうと思うと気恥ず
かしくてできない。

改めて紙切れをみると、二人ともとても幸せそうな顔をしてい
る。

あまり笑顔を見せたことのないセツナでさえ、笑っているのだ。よ
ほど、嬉しいことがあったのだろう。

写真を見ていると、むかむかと嫉妬心がわいてきた。

何よ！幸せそうにイチャイチャしちゃって！こんな娘のどこがいい
のよ！？

私なら、もっと幸せにしてあげるのに！？

写真を破りたくなる衝動に駆られるが、どうにか押さえる。

そんなことしたら、今後一生セツナと仲違いしたままで生きていく
ことになるであろう。

そんなこと・・・耐えられない！！

震える手で紙切れを袋の中に戻し、ほかのものも袋に大雑把ながら戻していった。

よろよろと立ち上がり、また寝転がる。

胸の中には、セツナに対する不信感が募っていた。

私が一番じゃないのが許せない！

女がいるなら、何で私を受け入れたの！？

そんなことを考えていると、いつしか深い闇に落ちていった。

そのころ、軍議がいい感じにグダグダになりセツナはついに眠りの底に落ちようとしていた。

と、その時・・・

「すみません！」

一人の武将が意を決して、袁紹に声を上げた。

その澄み渡った声に眠気を吹き飛ばされたセツナは、片目だけを開け誰なのかを確かめる。

「こんな事をしている間に、董卓軍が軍備を整えちゃいますよ！」

全くの正論を言い始めたのは、劉備だった。秀麗な眉を少しばかり歪ませて、苛立っているようだ。

確かにここでぐずぐずしていたら、敵は軍備や防衛所を整えてしまう。さつさと大まかなことを決めて出発しなければならぬ。

「あら、そういうあなたはどなたかしら？」

先ほど、名乗ったのに早くも忘れてる。軽くムツときながらその動向を見守る。

「・・・平原の相、劉備です・・・ねえ、皆さん。皆さんは董卓さんと戦うために集まった訳でしょう？なのにこんなところで味方の腹の探り合いをしていてどうするんです！こうしている間にも圧政で苦しんでいる人たちがいるかも知れないのに・・・！」

強い口調で訴えてくる劉備を、一人を除く諸侯達が冷ややかな目で見ってくる。

圧政で苦しんでいる人たちを助きたい。劉備以外の諸侯にはその気持ちはないであろう。自分たちの利益を求めてやってきているのだ。民のことなど二の次になる。

「あら、新参者がよいことを仰りますわね。じゃあ劉備さんとやら。あなたにお聞きしましょう。この連合軍を率いるのにふさわしい人物はだあれ？」

完全に舐めきつた口調で問いかける袁紹。

その態度に、本当に腹が立ち、劉備達に同情しながら投げナイフを

投げかけるが自制する。

・・・怒ると何かする癖、直そう。

「・・・もう、袁紹さんでいいんじゃないです？だって、袁紹さん、総大将になりたいんでしょ？」

あの態度に、投げやりな口調で返す劉備。

この場で強く言い返しても、立場が悪くなるだけである。

弱者と強者の立場がよく分かる構図でもある。

「あらあら、この私がいっそんなことを言いました？だけど・・・
そうですね。なり手がいないのであれば私がやって差し上げても
よろしくてよ？」

「なら決まりね。袁紹が総大将になりなさい。」

「我らも劉備の提案に異存はない。」

「妾も問題ないぞよ。」

皆が一樣に、どうぞご勝手にという雰囲気で賛成する。

その答えに満足した袁紹は、満面の笑みを浮かべて・・・

「あらあら？みなさんそうですね？・・・ならば決定ですわね。で
はこの私・・・三国一の名家の当主であるこの私が、連合軍の総大
将になってさしあげますわ。おーっほっほっほっ
」

ウキウキと弾んだ様子で、高らかに宣言した。

「「「「「」」」」」」

袁紹の宣言に諸侯たちが微妙な沈黙を提供する中・・・

「・・・話にならない。」

と、常人では聞こえない囁きが音響視力で耳に飛び込んできた。

目を声のした方に向けてみると、曹操の後ろにいる男からみたいだ。

「華琳、これ以上は時間の無駄だ。後のことは総大将とやらに任せて、陣に戻ろう。」

「そうね。」

と、つぶやき曹操達は出口の方に向かう。

「袁紹、私たちは陣に戻るわ。進軍や軍の配備などは総大将のあなたが決めていいから、決定事項は後から伝えてちょうだい。」

と、軍議の場を後にしていった。

他の諸侯がぼかんとしていると、冥琳が立ち上がり・・・

「私たちも自陣に戻らせてもらおう。曹操殿と同様、作戦は後ほど通達してくればそれでよい。行くぞ、セツナ。」

切れ味鋭く言い捨てると、さつさと出口に向かって闊歩する。

あわてて立ち上がり、冥琳の後を追う。

軍議が終わったので、少しばかり気持ちが良い。

後ろからは、出ていった二人を非難する声が音響視力で聞こえてきた。

・・・まあ、いいさ。他で挽回すればいいことさ。

冥琳の隣に並び、足取り軽く歩き進める。

「まったく・・・あんなのが総大将だなんて世も末だな。」

「我々には関係ないさ。私たちは、出来ることをするだけなのだからな。・・・まあ、私も同意見だがな。」

苦笑気味に冥琳も袁紹を批評する。

「・・・それでさっき聞き損ねたことだが・・・お前の信念とは何なのだ？我々の掲げている思想と背反するぐらいだからな。すこし興味がある。」

先ほど言いかけて言えなかった事を聞いてきた。

信念ねえ・・・代々伝わるものに俺が好きで付け加えている奴を人に言うのは少し気が引ける。

しかし、俺を理解してもらえるにはちょうどいい機会でもあるし・・・

「・・・そうだな。少し長くなるけどいいか？」

「構わん、どうせ諸侯の兵を見がてら、回り道をするつもりだ。」

「・・・わかった。・・・俺の信念は・・・」

父や師匠からの教え、幼い頃から守っていること、大戦中に感じ改めたこと・・・信念に当たることを全て冥琳に話した。

冥琳は、静かに時折相づちを打ちながら俺の話聞いてくれた。

子どもが聞いても分からないし、大人が聞いたら一笑され、現実を知っている奴が聞いたら嫌悪するような信念である。

「・・・という訳なんだ。わかってくれたか？」

話を聞き終えた冥琳は、ああ、と一言相づちを打つ。

自分の信念を言葉にして言ったのは初めてだな・・・他の奴らは言わずとも分かっているから誰も聞いてこなかったな・・・

「セツナ、一つ言わせてもらおう・・・その信念はあまりにもバカバカしい。」

鋭い目をこちらに向け、俺の信念を非難してくる冥琳。

・・・いや、代々伝わる信念を非難しているのではなく、俺の思っている信念を批難しているのだろう。

「そんな生き方をしている・・・辛くないのか？ 苦しくないのか？ 人は自分が一番大切だと分かっているはずだ。・・・なのに、なぜお前は自分を犠牲にする！？」

「・・・今の生き方に辛さや苦しさを感じたことはない。感じたのは・・・悲しみだけだ。仲間を失い、親が殺され、そして・・・自らの手で人を殺してきたんだ。失われた仲間の命と殺してきた奴らの分まで生き、生きることと罪を償っている。・・・それが人を殺し、仲間を失ってきた俺に課せられた・・・」

冥琳の方に向き直り、哀しげとも虚ろげとも取れる目で言い終えた。

「責務なんだ。」

「あまりにもバカバカしい！ そのただけに生きているだなんて・・・自分を犠牲にしてまで他人を助けたいというのか！？」

髪を振りかざして、冥琳はセツナの生き方に激しく激昂した。

他人が生き長らえるなら自分を殺し、他人を救えるなら自らの命もかける。

普通の人からしたら、あまりにもおかしいと見えるだろう。

「そこまでは言っていない。見ず知らずの他人を救うほど俺は人間が出来ていないからな。けどな・・・俺の命で大切な仲間を救えるなら・・・命だって捨てる覚悟を持っている！」

「・・・っ！」

冥琳は驚愕した。この男は本気で言っているのだと・・・目には不屈の光が宿っているのだから。

「そんな大層なこと言っているけど、昔は俺もめっちゃ弱かったんだぜ？今も弱いけどな・・・そこらのゴロツキにも負けるくらい弱かった・・・」

子どもの頃は、喧嘩はしなかったが10歳の時に始めて喧嘩し、負けた。自分の力のなさを痛感し、親父に頼んで稽古をつけてもらうようになったが、それでも負け続けた。

稽古でつけた仮初めの自信を負けて崩されるの毎日だった。その毎日に終止符を打ったのは士官学校に入っすぐのことだった。

喧嘩していた同期の仲裁に入って、気づいたら三つ巴の喧嘩となり二人を制止ながら、勝った。

そこからだろう。勝つことに執着し、負けるなら死んだ方がマシと思うようになったのは・・・

士官学校で誰よりも努力をし、その結果が主席で卒業し、いきなりMSパイロットの座を勝ち取ったのだ。

しかし・・・士官学校で備わった考えは間違っていた。

自分のことしか考えていなくて、周りの視野が狭くなっていたのだ。

自分が勝つために、何人もの仲間を犠牲にしてきたことを初陣であった戦場で知った。

今の信念にたどり着いたのも、そのころからだ。

「人は一人では得るものがない。仲間がいるからこそ得るものがあり、そのために仲間を守る。」

その信念こそが、今の俺を形成しているのだ。

俺は、一つの勝利を得るために大勢の仲間を失い、一つの敗北を得るために仲間を守った。

「そんなに謙遜するな。昔はどうかは知らないが、今は十分強いではないか？」

「そんなことないって、今の弱さ。・・・なぜかってっ」

そこで、自陣の前にたどり着いた。

これ以上冥琳と一緒にいると雪蓮に何を言われるか分からない。

背中を向け、挨拶代わりに親指を立てる。

「自分に弱いからな！」

と言い残し、冥琳を置いて自分の荷物を取りに行った。

天幕の中に入り、中で眠っている雪蓮を一見し、自分の背囊を持ち上げた。

・・・何となく荒らされた形跡があるが、気にしない方向で行こう。

「・・・雪蓮は寝ているようだな？」

あとから天幕に入ってきた冥琳も雪蓮の姿を見て、あきれたように苦笑を浮かべる。

心なしか、雪蓮はうなされているように見えた。

「ああ・・・少しうなされているようだが？」

「おや？仲違いしていても心配はするのだな？」

意地悪く冥琳が問いかけてくる。

もう意地の張り合いだけだからな・・・心配はするぞ。

「心配はするさ。もう意地の張り合いだけだからな・・・キツカケがあれば俺から謝ろうと思っている。」

そのキツカケがうまく作れない。普段受け身になっているだけあって、恋愛下手であるセツナであった。

寝ている雪蓮の髪を一撫でし、天幕から出る。

「じゃあ、自分の場所に戻るよ。そろそろ部下達も戻ってくるしな・・・作戦の伝達が来たら使いをよこしてくれ。」

「わかった。いつでも出発できるようにしておいてくれ。」

冥琳は手を振り、見送ってくれた。

手を振り返しながら、自分の天幕の場所に向かっていく。

三十秒もしないうちに着き、背囊を置き、それを枕にして横になる。考えるのは、うなされていた雪蓮のことだ。

何にうなされているのか分からない。額には汗が浮かんでいたし、目尻には涙が溜まっていたような気がする。

寝ている相手に俺は何も出来ない。

ただただ心配になるだけ……

そうこうしているうちに、部下達が各々の任務を果たして帰ってきた……

「っ！？」

私は、悪夢から逃れるように跳ね起きた。息は全力疾走したかのよう荒い。

体には、じつとりと汗が浮かび目尻には涙が溜まっていた。

冥琳には悟られないように袖で涙を拭き、汗をぬぐう。

……何で、セツナの夢なんて見たのだろう？

息を整えている間に冥琳が私の傍にやってきた。

「やっと起きたか・・・気分はどうだ？」

持っていた筒を渡してくる。おそらく中身は水だろう。

「最悪ね・・・」

私はそれを受け取り、ゆっくりと飲み干す。

冷たい水が私の息を落ち着ける手助けをした。

「どんな夢を見ていたのだ？」

「んくつ・・・んくつ・・・プハア・・・セツナが・・・私を拒絶して、他の女の所に帰って行く夢だったわ。まあ、別に何ともないけど？」

「ほお？それはまた、おもしろそうな夢ではないか？だいぶつなされていたがな？」

「っ!？」

見られていた!？

そういえば、セツナの荷物もない!？

もう帰ってきたって事？

「うなされているお前を見て、セツナも心配していたぞ？」

「・・・セツナが？」

仲違いしていても私のことを心配してくれるセツナのことを、少し見直した。

「ふふっ・・・これを機に仲直りしたらどうだ？向こうも機をうかがっているぞ？」

「・・・別に冥琳には関係ないじゃない。それより、手に持っている文は何？」

別に人に言われて、行くことはない。

自分から行ってこそ意味があるのだ。

しかし・・・さっきの夢は本当に怖かった。

セツナが天の女を連れてきて、「これが答えだ。俺は天に帰る」と言い、私たちを一方的において天に帰ろうとしていた。

私はそれを必死になって止めるも、セツナは突き放してくる。

絶望感に包まれ耐えきれなくなり、私はその女を斬った。

女が倒れていく中、セツナが、「それがお前の答えか」と拳を振りかざしながら問いかけてくる。

私は答える間もなく、顔を粉碎されたところで目が覚めた。

あれは本当に怖かった・・・あのときのセツナの顔はまさに鬼神だった。

思い出すと悪寒が走り、ブルルツと体が震える。

そんな私の様子に眉をひそめるが、構わず冥琳は用件を言った。

「袁紹からの作戦内容の文だ・・・まあ、これは軍師として作戦とは言いたくないが・・・」

「どんな作戦なの？」

冥琳が作戦と言いたくないほどのものだから、よほど単純なものなんだろう。

「連合軍は一致団結して洛陽を目指す。途中にある？水関と虎牢関を力ずくで押し通って、華麗に進軍しますわ・・・とのことだ。」

「・・・はあ？何それ？そんな策もなしに力ずくで通るって・・・ここまでアホだとは思ってもいなかった。」

あの強固な関所を力ずくで通るバカはどこにも居ないと思っていたんだけど・・・

「・・・で、誰が先陣を取るの？」

「劉備の軍が取ることに決まった・・・まあ、捨て駒でしょうね。」

「あら・・・まあ、状況的にそうなるか。」

まだまだ勢力の弱い劉備ではそれぐらいの役目しか与えられないであらう。

しかし・・・捨て駒ではなく、前線としての機能をしっかりと果たせば、大きな戦果を挙げることも出来る。

「まあね。しかしこの状況を乗り越えれば、あの勢力は大きくなる
と見た。」

「その根拠は？」

「天の時と人の和。その二つをこの目で確認したからよ。関羽、張飛と言った豪傑を従え、知将も多く揃っている。また、前の大乱を利用して成り上がれる天運もある。」

「天下を担う英雄の一人になり得るって事ね。」

確かにあの子は義勇兵から成り上がっている。このまま順調に行けばもっと上に上がることは間違いないであらう。

しかし、同時にそれは孫呉の脅威にもなるということだ。

さて・・・どうしたものか。

「ああ、しかし曹操よりは組みやすからう。」

「味方に引き入れる？」

脅威となるなら味方にする方が益が出るだらう。

勢力の弱い劉備にとっても願ったり敵つたりの状況にもなる。

二人の間に不利益なことは何一つない。

「可能だろうな。」

「ふむ・・・よし。なら劉備を助けましょうか？」

「・・・恩を売るといふことか。わかった、すでに劉備の所には使者を出しているからすぐに向かおう。」

毎回思うが、仕事が速すぎる。

・・・何でも手際がいいわね。冥琳って。

「周瑜様。」

「何だ？」

使いの者が冥琳の傍にやってきた。

おそらく劉備の返事を伝えに来たのであろう。

しかし、思惑が少しはずれた。

「セツナ様は一緒には行かないと・・・行くなら二人で行ってくださいとの事です」

「そうか・・・作戦内容については？」

「それはただ苦笑するだけでした。」

「……わかった。下がっていいぞ」

「それでは、失礼します。」

使いの者はそそくさとその場を後にした。

「……セツナも連れて行くつもりだったの？」

「ああ、こういったことを経験させようと思ってな……ダメだったか？」

「……別に。それより早く行きましょう。」

立ち上がり、天幕から出る。

燦々と降り注ぐ日が少しまぶしく目を細めるも、気持ちいいものだった。

冥琳を放って、先にゆっくりと歩き出す。後からちゃんと追いつくであろう。

周りを見渡すと、セツナのいる天幕が目に入ってきた。

部下であろう四人を囲むように座らせ、何や説いているようだ。

なぜか、その姿が少し似合っていると思うがすぐに打ち消す。

何せ、腐っても武人だ。人に教えるといった事はセツナには似合わない。

その光景から、目線を切り、追いついてきた冥琳と一緒に劉備の陣に向かった……

帰ってきた部下達に、戦いの何たるかを説いていたら、冥琳からの使いが来た。

内容は、作戦内容の通達と劉備達の所に行くが、一緒に来ないかという用件だった。

俺はそれを断る旨を伝えて、その使いを下がらせた。

「すまないな。」

「いえ、自分たちは構いません」

四人はそれぞれくつろいだ姿勢で、返事を返してくれた。

この四人は、初代四部隊の隊長である。

今回は経験をさせるために、同行させた。その途上で、いろいろなことを教えていき、吸収させるのが今回の目的である。

「では、もう一度聞こうか？……戦場において、自分が生き残るのに一番大切なものはなんだと思う？……張凱から行こうか？」

真ん中に座っていた男、張凱は少し姿勢をただし、俺の問いに答え
てくる。

張凱は、部隊の中核になる豪力隊の隊長である。体は俺より少しで
かく、それほど骨格はごつくない。年は俺より一つ上の22歳と言
っていた。

性格は、実直で俺の言うことを素直に受け止め、堅実に実行してく
れる。またリーダーシップがとれるため、他の隊の隊長との折り合
いも良好である。隊長に抜擢された理由はもつとも能力が高く、ま
たリーダーシップがとれるところが決定打となった。

「・・・私は、体力が一番大切だと思います。やはり疲れてくると
隙が大きくなりますのでそこを突かれて死ぬ、なんてことは多々あ
りますから。」

「そうか・・・劉仙は？」

片膝を立てて、こちらをすつと見据えて座っている男、劉仙はその
体勢のまま、返事を返した。口はマスクで覆われていて何を喋って
いるかは分からなかった。

劉仙は、独特の暗さを持っている男だ。瘦躯の猫背で無口を貫き通
し、常に最小限の返事しか返してこない。年はまだ19歳という若
さで迅速隊の隊長に抜擢されたのである。抜擢した理由はやはり、
隠密行動能力の高さとスキルの良さが一番の理由だ。

彼から少し話は聞いた限り、幼少の頃から暗殺者として仕立て上げ
られるが、暗殺に失敗し逃亡している身であるらしい。軍に入った
のはちょうどいい目くらましであるとのことだ。マスクをしている

のもそれが関係していると言つことだ。

「・・・迅さ・・・敵より早く斬ることで自分が生き残れる・・・」

「そうだな・・・黄烈？」

暇そつにあくびをしている男、黄烈はだるそつに顔をこちらに向けて、返事をした。

黄烈は、表裏がはつきりとした性格の男である。今はこつやつてだらけているが、それはただ緊張感がないだけで戦闘になれば冷静に敵を殺せる狩人となる男だ。そのことはすでに実際にやってみて、立証されている。

体は至つて標準、背は少し高めでかなりの美男子である。年は25歳とのことだ。年上なので無礼講を許している。蒼穹隊の隊長に抜擢された理由は、目の良さと空間把握能力の高さ、持ち前の社交性でうまく隊を統制できるであろうと期待を込めて抜擢した。

「やつぱ、力じゃねえの？力ない者は戦場で生き残れる通りはないし?。」

「もつともだな・・・満貫?。」

仏頂面で、待ちかまえていた男、満貫がどつしりとした声では返事をする。

最後の男、満貫は筋骨隆々とした偉丈夫である。背は俺よりあり、下あごにひげを蓄えている。性格はとにかく堅実さを求め、守りに関しては俺より達観している部分が多度多度ある。端から見れば強

顔だが、意外に面倒見がよく三人の親父代わりにもなっている。年は31歳だそうだ。

黄巾の乱を生き抜いた猛者であり、官軍が解体され路頭に迷っていたところ、この募兵を見つけたということだ。鋼盾隊の隊長に抜擢された理由は、守りに対しての考えと経験が部隊を引っ張ってくれると思ったからだ。

「俺は、運だと思うな。運が悪い奴から死んでいくことは確かだからな。」

ちなみに年上なので満貫も無礼講を許している。

「まあな・・・さて。」

みんなの出してくれた答えは、少なからず正解である。

どれが欠けても、戦場で生き残ることは出来ないしな・・・

しかし、旧フラッシュ・ファントムのカリキュラムを受けている俺にとって、最終的に物をいうのは・・・

「みんなの答えは少なからず正解だ。だけど、しぶとく生き残る決め手になるのは張凱の言った体力になる。迅さを維持するのにも体力が必要だし力を出し続けるのにも体力が必要になってくる。逃げるにも走りつづけないといけないから絶対に体力がものを言ってくる。走れなくなったものから殺されていくのが戦場だ。まあ、満貫の言った運も重要な要素となるがな。」

それを考慮して、俺の経験してきたことを考えてみると・・・

どうも悪運が強すぎるみたいだな。血を流しすぎて死にける経験もしたし、海に流されても運良く海洋の鉄食性原生種に遭遇せずに海岸に着きあまつさえ医者に連れてかれるという経験もした。

「じゃあ、今やっている訓練は体力をつけるために毎日やってんのか？」

黄烈が不満そうな顔で質問してきた。

ここ二週間、隊の訓練はほぼ基礎体力と基礎筋力の向上を重点にした訓練メニューをやらせてきた。地味で且つ、つらいものなので黄烈の顔もつなずける。

置いてきたほかの隊員には、今まで通りのメニューを渡して、徹底的にやるようにと言ってあるが・・・ちゃんとやっているのだろうか？

「まあ、そうだな。あと一ヶ月もすれば、各隊独自の訓練を開始するからそれまで我慢してくれないか？」

「「「「はっ！」「」「」

四人から威勢のいい返事が返ってくる

「・・・ああ、それと、返ったら居残り組に訓練をちゃんとやっていたか確認するための試験するから、おまえたちも覚悟しておけよ？」

「「「「はっ！」「」「」

一気にやる気を感じさせない返事が出てきた。

セツナは、その様子をケラケラと笑い、四人も釣られて笑い始めた。ひとしきり笑ったところで、セツナは宿題を四人に言い渡した

「とりあえずお前達は戦いを見て、自分たちの隊はこの状況なら有効に働ける、この状況は満足に動けないなどを考える。俺が教えるだけでは無理があるからな。自分で考えてこそ物になるんだ。あと、ちよつとしたことでも思いついたら、俺に言うこと。他人の意見で新たなことが俺が思いつくかも知れないからだ。いいか？」

「分かりました！」

「・・・御意」

「あいよ。」

「了解！」

宿題を、言い渡したところで、天幕にまた使いの者が入ってきた。

エージェント・ノートで時間を見てみると、かれこれ小一時間がたっていた。

劉備との会談が終わってもいい頃だな・・・あの子は、器量があるから多分同盟なんか結んでいるだろうな。

「周瑜様からの伝言です。出陣準備を開始しろとのことです。」

「わかった。．．．よし、天幕を片付けて荷物をまとめる。」

「『はっ！』」

四人は、慌ただしく準備を始めた。

俺は、すでにまとめてあった背嚢を背負い、空雷の元に向かう。あいつの調子も見えておかないと．．．今ではほとんど体の一部だからな。

せわしく出陣準備を始め、きっかり一刻後．．．

出陣準備を終えた俺たちは、反董卓連合の総大将になった袁紹の脱力しそうな命令を聞いて進軍を始めた。

その命令が．．．

「さあ、皆さん！雄々しく！勇ましく！華麗に出陣しますわよ！」

軍隊というもので、これで脱力しない奴は新兵かバカの二人しかないだろう。

先に聞いていたとおり、先鋒は劉備の軍が、その後ろに曹操と雪蓮が付く形で？水関に向かって、進軍を始めたのだった．．．

第四話 対立、対面 【中編】（後書き）

とりあえず中書きです。

次は、戦闘シーンを重厚に書き上げたいと思います。

・・・なんか、自分のハードルを上げたような気が・・・

まあ、気長に待っていてください。なるべく早く更新するようにつし
ます。

それでは

第四話 対立、対面 【？水関攻略編】（前書き）

作者「皆さん、約一ヶ月ぶりに久しぶりです！」

セツナ「やれやれ・・・やっとできあがったのか・・・」

雪蓮「ここまで作るのに、どれだけかかっているのよ・・・」

蓮華「作者・・・もうちょっと頑張ろう？」

作者「うるさい・・・いろいろと難しい時期に入っていたんだよ！
とりあえず投げずに書いたのだからいいでしょ！？」

雪蓮「・・・投げるつもりだったの？（シャキンッ）」

作者「いえ、滅相もない！実は、戦闘シーンでちょっと手こずって
いただけさ」

セツナ「たかが、あれぐらいで手こずるって・・・先が思いやられ
るな。」

蓮華「ま、まあ、作者も頑張っていることだし・・・お疲れ様。」

作者「蓮華だけだ・・・そうやっていつてくれるのは・・・さて、
今回はとある小説からゲストを招いています！」

セツナ・雪蓮・蓮華「おっっ！」

作者「それでは・・・今回魔法少女リリカルなのは ～時の旅人～

からお越しいただいた・・・ファイアちゃんをつっ!」

ファイア「だ〜れがつ、ちゃんずけしろってえ〜!」

ゴスグツ!!

作者「グボラツ!・・・し、失礼しました。ファイア君です!みんな拍手!」

パチパチパチッ!

ファイア「どうも!先ほど紹介された高町ファイアです。よろしく!」

セツナ「へえ・・・結構小さいな。・・・何歳なんだ?」

ファイア「小さい言うな!・・・9歳です。」

雪蓮「ええ〜、9歳なの!?かわいい〜(ナデナデ)」

ファイア「頭を撫でるな〜。」

作者「さて・・・俺はファイア君のために抹茶を用意するから、ちょっと席外すわ・・・みんな、くれぐれも可愛がるなよ?」

セツナ・雪蓮・蓮華「は〜い(ニヤリ)」

作者はドスドスと奥に下がっていく。

セツナ「・・・しかし、見れば見るほど女の子だな。」

雪蓮「ホントよね〜（ナデナデ）」

蓮華「・・・可愛い（控えめにナデナデ）」

ファイア「頭を撫でるな〜」

セツナ「これで・・・女装させても、違和感はないな。」

雪蓮「いつそ、女だったりして?」

ファイア「・・・」

蓮華「ファイア。今日からあなたは私の妹ってことで!」

ファイア「・・・ウガーっ!」

セツナ「うわっ!?何だこいつ!?!」

雪蓮「いきなりキレたわよ!?!」

蓮華「・・・それでも可愛い。」

ファイア「俺は女じゃない!男なんだ〜!!!」

作者「戻ってきたよ〜・・・って、あゝあ、あれほど可愛いがる鳴っていつておいたのに〜」

ファイア「確信犯だな!? 確信犯なんだな!?!」

作者「・・・モチ!」

ファイア「殺すっ！」

作者「ふっ……トレース・オン 投影、開始！」

ジャララ、ジャララッ！

ガシャンッ！ガシャン！ガシャンッ！

雪蓮「エフェクト音、雑ね……」

セツナ「そこに突っ込むなよ……」

ファイア「なっ!?!」

作者「ふふっ、エルキドゥ 対神兵装、神の鎖を投影した。お前の動きは封じた。

」

ファイア「くそっ！離せ！」

作者「もうちょっと頭を冷やしたら、離してやるよ。」

セツナ「それよりも……よく違う作品からつれてこれたな？」

作者「ファイア君の作者さんとは鬼ダチだからね。ゲストの件も脅っ・
・頼んだら快く承知してくれたよ？」

雪蓮「今なんか、脅したとかいうキーワードが……」

作者「何言ってるんだ？雪蓮？幻聴じゃないのか？」

雪蓮「そ、そうよね!」

ファイア「それより・・・離してくれないか?」

作者「ああ・・・悪い悪い」

ジャラジャラ・・・

ファイア「ふう・・・やっと解かれたか・・・」

作者「まあ、抹茶でも飲んで落ち着け。」

ファイア「サンキュー・・・ああ、うまい・・・」

作者「そういえば、さっきファイア君の作者から小包が届いたんだけど・・・」

蓮華「けっこう大きいわね?何が入っているのかしら?」

ファイア「あの駄作者からだから、ロクでもない物でも・・・」

ガサゴソ・・・

ファイア「・・・(滝汗)」

パタン・・・

作者・セツナ・雪蓮・蓮華「なにがはいつていた(んだ／＼)?」

ファイア「何でもない！こんな物、燃やしてやる！！」

作者「・・・セツナ。」

セツナ「OK！（ガシッ）」

セツナがファイアを渾身の力でドラゴンスリーパーに持ち込んだ！

ファイア「H A ・ N A ・ S E ！」

雪蓮「さくで、何が入っているのかな？」

ガサゴソ・・・パカッ。

蓮華「これって・・・コスプレ衣装？しかもゴスロリの・・・」

雪蓮「ファイア君がこれ着たら・・・ハアハアッ!？」

作者「雪蓮・・・目がイってるぞ?」

雪蓮「はっ・・・ごめんごめん！でも・・・絶対似合うと思うわ。」

ファイア「モガーっ！モガモガ、モガーっ！（うるさい！誰が着るか！）」

セツナ「何言ってるかわかんねえな？（ギシギシ）」

締め上げているにもかかわらず、ファイアがドラゴンスリーパーを外した！

ファイア「こんな所にまで来て、女装なんて出来るか〜！（ダツ！）」

雪蓮「あつ！？逃げた！」

作者「任せろ！トレース・オン投影、開始！」

セツナ「今更ながら説明。作者はFate/stay nightの大ファンでもある。」

シユルルルツ！

蓮華「相変わらず、雑ね・・・」

作者「いや、だからエフェクト音に突っ込まないで！」

ガシツ！」

ファイア「モガーッ！」

セツナ「へえ・・・マグダラの聖骸布が投影したのか。」

作者「これなら、エルキトウ神の鎖より確實だからな。さ〜て、ファイア君？お楽しみの時間だ・・・」

ファイア「モガーッ！（やめろっ！）」

作者「何言ってるかわかんないなコスチューム・チェンジ。それじゃ、行きますか。作者ご都合スキル発動！！CT！！！！」

ボンツ！

煙の中から、とても可愛らしい女の子が・・・

ファイア「女じゃない!」

雪蓮「ナレーションに突っ込んでどうするのよ・・・」

ファイア「くそっ・・・またこれかよ!？」

セツナ「似合っているぞ!今写真撮るからな!(パシャパシャ!)」

ファイア「やめろ!こんな俺を撮るな!」

雪蓮「女装すると、一段と・・・ハアハアツ!？」

ファイア「そんな目で見ないで!？」

蓮華「止めなさい!セツナ、お姉様!」

ファイア「うう・・・やっぱり味方してくれるのは蓮華さんだけか・・・」

蓮華「私の大事な妹になにするの!？」

ファイア「・・・ですよね」

作者「・・・諦める、お前の運命はもう・・・」

ファイア「お前のせいでこうなったんだらう!」

ドスツ！」

作者「ゴフツ！！？そん．．．な．．．たかが．．．ボディ．．．ブロー．．．一．．．発で．．．（ガクンッ）」

ファイア「お前らもいい加減にしるおお〜！（ブチッ！！）」

その後、ファイアと三人の戦いでこの前書き会場は跡形もなく壊されていった．．．

作者「．．．さて、皆さんが復活したところで、タイトルコールに行きたいと思います〜！」

ファイア「結局逃げない．．．」

セツナ「安心しろ！写真はFM3に貼っておくから！」

ファイア「．．．（プチッ！」

作者「こらこら、すぐにキレない。それじゃ．．．せーの！」

セツナ・ファイア・雪蓮・蓮華「それでは、真・恋姫十無双〜乙女繚乱 三国志演義〜 呉書 虎狼天下覇道の巻 第四話 対立、対面【？水関攻略編】どうぞ閲覧してください！」

ファイア「魔法少女リリカルなのは〜時の旅人〜 もよろしくな。」

作者「最後に後書きの方で連絡がありますんで見ていってくださいな〜」

第四話 対立、対面 【？水関攻略編】

進軍を開始した俺たちは、途上馬上で作戦会議を開いた。

「なあ、冥琳。？水関にいる兵はどのくらいなんだ？」

「ふむ・・・今？水関にいる兵の数はおよそ八万から十万。それを率いるのは騎将・張遼と猛将・華雄の二人だ。」

張遼に華雄か・・・ちよつとしんどい戦いになりそうだな。

ましてや、難攻不落と言われている？水関に立て籠もっているのだ。防衛能力は類を見ないだろうな・・・

「セツナ、天の国では難攻不落と言われている砦はどうやって落としていた？」

「・・・こつちじゃ使えないものだから、聞いても意味ないぞ？」

「構わん。参考にする程度だ。」

参考にするって・・・出来ないぞ。たぶん・・・

とりあえず話すことにした。

難攻不落の砦・・・俺たちの世界ではMSがある以上それはなかなか成り立たない物である。

まず、迎撃能力が秀でていないといけないし、砲撃系MSの砲撃に

も耐える強固な壁も必要になってくる。対空迎撃に関しても相当レベルの高い物でないといけない。

その場合、まずデモリッション・ウェポンなどで壁を破壊。次に迎撃システムを沈黙させた後総力を持って攻勢に出るか、少数精鋭のMS小隊を内部に進入させ、動力部を破壊して内から壊すという策が基本である。

それを、説明を交えながら話していくと案の定・・・

「話にならんな。」

「だろ？ましてや、今回は大がかりな城壁破壊兵器が持つて行けない状況だからなおさらだ。」

「ふむ・・・では、こちらのやり方ではどうする？」

「・・・無いな。はっきり言って前提が間違っている。」

難攻不落と言われている砦に、八万から十万の兵と有能な将が立て籠もっている時点ですでに打つ手なしだ。正面から向かっていくなど自殺行為でしかない。

「正論だ。では、そこに持つて行くまでの棋譜を作成するか。」

「ああ、そっちの方が正しい。まず兵力と砦、この二つを切り離す策を考える。次に切り離れた兵力と砦を双方に対処する策を考える。最後にその兵力・・・特に張遼と華雄をどう対応するか考えた上で残りの兵をどう対処するための策と砦をどう落とすかという策を考える。・・・これでどうだ？」

「華雄つて・・・母様にコテンパンにやられちゃった武将じゃない・・・セツナでも楽に倒せるんじゃないの？」

明らかな挑発。不敵な目で俺に言葉を投げかけてくる雪蓮をにらみ返す。

しかし・・・おもしろい。ここは挑発に乗ってやろうじゃないか。

「そうかもな。一騎打ちでやる機会があったら、一撃で倒してやるよ。」

不敵に笑い返して、そっくりそのまま挑発を仕返す。

「はっ！出来るものなら、やってみなさい！」

それだけ言い返し、雪蓮はそっぽを向いた。

まあ、いい。それよりも・・・華雄か。

正史では、孫堅の援護に来た夏侯惇が一合も受けずに切り捨てたという。

それから考えれば、それほどでもないと考えるのが普通だが・・・

だが、ここは平行世界。なんかしらの因果で華雄の武は格段に上がっているかも知れない。

考えてみると、体の芯から震えが来る。これは・・・武者震いの類だ。

一 武人として、強い敵と戦ってみたい。

師匠と先生達の姿を見て、自然とその考えに感化され、そして今分かった。

強い敵と戦う。つまり、自分の力を試すことができ、またさらに武の底を押し上げてくれる存在になりうるということなんだ。

俺にもそういう機会がよくあった。しかし、このような高揚感はなく全て義務感と責務で戦っていたことがほとんどだ。

偉大なる師達の考えに感服し、改めて心の中で礼をする。

話を戻そう・・・

「あの時は、華雄の同僚が暴走し、部隊に混乱が来した。その隙を文台様につかれて敗走したのだが・・・あのときの戦いを基本にして、華雄を推し量るのは危険だろう。」

確かに・・・人は反省して成長する生き物だ。過去に手痛い目に遇ってるなら、それを克服していると見ていいだろう。

しかし・・・同じ轍を踏む場合もある。俺たちの世界ではそれが日常茶飯事のようにある。

だが、それには訳がある。同じ轍を踏ませるために巧妙にその轍を隠してある場合が多数を占めているのだ。

それでも、踏まない奴は踏まない。そういった奴が戦場で生き残っ

ていける存在なのだ。

「でもさー、それを差し引いても華雄ってそんなに有能な武将だったっけ？」

「こと武に関してはな」

ドクンッ！

その言葉を聞いて、俺の胸は一段と高鳴る。

血が滾ってくる。しかし、すぐに押さえる。

滾らせるのは、戦うときで十分だ・・・落ち着け。

「ふむ・・・厄介ねえ・・・」

「武に関して、か・・・ということとは、それだけ誇り高いってことだろ？祭さんとか見ていると、自分の信念や誇りを凄く大切にしている気がするし・・・」

「ああ、武官にとって、武こそが己をもっとも輝かしめる要素だからな。」

やはりそうか・・・俺も誇りとか信念を汚されたら怒るしな・・・

しかし、そのせいで自分が出ていき作戦などが失敗に終わるようなことは絶対にしない。

・・・祭さんとかは、かなりの確率でやりそうだけどね。

俺の場合、耐える。耐えに耐えて、その罵倒をした敵を作戰実行中にたたき殺す。それならば、作戰も成功し、鬱憤も晴らせる。

「なら、その心理を逆手にとって、おびき出すことは出来ないのか？」

「例えば？」

「やはり、罵倒するっていうのが妥当だろう。罵倒されて起こって出てきたところをタコ殴りにするとか？」

「ふむ・・・悪くはないな。だが、もう一工夫欲しいところだ。」

確かに・・・しかし、俺程度じゃ、このぐらいしか思いつかない。ベルナデイスさんやナナ姐さん、トゥルクならもつと画期的な案が出てくるが、俺の頭では到底無理がある。

ライティックスの仕官として、それなりに戦術理論を備えているがやはり「普通の」エキスパートの分類になる。天賦の才を持っている物には絶対に敵わない。

「ただ罵っただけで突出するような愚か者ならば、？水関の守りなど任せられるはずが無かろう？」

「それもそうだな。」

「キツカケを作らねばならないな。例えば・・・十分に罵り、愚弄

した後、戦いを仕掛けて退いてみる……てのはどうだ？」

「それまでの罵声で鬱憤が溜まっているから、出てきそうではあるわね。冥琳ってば、性格悪いんだから」

「策と言ってもらおうか。……ただこの策にも問題点がいくつかある。……まず第一点、罵倒する人間の質だ。」

ああ、なるほどな。

罵倒する側の人間が無名では一蹴されるだけに終わる。有名であればあるほど、効果が上がってくるのが罵倒だ。

しかし、俺たちの軍で有名であるのは……

「……今セツナが考えているとおり、我が軍で大陸中に名の知れた者は二人しかいない。」

「人の心を勝手に読まないでくれるか？」

読まれると結構へこむんだが……

「セツナの場合、顔に出やすいからな。」

「そうかな……？話は戻すけど、俺は華雄のことは知らないから無理だな。」

「私がやっていいならやるけど？」

雪蓮が子どものような好奇心を全開にして手を挙げる。

・・・こうしていれば可愛いもんなんだけどな。

「却下よ。」

それを冥琳があっさりと切り捨てる。

「ええ〜面白そうなのに」

「却下」

「はあ〜い・・・」

言い終える前に再度念を押して切り捨てた。

不満たらたらな返事を返し、雪蓮は少しシヨボンと顔を下向ける。

ふふっ・・・やはり可愛い分類だな。

トウルクとはまた違う可愛さ。やはり俺はそこに惹かれているのだ。

「雪蓮はほつといて・・・第二の問題点は、あからさまにしゃしゃり出るのはまずい・・・袁術に勘ぐられる可能性もある。」

「そつちにも気を配っておかないといけないか・・・」

あんまり際だつて行動すると、袁術に不穏な動きがあると感じられるがあるかも知れない。

（しかし・・・あの嬢ちゃんが、そこまでの知恵が回るんだろうか

?)

「・・・おそらく回るだろう。子どもなりに皇帝になりたいと言っているのだ。」

「周りに障害があつてはたまらない。だから、俺たちの独立にも気を配っておかないといけないんだ。」

「・・・難しい話だな。」

「今は極力目立つ行動は控えねばならん。」

「それは分かる。じゃあ、どうするんだ？」

「だからこそ、劉備に会つたのだよ。」

「そつえば、劉備と会つていたんだな。」

「さつき作戦会議する前、冥琳に聞いた限り同盟を結ぶことが出来たつて言つていたけど・・・」

「・・・読めた。この作戦を劉備に伝えて、実行させるんだろ？」

「ええ、劉備軍ならうまくやるだろう。関羽、張飛がいるからな」

「だが、それだけだと劉備軍だけが危ない目に遭うんじゃないか？」

「初めはな。だがすぐに我らが駆けつけるさ。・・・理由は先鋒を支えるため、だ」

それならもつともな理由だから、袁術も合意せざるを得ない。

さすがによく考えている。

その場しのぎの言い訳する俺とは天と地のほどの差がある。

「それなら、袁術ちゃんの間目も誤魔化せる、か・・・じゃあ、それでいきましょう！」

「了解した。・・・だれがおるか。」

すぐさま伝令係が冥琳の元にやってきて、内容を伝える。

伝令はすぐに先行する劉備の元に走っていった。

「これでうまくいくといいのだが・・・まあ、なるようになるか。」

ひとりごちながらも、軍はそんな俺に関係なしに進んでいく。

ふと周りを見渡してみると・・・

荒野を埋め尽くす人の波。

風にはためく無数の旗。

MSの整列を見てきた俺にとって、違和感のある光景だが悪い気がしない。

今も昔も戦うのは、人であることに変わりはない。

それが剣と槍から、銃とMSに変化しただけのこと。

戦いの根底は一つも変わっていないのだから・・・

・・・決戦に向けて緊張が高まってきたのであった・・・

峡谷をいくつか抜けると、左右を絶壁に囲まれたただっ広い道に到着した。

目の前にはいかにも強固な城壁がそびえ立っている。

「ここが？水関か？」

「正確には今、我々の目の前にそびえ立っている砦のことを？水関というのだ。」

「へえ・・・」

絶壁の間にある道を塞ぐ目的で作られた巨大な城壁が敵を威圧するようにそびえ立っていた。

MSがあれば楽勝だろうな・・・

しかし、ここは古代中国。そんな甘い話があるわけが無く・・・

「難攻不落つても・・・よく分かるなあ。」

「包囲されることもなく、正面だけを防ぐだけでよい。しかも敵は部隊を展開できない・・・大陸にある関の内でも完璧な防御施設の一つだろうな。」

「・・・しんどい戦いになりそうだな。」

「まあ、なんとかなるでしょう。」

穩がのんきな声でお気楽な発言をする。

これがなんとかなら・・・結構凄いな。いろいろな意味で・・・

「お気楽だなあ・・・穩は。」

「眉間に皺を寄せてうーんとか唸っていても、現実是不変ならないですからねぇ。」

「そりゃそうだ。」

考えているだけでは、現実是不変ならない。行動してこそ現実が変えられる。

行動を起こさず、口先だけで生きている奴は、いざって時に役に立たないし、何も言わずとも行動していく奴は、何やっても頼もしい。つまり、男は黙って実行するほうがいいってことだ。

「穩の言う通り・・・さっさと作戦を実行に移しましょう。」

「分かったわ。じゃあ、私は劉備の所に行って、作戦の細かいこと

ろを相談してくるわ・・・雪蓮達は戦闘準備を。」

「了解・・・よろしくね。」

「ええ」

冥琳は、馬を前の方で戦闘配置に付いている劉備達の所に向かわせた。

向こうには、諸葛亮がいるから、細かく正確に作戦を修正してくることだろう。

・・・なんか、二人が頭で戦うと、別の意味で凄いことになりそうだな。

まあ、多分そんなことはないと思う。正史でも結局一度も相まみえることはなかったのだから。

「さて・・・準備に取りかかりましょうか？」

「御意。前曲は我らが仕りましょう」

思春・・・いたんだ。てつきり連華の方について行っていると思っていた。

「頼むわね。後は作戦の結果によって臨機応変に対応しましょ。」

「はっ」

「セツナ様は、どうするんですか？」

明命がもつともな質問してきた。

俺的には前線に出てもいいが、今回の位置は雪蓮の副将ということになっている。

ここで雪蓮が俺を動かしてくるかな？

「セツナは、今まで通り私の副将で行くわ。その方が勝手がいいしね。」

「雪蓮のことはしっかり守ってやるから安心しろ。」

表面上では一応普通に行っている。

やはりここでは雪蓮も大人だな。

「……そう願おう。では孫策様。我らは前曲の編成を行います」

「ん、よろしくー」

「御意！……ではです！」

思春と明命は後ろで待機している兵達に向かった指示を出し始めた。

慌ただしく兵達が動き始め、だんだん部隊が構成されていく。

……思春の俺に対する態度が未だに変わらないな。

会って少し立つのに、未だにつんけんとした態度で接してくる。

はっきり言って、結構きつい。

辺りを見回すと、穏もいつの間にか姿を消していた。

多分冥琳に付いていったのだろう。勉強熱心なことだ。

残っているのは俺と・・・

「・・・」

ぶすつとこちらを見てくる雪蓮だけだ。

・・・嫌な雰囲気だが、裏を返せばこれはチャンスだ。

俺が一言謝れば、全て解決する。

だが・・・

「・・・何っ？」

視線を向け話そうとした矢先にこれだ。

会話を拒絶するような問いかけに俺も少しカチンと来た。

「・・・どうして、今の状況で俺を雪蓮の副将に置いているんだ？」

「わからない？いつ、後ろからやられるか分からないからね。そのためよ」

「ふふつ、案外小心者なんだな。孫呉の王つて者は。」

「なんですって!」

売り言葉に買い言葉。

しかも、いつも制止役を買って出る冥琳達がないため、止める者は誰もいない。

ところが・・・

「ふう・・・いつまでも意地の張り合いしているもの疲れたわ。」

意外にも雪蓮から休戦を申し出てきた。

「まあな・・・」

「でも、私はあなたの行動は認めない。それでもあなたがそれを貫くっていつんなら・・・」

雪蓮が剣に手をかける。

その意味は、あんたが逃がしても私が斬るとい意思表示だろう。

「俺は・・・どんなときでも貫き通すよ。曲げるつもりは無い。」

「・・・偽善なのよ。戦場であれだけ人を殺しておいて!」

「・・・」

反論が出来ない。

実際にそうだ。街の悪党を生きて逃がしても、戦場で容赦なく敵を殺す。

明らかに矛盾している。

この板挟みは軍人になって何年も悩んで今も悩み続けているものだ。

「さっ、口喧嘩もおしまい。私たちも部隊の編制を急ぎましょ」

「・・・ああ」

雪蓮が鋭く兵に指示を出していく。

俺はそれを聞きながら、腰にかけてある手甲をつけていく。

が、その動作は緩慢でひどく重いものだ。

自分の理想と現実の違い・・・か。

そんなものはとっくの昔に分かっている。

だが、理想を追いかけて何が悪い。

手甲を締め直し、気合いを入れる。

今から戦闘なのだ。余計な考えは持ち込むな。

こうして、集中力を高めていった・・・

いよいよ？水関攻略作戦が始まる。

体内で練り上げられる内功。そして高まる集中力。

いつでもいける体勢を作っておく。体と精神の調子もいい。・・・
精神はどうか分からないが・・・

やがて、連合軍の本陣から戦闘開始の命令が下った。

俺はそれと同時に飛び出そうとするが・・・

「待て、セツナ。まだ戦闘は始まらない。」

「・・・そうでした。敵が出てきてからだったな。」

入れ込み過ぎた。ちょっとクールになろう。

内功をそのままに、集中力を弱める。

そして腰にかけてある弓を取り出し広げる。

今回の位置は後方支援だからな。あまり前に出すぎるのも考え物だ。

「もう少しすれば、関羽と張飛が前に進み出るだろう。」

「罵声を浴びせて、出てくるものかねえ？」

少しの知恵と理性があれば、簡単に耐えられてしまつからすこし不安だ。

場合によっては、長期戦に陥る可能性もある。

それはなるべく避けたいものだ。

「ようは華雄をどつやつて引きずり出すか、だ・・・華雄さえ引きずり出せば、それにつられて張遼も出てくるだろう」

まあ・・・そうだよな。

同僚が勝手にでて、止めないバカはそうはいない。

止める意味合いもかねて出てくるのが普通だろう。

「神速の騎将・張遼か・・・一度手合わせしてみたいわね。」

このお転婆姫と来たら、今の状況でいかにもと言うことを言っている。

張遼か・・・

正史では、遼州の出で呂布の配下、そして曹操の配下として知られている。武はあの武神・関羽と引けを取らず、知謀にも長けている。呉にとっては鬼将とも恐れられ、合肥の戦いがもつともその印象を強めている。また赤子をあやすために「遼来来」という言葉まで作られているほど有名である。

確かに一度戦つてみたいという気持ちは分かるが・・・

「却下。あなたは一度・・・華佗にでも血を抜いてもらった方がいいわね。」

「強い奴と戦いたいつて思うの、武人の習性なんだから仕方ないでしょ?」

「武人である前に王だつてこと、忘れないでね」

「はあくい・・・あーあ、つまんないなあ」

そんなことを体で表現するかのように深いため息をつく。

俺も冥琳の意見に賛成だ。

武人である前に王。

王が死んだら、元も子もない。戦闘関係は家臣に任せて欲しいものだが・・・

あいにく、この血気盛んな王は前に出ないと収まらない質らしい。

今ではあまり考えられない王の姿に、民はついていくのか・・・

かの有名なアーサー王と同様なカリスマを感じるな・・・

「セツナ」

「ん?なんだい?」

冥琳が不意にこちらに声をかけてきた。

まあ、この場合用件はあれぐらいしか思い当たらない。

「雪蓮がいつ暴走するか分からない・・・それをさりげなく止めに
入ってくれないか？」

「・・・わかってるよ。気が障らない程度に止めにはいるから。」

「あつ！雪蓮様、冥琳様！前線の方で動きがありそうですよ。」

「ようやく動くか!？」

俺も音響視力フォニックス・アイを使つて、前の状況を調べてみる。

確かに罵声の中、砦の方で慌ただしく軍靴の音が聞こえたり、馬が興奮していなくて音が聞こえてくる。

だが・・・その音は徐々に小さくなっていく。

「・・・あ、嘘でした。ごめんなさい。」

「嘘？どういふこと？」

「城壁の上の旗がブワァーって動き出したんですけど、どうしてか
動きを止めちゃいました・・・」

確かにあれほど荒々しくなっていた軍靴も、今はだいぶ静かになっ
ている。

変わったところを言えば、誰かががなりたて、止められていると言
うことだろう。

「ふむ・・・突出しようとして、張遼に止められた・・・と、見る
べきか。」

「そんなところでしょうね。」

その後、しばらくの間敵が出てくるのを待ったのだが・・・

「・・・動かないわね」

「そのようだな。・・・あまり良くない卦だな。」

「時間をかければかけるほど、相手に冷静さが戻ってきますからね。
・・・何か手を打たないと」

今、ちよつとした小康状態に陥っている。

このまま長期戦に持ち込まれれば、遠征しているこちらが不利にな
ってくる。

兵糧が無くなれば、戦が出来ない。

・・・何とかこの状況を打破できないのか？

「ふむ・・・冥琳。私、ちよつと袁術ちゃんの所に行ってくるわ。」

雪蓮が急に馬にまたがり、殿にいる袁術の方に向かおうとする。

あまりにも突発的だったので誰もが雪蓮の方を向いた。

「何しにだ？」

ただ一人、冥琳だけはいつも通りの口調で雪蓮を問いただす。

「後で説明するわ・・・じゃあね」

それだけを言っつて、颯爽と袁術の所に走り出した。

「・・・一体何しに行くんだ？」

「おそらく、我々が前に出る許可をもらいに行っただろう。独断で行ったら、我等の独立が危ぶまれるからな。」

ああ、なるほどな。

戦線が膠着しているとても理由づければ、許可を出させることは可能だろう。

しかし・・・ちょっとでも考えれば、俺たちの意図が分かってしま
う。

気づかれたら、その分孫呉の独立が遅れることになり、大陸の覇者になるのが難しくなってくる。

「そんな心配そつな顔をするな。許可を出すのは、あの袁術だぞ？」

「・・・それもそつだな。まあ・・・どっしり待っているか。」

そして、15分ぐらいたった頃に雪蓮が帰ってきた。

「冥琳。さつさと軍を動かすわよ。」

「許可は・・・しつかりとれたみたいだな。」

帰ってきた雪蓮は馬から下り、すぐさま軍を動かそうとする。

兵達の方に振り返ってみると、すでに編成は終わってきっちりと整列している。

いつでもいける状態になった。

「そ・・・つくづくよね？あの子って・・・とりあえず袁術ちゃん
の命令ってことで劉備軍と連携するわ。」

「わかった・・・興覇！幼平！」

「はっ！」

「はっ！」

二人は勢いよく返事をし、冥琳の前で整列した。

「劉備の横まで前進する。その後は華雄の挑発に参加するぞ。」

「はっ！」

「了解ですっ！」

すぐさま、二人は編成した隊に号令をかける。

一斉に兵達が劉備達の横に並ぶために、秩序よく前進しだした。

「挑発には私も参加するわ。」

「却下」

雪蓮は前線に出ることを望むが、またも冥琳に却下される。

しかし……

「却下は却下よ。……今の状況を長引かせるわけにはいかないでしょ。なら私が餌にならないと。」

自らを餌にするトンデモ発言を繰り返してきた。

確かに、因縁がある相手が前に出てくれば、おいしい餌に見えるだろう。

しかし、餌になった者は多少……いや、結構なリスクを背負うことになる。

「……文台様を絡めて挑発するの？」

「そついつこと。……いいでしょ？」

もはや、承知してくれる前提で話しているようだ。

さすがに実戦になれば、冥琳も反対するだろう・・・

「・・・わかった。興覇、幼平。二人ともくれぐれも頼むぞ」

賛成しましたよ！？マジですか！？

ちょっと驚きを感じながら、冥琳の方に向き直る。

その顔は、いつものことだな・・・とありありと描かれていた。

「・・・」

思春は言葉に出さず、首を縦に振る。

「お任せ下さい！」

明命は忠犬さながらの気張った返事を返した。

「よろしくね。冥琳と穏・・・セツナは後曲の部隊を指揮。・・・
釣り上げた大物を逃がさないようにしてよね。」

一瞬躊躇したが、指揮権を俺に渡してくれた。

部隊の指揮か・・・実戦で本格的にするのは初めてだな。

総司令官とはいえ、今の所全権をベルナデイスさんに渡してあるから、基本的に指揮は執らない。執っても小隊クラスぐらいであった。

うまく動かせれば大きな経験になるが・・・多分俺は今回指揮を執ることはないだろう。

「心得ているわ。・・・雪蓮、気をつけてね。」

「・・・一応、無茶をするなど言っておこう。」

「ん・・・じゃ、行ってくるわ。」

雪蓮は思春達と混じって、劉備達の方に向かった。

俺は、冥琳からの指示待ちである。

広げていた弓の弦の張りを確かめる。

「今回は、弓ですかあ？」

いつもは剣や拳で戦っているので、疑問を持った穏がほんわかとした声で質問してきた。

・・・なんか、この声って、リラックスできるな。少し楽になった。

「今回は後方支援が主な役割だからな。これで十分。」

「そうですねえ・・・セツナさんって、弓を構えてる姿の方がしっくり来ますね？」

「なんで？俺の本分は拳だけど？」

「なんか・・・昔からその・・・飛び道具を使っていた感じがありますう。」

ああ・・・昔は今より修練を積んでいなかったから、ほとんど拳銃に頼っていたんだっけ。

ライティックスの任務は多種多様だ。一芸に長けているだけではこなせない。

歩兵の任務もこなすことが多かったため、突撃銃の扱いと二丁拳銃については、特殊部隊と遜色のないほどの腕になっていた。

「まあ・・・今も使っているけどな・・・だけど、似合ってるって言われたのは初めてだ。ありがとうな。」

褒める意味で、穩の頭を撫でてやる。

「ああん・・・子ども扱いしないでくださいよあー！」

少し子どもっぽいところがある穩は、口で言うが撫でられることは拒否していない。

柔らかい穩の髪をひとしきり撫でたところで、手を離れた。

「ははっ、ワリイ、ワリイ。さて・・・そろそろだな。」

先ほどから、城壁の方でギヤーギヤー騒がしくなってきた。

弦の張りはいつも通り。これならいける。

矢筒から矢を取り、いつでも撃てるようにつがえる。

(どう挑発する？雪蓮よ。)

まだ城壁に弓兵の姿は見えない。見えて、雪蓮に狙いを定めた瞬間、そいつを打ち抜く。

それが、今の状況で雪蓮を守ることが出来る唯一の方法だった……

雪蓮は一言一言劉備と会話して、華雄を釣るために前に出る。

「猪ほど、餌垂らせば釣るのは容易い……ってね。」

独り言を言いながら、どうやって挑発するか考える。

少しの間、黙考してすっきりした顔で城壁の上を向く。どうやら決まったようだ。

「守将華雄に告げる！我が母、孫堅に破られた貴様が再び我等の前に立ちはだかつてくれるとは有り難し！」

「その頸をもらうにいかほどの難儀があるっ？……フツ、無いな。稲を刈るぐらいに容易いことだろう。」

少しわざとらしく大げさに蔑む。

少し賢い奴にはやり過ぎかも知れないが、単細胞の猪にはこれくらいがちょうどいい。

「どうした華雄、反論はないのか？それとも江東の虎、孫堅に破れたことがよほど怖かったのか？」

「そうか怖かったか・・・ならば、致し方なし。・・・孫堅の娘、孫策が、貴様に再戦の機会を与えてやろうと思ったのだがな。」

「それも怖いと見えるか、いやはや・・・それほどの臆病者、戦場において何になる。さっさと尻尾を巻いて逃げるがよい。」

ひとしきり言い終えて、陣に戻るために踵を返す。

あれぐらい言えば、黙ってはいられないだろう。

「ではさらばだ！負け犬華雄殿！」

いつ出てくるのかと口をつり上げて笑いながら、陣に戻った。

「い、言わせておけばあ・・・!!！」

城壁の上で、雪蓮の罵倒を聞いていた華雄は、もはや我慢の限界であった。

体全身で怒りを表しているかのように、ぶるぶると震えている。

今にも自分の武器、金剛爆斧を掲げて外に出て行くこうとしている。

「だあー、待て待て待て待て！落ち着け！落ち着かんとかあかなくて！

あんな見え透いた手に乗ってどうすんねん！」

訛りのきつい関西弁で喋っている張遼が華雄の体を必死に押さえつける。

「我が誇りが傷つけられているのだ！たとえ何らかの策があったとしても、畏など食い破ってみせる！だから、止めるな張遼！」

制止を振り切り、今にも飛び出そうとする華雄。

畏など食い破ると言っているが、ここまで血が上っている状態で下や周りに気を配れるはずがない。

だから、張遼も必死に止めているのだ。

「アカンて！賈馱つちに言われたやろ！長期戦に持ち込めばこっちの勝ちやあって！ここで華雄が出ていってどうすんねん！」

「奴らを蹴散らす！」

馬耳東風、今の状態の華雄に何言っても無駄なようだ。

それでも張遼は辛抱強く言い聞かせる。

「そんな必要ないねんて！！！」

「うるさい！離せ張遼！」

「アカンツ！ウチかて悔しいの我慢して耐えとるねん！華雄ももうちょっと我慢してくれ！」

そこまで言い聞かされた華雄は、おとなしくするも・・・

「うう・・・あああっ！」

雄叫びを上げ、溜まりに溜まったフラストレーションを少しでも発散させようとあらんばかりに叫んだ。

後方で待機しているセツナには、その雄叫びがはっきりと聞こえてきた。

・・・そろそろ頃合いだな。

「あれほど、言われて・・・まだ動かないとは・・・」

冥琳も焦れったくなってきたのか、声に焦りが感じられる。

あれほど怒り狂っているなら、あとちょっとした物で出てくるだろうな。

「・・・冥琳、前線に伝令。軍を押し上げるとな。」

ピンと閃いて、冥琳に言ってみる。

こういった戦場でのとっさの判断、ひらめきがセツナには備わっている。

そこがやはりライティックスという特殊な部隊を率いるのに必要な能力であり、いつでもも養っていないければいけない物である。

セツナに関しては、そのひらめきが尋常ではないほど発達している。

「なるほどな・・・出てこないから圧力をかけてさらに煽ろうという訳か。煽られた華雄は、屈辱的だろうな。」

「打てる手は打っておく。それが戦いの基本だ。」

打てる手を打たずに死んでいった奴を俺は何人も見てきた。

雪蓮達にはそういう死に方をして欲しくない。

「ふっ・・・お前らしいな。わかった・・・誰があるか！」

すぐに伝令係が、冥琳の元に駆けつけた。

短く伝令を伝え、すぐに走っていく。

「これで動いてくれればいいのだが・・・」

「ああ・・・」

ちよっとして、雪蓮達が城壁に軍を寄せ始めた。

音響視力がまた華雄の声を捕らえた。

明らかに怒り狂い、ついに軍を動かすようだ。

軍靴の音が最初の時より、荒々しく踏み荒らされて戦闘準備を行っている。

「冥琳・・・出てくるぞ。」

「そのようだな。各員、戦闘配置！」

兵達が、一斉に剣を抜き、弓をつがえ構える

「戦闘が始まり次第、前線の部隊に援護を開始するぞ。合図をしたら、弓兵は撃てっ！」

徐々に高まっていく緊張。

張りつめていく空気。

この遠征が始まったときは、ゆるゆるだった空気がやっと戦場らしき者になってきた。

ようやく城門が開き、華と書かれた漆黒の旗を掲げた軍と張と書かれた紫基調の旗を掲げた軍が並んで出てきた。

ようやくお出ましか・・・

弱めていた集中力を一気に高める。

練られた内功がいい感じに体を駆けめぐっていく。

前から伝令が帰ってきて、すぐさま冥琳に帰ってきた伝令を伝えた。

「孫策様から伝令！大物を引っ張っていくから、しっかりと対応よろしくのことです。」

「分かった。下がって良い。」

伝令は一礼をして、すぐさまさらに後方、本陣の方に走っていく。

あの様子だと袁術の方にも伝えるようだな。

そんなことはどうでもいい。

今から戦闘が始まる。余計な感情は捨てていけ。

前の方で雪蓮の号令が聞こえてくる。

弓を力の限り、引き始める。

最初の一発は威嚇の意味も込めて撃ち込む。

「さあ、孫呉の精兵達よ！猪突してきた敵を殲滅する！その力、天下に示せ！」

オオオオオオオーツ！！

雄叫びを上げ、兵達が突撃していく。

俺は真っ先に先頭に立っている敵兵に向かって、思いっきり打ち込んだ！

「華雄將軍！もう・・・もう前線が持ちません！」

「くっ・・・」

やはりこちらから仕掛けたのがまずかったのか！？

歯がみして、前線を再度見る。

明らかに押されている。

今はまだ崩れていないが、それも時間の問題だ。

シュンッ！

加えて、時たま来るこの点射。

まるで私の位置が分かっているかのように撃ってくる。

「ここは一旦、兵を退くのが上策かと！」

「こんな・・・こんな結果、誰が認めるか！華雄隊は集合しろ。再度突撃を仕掛ける。」

自ら出て行って、むざむざと退くなど我が武に背くものだ！

断じて、それは許せない。

「阿呆！そんなんやつても無駄や！」

「無駄ではない！無駄では……」

「……認めたくないって気持ちはよー分かる。けど認めなくても負けは負け。それは事実や。……ええ加減納得せい。」

……負けてはおらん。まだ負けたわけではない。

現に前線はまだ持ちこたえている。

そこに我等が加われば、押し上げることだって可能だ。

孫家に目にもものを見せてくれるわ！

「うう……いやだ……いやだ！二度も孫家の旗に背を向けるなど、私の誇りが許さん！華雄隊は早く集合しろ！」

「だからそんなんやつても！」

都合のいいことに、よく訓練された兵達はすぐに華雄の元に集まってしまった。

「集まったな！錐行の陣を牽き、敵前戦を一点突破するぞ！我に続けええ！」

オオオオー！！

華雄隊の兵達は、何の疑問も持たずに華雄を追って、敵前戦に突っ走っていった。

取り残された張遼は・・・

「あかん・・・あいつ、ホンマもんのアホや。こうなったら、ウチらだけでも退くぞ！張遼隊は虎牢関まで撤退！各員、追撃を警戒しながら、ウチの旗についてこい！」

「はっ！！」

張遼は、早々と？水関に戻り、城壁に駆け上がる。

華雄を先頭に錐行の陣が取られた部隊が、敵陣を圧倒している。

これは、一時的なものだろう。

根本的な状況は変わらない。ならウチに出来ることは一つ。

潰走してくる兵の殿に立つことや！

「孫策！どこだあ！出てこい！」

敵を薙ぎ払いながら、宿敵孫策の姿の探す。

われらが加わったことで前線は持ちこたえ、押し上げ始めた。

これならいける。軟弱な連合軍を打倒できる！

そうできると信じ切り、華雄は敵をさらに薙ぎ払っていった。

「孫策様、華雄が突出してきました！」

「あゝらら、これだから、猪は・・・」

明命の報告を受けて、雪蓮は面白おかし嘆息を漏らす。

今は、押されているが絶対に押し返せる。

敵は私たちより少ない。あの人数で何とか出来たら、世の中何でもできるわよ。

「華雄は、孫策様のことを探しているようですが・・・」

「・・・いいわ。まだ戦い足りないところだったし・・・引導を渡してやるわ。」

その会話を聞こえていたセツナはいてもたってもいられなくなった。

窮鼠となった相手は、侮れない。

かみつかれてやられてしまうことは多度多度ある。

「・・・冥琳、後は頼んだ！」

「おい！どこに行く！」

制止を聞かず、すぐに前線にいる雪蓮の元に駆け寄る。

ここは雪蓮が行くより、俺が言ったほうがいくらかマシだ。

「雪蓮、俺が行く。」

華雄の叫びに反応し、すぐにでも駆けつけようとしていた雪蓮を止めに入る。

「はあ！？何言ってるの！？私が行くに決まってるでしょ！」

武人の血が騒いでいるのか、すでに興奮状態に入っている雪蓮を止めるには一苦労だ。

だが、ここまで入り乱れている状況では護衛もままならない。

一度後ろに退ってもらった方がいい。

「一騎打ちしている間に、流れ矢でも飛んできたら死ぬかも知れないんだぞ！？ここは下のものにつ」

雪蓮は、うつとうしそくに顔を歪め、俺の言葉が終わる前に反論してきた。

「おあいにくさま。私はそんなことでは死なないっ」

あくまで前に出ようとする雪蓮に俺は、脅しとばかりに額にナイフを突きつけた。

「お前が死んだら、元の子もねえんだ……下がってな。」

本物の殺気を雪蓮にぶつけ、黙らせる。

額にナイフが突きつけられている状況でも雪蓮は至極冷静で、セツナの目だけを見ていた。

その目から読み取れたものは、仲間を失うかも知れないという不安、そして自分を心の底から心配していると言ったことが分かった。

そんな目で、言われたら……引き下がるしかないじゃない。

「……どうしてもあんたが行くって言うのね？」

「ああ。」

「……フンツ！なら、勝手に死に行きなさい！」

「……ありがとう。」

セツナは、すぐに前に出た。

途中何度か敵が斬りかかってきたが全て弓で撃退し、雪蓮のことを探していた華雄の前に立ちはだかった。

「ほお？見慣れん武将だな？名は何と言う！？」

華雄が戦斧を振り回して、こちらを向いてきた。

あれほど巨大な戦斧を振り回している奴は、武者以外では見たこ

と無い。

しかし、セツナは臆せずいつも通りにシャムシールを抜いた。

こちらの流儀に乗っ取って仰々しく行くか？

「孫策が主！セツナ・フォーリング！」

「貴様が噂に聞く白銀の修羅か。ならば、存分に戦おうぞっ！」

いきなり上から振りかぶってきた。

戦斧はその重さで敵を叩き斬る、または押しつぶす武器だ。

こんな斬れ味を重視して、薄く強度の低いシャムシールで受けたら、一発で折られる。

セツナは体を右に捌き、攻撃を仕掛けようとするも……

「でえええいつ！」

すでに戻り、横薙ぎに攻撃してきた。

「ちっ！」

スウエーで躲し、一息つくこうもするも、すぐさま距離を詰められる。

攻撃が重い上、回転も速い……この上なくやっかいな相手だ。

しかも、間合いも違う。懐に飛び込まなければ俺に勝ち目がない。

華雄は、さらに苛烈に攻撃を加えてくる。

避け続けなければ、勝ち目が見えてこない。

俺は勝機を探りながら、体を捌き続けた・・・

そんなセツナと華雄の一騎打ちをみていた雪蓮は齒がみしていた。

「何よ、あいつ・・・口ほどにもないわね。」

今、華雄の周りを円を描きながら、斬撃を避け続けているセツナ。

見る限り、攻撃はしていない・・・いや、攻撃ができないのだ。

「これだったら、私が行ったらよかったわ!」

「っ!」

パンツ!

これに見るに見かねた冥琳が激昂して、雪蓮の頬を叩いた。

「・・・冥琳?」

叩かれた理由がわからず、呆然と痛む頬を押さえる雪蓮。

「いつからだ！？そんな風に人を侮辱する小さい人間になったのは！？」

「侮辱？私はそんなつもりじゃ・・・」

「いくら仲違いしているからって、そこまで言つともはや侮辱のたぐいだ！」

「うっ・・・」

反論できない。

私は・・・セツナを侮辱していたの？

わからない・・・私はただ普通に言っているつもりだったのに・・・

「仲違いの理由はセツナから聞いた。あいつは我々には想像できないほど堅い信念を持っている。」

「たかが、人を殺さないことでしょ？そんなことぐらいでっ」

「違う。あいつは「無殺」をできるのは神か聖人だけだと言っている。できないから「不殺」を常に心がけているのだ。自分に立ち向かってくる敵だけを全力を持って倒し、それ以外は生かすことを選んでる。つまり、必要悪だけを倒しているのだ。」

「必要悪？」

「世の中に必要な悪ってことよ。例えば、大陸を混乱に陥れる者、暴政で民を苦しめる者、破滅的な暴力で民を容赦なく殺す者などだ。」

セツナは特にそれらを必要悪と考えた上でそれらを倒すために障害になる敵を倒しているのだ。・・・しかも、その者の分まで生きるという責務を背負ってな。盗賊などは生きるためにやっていることだから必要悪じゃない。殺さず生かしておくことで世の中がちゃんと回っていくんだと・・・悪のない世の中は存在しないと・・・セツナが言っていた。」

その事実を知って驚愕する。

盗賊などがいないと世の中がおかしい？

いなかったら、平和で結構。生かしておいて世の中が回っていくなんて・・・

いや、盗賊達がいるからこそ普通だと思えることだってある。

いなかったら、いなかったで、多分誰かがそういった罪を犯すだろう。

殺した者の分まで生きる？

なら、殺せば殺すほどその責務を何千、何万と背負って生きていくことになる。

そんなことを考えて生きていたら、いつか絶対に無理が来る。

生きているのがただ辛いだけじゃない！？

「・・・バツカじゃないの！？そんなことして何の意味がっ」

「まだ言うのか!? セツナは、自分にそういった責務を課していかない、ただの殺戮兵器をなってしまうからだ、言っていた! 我々も同じだ。道を一步間違えれば、セツナが言ったとおりになる。」

「・・・」

「それにあいつは、全ての者を救えるほど人間は出来ていない。俺はただ、仲間を救えればいいと言っていたのだよ。」

「・・・嘘っ?」

自分より仲間を優先する。

そんなのおかしい。

人は生きている限り、自分が大事なのだ。

その本能に逆らうことをセツナはいつも選んでいるの?

「さすがに、見ず知らずの人は救わないし、目の前で事が起こったときにしか人を救わないらしい・・・セツナは自分が一番大事だと思っているらしいな。だが・・・それがひとたび信賴する仲間が関われば、自分の命を投げ出してでも救ってみせると、私に話してくれた。」

「・・・そんな!?!」

端から見れば、非常に美德と見えるだろう。

しかし、親しい者から見れば、そこまでしてなぜ救うのかと問いか

けたくなる。

おそらく、常人・・・いや、幼少からセツナと付き合っている人間でもそこまでの信念は分らないだろう。

私は、自分のバカさ加減に後悔した。

セツナは・・・その確固たる信念があるからこそ、全てを受け入れているのだ。

「・・・私は、なんてことを言っていたのかしら。」

「やっと気がついたのね・・・これで万事解決だな？」

「いいえ。まだよ。・・・ちゃんとセツナに謝らないと・・・」

しっかりと一騎打ちが行われている方に目を向けると・・・

先ほどよりもさらに苛烈に攻撃を仕掛けている華雄とかなり押されているセツナの姿が映った・・・

そのセツナは、今や防戦一方だった

華雄の周りを避けながらサークリングし、相手のリズムと力量をはかっていたのだが・・・

さすがに冥琳が言うだけのことはある。

かなり猪的な性格をしているが、力任せではなく、緩急を織り交ぜて攻撃してくるし、時折フェイントや捨て攻撃も欠かせない。

武においてはかなりの高みにいることがうかがえる

ノセると厄介なそんな相手だっただけに、攻撃しないで見ていたことを少し後悔する。

だが、相手もそろそろ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁっ！」

息を荒くして攻撃を続けてくる。

末端重量の大きい武器をあれだけ受けてもらえず空振りを繰り返したら、息も上がってくる。

さらに当たらないという焦燥感が徐々に大振りを誘い、隙が生まれるようになる。

ブウンッ！

肩すれすれに斧は通り過ぎる。その余波がセツナの頬を荒々しく撫でる。

「どつした！？手も足も出ないのか！？修羅！？」

声を張り上げ、こちらを罵倒してくるがそんなものは自分を奮い立

たせるだけのものである。

向こうは息が切れ、対するこちらはいまだに息ひとつ切れていない。

勝機が見えてきた・・・

次の振りおろしを避け、一気に懐に飛び込もう。

ブウンッ！

左からの振りおろし。しかしさきほどより明らかにスピードが落ちている。

このスピードなら飛びこめるっ！

左に体を捌き、一気に詰め寄ろうとするが・・・

華雄も、大きなバックステップを取り距離を取ってきた。

そこから、先ほどとは違うリズムで攻撃を仕掛けてきた。

（っ！マズイっ！）

先ほどまでのリズムに慣れきっていた俺は、面を食らった。

腕を折りたたんでの振り下ろし。力はないが一太刀で体が真っ二つになるであろう。

前に重心を転ばしている俺は左右に逃げる事が出来ない。

・・・持つてくれよっ！

そう祈りながら、シャムシールで受けに行った。

ガキンツッ！ピシツッ！

受けた刃に、ヒビが入るのが感じられる。

しかし受けた。ならばっ！

「はあああっ！」

ワイヲリカ流無形の罅迫り合いの要領で、押し込んだ。

「何いつ！」

華雄の体はいとも簡単にバランスが崩され、たたらを踏む。

その隙にセツナが、華雄を肉迫する。

渾身の一太刀を華雄に浴びせようとするが・・・

「その程度っ！」

キンツッ！

受けられてしまう・・・セツナは落胆することなくすがさず次の攻撃に入った。

一瞬で距離を詰め、脇に回り込む。

受けて隙だらけの左脇に掌底を叩き込む。

「ぐっ!？」

華雄の体がよろめき、横に流れた。

しかし、何とか踏ん張った華雄は追撃に備え、またバックステップを取ろうとするが・・・

「なっ!？体が・・・動かんっ!」

さっきの連撃は初撃を受けさせてこそ、意味のある攻撃だったのだ。

犀牙流上伝 打器落とし

相手の武器目がけて、目に見えないほどの速さで特殊な打ち込みを数度する。

特殊な打ち込みを受けた腕は、一時的に機能が麻痺して痺れる

受けた相手は、その痺れで武器を落としてしまう技なのだが、セツナの場合その段階までたどり着けずにいた。

そこでフォローとして、止めた武器側に素早く回り込みながら空きの脇に貫徹を叩き込むことで、全身を約5秒程度痺れさせる連携を思いつき、常日頃修練を重ねていた。

犀牙流徒手格闘 貫徹

相手に掌底を叩き込むというシンプルな技だが、頸を放つためほんの一瞬血流が逆流し、全身が麻痺するような感覚に陥り動けなくなる技である。

基本は左胸、つまり心臓に向かって放つのが一番効果的だが、頭に打てば脳震盪を起こし、体に打てば心臓に打ったときよりは効果が薄い、動きを止められるという便利な技でもある。

「はあっ！」

鋭い気合いと共に次の攻撃に移った。

体を左半身に構え、右手に持っている剣を引き、重心を右足に全て乗せ・・・そこから弾けた。

神速の速さで華雄を突こうとするも・・・

「チイツ！」

やっと痺れから解放された華雄が、横に弾けるように飛ぶ。

セツナは華雄の横をすり抜ける。だが・・・

「くっ！」

華雄の体に数本の切り傷が入った。その切り傷から鮮血がゆっくと溢れてくる。

胴体の端を数力所突き、その血で花を染めるかのように見えることから命名されたという技。

端を突くと言っているが、肺、脾臓、大腸を的確に切断しているため決まればほぼ即死は免れない。

華雄が直前で避けたため、浅い突きになり皮膚を裂く程度にとどまったのだ。

攻撃を終えたセツナは、すぐさま上に飛んだ。

落下してくる速度＋飛んだときの勢い＋全体重を乗せた踵落としを華雄に見舞う。

「この程度でっ！」

華雄は、まだ余力を残しているようだ。

きつちり受けられた。しかし、切り傷からは踏ん張った衝撃で血が吹き出る。

「おおおっ！」

セツナは受けられたそこから、踵落としの回転運動を利用してさらに上から剣を振り下ろす

まるで鋼鉄を断ち切るかのごとくすさまじい斬撃が華雄を襲う。

華雄は同じ体勢から今度は柄で受けた。

だが・・・

「はあああつ！」

さらに力を込めたセツナの剣が柄を叩き割り、華雄の体を肩口から真つ二つに斬り落とした。

凱英流 大崩牙

元々は堅い鱗を持つ原生種用に使われるのだが、対人でもフルプレートなどの鎧や柄の長い武器を無効化にする技でもある。

一回目の踵落として相手の動きを止め、武器や鎧に多大な負荷をかける。そこからさらに剣でその部分に打ち込み過負荷のかかった鎧を砕くという豪快な技である

切り落とさせた華雄の体だったものが、慣性に従って大地に倒れる。

その返り血を浴びた俺は、顔に付いた血を拭いながらただそれを見下ろしていた。

（・・・あの時、剣が折れていたら今頃こつやってくたばっているんだろうな。）

少しばかりそのことを考え、やるべきことを思い出した。

倒したら、首を取らないと・・・

しかし、死人に鞭打つような行動は俺には出来ない。

「・・・張凱っ！」

「はっ！」

雪蓮達と一騎打ちを見ていた張凱がすぐさま俺の傍に駆けつけた。

「・・・首を取って、お前の手柄にしる。」

「えっ？」

張凱は驚き、一歩二歩後ろに引いた。

「あんまり名声とか・・・興味がないからな。お前が討ったことにしる。」

「・・・いいのですか？」

「いって言ってんだ。さっさとやれ。」

「・・・わかりました・・・ではっ。」

張凱は持っていた剣で華雄の首を斬り分けた。

斬り分けたばかりの首を上を高々と掲げ、全軍に響き渡るように宣言する。

「敵将華雄、孫策が主、張凱が討ち取ったりっ！」

周りの戦闘が不意に止まり・・・敵側が皆に向かって潰走し始めた。

「さすがだと……言っておこうか。」

戦闘を止め、軍をゆっくりと前進させてやってきた冥琳が声をかけた。

おれは集中を解き、体の力を抜く。

「まあ……な。剣が折れていたらわからなかった。」

持っていた白銀乃孤狼はくぎのころうの刀身をじっと見てみる。

受けた場所は刃が欠け、それを起点に細かなひびが入っている。

軽く振ってみると、ピキツと音を立て、崩れ落ちそうになる。

これではもう使い物にならない。

収まりが悪いので、納刀して紐で抜けないように縛っておく。

「しかし……あの華雄をわずか三撃で倒すとは……お前の武も捨てたものではないな。」

「今までの相手が雑魚だったということだ。ところで追撃はどうするんだ？」

今追撃をかけてもあまり効果は上がらないが……

「追撃はかけないわ……いいでしょ？冥琳」

代わりに雪蓮が答えてくれた。

戦闘時のような興奮はすでに収まっており、いつも通りの雰囲気はこちらに駆寄ってきた。

「ああ。戦いは？水関では終わらんからな・・・奴らは虎牢関に退却しただろう。ならば、我等も兵力と体力を温存しておこう。」

「了解です。では、兵をまとめた後、？水関に入城します。」

思春と明命の二人は、すぐに部隊をまとめることに取りかかった。

「よろしくね。」

・・・この戦いを各地に伝えることで、孫呉の名声を一気に上げることは出来ないのかな？

風評が何より物をいうこの世界には、うってつけの策だと思う。

それを冥琳に言ってみると・・・

「ふむ・・・良い手だと思うが、そんなことをよく思いついたな。」

「なんか・・・自然に考えついた。何人かの兵を旅人に変装させて、各地方の主要都市・・・特に荊州地方に向けて放てば大きな効果が出てくるはずだ。」

「会心の一手だろう。すぐに準備する・・・穏、兵士の選抜を頼む。」

「了解であります。」

片手を上げて返事した穩が、パタパタと足音高く立ち去っていったのと入れ替わりに……

「孫策さん！」

息を切らせながら、劉備達が駆寄ってきた。

……あまり顔を知られたくないな。

だけど……劉備に対して聞きたいこともあるし……

まあ、血を落としてから来てもいいか。

と一旦雪蓮達から離れ、張凱達の所に向かった。

「すまない……誰か、水を桶いっぱいにもらってきてくれないか？」

「……」

用意のいいことに劉仙が桶二杯分の水と水筒一本の水を用意してくれていた。

こういう細かな気配りが出来るのも、いい隊長になれる要因の一つだな。

普段は全く無口でもちゃんと俺のことを慕ってくれてるのか……

「ありがとうな……んしょ。」

血の付いたミルスペックジャケット、長袖のシャツ、ズボンを脱ぎ、黒のインナーとパンツ姿になる。

さすがにパンツは恥ずかしいので、背囊から持ってきていたハーフパンツを穿いておく。ジャケットの中身も全て出しておかないと・

早速ジャケット、シャツ、ズボンを水につけ、固まった血を溶かしていく。

速乾性のある衣服だから、天気の良い今日みたいな日は一時間もあれば乾くだろう。

血が溶けたみたいで、ざぶざぶと軽く洗って血を落としていく。

帰ったら、洗剤を錬成して思いっきり洗おう。

血は意外に残る。匂いもだ。

適度にとれたところで水気を切り、長槍に干しておく。

「……よし。」

こういった洗濯も、長くなりがちな遠征など軍事行動の中では重要なスキルだ。

「……確か、お前らに宿題だしていたよな？どの状況で自分の隊がどう動けるか考えろっていう……」

「「「「はいつ」「」「」」

「なら、さつき華雄が突出してきて、前線が押されていたらどう？
あの時どうすれば押されなかった？」

四人は一斉に考え始める。

ここで四人の戦術理論のセンスの良さを窺うことができる。

少ししてから答えが出たようで、満貫が手を上げてきた

「あそこでは、敵の突進は強い。なら、こちらは守りを強固にして
じっと耐え抜く。突進が弱まってきたところで、一気に攻勢をかける
のが一番だと思うな。」

「ふむ・・・他のものは？」

皆を見回し、答えを促すがどうやら同じ答えにたどりついたようだ。

「そうだな。満貫の出した答えが正しいな。力を力で対抗するのは
余計な損害を増やすだけだ。守りを固め、敵の進行を止めることに
徹底する。止まったところで一気に押し返すのが一番効果的だ。」

その結論にたどりついた四人は、まあまあなセンスを持っている。

やはり、隊長に選ばれたことだけはあるな・・・

「お前たちは、常にこういった自分の隊はどこでどう動けるかを考
えなければいけない。戦場では常に空気の変わり方を感じる。大ま
かな指示はおれが出していくが、細かいところでお前たちで動いて

いけ。いいな？」

「「「「はいつ！」「」「」

勢いのよい返事が一斉に返ってきて、満足げにうなずく。

まだまだ伸びるな・・・こいつらは。

さて・・・音響視力フォニック・アイで聞き耳を立てていたところに面白い言葉が聞こえてきた。

劉備が、「みんなが安心して、笑って暮らせる世界」と雪蓮達に話していた。

・・・そんな世界があれば、俺のような軍人家業は無くなっているな・・・

首あたりについていた血を拭き取りながら、考え始めた。

士官学校で徹底的に現実を叩き込まれ、利潤主義者顔負けの現実主義に染まった俺には、とても不愉快な言葉だった。

昔は、そうだった夢を見ていた。

いつか自分の手で戦いを終わらせ、世界を平和にしてみせると・・・

だが・・・それは、軍に入ってから夢物語だと気づいた。

戦えば戦うほど、敵だった人間は俺たちに憎悪を持ち、次の戦乱の火種になった。

その時知ったのだ・・・誰かが戦えば、倒された誰かが勝ったものを恨み、そして・・・復讐に走る。

・・・ちよつと暗い思考になったようだ。切り替えていこう。

今ちょうど話が一段落したみたいだし？

俺は、そのままの格好で何も持たずに雪蓮達の所に戻る。

「あれ？そちらの方は？」

雪蓮達と楽しそうに話していた劉備がこちらに気づいた。

改めて見てみると・・・可愛いと思った。

この時代では珍しくいかにも女の子の匂いがしてくる。雪蓮のように荒々しい気ではなく、かといって側に立っている女性のような澄んだ気でもない。全てを包み込むような優しく、暖かい気が劉備から感じられた。

「私たちの仲間で、セツナって言うの。」

「さっき、華雄を討った人物と見て間違いないか？」

隣に立っていた女性が身を乗り出して、こちらに迫ってきた。

燐とした表情、手に持っている武器は装飾の入った幅広な長刀。おそらく青龍偃月刀だろう。そして、何より感じるのは凄まじい武の底だった。

「質問する前に、名乗らないのは失礼じゃないかな？」

あくまで、心優しい青年をイメージしてそれを表情に出す。

セツナが軍にいる間に覚えた、初対面の相手や嫌いな上官に対して構える顔の一つである。

こうすることである程度の好感が得られる。地を出して、反感を買うよりはマシだ。

「ああ、これはすまない。我が名は関雲長。幽州の青龍刀にして、桃香様の第一の矛だ。」

これがあの関羽ねえ・・・史実に違わぬ豪傑だことで・・・

「俺は、セツナって言います。以後お見知りおきを・・・」

深く頭を下げ、丁寧に名乗りを上げる俺。

おそらく今、雪蓮達は俺のことを怪訝な目で見ているであろう。

「それで、貴行が華雄を討つたのだな？」

「・・・あくまでも、華雄を討つたのは俺の部下だ。その所は分かってくれ。」

「なぜだ？武人なら、武の誉れとして大々的に喧伝してもいいのだぞ？」

まあ・・・普通はそうだよな。

しかし、この世界であり名を知られることはしたくない。もう知られてしまっているがな・・・

「事情があるんだよ。あくまで俺は、天の御使いってことになってるんだから。」

「えっ？じゃあ、あなたが南の天の御使い様なんですか？」

「南の？どづいうことだ？」

俺の他に、まだ天の御使いという胡散臭い存在がいるのか？

雪蓮達も呆気を食らっている。どうやら知らないみたいだ。

「今、巷で噂になってますよ？北に二人、南に一人の天からの御使いが降り立つ。一人は知略と仙術を、一人は目と耳を、一人は武力と信念を持って、乱世の世を平穩に導く・・・って言う噂です。ご存じないですか？」

「い、いや・・・今始めて知った。」

北に二人、南に一人・・・荊州は南に位置しているから俺のことだろう・・・

後の二人は、曹操の所にいた男と、劉備達の所にいるエリナだろう。

なぜここにこれたかは分からないが、少し面倒なことになっているな。

「それにしても・・・何でそんな格好をしているんだ？」

「さっき血を洗い流していたからな。今は乾かしているところだ。」

早く乾いてくれないかな・・・ちよつと肌寒い。

呉の暖かな気候に慣れていたせいか、北の方に行くと寒いと感じる。

「そんなことよりも・・・劉備さん、一つ聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「はい。私に答えられることなら何でも！」

にっこりとこちらに返事を返してくる。

その笑顔が数分後には無くなるような質問をするんだけど・・・

「敬語は苦手だから、いつもの喋り方でいいですか？」

「どうぞ、お構いなく。」

「ありがとうございます」

そこでさっきのイメージを消し、いつもの自分に戻る。

・・・やっぱりさっきのイメージは自分には向かないな。

「では・・・お前はみんなが安心して、笑って暮らせる世界。弱い人たちが苦しんでいるのを見ていられない、どうにかして助けたい

と言ったな。」

さっきの優しい声から、一転して硬質で鋭い声で劉備に問いかける。

「えっ！？聞こえていたんですか!？」

「耳がいいのでな・・・聞き耳を立ててすまなかった。」

実際は、特殊能力タレントのおかげなのだが・・・説明するのが面倒だ。

しかし、劉備はそれを信じて自分のことのように驚いている

「話を戻そうか?・・・そう言っただよな?」

「はい・・・それが何か?」

「言うておくぞ・・・そんなバカげた幻想はあきらめろ。」

「えっ?」

劉備が驚き、目を丸くしてこちらを見てくる。

「貴様あつ！桃香様の理想を愚弄しているのか!？」

関羽は激昂して、青龍偃月刀を抜いて首元に突きつけてきた。

それに動じず、言葉を続ける。

「そんなつもりはない。ただ・・・そんな理想はあり得ない。目の届かない貧困者は?手足を切り落とされ障害を持った者は?迫害さ

れる者は？戦乱で家族や愛する人を失った者は？今掲げた例と一緒に他にもたくさんいる。その人達にも笑って暮らせる世界を作るのか……いや、作れるのか？」

「私たちなら、それが出来ると信じています！愛紗ちゃんや鈴々ちやん達が付いていますし、みんなのために頑張れる日が来ると信じていますから！」

理想を必ず実現できると頭から信じ切っている。

目はまばゆいばかりに輝いている。

昔の俺ならあんな目が出来ただろうが……今の俺にはそれは出来ないだろうな……

「じゃあ聞こうか？その理想を実現するために何人殺せばいい？」

「それは……」

「一万や十万ではない。何百万、何千万といった犠牲が出るだろう。その上で実現した笑って暮らせる世界は本物だろうか？」

かの有名なアーサー王、アレクサンドロス三世、ナポレオンといった歴代の英雄は犠牲の重さを知っていた。

アーサー王は民のために先頭に立って戦い、アレクサンドロス三世は一緒に戦ってきた兵士達のために一緒に戦い、ナポレオンは戦う時間を極力かけないようにして戦った……そうやって、犠牲を最小限に抑えた上で自分たちの理想へと、突き進んでいった。

しかし戦いに犠牲はつきものだ。彼らは、悲しみ、嘆き、涙して彼らの犠牲を弔った。

「じゃあ、むやみに犠牲を出して得た平和が本物なのですか!?!? . . .
・あなたはいつたい何が言いたいんです?」

劉備はこちらを不快と疑心の目で見てくる。

そりゃそうだ。何たって、今自分の理想を汚されているのだから、怒るのも当たり前だ。

しかし、これから言うことはもっときつい一言になる。

「そんな世界は実現できても、仮初めの物でしかない。 . . .この世から、戦いはなくなることはないんだ。」

「無くなります! 私たちの手で、戦いを終わらせて見せます!」

「青い! 青すぎる! 永久に続く平和なんて存在しないんだ! それを夢見て、朽ち果て、壊れ、絶望していった者達は数知れない!」

恒久的な平和は実現できるのだろうか?

答えは絶対に不可能だ。

人に悪意がある限り、争いが無くなることなど無い。

恒久的な平和が実現できたら、軍人やそれらの家業の人たちは必要とされない。

「劉備、お前がその理想を求めるなら止めはしない。だがな・・・それはとてつもなく困難で苦難の道のことであることを覚えておけ・・・俺からはそれだけだ。」

と、背を見せその場を去ろうとする。

劉備に言ったことは、全て事実であり、人の世の摂理でもある。

何千年と続いてきた哀しくて、あまりにもむなし事実・・・

「じゃあ！あれだけ言ったあなたはどんな理想を持っているんですか！？それを聞かないと納得できません！」

「俺か・・・俺の理想はただ仲間を守ること。それ以外はもういい。」

もう・・・ジャルダが殺されたときや、親父が死んだときのような気持ちにはなりたくない。

自らの信念、理想をひとまとめするとそうなる。

「ただ守る？・・・大陸の平和はどうでもいいんですか!？」

「雪蓮達が戦うなら、俺も戦う。その過程で大陸が平和になればよし。はつきり言って、大陸の平和なんか二の次だ。」

「そんな・・・」

背中越しに、劉備の絶句した声が届いてくる。

これが、平和を願う者、何かを守るために戦う者の重さの違い。

この重さがあるから、戦場で戦え、みんなと一緒にいることが出来るのだ。

俺は部下の元に歩き出す。

その後ろで、冥琳達が劉備達に謝っているのが、聞こえてきたが無視する。

おれは・・・間違っていない。

？水関で連合軍が戦後処理をしている間、俺は城壁に上って戦場跡を見ていた。

ここから目線を下に向けると、かなりの数の死体が山となって放置されている。

そして、真ん中には首から上が無くなった華雄の体が見えた。

俺はそこから目線を切らずに、ぼんやりと見る。

これが・・・この時代の戦場跡か・・・

現代よりはまだグロくはない。もっと悲惨の死体もあるのだから。

黄燐手榴弾で骨まで焼きただれた死体、迫撃砲の直撃を受け体が四

散していった死体、狙撃を受け脳漿をまき散らしている死体。

それらを見てきた俺にとって、斬死体の類はまだ見慣れたものである。

「こんな所にいたのか？探したぞ。」

「・・・冥琳か。」

階段を駆け上がってやってきたのは冥琳だった。

今は確か戦後処理に忙しいはずだが・・・

城壁の上に座っていた俺の隣に、腰を降ろし俺と同じ視線を向ける。

「何を見ていたのだ？」

「・・・戦場跡をね・・・ぼんやりと見ていたんだよ。」

「そうか・・・」

そこで会話が途切れる。

冥琳は俺の考えていることを察して、何も言わないのだろう。

どんな戦いにしろ、犠牲は出る。

その犠牲は無駄にしたくない。ただの踏み石にされたら、その者の生は意味のないものになる。

「セツナ・・・なぜ、劉備にあんなことを言ったのだ？」

長い沈黙を破って、冥琳が質問してきた。

まあ、普段の俺を見ていればあんな風に人に意見はしないよな。

「釘を刺しておいただけさ。あいつの目指す理想は修羅の道よりも険しいもんだからな。」

「まったく・・・それだけのことであんなに強く言ったのか？後で謝る私たちのことも考えてくれ。」

「ははっ・・・悪い悪い。でもな・・・あいつはまだ犠牲の重さを知っていないんだ。だから言っておいたまです。」

そう、劉備はまだ知らないのだ。

自分たちが戦っても、犠牲は出るものだ・・・

だから、あんな大言が吐けるのだ。はつきり言って胸くそ悪かった。

「冥琳！どこにいるの？」

下の方から、雪蓮が冥琳を呼んでいる。

大方、戦後処理のことだろう。雪蓮達だけでは分からない案件でもでたのであろう。

「さて・・・呼ばれたようだから、失礼するぞ。セツナもほどほどにしておけ。すぐに出発するからな。」

「わかった。」

少し小走りで冥琳は階段を下りていった。

まったく・・・急ぐほどのものじゃないっしょ。

俺も少ししたら、降りて準備をするか。

「・・・」

再び、戦場跡を見ていると今度は雪蓮が何も言わずに隣に座ってきた。

前みたいに刺々しい態度は感じられない。

何かいいことでもあったのだろうか？

「・・・冥琳から話は聞いたわ。その・・・」

「ここではやめとこう。」

雪蓮が謝るのを察して、言葉を切らせる。

こんなところで謝られるのは・・・なんか嫌だ。

謝られるなら、死体の見えない場所がいい。

「こんな血なまぐさいところで言おうとしていたことを言つもんじやない。この遠征が終わったら・・・俺から謝るよ。」

「・・・そうね。じゃあ、帰ったら聞かせてもらおうわ。」

「ああ。」

「さつきはお疲れ様。」

「あれくらいどうってことないよ。」

それから、少しの時間二人は雑談をかわし、久しぶりに笑い合った。
・
・

それをこの時代にはない望遠鏡ダスターグラスで見ている不審な二人がいた。

「あれが・・・セツナ・フォーリングか。」

「今殺つちゃえばいいんじゃない？」

一人は金髪、一人は赤髪のなりで下の方から見上げるように見ている。

「今殺るのはマズイ。立場的に疑いをかけられるし、俺たちの目的の物を持っているとは限らない。」

「慎重だねえ・・・あたしはいつでも構わないんだよ？そのために体も変えたんだから。」

赤髪の方は手をパキパキと鳴らし、金髪の方を促す。

「大事を成すには、それ相当の準備が必要だ。それまで我慢してくれ。」

「はいはい……」

金髪の方に諭されて、仕方なく諦める赤髪。

「そっちはうまく馴染めたか？」

「上々、それなりに働いているしね……そっちは？」

「おかげさまで重宝されているよ。まあ、同席に小うるさいのがいるがな。」

「ははっ、そいつは災難ね……さて、そろそろ行かないと心配されるわねえ？」

「そうだな……いいか？俺たちの作戦は、あくまで三国鼎立が起こってからだ。」

「はいはい。分かっていますって。」

ヒラヒラと手を振り、それっきりで二人は自分たちの場所に戻る。

しかし、その顔は獲物を捕らえどう料理しようかと考えている狼の顔そのものだった……

第四話 対立、対面 【?水関攻略編】（後書き）

どうでしたか？

戦闘シーンを書くのは、初めてに近いのでうまく書けたか分かりません。

連絡は、更新スピードの件でリアルが今結構書くにはきつい生活を送っています。

ですから、三週間から一ヶ月程度のお時間をいただきたいと思います。

それらを目安にして、この小説をチェックしてください。

それでは、次回もこうご期待をしないでください。

それでは。

第四話 対立、対面 【完結編】（前書き）

座談会場跡地の仮設ハレハブにて・・・

作者「どうも。遅れに遅れてやっと完成しました。」

セツナ「さて、一ヶ月の遅れの原因・・・しっかりと話してもらおうか？（パキボキツ）」

明命「そうです！一ヶ月も何していたんですか！周泰です！（シャキンっ）」

作者「待て待て！構えるな、剣を抜くな！ひとまず理由を聞いてくれ！」

セツナ「ほお・・・では、遺言を聞こうではないか？」

作者「遺言って・・・まあ、リアルに忙しくて書く時間がなかった・・・あとは戦闘シーンに時間をかけたのも遅れた理由の一つだ・・・やっと最近、時間が取れるようになったって！信じてくれ！」

明命「そうですか・・・それは、辛かったですね。お猫様で疲れを癒してください！」

作者「猫かあ・・・案外癒されるな。」

セツナ「・・・まあ、今回は信じてやろう。しかしだな・・・なぜこんなボロイプレハブでやっているんだ？」

作者「それは、前回ゲストのファイア君が最後に暴れたからだ。あのバカ・・・見境無しに魔法ぶちかますから、帰った後に会場が崩壊したんだよ！」

明命「止めるために、みんな総出で頑張りましたからね。作者も全力で他の作品から技をパクっていましたし・・・」

作者「明命・・・それは言わない約束だよ。さて、ここでお知らせですが、もうすぐ春休みに入るので時間が取れるようになります。ですから次からは前に告知した周期で上げるように頑張ります。こんな駄文ですが、まだ見捨てないでくださいね？」

セツナ・明命「作者も必死に頑張って（いるノいます）。これからも生暖かい目で見てくださいくれノくださいね！」
「それでは・・・
真・恋姫十無双　く乙女繚乱　三国志演義　呉書　虎狼天下霸道
の巻　第四話　対立、対面　【完結編】どうぞ閲覧してください。」

作者「長らく大変お待たせしましたが、見てくださいね。」

第四話 対立、対面 【完結編】

やがて、？水関を完全に制圧した連合軍はすぐに虎牢関に向けて出発した。

その途上、兵達がささやいていた噂の真意を確かめるために、雪蓮達と馬上で話し合った。

「先鋒が変わったって本当か？」

「ああ。劉備の部隊と私たちの部隊は後曲に配置換えだ。・・・先鋒は袁紹と曹操が取るらしい。」

やはり噂は本当だったようだ。

あの二人のことだから、初戦の俺たちの活躍を見て焦りだしたかも知れない。

「初戦で劉備さんと私たち、大活躍でしたからねえ。特に私たちの将が華雄を討ったって聞いたら黙っていませんでしょうねえ。」

「ま、ちょうどいいんじゃない？斥候の話じゃ、虎牢関には飛將軍呂布が居るってことだし」

「はっ。虎牢関に籠もるのは飛將軍呂布。董卓の懐刀、賈馮という話です」

三国志武将の最強の座を君臨する呂布と、あの霸王曹操を策で後一歩まで追いつめた賈馮か・・・

さつきより激しい闘いになることは間違いない。

「それに張遼が？水関から退却し、虎牢関に入ったとの情報もあります。・・・苦戦は必至かと」

思春からさらなる情報が入り、改めて分析していく。

曹操と袁紹の部隊の練熟度は分からないが、やはり苦戦は必至で相
当の被害が出るであろう。

「ふむ、袁紹と曹操がどうやって虎牢関を落とすか・・・見物だな。」

「・・・つまないわね」

「ん？何がだ？」

ボソツとつぶやいた雪蓮の顔は、むすつとしていて本当につまらな
そうな顔をしていた。

一体何に対してつまらないのか、皆目見当が付かない。

「袁術ちゃんよ。あいつ、まだ動いていないでしょ？」

「そうだな。袁紹をうまく操っているのだろう。・・・確かに面白
くない。」

「袁術さんの部隊が無傷っていうの、後々のことを考えれば厄介か
も知れませんねえ・・・」

確かに・・・多少ながら損害を被っているこちらと、全くの無傷で万全の向こう。

負けるつもりはないが、さすがにちょっとばかりきつい。

なんかしらのキツカケに乗じて、損害を与えたいのだが・・・そのキツカケさえも作れない位置に袁術はいる。

「・・・セツナ、何かいい考えある？」

「俺か・・・うん」

雪蓮達が求めているのは、この戦いで袁紹が消耗することだろう。

「損害を与えるためには、まず袁術を戦場に引っ張り出す必要がある。・・・となると、袁術を口車に乗せてうまく煽るしか方法がないな。」

「やはりその手しか思いつかないか・・・残念だが今回は無理だろうな。」

「むう・・・俺に案を求める時点で間違っていると思うんだが・・・」

俺に知略を求めるのは無理だ。

この時代でロボット工学や電子工学の知識は全然役に立たないし、士官学校でも戦術理論は独創性があると言われなかったし、軍に入ったらほとんど上の人たちに任せっきりだったからちゃんとし

たものはたまにしか出てこないって・・・

「すでに袁術が吹く笛の音で袁紹が踊っている。奏者が踊り子と同じ踊りを踊らなければいけないという道理はない。」

「・・・ってことは、無理矢理にでも巻き込む、しかないな。」

「そういうことだ。」

「袁術の部隊は確か俺たちより後ろ、後方の方に位置しているんだよな？」

「ええ。袁術さんは私たちより後曲よりさらに後方に布陣していますねー」

俺たちより後方に位置する部隊に損害を出させるのか・・・

前線の敵をつまかく釣れたとしても前曲をどかせ、宙曲にいる部隊を無理矢理割って通らせ、そしてやっと後方の部隊に届くという状況。気の遠くなる話だ。全てがうまくいく確率としてざっと見ても10%以下だろうな。

「まず・・・距離がありすぎるのが問題だ。」

「距離？」

「損害を与えると・・・袁術が居るところまで敵を引っ張ってこないといけないからこれだけ距離が離れていると賭け以外の何者でもない。」

「ん？・・・とりあえず、説明してもらおうか？」

「分かった。・・・まずは曹操と袁紹の先陣に割って入って、戦いの途中で大崩したフリをして敗走するんだ。・・・袁術の陣まで」

「うわあ〜・・・危険っていうよりも、無謀って言った方がいい作戦ですねえ〜」

改めて考えてみると、やっぱり無謀な考えである。

引つ張り上げるために数々の苦勞を伴っても成功する確率は限りなく低い。

・・・MS同士の戦いだったら、流れ弾で誤魔化せるんだけどな・・・

そんな考えがよぎり、切り替えるために頭を軽く振る。

「確かにそうだ・・・だが、こうでもしない限り高見の見物を決め込んでいる人間を、舞台上に上げることは出来ないしな・・・。」

「舞台上に乗せるためには、芝居を潰してでも力尽くで脚本を変えねばならない、か・・・それしか方法がないようだな」

「じゃ、そうしましょ」

「おいおい・・・こんな素人くさい作戦でいいのか？」

トントン拍子で決められていくが・・・

これではそこらの一般人がちょっと考えた程度の作戦でしかない。

冥琳や穩達ならもつといい作戦が出てくるのではないのか？

「あら。自分の策に自信ない？」

「この策は、賭の部分が大きすぎる。あと少し確実性のある・・・」

「だが、セツナよ。お前の言った作戦が我々に取り得る唯一の策だ。・・・やってみるしかないだろうな」

「大丈夫。軍の指揮はうまくやってみせるから、セツナは安心して前で戦っていればいいのよ。」

そう言つて、雪蓮は俺の肩を叩く。

元気づけられるが、その言葉をそのまま鵜呑みに出来るほど、俺の今の状態は良くなかった。

「前に出させてくれるのは嬉しいんだが・・・」

と、ポロポロの剣を抜いてみんなに見せた。

「あら、形がそのまま残っているのが奇跡みたいですねえ」

「・・・さっきの華雄とやっていたとき？」

「ああ、剣が折れかかっていて使い物にならないんだ。」

「で、どうしたいんだ？」

「出来る限り、拳を使って戦いたくはないんだ。こんなに諸侯がいる場所で本当の実力を見せるわけにはいかないし、なにより目をつけられてしまうからだ。」

今までほとんど拳を使わずに戦ってきた一番の理由だ。

感触を忘れないようにたまに実戦でも使っているが、戦局が混乱しやすい城内戦や夜戦でしか使つてこなかった。

能ある鷹は爪を隠すとまではいかないが、こいつはある程度の実力を持っているがその程度というくらいの認識でやっていきたいと思つている。

本気を出して相手が動揺すればしめたものだ。そういったメリットも含めて、実力はなるべく隠しておきたい。

「それにさっきの一騎打ちで受けた際に手をひねったかも知れない。微妙に右手の感触がおかしい。」

さっきから握っては開いてを繰り返して確かめているがやはりおかしい。

衝撃を逃がしきれなかったせいか、右手首を捻挫しているかも知れない。

「では、後方に下がって援護に回るか？」

「……いや、それもだめだと思う。俺が次の戦いで下がったら、

諸侯や敵はこう思うだろう・・・華雄を討った孫策の将は、一度戦っただけで下がった。華雄を討てたのは幸運と偶然が重なっただけで、孫策の元には軟弱な将しかいない・・・という風にな。それだけは避けたい。」

「・・・一理あるな。なら、どうするつもりだ？」

「雪蓮を前に出して後につきながら弓で援護するか、武器を借りて前に出るしかないな。」

千越寺先生のおかげで、すこしばかり他の武術も出来る。

棒術、槍術、鎚を使つての戦闘。

千越寺流総合格闘術は数々の武術や武闘術を広範囲に手をつけているため、全てを習得しようとしたら50年はかかると言われ、いくつかを選んで修行をつけてもらった。

犀牙流に応用できる剣術、柔術、骨法、空手。

道ばたの物を利用できる棒術、槍術、鎚戦闘術。

これら七つに絞つて、わずか一年で習得した。

だが、完璧に習得できたのは柔術、骨法、空手、剣術の四つだけで、残りの三つは上っ面を舐めた程度の精度にしかならなかった。

先生曰く、武闘のようで舞踏だ、とのことだ。

つまり実力があるように見えるだけだということ、熟練者、達人

には絶対使つなと念を押された。

「ふむ・・・前者は陰のように戦闘できて、なおかつ前に出れる。後者は借り物だから死ぬ可能性が出てくる、か・・・」

冥琳は頭を少し下げ、黙考に入る。

少しして、考えがまとまったようでもう一度頭を上げる。

やはり、軍師という人種は頭の回転が速いのだろうか？

発想力も違うし・・・一体どれだけ勉強すればこうなれるのだろうか？

「前者の策は取れないな。なぜかという・・・」

「私なら前にもいいんだけど」

雪蓮がのんきな発言を制するかのようには冥琳が割り込む。

「雪蓮は！・・・今回軍の指揮に専念させることにする。虎牢関には飛將軍呂布もいる。万が一鉢合わせて勝てるという見込みは全くない。・・・王がやられたら、元も子もないからな。」

「ちえゝ・・・呂布くらい軽くいなしてやるのに・・・」

またもがつくりと肩を落とす雪蓮。

・・・つか、指揮は任せておいてって言ったのに前に出たかって・・・本当に戦うことが好きなんだな。

端から見れば危ないが、俺たちは性格を知っているからそんな風には思わない。

「よって、セツナは武器を借りて前に出るしかない。それでも良いか？」

「別に良いよ。雪蓮を前に出すって言うっても無理とは思っていたからな。」

と、すぐに後ろにいた満貫から槍を借りる。

馬から下り、一通りの型をやって体捌きを思い出す。

武将クラスには歯が立たないが、雑兵程度なら何とか出来るだろう。

雪蓮に目配せをして、OKの合図を出す。

それを受け取った雪蓮は、にっこりと笑って……

「よし。じゃ作戦も決まったし、時期を見て割り込んでいきましょうか？」

と、雪蓮が言うのと同時に前線に張り付いていた斥候が戻ってきた。

「袁紹、曹操が虎牢関に取り付き、戦闘を開始しました。」

「了解した……雪蓮、動くぞ。」

「ん……じゃあ行きましょ、セツナ」

「ああっ！」

俺たちは前線に割って入るために進軍を開始した。

この作戦は成功する確率は低い。

しかし、みんなは成功すると信じて前に進んでいる。

だから、俺も信じ、成功を心中の中で祈った。

この後に控えている孫呉独立、そのために袁術にその楔を打つことを……

「……さすがは虎牢関と言つべきか。すぐには落とせそうに無いわね。」

虎牢関に取り付いた曹操と袁紹はすぐに攻撃を開始したが、虎牢関の防衛能力の前に攻めあぐねていた。

向こうの兵も必死だった。ここを突破されたら洛陽まで一直線であり、道中砦のような物もない。

つまり洛陽での攻城戦を強いられることになる。

後ろがないということは長期戦になれば精神的にも参ってくる。

それだけは避けたいため、？水関以上に防衛には力を入れてくる。

「？水関から退却した張遼。それに飛將軍呂布も居ますからね。」

「・・・ガルム、あなたの魔法や錬金術で何とか出来ないの？」

曹操の隣ですつと杖をかざし城壁の上にいる弓兵に対して、気絶魔法を放っていた金髪の男ガルムは顔を向けることなく曹操の質問に答えた。

「さつき透視で調べたが、思いの外壁が厚い。俺の錬金術じゃここまで大がかりな物を何かに変えることは出来ないし、魔法でも十数発を打ち込まなければいけない。撃っている間に敵はここに殺到してくるだろう。」

「そう・・・なら、他の策を考えましょう。」

「ですが、無理に攻めても被害が大きくなるだけかと・・・」
後ろに控えていた荀？が冷静に意見してきた。

となると、やはり取る策は一つしか残っていない。

「虎牢関から引つ張り出すのが上策、か・・・」

「しかし・・・その策を実行する場合、袁紹軍が連携を取ってくれないと意味がないでしょう。」

「あのバカは攻めることしか頭にないようね・・・迷惑だわ。」

心底ウザそうな顔をして、砦に張り付き策もなしに攻撃している袁紹軍を見る。

元々仲が悪いのだ。今回一緒に前線で戦うことだって、利害が一致しているだけでそれがなかったら絶対に袁紹とは組まない。

「御意。城門の前に取り付き、めったやたらに攻め立てているようですが・・・邪魔ですなあ」

「砦からの攻撃を一身に受けてくれるから楽と言えば楽だけど・・・これではラチが明かないわね」

「何か・・・この状況を変える一石があれば良いのですが・・・」
と荀？が言っていると、後ろの方で見張っていた兵が慌てた様子で曹操の元に走ってきた。

「申し上げます！後方より砂塵！旗印は孫一文字！」

「孫策の部隊だと？奴ら、後方で待機していたはずでは無いのか？」

「・・・何をしに来た？」

「・・・あの勢いから見ると、こちらの戦場に乱入するつもりじゃないかしら!？」

確かに、援軍にしては止まる気配を見せないし、後方で高みの見物を決め込むなら動くこともない。

まるで砦に向かって突撃していくような速度でこちらに向かってき

ているのだ。

「乱入だと！？ただでさえ袁紹の動きが邪魔だというのに面倒な！」

「乱入、か・・・なるほどね」

一人分かったようで、面白そうに口をつり上げる曹操。

隣で見ていた、ガルムもその笑みを見て何となく感づき、小さく鼻で笑う。

「華琳様は孫策の考えがお分かりで？・・・それにガルムも気づいたのか？」

「まあな。・・・孫策が今、消したがつている人間は誰と思う？」

「それぐらい簡単じゃない！袁術でしょ・・・あっ！？」

「そういうことよ。我等はこの一石に乗じましょう。春蘭、秋蘭。孫策の動きに合わせ、敗走するフリをしながら後退する。準備をしておきなさい。」

「・・・なるほど、孫策の意図はそこにありますか。・・・了解しました。」

「えっ？えっ？どういうことだ？」

皆が慌ただしく後退準備する中、夏侯惇だけが頭に？マークをたくさん浮かべてオロオロしていた。

「後で説明してやる。今はすぐに軍を動かすぞ。」

「わ、わかった!」

無理矢理ながらも納得して、すぐさま後退準備に入った。

その後、袁紹軍にも孫策の部隊のことが伝わったが、前線にとどまることを選択し結局退却はしなかった・・・

勢いをつけて、前進していた軍はすでに虎牢関の目の前まで来ていた。

「前方、城攻めの部隊に動きあり!曹の牙門旗が道を開けました!」

「道を開けた?・・・さすが曹操。こつちの思惑、見透かされているっばいわね。」

「そのようね。曹孟徳・・・恐ろしい奴だ。」

「それくらいは予想済みだ。今はその読みが俺たちに味方してくれている。」

後世に霸王、破格の英雄と呼ばれるほど凄い人物なのだ。

これくらいは想定内の範囲さ。後に戦う相手にとって不足なし。

「そうね。私たちにとっては助かることなんだから・・・向こうもこっちの思惑が分かっているなら、うまく連携してくれるでしょ。・・・突っ込むわよ、冥琳！」

「分かった。・・・セツナ。遅れるなよ？」

「遅れるつもりは毛頭無いね！」

と、さらに軍のスピードを上げていく俺達。

その最中、俺は馬脚を早め、颯爽と前に出る。

その後ろに、陰のように付き添うのは明命。

「セツナのこと、ちゃんと守ってあげてね。明命！」

「はっ！この命に代えましても、しっかりとお守り致します！」

「後ろは任せませ！明命！」

「任せました！」

作戦会議の後、雪蓮が突然「なんか不安があるから、明命を護衛につれて行きなさい」という提案があり、実戦で初めて槍を使うという不安があった俺は、意見することなくその案を呑んだ。

急に言い出したから、直感でも働いたのだろう。下手な考えよりよっぽど役に立つから、信頼できる。

「よろしくね・・・では行く！皆の者、我が旗に続けえーっ」

この中に誰一人としてそれを疑う物は居なかった……

「申し上げます！呂布將軍が城門を開き、討って出ました！」

「ちょ……！僕は命令してないよ！」

中央の建物を司令塔に見立て、その中で後々の軍略を考えていた賈馮が素つ頓狂な声を上げて驚く。

「え、そ……そうなんですか？」

「当たり前でしょ！……籠城して、敵の補給切れと内部崩壊を待つって作戦、説明しておいたのに……」

この作戦なら、労せずに連合軍を倒せたはずだ。なのに、呂布と来たら……！

しかし、狼狽はすぐに終わり次なる策を考え始める。

いちいち引きずっていたら、軍師は務まらない。呂布の出陣に合わせて何とか連合軍に損害を与えることは出来ないか！？

「アカン……こりゃ？水関の二の舞になる……なんでウチらの陣営には猪しかおらんのや……」

「申し上げます！呂布將軍に続き、李？・郭？・張濟將軍も討つて出ました！」

おそらく、これらの將軍も天下無双の呂布が出るからと勇んで出たのである。

名が天下に轟く呂布の恐怖を後盾にして、一気に戦果を稼ごうという魂胆だ。

「ああもう！霞！」

「ほいさ！」

「呂布を失えば、僕たちの軍は瓦解する。ただでさえ華雄を失ってガタついている軍に致命的な傷が入って総倒れになるから、出来るだけ多くの將軍を助けるしかないわ。」

先の方？水関の戦いで軍の要だった華雄を失ってしまった。

止められなかった霞を責めるところだが、聞いた限りの状況では華雄の性格上それは無理だと考え、無事に帰還してきたことを労った。

しかし・・・聞いた話によると華雄を討つたのは、孫策の軍にいたただの一般兵だと言うことだ。

数人に聞いても、その一般兵が天高々と華雄の首を掲げていたという話しか聞かなかった。

確か・・・張凱とか聞いたわね。

頭の中の引き出しを全て開けても名前を思い出せない。

つまり、全くの新人を孫策は発掘してきたのだ。厄介なことこの上ない。

「せやなあ・・・ああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！もうっ！これやから猪は嫌いやねん！それに付いていく野良犬も！」

「手綱が甘かったのは僕の責任・・・だから霞。僕を助けて！」

「分かつとる！やつたるわい！」

張遼は、意気込んで返事を返し自分の軍を動かすために、外に出て行った。

「霞！敵に全く情報のない一般兵が居るの！かなりやるみたいだから、気をつけて！」

「あいよあ〜！」

一応の忠告をして、注意を促しておく。

霞なら、負けることはなさそうだけど・・・薄気味悪いわね。

「よし・・・総員戦闘準備！城門から討って出て、敵を押し返すわよー！」

「応っ！」

賈馱の号令がかかり、兵達は慌ただしく戦闘準備に入っていた。

もう虎牢関が目と鼻の先まで迫ってきたとき、ついに城門が開いた。

「城門が開きました！旗印は真紅の呂旗！その後ろに李、郭、張の旗が見えます！」

「張？張遼が出てきたの？」

「・・・いえ！後ろの軍勢に張遼の姿は見られません！」

「そう・・・それにしても猪は釣りやすいわね・・・全軍反転！」

「はっ！」

敵が出てきたところを見計らって、一気に俺達の部隊は反転を開始した。

その動きはよく訓練されたもので、すぐに反転が終わり、来た道をまた全速力で戻っていく。

一番前にいた俺は、殿をつとめるためにあえて速度を落とし、一番後ろに身を置く。

その横には明命、本当に護るつもりで来ている。

後ろをチラリと振り返り、一瞬で敵軍の陣営を確かめる。

敵軍の戦鬪には呂布、その後ろに他の将軍がついて来ている。

前は猪、後ろはハイエナか・・・どちらも餌出せば、釣れるから確かに楽だわな。

でも、前の猪は猪でも世界最強の猪と言っても過言ではない。

戦いたいという衝動に駆られるが、まだその時ではない。

時を待て・・・俺！

曹操の軍の横を抜け、一気に袁術の所まで駆け上がり始めた。

俺達が駆け抜けた後、曹操達も反転を開始し、俺達の後に軍をつけた。

袁紹達は、まだ前線にとどまっているようだ。このまま殿は袁紹になるみたいだ。

もう一度城門の方を見てみると、また新たな部隊が出てくるのが確認できた。

旗印までは分からなかったが、紺碧ということだけはわかり、？水関の戦いの時の記憶をたどる。

確か・・・華雄と一緒に出てきた武将だったな・・・名前は・・・張遼！

帰ってくるときは先ほどより苛烈な戦いが待っていることを予想するのは容易かった。

内心ため息をつきながらも、俺は無我夢中で馬を進めた……

その後、袁術の所まで戻ってきた俺達は追撃の軍を全て袁術に押しつけて、大混乱に陥らせた。

その様子を馬背に立ち、胸ポケットから取り出した多機能防塵サン^{ダスター}グラスの望遠モードで見っていた。

(いい感じに混乱してくれているな……)

倍率を上げ、袁術の姿を捕らえる。

飲み物が入っていたであろう杯をワタワタと振りながら迎撃命令を出し、側近の者がすぐに迎撃準備をしようと右往左往するが、混乱はなかなか収まらない。

このまま、雪蓮達の思惑通りに戦力が削れるといいのだが……

とりあえず、その考えは虫のいい話と思っておこう。

「 ふふっ、慌ててる慌ててる 」

雪蓮はその様子を見て相当ご機嫌になっている。

仇敵が窮地になっているのを見るのは……悪い気分ではない。

むしろ攻めるチャンスだと思い、喜ぶ！

「作戦は成功か・・・曹操が上手く乗ってくれたお陰で、危険な賭にならずに済んだな」

「袁紹さん達の混乱も、いい感じに盾になってくれましたからねえ」

「・・・フウ〜！」

自分の立案した作戦が成功したことで、張りつめていた緊張の糸を少しの間弛める。

肺に溜め込んでいた息を吐き、強ばっていた背中をゴキゴキとならし背伸びする。

その姿を見ていた冥琳に、軽く笑われた。

気恥ずかしくなって、顔が少し真っ赤になってしまった。

「ふっ、お前のなけなしの策に、天も哀れんで同情したかもしれんな？」

「ははっ、そうかもしんねえな・・・」

「ま、気を抜くのはまだ早いけどね。この難場をどれだけ被害を押しさえて乗り切るか・・・正念場はまだ終わってないんだから。」

「うむ。では我らも反撃に移ろう・・・雪蓮、頼んだわよ。」

「了解・・・興覇！幼平！セツナ！」

「はっ！」

「あいよ！」

後ろに控えていた二人は、すぐに雪蓮の元にやってくる。隣にいた俺はそのまま待機。

「部隊を反転させて反撃に移る！袁術軍を盾にしつつ敵を分断！我らは呂布と他の將の部隊に横撃を掛けるぞ！」

「御意！」

「はっ！」

「応っ！」

反撃に備え、にわかに慌ただしくなってきたところに伝令が走ってきた。

「曹操軍反転！続いて袁紹軍も反転！さらに後方よりお味方接近！旗は劉！曹操、袁紹共に向かうは紺碧の張旗！劉旗はこのまま賈！文字の旗に向かっていく模様です！」

いい感じに戦力が割り振られた。俺達にとって、いい傾向だ。

兵達の方に向き、雪蓮が剣を抜いて兵達を鼓舞する。

「傾合いはよし！孫呉の兵達よ！今こそ我らの力を見せつける時！」

「応っ！」

槍がたやすく喉に突き刺さり、声を上げる間もなく絶命する。

素早く引き抜き、次の敵を探す。

ここまでかなりの数の敵を倒してきたが、慣れていない槍を使っているため、少なからず傷を負っている。

防弾、防刃のミルスペック・ジャケットは敵の刃を受けて擦り切れ、城下で買ったズボンも斬られ、斬られた間からは赤い筋が走っている。(いつも使っている薄い青のズボンは現在荊州の城に干してある)

顔にも数か所浅い傷が走り、いつもの手際よく戦う姿とは全くかけ離れた姿であった。

いつも、間合いが短い剣や拳で戦っていたのが響いて、踏み込みすぎて敵に差し込まれたり、意識しすぎて踏み込みが浅く倒しきれなかったりなどの些細なミスがこうした傷となって返ってきている。

(はあく・・・やっぱり剣を借りるべきだったかな?)

形こそ違つにせよ、根本が一緒なのだから馴染んだ剣しか使わないという変な意地を張らずに、張凱から借りとけば良かった。

そう考えながら、長槍を持った敵兵と対峙する。

相手はすぐさまこちらを突いてきたが、慌てず手首を返して槍を絡めながら、突き返した。

相手の槍は俺の横顔をかすめ、俺の槍は額に突き刺さった。

声を上げる間もなく死んだ相手の額からすぐに槍を抜いて、血を払うように振り回す。

そんな隙をついてきた敵兵が、雄叫びを上げながらこちらを斬りつけてくる。

(ちっ!?)

拳を出して応戦しようにも、タイミングとしてはかなりギリギリだ。

このままミルスペック・ジャケットの防刃能力に任してもいいが、衝撃までは逃がしてくれない。骨などがやられる可能性がある。

半ば諦めながら、一縷の望みを掛けて拳を突き出すが・・・手甲にかすって、剣の軌道を外側に逃がすことしかできなかった。

焦げ臭い匂いを放ちながら、敵の剣が上着をこすって俺の横を通り過ぎた。

すぐさま反撃に出ようとするが、なにぶん長槍なため、クロスレンジでは分が悪すぎる。

敵がすぐさまこちらを切り裂こうとするが・・・

「やあああっ!」

陰のように後ろを取った明命が、肩口から敵を斬り落とした。

「すまない! 明命!」

「間一髪でしたね！」

これまでも何度か助けてもらったが、それにしても今日の俺はミスが多い。

戦っていて分かったことだが、違和感のあった右手の怪我がはっきりと分かった。

答えはただの捻挫。三日もあれば治るのだが、そんな悠長なことは言ってられない。

本能がどうしても右手を庇ってしまうため、そこからミスが来ているのだろう。

「あの・・・一度雪蓮様の所に戻られませんか？お怪我もしていることですし・・・」

顔や足の傷を見て、明命は当然の提案をしてくる。

確かに今回は、傷が多い。顔の浅い傷はすでに血が固まって出血は止まっているが、足の方は微弱だがまだ出血が収まっていない。

衛生兵にいつて、包帯を巻いてもらう必要がある。

自分が退いてもいいか判断するために周りを見渡し、現在の状況を調べる。

さすがの董卓軍も、数の暴力には勝てないのか、徐々にこちらの軍が押し始めている。

これなら、俺達が退いたところで問題ないだろう。

「……よし、一旦雪蓮達の所に戻ろう。」

「はいっ！」

元氣な返事を返し、颯爽と護衛するために元来た道を進んでいく。

俺はその後を追いかけて、途上立ち向かってくる敵を苦勞しながらも倒して、やっとの事で雪蓮の所までたどり着いた。

「おやおや……いつものお前らしくない格好をしているな？」

開口一番、冥琳が見るも無様な俺に対して、口をつり上げて皮肉を言ってくる。

……正直、軽く心が病んだ。

俺って、なんか颯爽と戦うイメージでもあるのか？

戦いに関しては、そんなイメージを挟む余裕は持っていない。いつも生き残るために必死なのだ。

「うっせえっ！それよりも、早く治療してくれ。」

「それもそうだな。……衛生兵！すぐにセツナに、治療を！」

すぐさま衛生兵が俺の周りを取り囲み、治療を開始する。

服を荒々しく脱がされ、手早く傷口を調べ、水で血を洗い流していく。

「痛っ!?!?!?!もうちょっと優しくっ!」

「何いつているんですか!?!將軍ほどの男がこれくらいで!?!ちよっとは辛抱してください!」

一人の衛生兵に、一喝されて、居心地悪そうに身をよじった。

・・・痛いものは痛いつて言つて・・・何が悪い。

血止めと自然治癒促進の効果がある軟膏が傷口に塗られ、包帯がそこから彼処に巻かれていく。

「これでよし・・・っと!?!しばらくは動かないでくださいよ!」

すぐにでも動きそうな俺に、釘を刺し、次の負傷兵の所に走っていった。

しばらく動くなって・・・それは無理な相談だぜ・・・

「冥琳、そろそろ本格的に・・・って、セツナ!?!どうしたの、その包帯!?!」

指揮していた雪蓮が冥琳にこの後のことを相談しにやってきた。

全身に包帯を巻かれた俺の姿を見て、かなり驚いているようだ。

それもそのはず、今までの戦いでここまで負傷したことはなく、こ

ここまで大きさに包帯を巻かれたことはなかったのだから……

「ちょっとマズってね……それより、戦況はどうだ？」

俺は、ズタボロのミルスペック・ジャケットを直すために、ジャケットにしまつてある物を全て出し、懐にしまつてあつた錬成手袋ですぐさま手を合わせてジャケットに手をかざした。

「……今の所私たちがの方が優勢ね。このまま行けば、虎牢間は落とせるわ……だけど、呂布と張遼の動きが気になるのよ。」

たちまち錬成反応が起こり、前の状態のジャケットができあがる。

着直し、散らばっていた物を元の場所にしまいながら、雪蓮の話を聞いていた。

「ふむっ……おそらく二人で強撃をかけ、私たちの勢いが止まつたところで一気に退却するつもりなのだろう。」

「確かにそれなら、退却することは可能ね。どうしましょうか？」

「我々が動く必要はない。呂布は劉備達が、張遼は曹操達が対処してくれるだろう。むやみに出て、損害を出す馬鹿はいないだろうな。」

多機能防塵サングラスを胸ポケットにしまい、錬成手袋を懐に入れ、身支度を調えながら、冥琳達の会話について考える。

呂布と張遼がこちらの勢いを止めるために突撃してくる。

ならば、どの武将が止めることになるのか・・・

おそらく、聞いている限り呂布の方には関羽達が、張遼の方に夏侯惇が夏侯淵が当たるだろう。

多分呂布の方は華雄と・・・いや、華雄以上の猪であることは間違いない。史実でも狂人と記されることが多いし、圧倒的なまでの暴力がそう謳わされているのだろう。

張遼はこの時代に生きる優秀な武人であろう。引き際をしつかり見極め、そつなく退却していくことは間違いない。

なら、どちらの方に行くか？

適度なところで切り上げる張遼か、いつまでも戦い続ける呂布か？

俺は一人、その場で深く深く黙考する。

・・・これは呂布と戦うチャンスである。

最初で最後のチャンスかも知れないし、振ってくるチャンスを避けるようなことはしたくない。

掴めるヤンスは全て掴む・・・それが俺の信条だ。

また長槍を持って、馬に乗ろうとしたが・・・

「待ちなさい、セツナ・・・どこに行くの？」

雪蓮に止められた。やっぱり簡単には見逃してくれないか・・・

「突撃してくる武將を止めに行く。」

「……どっちの方に行くわけ？」

雪蓮の目から、張遼の方であつて欲しいという思いが、少なからず読み取れた。

それほどまでに呂布は強いのだ。それにこの傷だらけの体……誰であつても、無理な出撃は止めるだろう。

でも、今動けるなら傷など関係ない。闘争本能には抗えない。

「……呂布の方に行く。おそらく、いつまでも撤退しないだろうから、ちよつと援護しに行くぐらいだよ。」

「死に行くつもり！？そんな体で呂布と戦つたら、瞬殺されるわよ！」

「簡単には死なないさ。それにな、雪蓮……俺が戦うことによつて、十人、百人の命が助かるなら迷わず戦いに行くのが、俺って言う人間なんだ。」

馬の腹を蹴り、雪蓮の言葉を待たずに駆け出す。

向かうは劉備達のいる戦場。その戦場に呂布が向かっていると聞いた。

「……なぐに、死に行くんじゃないか……生きるために、戦うんだ。」

独りごちながら、呂布に対抗するための手をあれこれ考える。

正々堂々と言う言葉の足枷を外したら、生き長らえる方法なんていくらでも持っている。

今回はそれを使うまでさ！

はやる気持ちを抑えながら、空雷は主人の気持ちに答えるかのように馬脚を強め、混沌と化した戦場を突き抜けていった。

「恋、強い……なめてると死ぬ。」

呂布はすでに劉備達と会敵していて、関羽、張飛、趙雲の三人が対峙していた。

両者、全く動かない……いや、動けないのである。

下手に動くと、呂布に斬られてしまうからだ。

その中で、関羽は一步前に出て……

「確かに、だが……我等とて腕には多少覚えがある。全力を持って貴様を止めてみせよう。」

威圧感たっぷりに青龍偃月刀を構え、いつでも斬り込める体勢を取

る。

重く、息苦しい雰囲気を二人は醸し出し、両者の間には乾風が吹き込む。

そして、関羽が半歩だけ踏み込んだその瞬間！？

「待ったっ！」

「……っ！？」

「孫策が主、セツナ・フォーリングが助太刀いたす！」

「何っ！？」

時代がかった台詞を言って関羽を押しつけて、呂布の前に躍り出る。

空雷を高く跳びあがらせ、槍を投擲。その陰に隠れて弓を広げ、すぐさま二矢を速射する。

「……無駄」

何の驚きもしないで、槍と矢を軽く捌く。

「ちっ！」

あれぐらいで倒せるとは思っていなかったが、事もなしに捌かれたことに腹が立った。

馬から飛び降り、そのままの勢いでドロップキックを放つ。

得物を持っている相手に対してキックはタブーとされているが、威嚇の意味を込めてあえて放った。これなら、ガードしてもかなり踏ん張らないといけなから、そのぶん隙が出来る。

「・・・遅い」

まるで、歩いていて人を避けるような緩慢な動作で、渾身のドロツブキックを避けた。

当てる前提で放ってしまったため、着地に失敗し、尻を焦がす勢いで滑っていく。

すぐに体勢を立て直し戦闘準備に入ろうとしたが、すでに呂布が目の前まで迫って来ていた。

「・・・これで終わり」

神速の斬撃が上から降ってくる。

音速を超える銃弾を見切るこの目でも、その斬撃は淡く霞んでいる程度しか見えない。

（っ！？なんて斬撃なんだ！？）

とっさに吹っ飛ばすように横に跳び、辛くも避けられた。

ズゴオオオンッ！

外れた斬撃が地面を抉り、その刃筋で1メートル程度の溝が出来上

がった。

そして、その破碎跡はまるで・・・上から鉄球を落としたかのごとく陥没し、見事なクレーターを作っていた。

「・・・」

背中に戦慄が走り、こめかみに一筋冷や汗が垂れてくる。

・・・こいつは、正真正銘の化け物だ！

着地した体勢のまま、呂布を見据える。

方天戟と思われる物を片手で構え、今にもこちらを両断しようといつと見据えらえていた。

周りを見渡し、使える物がないかと探す。

すると、足下の方に普通サイズの槍が、転がっていた。

これは使えると思い、足で手元に引き寄せた。

その瞬間、呂布は動き、こちらを水平に薙ぎ払ってきた。

掴んだ瞬間、後ろに弾けるように飛び、アンダースローの要領で呂布の顔面を掛けて、槍を投げた。

「・・・ん」

重そうな方天戟をなんと片手で操り、飛んでくる槍を軽く薙ぎ落と

す。

しかも、それをこちらに突撃しながらやっているのだ。

そのままの体勢から今度は突きを繰り出してきた。

槍、トライデント、ハルバードなどのポールウェポン類の攻撃の中で一番確実に人を殺せる攻撃は何か？

それは、突きである。最小の動作で、相手の急所を貫けるが可能な故、その速さを見切り避けられる人間は数少ない。

しかも、呂布の突き。速度にして光速にも達するほど速いだろう。

少しでも反らすため、地面を蹴って砂利を呂布に向かって、蹴り上げた。

「っ！？」

バチバチと砂利が呂布の顔を叩き、そのせいあってか、突きの打点が少しだけズレた。

頭を振って何とか突きをかわしたが、横に出ている刃が頬をかすり、新たな傷を作った。

目に入ったのか、呂布は下がりながら方天戟を振り、一旦間を取った。

その間に俺は関羽達の所に退却して、一息ついた。

「助太刀いたすと言って・・・あの程度とは底が知れますな・・・南の天の御使いよ？」

前の一件と今の割り込みのことを根に持っているのか、冷ややかな目で皮肉を言ってくる関羽。

「・・・お兄ちゃんは、弱くはないと思うけど・・・あれくらいじゃ、呂布には勝てないのだ！」

無邪気な声で、無慈悲な事実を突きつけてくる張飛。

「まあ、二人とも。そこまで言わなくてもいいではないか。」

不思議にこちらを庇ってくれる、白基調の服を着ている女性。

「おっと、申し遅れましたな。我が名は趙雲、以後戦場ではお見知りおきを・・・」

あっ、この子が三国志で超メジャーな武将、趙雲か。

義に生きる人物として有名で、一度は劉備の元を去るが、誓いを守るためもう一度戻ってくるほど忠義な人物として知られている。

「ですがな、御使い殿・・・何の策もなしにあの呂布に向かっていくのは、少々・・・いや、だいぶ無謀ですぞ。」

口端をつり上げながら、毒を吐いてくる趙雲。

「・・・やっぱりこいつら、全員嫌いだ。・・・って子どもみたいなこと言っている場合じゃないか。」

「ああ、となると……やはり策が必要になってくるか。」

「ええ、しかし……天の知識の策があつた呂布にどこまで通用するか……見物ですな？」

関羽は、またも冷ややかな目で皮肉を言ってくる。

正直、精神的に参ってくる。

挫けそうな心を奮い立たせながら、策を考える。

搦め手は？……だめだ。そんなことをしてもそのまま斬られるだけだ。

なら、ワイヲリ力流無形を使った正面からの奇襲は？……これもだめだ。あの強さなら超人的な勅も絶対備えている。見切られてこちらがおしまいだ。

それなら、腰に掛けてある銃を使うのは？……この時代で使うのは出来るだけ避けたい。それに、弾丸を見切られる可能性の方が高い。

一応THV弾を装填してきているが、所詮は拳銃弾。音速をやっと超える程度の弾丸速度しか出ない。

となると……俺を捨て駒にして、呂布の体力をなるべく多く削るしかないか……

俺では、数合……いや、三合も満たないうちに、斬られる可能性

があるが、関羽達なら互角に戦えるはずだ。三人で向かっていけば、なおさらだ。

できるだけだけの存命手段を選んで、この策を長く実行していただけるかが鍵になるな……

「とりあえず、呂布の体力を削る策で行こうと思う。」

「して、その策は？」

「簡単なことさ。俺が捨て駒になればいい。」

「……なっ!?!?」「」「」

実際の所、俺一人での囷の経験はいくらでもある。

夜襲の時、スナイパーの潜伏しているポイントを探り出すためわざと撃たれるために、隘路でトラップの場所まで誘導するために、わずか数人程度の小隊を守るために何日間も万丈樹イノマシ・セコイアの木々の間で一人で囷になり、援軍を待った……と経験してきたことを上げていけばキリがない。

端から見れば捨て駒同然の状況から、当たり前のように生還してきた。今回もただそれをやるだけ。

「俺が、なるべく呂布の体力を削る。あれこれ手を使ってな……後は適当なところで敗走するから、その後は君たち三人に任せる。」

「し、しかし……あなたはそれでいいのですか!? 誇りも尊厳も捨てるような行動に出て、構わないというのですか!?!?」

さすがの関羽も、嫌悪している相手とはいえ武人の誇りを捨てに行く俺を、引き留める。

・・・案外いい奴なのかな？ すこしだけ見直した。

それと同時に俺が武人であることを思い出させてくれた。

だがな・・・生きるためには、そんな安っぽい誇りなんて簡単に捨ててやるさ。

「構わん！そんな誇りを捨てて、生き残れるならあっさりと捨ててやるさ。」

「っ！？・・・やはり、あなた達は我等と考えが根本から違うのですね。」

哀しそうな目で関羽が意味深な言葉を吐いてくる。

「んっ？あなた達って？」

「我等の御使い様も、命あつての物種という考えが根本にあるのです・・・あなたもその考えと同種なものだと、私は感じましたぞ？」

趙雲の説明を聞いて、腹の底からどす黒い感情が沸き起こり、すぐに頭を支配する。

俺が・・・エリナと同種だと！？

違う。あいつは何が何でも生き残るという考えだ。たとえ、その身

を真っ黒に染め上げて生き、他人のことはどうでもいいと考えている。

俺は・・・他人をどうでもいいとは思っていない！

出来ることなら、助けたいいつも思っている！

それが出来ないから・・・仲間だけという諦めに似た考えを持って自制しているのだ。

沸騰する頭を必死で冷まし、爆発しそうな劣情を押さえながら、話に合わせる。

「・・・確かにそうかもな。さて・・・分かったならいいな？」

「・・・はい。」

「分かったのだ！」

「私も賛成です。しっかりとその策に乗っかりますぞ。」

全員の賛成を得られたので、頷き、呂布の一步前に入る。

呂布は砂利が入ったのか、目をこすって待っていた。

「待たせたな・・・呂布。」

「ん・・・おまえ、なかなかやる・・・だけど、卑怯。」

こんな純粹無垢な声で言われたら、俺がまるで悪役にでもなってい

る気分に襲われた。

「御使い殿……この場合、我々が完全に悪役ですぞ？」

「……趙雲、考えていることを読まないでくれ。」

「おっと、これは失礼。」

「たくつ……生きるなら、少しぐらい卑怯じゃないとこの戦乱は生きていけないからな。」

スタンスを広げながら、いつでも飛び込める体勢を作っていく。

拳はまだ上げない。一瞬で構えを作り、一気に跳はける。

「……ここからは、正々堂々。」

「そいつは……どうか？君は、とても強いから真っ向勝負は出来ないかも知れないぞ？」

「……わかった。……面倒だから、四人同時に来い。」

片手で、10？もありそうな方天戟を肩に乗せる。

そして、そこから醸し出す威圧感は、今まで出会ってきた強敵の比ではなかった。

例えるなら、魔神または修羅神と言ったところか……

どんな敵にも、腰を引かなかったこの俺が今にも逃げ出したいとい

う気持ちに駆られる。

足がすくんで、前に踏み出せない。カタカタと体が震え始める。

しかし、そんな弱気な行動は全て気合いでねじ伏せた。

「まずは・・・俺から相手になってもらうぜ！！」

一瞬で鋼牙の構えを取って、弾丸のごとく呂布に跳けた。

「・・・直線的すぎる。避けるの簡単。」

ひらりと俺の突進を避けようとする。

(ちっ・・・やっぱり普段通りには行けねえか。)

避ける方向を予測して、その方向に膝を抜いて重心を転ばす。

「・・・動きが変わった？」

「はあああっ！」

自分の間合いに一気に詰められた！？　これは奇跡に近い。

このまま一気に自分のペースに持ち込むために、ボディに重い一撃を食らわそうとするが・・・

ギインッ！

片手で方天戟を操り、俺とのわずかな隙間を縫って割り込ませ、拳

をガードした。

(っ!?!マジかよ!?)

何という戦闘センスとひらめき。

考える間もなく、左で返しを打とうとするも薙ぎ払うように振り払われ、拳は空を切った。

逆にそのまま返しで、上から振り下ろされてしまった。

先ほどよりは目が慣れて斬撃はまだ見えるようになったが、それでも避けられる自信は全くない。

拳を出して、膝を抜いて避けながら、振り下ろされる戟に合わせて、いなす。

ギギギギイイインツ!

何とかいなせたものの、重い衝撃が手の甲に走る。

振りおろしの際について、体を密着させる。

こうでもしないと、またあの神速の斬撃が襲いかかってくる。

間合いのある戟は、懐に潜り込まれると弱いのは、周知の事実。

先ほども言ったが、避けられる自信は全くない。

攻撃をさせないことで、自分の生存率を上げている。

この体勢から、またボディを叩こうと拳を出すが・・・

ギンツッ！

さっきと同じ事をされ、またも防がれる。

しかしセツナはそんなことはお構いなしに、ガードの上から連打した。

ギンツッ、ギンツッ、ギンツッ、ギンツッ！！

ガードの上から打つこと数度、呂布はウザそうに顔を歪める。

「・・・無駄」

さっきと同じように振り払おうと戟を振る。

セツナは、戟の柄を掴んで曲芸のように遠心力を利用して、呂布の後ろに回った。

本来なら不可能だが、膝抜きと転ばしの鍛練を積んで体の重心の制御をほぼマスターしているのです、これくらいの芸当は可能である。

その遠心力を利用して、がら空きの脇腹に蹴りを入れた。

「うつ！？」

呻き声を上げ、セツナのいた方向に戟を振るも、すでにセツナの姿はなく、またも体を寄せられていた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

息を整えながら、呂布の状態を伺う。

脇腹への蹴りもすんでの所で籠手にガードされて、ほぼノーダメージになってしまった。

こちらは神経をすり減らしながら攻撃しているため、体力を消耗して息が上がってきているのに対して、まだ呂布は乱れた呼吸一つもしていない。

普通ガードの上から叩かれても踏ん張るため、少しは体力を使うと思っただけだ・・・

見込みが甘かった。さすがに怪物級なだけはある。

(ちっ・・・どうやら、俺じゃこれ以上は命取りになるな。)

これからどうしたものかと考えていたら、目の前から拳が飛んできた。

「うっ！？」

額を思いっきり殴られ、間合いを取られる。

「・・・恋に、同じ手は効かない。」

空いていた手で額を殴りつけられたと気づいたときには、すでに振りかぶってこちらを見据えていた。

「・・・終わり」

「っ!？」

神速の速さで振り下ろされる方天戟。

体勢が崩れている今、膝を抜いて回避することさえ叶わない。

一か八か、腕をクロスさせ、ガードを試みる。

ガキイイインツ!!!

いつもより甲高く、耳障りな金属音を発しながらもガードに成功した。

さすがは、エノキウス鋼・・・強度はなかなかあるな。

しかし、成功した代償も大きかった。

そのエノキウス鋼の強度を持っても綺麗に歪曲していた籠手部分は凹み、衝撃を分散させても腕がもげそうなほどの痛みが走った。

幸い骨が折れるなどの外傷はなかったが、これ以上の戦闘続行は不可能と判断する。

何とか方天戟をはじき、後ろに飛んで一気に距離を稼ぐ。

それを呂布が追おうとして、前進したところに・・・

ヒュン、ヒュン

飛んでいる間に取り出しておいた右左の足と懐、左腕に仕込んである投げナイフを時間差で顔目掛けて放った。

「・・・遅い」

器用に片手だけで捌き、またも俺に接近する。

(これだけは使いたくなかったんだがな！)

腰に掛けてあるホルスターからカローンP21CQBを抜いて、これも顔目掛けて撃ち込む。

パシユンッ！

消音処理はすでに行っているため、気の抜けたシャンパンみたいな射撃音が俺の耳に飛び込んできた。

「っ!?!」

音速の壁を突き破って飛んでくる銃弾を本能が危険と感づいたのか、全て戟で弾いた。

その間にセツナは関羽達の所に退却し、馬に乗って逃げていった。

「・・・今の、何？」

先ほど弾いた銃弾の数は、六発。

一度のトリガー捌きで六連射し、あまつさえ……

「……痛い。」

太ももには、投擲用の小さな短刀が刺さっていた

銃弾に目を取られている隙に最後の投げナイフを、呂布の足目掛けて投げ込んでいたのだ。

「さて……今度は、我等の相手をしてもらおうか？」

刺さっているところを見ていた呂布の前には、後ろで待機していた関羽、張飛、趙雲が立ちはだかった。

「……」

「さすがは御使い殿だな。あの呂布に一矢報いるとは……」

「これで、鈴々達が有利に戦えるのだ！」

「さて……呂布よ。覚悟はいいか？」

各々の武器を構えて、呂布を問いただす。

「……次は、お前達か？」

痛みを気にせずにナイフを抜く。血しぶきが呂布の足を染め上げたが気にしない。

「お前たち、倒す。……恋たちはにげる。」

「大層な自信だな・・・」

「そんな体で、鈴々達三人に勝てると思うなのだ！」

呂布と、関羽達三人は同時にぶつかり合った。

この後、三人は二、三合打っただけで呂布の部下から火矢が放たれ、戦闘を止めざるを得なかった。火矢で進撃の勢いが弱まったことで、呂布達は虎牢関に退却していった。

曹操の方に突撃していった張遼はというと、対峙していた夏侯惇の説得に応じず、進撃の勢いが止まったこともあって虎牢関にうまく退却出来たのであった

そのころ、呂布との戦闘から命からがら逃げ延びたセツナは、雪蓮達の所に返る最中、自分の腕の状態を調べていた。

「ててててっ！・・・ちつくしょー！呂布の奴、馬鹿力しやがって
く・・・」

あの戟を受けた両腕は、赤く腫れ上がっていた。

まあ、他に怪我がなかったことだけは不幸中の幸いだな。

「さて・・・今後あいつと会敵したら、なるべく戦わないようにし

ないとな。」

さっきの戦闘で、次元の違いがはっきりと分かってしまった。

俺もまだまだ未熟ということか・・・

とりあえず、この敗北に感謝しないとな。

馬に揺られながら、腰に掛けてあるなめし革のナイフボックスに手を突っ込むが・・・

出てきたのは、たった二本。

「嘘おつ！ たったこれだけ!？」

セツナは、身につけている5本+予備としてなめし革に収納している5本をいつも持ってきている。

今までの行動を思い返してみると、食事などで生肉などを捌くのに一本、戦闘で使った三本、そして先ほどの五本。

汚れている方が使つてある方だから、実質一本しかない。

「・・・残弾とかのチェックは、本能レベルで染みついてんだけどな?」

無いものをグダグダ言っても仕方がない。

残っている一本を、右腕の方に仕込んでおく。

「さて・・・みんなの場所に帰るか？」

空雷は同意するように嘸き、少し足を速めてくれた。

その後、雪蓮達の所に無事帰ってこれたセツナは、無断出撃を冥琳からこっぴどく怒られ、思春からはネチネチと文句を言われ、雪蓮には怒られている姿を思いつきり笑われた・・・

虎牢関を放棄した董卓軍は、最後の本拠地である洛陽まで撤退していた。

しかし、連合軍の執拗な追撃で徐々に兵力を消耗し、虎牢関防衛時の兵力から半分以下まで削られた。

そして、目的地の洛陽まであと少しのところ・・・

「・・・わかった。下がって良い。」

「はっ。」

斥候から返ってきた兵の報告を聞いて、冥琳は渋い顔をした。

「どうした？」

「董卓軍の残っていた武将が全て洛陽に撤退していったとのことだ。殿の呂布と、張遼はまだ追撃されているらしい。さすがの連合軍でも仕留めきれないみたいだな・・・」

「それで、洛陽に籠もって籠城戦って訳ね・・・首都だから守りが強固な分、厄介ね」

（ん？戦うにとしては、まるで他人事のように言うな。なぜだ？）

この追撃戦で俺達は袁紹と袁術の前、つまり最後方一歩手前のところで進軍していった。

前線には曹操と劉備の軍が、俺達の前には他の諸侯が並び、このグループが追撃戦を仕掛けていった。

袁紹と袁術は虎牢関での損害が激しく、現在軍を再編中である。

この追撃戦で、兵力を温存するために俺達は怪しまれない程度に何もしていない。

「でも・・・私たちには関係ない事よ。洛陽に着いたら外に陣地を構築して、籠城戦は他の諸侯に任せましょう。」

「いいのか？俺は別に反対しないけど、一番乗りとかの榮譽があるだろう？・・・それを他人にやるなんて・・・」

「私もセツナと同意見だ。・・・洛陽一番乗りの榮譽を捨てるのは、あまり賛成できないわね。」

この時代は何より名声が力の強さを示していると言っても過言ではない。

それを捨てるとなると、冥琳も反対の立場に回る。

「孫呉の軍勢の勇敢な戦いぶりは十分に示せたと思うし。セツナの献策を受けて、各地に間諜を放っているんだから、一番乗りの榮譽くらい譲っちゃってもいいんじゃない？・・・それにここまで来るのに、いろいろと利用させてもらったのだから、そのお返しよ。」

「・・・わかった。ならば軍勢一番乗りの榮譽は、他の諸侯に譲ろう。その代わり我々が前に出る必要がある。」

「なんで？このままでいいじゃない。」

「後から来て、高みの見物というわけには行かないわよ。前に出て攻撃を仕掛ける振りくらいはしておかないと、怪しまれるわよ？」

「分かったわ。・・・それじゃ、少し速く進軍しましょうか？」

「はっ！」

「はっ！」

傍にいた明命と思春が指令を飛ばし、俺達の軍は他の軍より少し速く行進を早めた。

一つ抜き、二つ抜き・・・と言ったところで、雪蓮が俺に声を掛けてきた。

「あれ？セツナ・・・いつもの手甲は？」

遠征中はいつもつけている手甲は今外して、腰のホルダーに掛けている。

なぜ、外しているかというと・・・

「・・・呂布のと戦闘で、思いっきり凹まされた。」

取り出して、雪連の方に放り投げる。

「と・・・あら、これはひどいわね・・・直るの？」

「陣地が構築されたら、直しにかかるよ・・・今は格好が悪いからつけていないだけ。」

「今更格好気にしたってね・・・返すわ。」

ポイツと、軽々しく投げ返された。

「もうちょっと丁寧に扱ってくれよ・・・」

「あはは、ごめんごめん！」

無邪気に笑って謝る雪蓮。その顔を見て自然と笑顔がこぼれた。

雑談をしながら、ついに先頭の劉備を抜かしたところで、急に開けた荒野が目飛び込んできた。

そして、もう目と鼻の先には洛陽が見えていた。雄大にそびえ立つ漢王朝の首都がこちらを待ちかまえている。

遠くの方からは、雄叫びがこちらまで聞こえてくる。おそらく追撃隊が呂布か張遼を追っているのだろう。

しばらく歩みを進めていると、追撃隊が横を通り過ぎていった。

秀囲気からして、大物を取り逃がしたのだろう・・・全員の足取りは重かった。

特に先頭をいる頭に包帯を巻いている将の落胆ぶりは兵の比ではなかった。

少しすると、今度は見慣れた将、関羽が俺達の横を通り過ぎた。

こちらにも追撃の成果はなしと言ったところか・・・

音響視力フォニック・アイで追撃の結果を盗み聞きする。とりあえず情報を聞いておけるなら聞いておきたい。

(・・・様、申し・・・せん！張遼を・・・がして・・・ました。)

(そう・・・蘭、ごくる・・・ま。・・・ってい・・・わ)

雑音が混じって聞き取りづらかったが、何とか聞こえた。

さて・・・もう一方の方は・・・

(・・・様、・・・訳ございません。・・・でた・・・の、呂布は・・・げまし・・・。)

(あや・・・ても、いい・・・。・・・ちゃんが・・・なら・・・いいんだよ。)

劣いの言葉のかけ方一つにしても、千差万別だな。勉強になる。

それより・・・今からどうするか？

追撃隊が帰ってきてからまだそれほど時間はたっていない＝遠くには逃げていないってことだ。

呂布はこの身で感じたから追撃は無理として・・・かけるなら、張遼の方がだな。

その時、頭の中で何かがピーンと閃いた。

これは、後々のことに関してもかなりのメリットを生む。

よし・・・早速実行しよう！

「雪蓮・・・ちょっと席外すわ。」

「えっ！？・・・一体どこに行くの？」

「すぐに戻ってくるって！それじゃ、行ってくるわ・・・あつと、それと旗を少し借りるぜ！」

「ちょっと、セツナ！説明していきなさいよ！」

そんな雪蓮の小言を無視しながら、すぐに部下の四人に声をかけ、一緒に駆け出した。

目指すは張遼の逃げた方向。全力で飛ばせば、先回りできるだろう。

自分の閃きの成功を、ワクワクしながら馬を飛ばしていった……

「あたたっ……痛い目におうたわ。」

辛くも夏侯惇の追撃を振り切った張遼は一息を付く。

多少の傷を受けたものの、まだまだ元気である。

「何人くらい、逃げれた？」

「……我々を含めて、これだけです。」

見渡すと、わずか50余人。

残りの数万は、戦場に散ったかはぐれてしまったのだろう。

「たったこんだけか……まあええ。逃げただけでよしとしよう。」

「命あつての物種ですからね。」

「月や賈馱っち、呂布ちゃんを助けに行けへんのは心苦しいけど……あきらめやななあ……」

張遼の顔に哀愁が漂う。

長い付き合いだけに、別れるのが辛い。

まあ、あの二人のことやからそう簡単には死なんやろう。特に呂布
ちゃんは。

「さて・・・変装でもして、遼州まで逃げるで！みんな、死なんよ
うにな！」

「張遼様！」

逃げ道になる道を偵察しに行っていた部下が血相を変えて帰ってき
た。

ここは主戦場とかなり離れている。誰もいないはずなのだが・・・

「何や!？」

「前方にわずか五騎がこちらの道を塞ぐように待ちかまえています。
旗印は孫一文字！」

「孫?・・・孫策の部隊の奴がここにおるんか!？」

あり得ない・・・今までの追撃戦では姿さえ見せてなかったのに・・・

誰かが独断で動いたんか？

「ええ度胸やないの・・・袋叩きや!・・・って言いたいけど、さ
すがにそれはあの人数に来た相手を大勢で叩くのは性に合わん。ウ
チ一人で相手する。」

「いえそれはっ！張遼様にもしものことがあれば我々はっ……」

兵達は張遼にすぎりよってくる。

ここまで来るのに、何度も死ぬ思いをした。

しかし、張遼がいたからこそ、ここまでこれた。

その精神的支柱をもしなくすことになれば、彼らはもう歩くことは出来ないだろう。

「阿呆。もうちょっとで逃げ切れるんやから、後は自分の才覚で何とか逃げ切らんかい！」

「しかし……」

まだすがってくる兵達にピシヤリと張遼が言い放つ。

「しかしもカカシもあらへん。……ウチがあいつらと戦つとる内は、敵の注意を引けるやろが。その隙をついてさっさと逃げえ。それがウチに出来る最後の饞別や……」

「ちよ、張遼様……」

兵士達は、この將軍の雄大さにむせび泣く。

今の時代、部下の責任をとれる上司が何人いることだろう……

しかし……張遼が考えていたこととは全く反対の方向に事態は進

む。

「張遼將軍！兵たちを連れて、こちらまで来てもらいたい！」

敵がなんと、こちらを手招いている。

罠に誘っているのか？しかし、それならばもっと巧妙に罠に誘ってくるはずだ。

あまりにも正面から来すぎている。

「・・・罠かもしれやんけど、ウチを呼んどるんや。行かんわけにはいかんやろ・・・おっしゃ！乗ったんで！全員、ウチについてこい！」

「はっ！」

張遼を含めた全員が、呼ばれた五人のほうに足を進めた。

進軍中の軍から抜け出してきたセツナは、部下たちを連れてすぐに張遼の後を追った。

明らかに張遼は自分の故郷、遼州の方向に向かっていった。帰省本能でも働いたのだろうか？

そのため、馬の速度を上げ気づかれないように迂回し、先回りして待ち伏せを敢行した。

案の定進路を変更せずにそのまま俺たちが待ち伏せしている場所までやってきたのだ。

「あんたか？ウチを呼んだんわ？」

「そうだが？」

先ほど呼んだ張遼が、こちらに呼応して兵達と一緒にやってきてくれた。

残っている兵の数は・・・4～50人つて所か。

数万いた部隊がここまで削られるとは・・・

さすがは連合軍。腐っても鯛ってことか。

だが、今回の目的は殲滅ではない。

殲滅が目的なら、もっと兵を借りてきているさ。

「用件は何や？ウチら、今敵から逃げんのに忙しいんやけど？」

明らかに殺気だった声で聞いてきた。

それもそうだよな・・・いないと思っていたら、いたんだもの。

「張遼。俺は無駄に命を失われるのが嫌いだ。だが、逃げているお

前らを知った以上、見て見ぬふりは出来ない。そこで取引しないか？」

「取引？ウチら何も持ってないで？」

「取引材料は・・・お前自身だ。張遼。」

「なんやて!？」

驚きの声を上げこちらを睨んでくる張遼。

後ろの兵達も殺気立ち、目線で殺さんとばかりに睨みをきかせてくる。

・・・そんな目で見ないでくれ。胃に穴が空く！

「取引の内容は、兵達の命だ。まず、残っている兵を無条件で逃がしてやる。しかし、張遼は俺と戦え。勝ったら、そのまま兵達と逃げがいい。だが、負ければ・・・俺たちの仲間になれ。」

これが俺が閃いた内容だ。騎馬民族出身の張遼をこちらに引き込めれば、陸戦での戦闘能力は格段に上がる。

また、将が少ない今、出来る限りの将を集めておきたい。後進が順調に育つという保証は全くないし、有能な将は多ければ多いほどいい。

「・・・そんだけ？」

「ああ。」

「・・・ぷっ、アハハハッ！」

条件を聞いた張遼が腹を抱えて笑い始める。

後ろの兵達も、爆笑している。

はっきり言って・・・不愉快だ

張凱達からも、苛立ちが感じ取れる。

目線で、張凱達を制し不愉快な気持ちを気合いでねじ伏せる。

「・・・何がおかしい？」

「い、いやっ、そこまで自信があんのが面白くてな！いや、まさか、腕比べを挑んでくると思わなかった！」

まだ腹を抱えて笑っている。

・・・俺って、そんなにおかしいことを言ったか？

部下達を見回し目線で問いかけてみるが、全員が首を横に振った。

「やけども・・・あんた、自惚れすぎっちゃうんか？」

「何？」

「ウチは、華雄とはちがうで？・・・あんたやろ、華雄を斬ったんは？」

やはり見ているか・・・

「それに・・・呂布ちんとも結構まともになりあつとつたし・・・華雄を斬ったんはあんたしか考えられへんのやけど？」

これでは力の隠蔽ができない。あまり自分の力を知られるのは好きじゃない。

能ある鷹は爪を隠すとまではいかないが、情報が漏れることは出来るだけ避けたい。

だが・・・仕方がない。ここでは本当のことを言おう。

「・・・そうだ。」

「華雄みたいにまぐれで勝てると思ったら大間違いやで？それでも・・・闘るつちゆうんか？」

そこまで言われたら、黙っていられない。

覇気を全開にして、一気に集中力を高める。

「っ！？」

その覇気の余波で、その場にいた全員がたじろぐ。

「やってやるよ・・・取引は、成立ってことでいいのかな？」

「そうなや・・・ほれっ！みんな、早よ行き！」

「しかし！あいつらの後ろに罠がないとは限りません！」

「ここまでのアホが、そんなもの仕掛けとるか！ウチも、後から追いつくから心配せんと行きな！」

「……御武運をっ！」

兵達全員が、軍礼を取り俺たちの横をすり抜けていく。

これで、少しは無駄な殺生をしなくても良くなった。

全員が過ぎ去った後、俺は道中錬成して直した手甲をつけながら馬から下り張遼と真正面で睨み合う。

「……さっきの言葉、訂正するわ。」

と、おもむろに青竜刀を抜き、構えてくる。

「あんた、めっちゃ強そうやん！さっきの闘気で分かったわ。ただ者やないってことが……」

「それは結構なことだ……」

俺も、足に体重を散らして鋼牙の構えを取る。

出方が分からない以上、基本に忠実にした方が安全だ。

「ゾクゾクするなあ……強い者と闘う時って……あんた、名は？」

「・・・セツナだ。」

「セツナか・・・その名、ウチの偃月刀に刻んだるわ！」

ほとんど呼び動作なしに、踏み込んで上から振りかぶってくる。

華雄とはまた違う速さ・・・そして、武の質の違いが、それから感じ取れた。

無骨で岩みたいに荒々しい武だった華雄に対して、こちらはまるで流水のごとく磨き上げられた武。

血が即座に滾り、体が勝手にほぐれていく。

俺は、あえて受けに行った。腕をクロスさせ、籠手の部分で張遼の偃月刀を防ぐ。

ガキンッ！

金属と金属がぶつかり合う嫌な音を発して、お互いの武器が交差する。

受けてみて分かる・・・張遼の武は遙か高みにあることが、この偃月刀を通して分かる。

重く、そして手甲ごと断ち切らんばかりの力で今も押ししている。

負けじと俺も押し返す。

しかし、力は拮抗してどちらも動けない状態になった。

「はっ！」

手首を返し、クロスしていた手をつまいこと外して、一気に距離を取る張遼。

・・・自分の間合いで、勝負する気だな。

なら、踏み込んで距離を潰すまでだ。

地面を蹴り、張遼を一気に肉迫しようとするが・・・

「いくで！はああああっ！！！」

気合一閃。機関銃のように連続で突きを繰り出してきた。

「ちっ！」

これでは前に詰める事ができないっ！

とにかく回避に専念しないとっ！

俺は張遼の突きを最小限の動作で、避け、いなし、時には刃に手を添え軌道を変えて回避していった。

しかし、これでは懐に飛び込むことは出来ない。

なら、自分で隙を作らすまでだ！

何度か突きを避けた後、その一つを選んで、無理矢理横に薙ぎ払った。

無理に薙ぎ払った代償で、少しの間左腕が痺れ、使い物にならない。

「この程度っ！」

普通は、弾かれた武器を体の方に引き寄せるが、それでは体勢を整えるのに時間がかかる。

その時間が熟練者にとって致命的な隙になる。

しかし張遼は逆転の発想で、体を武器の方に引き寄せ素早く体勢を立て直す。

だがそれでも、わずかな隙が出来る。

俺は腕を鋭く振って、袖に仕込んである投げナイフを張遼の額目掛けて投げた。

「っ!?!」

辛くも頭を振って、ナイフを避けるがこめかみに赤い線が走る。

さらに、セツナから目線を反らしたことで大きな隙が出来てしまった。

「オオオオッ！」

好機と見て、懐に一気に飛び込んだ。

張遼は、間合いを取ろうと偃月刀を横薙ぎに振ってくるが・・・

「嘘おっ！」

左手で上腕を掴み、攻撃を止めた。痺れているがこれぐらいは出来る。

まずは動きを止めることから始めよう。そうでないと勝機が見えてこない。

下から鋭い角度で、拳を突き出す。

狙いは脇腹、ここが動きを止めるのにもっとも効果が出る箇所だからだ。

ドゴオンッ！

「ぐふうっ！」

凄まじく重い拳が、張遼の体にめり込み、一瞬宙に浮かせる

張遼は苦痛の声を上げ、端正な顔が鈍痛で歪む。

動きが止まったので、もう一撃拳を腹にめり込ませる。

ドゴオンッ！

またも体が宙に浮き、苦痛な声は漏れはしなかったものの、ギリギリと音が聞こえてきそうなほど歯を食いしばって耐えている。

「ぐううっ！・・・こんちくしょうがっ！」

余っていた手で、張遼は俺の頭を殴ってくる。

視界の外から攻撃されたので、まともに食らう・・・が寸前で首をひねっていなす。

それでも衝撃を殺せず、頭を揺らされた。

掴んでいた手が緩み、張遼はそれを振り払い距離を取る。

息を整えながら、仕切り直していく。

「ははっ・・・楽しいわ！強い奴と闘うのは・・・ずっと闘ったりたいぐらいやわ！」

テンションがマックスに達しているようだ。声も興奮に彩られている。

対して俺は至極冷静に、頭部のダメージを計っていた。

少し揺すられただけだ。ダメージはない。

頭を軽く振り、集中力を繋ぎ直す。そうして、こちらも仕切り直していった。

改めて張遼を観察すると、カクカクと膝が笑っている。

ボディのダメージはでかいようだ。これで体力も少しは削れただろ

う。

だが、もう一つ二つ手を打たないとまだ勝機は見えてこない。

そう判断した瞬間、地面を蹴りまた張遼に迫る。

「調子に乗んなっ！」

近づかせまいと、またも速射砲のように突きを繰り出してくるが・

踏ん張りが利かないのか、先ほどより突きのスピードが出ていない。

それを払いのけながら、徐々に前に詰めていく。

「やるな！・・・なら、これや！」

突きでは止めれないと判断したのか、引き際に手を返し、横振りに薙ぎつけてきた。

いきなりの横薙ぎでリズムが変わったため、安易に斬り込まれた。

「くっ！」

避けていては斬られる。何があっても受けないと！

しかし、この重い攻撃を受けたらまた手が使い物にならなくなる。

迷っている暇はない。

すぐさまガードの態勢を作り、そして・・・

ギギインッ！！

耳元で甲高い耳障りな音を発しながら、偃月刀は止まったが・・・

受けた右腕が重く痺れる。瞬時に握って確認するが、まったく力が入らない。

張遼は、俺の前進を止めたと思ったのか、ほんのわずかに口元を釣り上げる。

・・・この程度で俺の前進を止められると思ったのか！？

さらに地面を強く蹴り込み、偃月刀を払いのけて、また懐に飛び込む。

「なんやてっ！」

「もらったっ！」

今度は左アッパーを繰り出し一気に攻勢に持ち込もうとするが、張遼は二度も食らうかと言いたいがごとくバックステップをしてかわしてきた。

直線的なバックステップに合わせるかのように踏み込み、がら空きの左胸に貫徹を叩き込んだ。

「っ！？動かんっ！？」

自分の状態に、目を見開いて驚愕している。

そうだよな。だれだってこの技を受ければ驚くさ。

そのまま、肩に飛燕脚を食らわし、貫徹を急所に使いまだ動けない張遼の腹に洞貫撃を撃った。

犀牙流徒手格闘 洞貫撃

力を極限まで一点に集中させて、インパクト時に開放してダメージを負わせる技。

威力は折り紙付きだが、その分隙が大きいためこういった相手が怯んだときなどにしか使われない。

「っ!？」

まともに食らってしまった張遼は、見事なまでに吹っ飛ばされ二転三転と地面を転がった。

先ほど攻撃を受けた右手は使っていない・・・利き腕じゃない方でここまでの威力だから、利き腕だったらもつと凄いんだろうな。

今まで、実力が遙かに上の達人にしか撃つことがなかったため、力量が拮抗している相手に対しての威力は不明だった。

これからは使うのを控えよう・・・ちよつと怖いわ。

ちなみに先ほど顔に攻撃しなかったのは、顔は女の命と幼少の頃から教え込まれたセツナのポリシーである。

基本的に女性と闘うときは、関節技や柔術を駆使して闘うのだが、実力が拮抗しているため引き出しの開放と本領を發揮しないと勝てないと判断して本気でやっている。

「げほっ・・・げほっ・・・ぜえ・・・ぜえ・・・」

青竜刀を杖代わりにしてまだ立ち上がってくる張遼。

さっきの間に距離を詰めてとどめを刺すことは出来たのだが・・・ちよつと卑怯だと思い、立ち上がってくるのを待った。

右腕の状態を確認してみると、さっきは感じなかった違和感を感じた。

もう一度握ってみると、腕の方から鋭い痛みが走った。

おそらく、腕にヒビが入ってしまったのだろう。

それほどに重い一撃だったのだ。恐ろしい奴だ。

右腕が使えない以上、これ以上の戦闘は命取りになるな・・・

「まだやるのか？膝が笑っているぞ？」

「うつさい！これからや！今に見とけや！」

と、無理矢理構えて突進してくる。

さっきあれほどのチャンスだったのにとどめを刺されなかったこと

にも腹を立てているのだろう。

足はついてきていないが、それでも十分早い突進だ。あの状態でここまでスピードが出せる奴は少ない。

俺も決着をつけるために、前に出る。

間合いに入った瞬間。振り下ろし、横薙ぎ、袈裟懸けと残像が残るほど速い攻撃を仕掛けたが・・・

やはりダメージが響いているのか、振りのスピードが落ちている。

膝抜きと転ばしを駆使して避け、ノーモーションでパンチを繰り出す。

「ちいっ!」

すんでの所で手首を返し、ガードが間に合ったが・・・

「破っ!」

気合いのかけ声で、なんと張遼の体が吹っ飛びかける。ガードしていなかったら、また吹っ飛んでいただろう。

さっきの攻撃は、中国拳法の中でもかなり有名な寸頸である。

何とか耐え、苦し紛れに右から偃月刀を振ってくる。

冷静に、軌道を読み手刀で下段に払う。

その勢いで、顎に鶴頭を打ち込む。

「ふっ!?!」

ゴチンツと音が出ていそうな勢いで、顎を跳ね上げられた張遼。

舌を切らなかつたのは、奇跡に近かつた。

張遼は、顎をカチ上げられたせいで視点がさまよっている。

すぐさま左手を戻し、螺旋運動をしながら突きと前蹴りを同時に放つた。

中国拳法・太極拳の一手、提腿栽捶てきたいさいすいだ。

「ふっ!?!」

まともに食らってしまったので、体勢が崩れてしまう。

すぐさま立て直そうとするがすでに遅し。

左手が掴まれていて、掴んでいる腕の主と、視線が合う。

覚えているのは、凍えているほどの無色な瞳。

それ以外は覚えていなかった。その瞳から意図を読み取るうとした瞬間、世界が回った。

「おわっ!?!」

何をされたかわからず、そのまま倒れてしまう。

とっさに意識が飛ばないように後頭部を庇うが、それでも全身を地面に打ちのめされる。

ダメージが残っていた腹に激痛が走り、意識を嫌にでも覚醒させる。

起きあがってまだ闘おうとするが、視界には・・・

「・・・俺の、勝ちだな？」

額に短刀を突きつけながら、勝利を宣言するセツナの姿を見た。

訳が分からない・・・なぜあんなに簡単に倒されたのだ？

最後にした魔法のような技は、柔術の小手返しである。

手首をひねって、相手を倒す精密な技である。

セツナは、各武術の達人達を師匠にしているため、一通りの事は全て出来る。

もっともわずか一年でここまでのレベルに達することが出来たのは、偏に頑丈な自分の体と、死ぬ一歩手前まで追い込み、そこから超回復させてまた追い込むという普通は考えない方法で一修行（拷問）をしてくれた師匠達のおかげである。

「・・・負けかぁ・・・」

ここまで打ちのめされたのは、小さいとき以来だ。

こないに強い奴に出会ったのは、呂布ちゃん以外におらんな・・・後
関羽くらいかな？

「さて・・・俺が勝ったから、仲間になってくれるんだろうな？」

ナイフを袖にしまい、手甲を外して緊張を解く。

解いた瞬間、腕から鈍痛が走る。

袖を捲って見てみると、かなり腫れ上がっている。

絶対ヒビは入っているな・・・しばらく療養が必要か。

「それが交換条件やからな・・・けどな、仲間になる前に一つだけ質問してええか？」

「ん？いいけど？」

「自分、何でそんなに強うなろうとしたん？」

「そうだな・・・仲間のためって言えば聞こえはいいが、やっぱり自分のためだな。仲間を守るためには自分に力があるし、死なないようにするにも力がある。だから、俺は強くなろうとしたんだ。」

そう、やっぱり強くなろうと思った根本には自分自身という考えがある。

何をするのにも、やはり力がある。それを人のためにするのだから、自分のことより何倍もの力が必要になってくる。

だから、鍛えて、鍛えて、鍛え抜いた。強くなるために・・・

まだこれが完成型ではないし、この状態が限界とは思っていない。

昔よりやつとマシになってきた程度だ。ここまで来るのに、かなりの回り道をしたが・・・

「そっやんなあ・・・だけど、強くなってその先に待ってるものがあるのか解つとるんか？」

おそらく、張遼はこう言いたいのだろう。

強くなっても、その先に待っているのは孤独とただの自己満足しか待っていないと・・・

「待っているものね・・・俺が強さを極めた先には、仲間達が笑って待っていてくれると思うな。そのために強くなっているようなものだから、俺はそれを信じて強くなって、戦うのさ。」

仲間のために戦っているのなら、その先に孤独という寂しいものは待っていないはずだ。

自分をその強さは化け物だと言って去っていく者は、本当の仲間ではない。

心の底から信頼し合う間柄、それが本当の仲間だと俺は思っている。

「へえ・・・そんな考え聞いたん始めてやわ」。俄然、あんに興味が出てきたわ・・・おっしゃ、仲間になつたる！」

「いいのか？俺みたいな奴についてきても、得はないぞ？」

「負けたら、仲間になるってのが条件やし、あんたとおったほうがなんか楽しそうやわ！ウチに二言はない！」

八キ八キと物事が進められていく・・・

もつと何かとモメると思っていたのだが、拍子抜けだった。

それにしても、妙にサバサバとして訛りの強いしゃべり方・・・どこかで聞いたことあるような？

・・・ああつ！惑星間横断鉄道の四等列車をのさばっているシート・ギャング盗団のしゃべり方とそっくりなんだ！

だから、あんなに訛りが強い喋りでも聞き取れたんだ。

・・・古代中国で、シート・ギャング座席強盗団訛りって・・・ありなのか？

この際考えないようにしよう・・・何たって、パラレルワールドなのだから。

「・・・わかった。そこまでいうならいいだろう。」

「よっしゃ！・・・それじゃ、仲間になったことやし改めて名乗らせてもらうわ。性は張、名は遼、字は文遠、真名は霞。これからよろしゅうな！」

「俺は、セツナ・フォーリングだ。一応南の天の御使いって事にな

っている。こいつらは俺の部下だ。」

四人は霞に対して、それぞれ自己紹介していく。

「じゃあ、とりあえず我が主の所に行くか？ 投降って事でいいんだよな、霞？」

「ん〜・・・この状況やとそれしかないな。ちょっと癪やけど・・・」

「諦めてくれ。結果的には敗戦の将なんだから。」

「は〜、戦で負けたんは初めてやからな・・・は〜」

「グダグダ言っていないで、行くぞ！ とりあえず形だけでも連行する形で・・・満貫、黄烈！」

「はっ！」

二人は一応、霞の首に剣を交差させ連行する形を取る。

「すまないが少しの間、我慢してくれ。」

「あいよ〜。」

のんきな返事を返されて、脱力しながらも俺たちは自分たちの陣に戻って行った。

そんなのんきな帰還をしながら、洛陽の城壁の所まで帰ってきた。洛陽の外で陣地を構築してあった雪蓮達を見つけ、霞を引きながら陣地に入っていく。

すでに中央に張ってある天幕の中では酒を飲んでご機嫌な雪蓮と、酒を飲むのを涙目で止めている穩の姿が見られた。

「さて・・・我が主に会うか？・・・酒呑んでいるけどね？」

「ウチは全然構わへんで。あんたと一緒に戦えるなら、なんでもいい！」

「はいはい・・・おお、い、雪蓮、穩！」

こちらの呼びかけに気づいたようで、雪蓮は酒器を掲げて応え、穩はパタパタとこちらに走ってきた。

「セツナさ〜ん、どこに行っていたんですか！？こっちは大変だったんですからねえ〜！？雪蓮様を止めないといけないし、雪蓮様は雪蓮様ですつと飲み続けているし・・・なんとかしてください！」

「ははっ、任せっきりで悪かったな。」

穩をなだめるために、またも頭を撫でる。これくらい子ども扱いした方が機嫌は直る。

「もう！子ども扱いしないでください！・・・あれ、そちらの方は？」

「ああ、さつき捕虜にしてきたんだ。今から雪蓮と会わせて、どうするか話し合おうんだ。」

「そうですね。なら、今から雪蓮様のこと、よろしくお願いしますねえ。私、自分の仕事がありますからあ。」

そう言って、すぐさまパタパタと陣の端の方に走っていった。

・・・それほど、お守りがいやだったのか？

まあ・・・いいか。人がいない方が都合がいいや。

霞を連れて、やっとこさ雪蓮の元にまで着いた。

「お帰りなさい。・・・どうやら、大物を持ち帰ってきたようね？」

「まあ・・・な。・・・霞」

雪蓮の持っていた酒器をもらい、入っていた酒を一気に喉に流す。度数は強かったが、思いのほか飲みやすかったので渴いた喉にはちよつと良かった。

「分かった。・・・名は張、性は遼、字は文遠。・・・ウチ、セツナに興味があんねん。せやけど、セツナのことを知るには大将の元におらなあかんやろ？だから、今回セツナに頼んで、捕虜として大将に会いにきたんやけど・・・。」

雪蓮はびっくりしながらも、目だけは明らかによそ者を見るような目をして警戒している。

「ふ〜ん・・・それで私の所で将になるうって訳ね・・・一つ、言っておくわね？」

「何や？」

「私たち、孫呉はみんなが家族なの。血は繋がってないけど、共にした時間とそれと同等の信頼から成り立っている仲間は家族同様。それにホイホイとあっさりと寝返る裏切り者が入ってこれる？・・・無理に決まっているでしょ？半年早くいるセツナも仲間だけど、まだそこまでの関係にはなっていないわ。だからね、それだけの理由で私たち、孫呉に仕官しようなんて・・・」

「雪蓮、俺達の利点も考えてみる。水辺出身の者が多い俺達の軍は、騎馬戦を苦手をする者が多い。騎馬民族出身の張遼が仕官すれば、陸戦戦闘力の質が格段に良くなる。」

「それくらい、私も分かっているわよ？じゃあ、張遼・・・聞くけど、あなたに元同僚が斬れるかしら？」

「斬れる！戦場で出会ったら、その時点から敵やから元同僚とかは関係ない。」

「何を騒いでいるのだ？」

言い合いになりかけたところで、姿が見えなかった冥琳が天幕の中に入ってきた。手には大量の巻物。

「ああ、冥琳か。実は・・・」

事の顛末を全て冥琳に話し、今の流れを理解させる。

冥琳は最初俺が張遼を捕虜にしたことに驚きの顔をしていたが、中身を話すと苦笑を漏らしながらもよくやったと滅多に褒めない冥琳が褒めてくれた。

「で、どうするの、雪蓮？部下にするの？その場で打ち首なの？もしくは野に放すの？」

「うーん・・・私なりに考えたんだけど、条件付きで部下にするわ。それでいいでしょ？」

「ホンマに！？・・・でも、仕官させてくれるんはありがたいけど、条件って何や？」

「しばらくは監視者付きで行動してもらおうわ。私たちの信頼が得られるまで城内の移動は制限させてもらうし、軍も持たせないわ。これで十分でしょ、冥琳？」

「・・・妥当な所ね。それで、その監視者は誰がするのだ？」

冥琳は分かっていたみたいだな。何かと言っても、雪蓮は張遼を端っから採用するつもりだったことが今読み取れた。

「もちろん！連れてきたセツナが責任もって監視者を引き受けてくれるみたいよ。ねえ、セツナ？」

雪蓮もなかなか優しいところがあるな・・・俺の時は、それはもう疑われに疑われ・・・っえ？

「・・・俺が！？今から仕事山ほど待っているのに、監視者までできるかっ！」

「おや？仲間にするって言ったのはセツナ、お前自身だ。それに張遼もセツナのことを知りたがっている。それにしばらくはお前の部下扱いだから、どちらにとっても一石二鳥ではないか？」

「・・・拒否権は？」

「ないに決まっているじゃない」

俺の存在って・・・こんな感じなのかな？

そりゃ連れてきた責任は取るけど・・・全部丸投げでなくともいいじゃないか・・・

「・・・わかった。監視者のことは引き受けよう。」

「それでよし！・・・だから、セツナは好きなのよね」

「はあく・・・冥琳、俺がいない間の状況を教えてくれ。」

「わかった。まずは・・・」

いない間の状況を聞いてまず驚いた。

籠城戦の構えを見せていた董卓軍はすでに退却した後。

呂布はどこかに逃げたということ。

そして今、劉備と曹操が一番乗りの功績を得るために競争しているということ。

その間に、冥琳は思春を護衛につけてある物を取りに行っていたこと。

以上が俺がいない間に起こったことである。

結構な短時間で事を動いている・・・なんだか置いてけぼりだ。

「なるほど・・・だから、戦闘とは違う熱気を感じたんだ。しかし・・・まさか撤退しているとはな。」

「そうよね。箱を開けたらびっくり。洛陽の城下には董卓の兵一人いないってね・・・あゝあゝつまんないや。」

「一旦城に籠もって籠城戦の気配を見せながら、身の回りの物を片付けていたってことか・・・戦闘がないから、別に良いけど。」

まあ、賈馮が入城したっていう報告を聞いてから、結構時間が空いたからな・・・俺達が来る前に撤退する時間はたっぷりあったわけだ。

俺達の時代みたいに、タチの悪いブービートラップはなさそうだし・・・先に一人で入城する必要もないな。

「それで冥琳が手に入れた物は何なんだ？」

「台帳と地図だ。これは呉にとって無形の財産となるだろう。」

「情報は大切だからな・・・それで今からどうするんだ？」

「劉備と曹操の一番乗り争いの後、洛陽に入城する。その後の方針は、入城する前に説明するわ。」

とりあえず、しばらくは休憩できるみたいだな。腫れたところとか、捻挫している場所を後で氷を錬成してゆっくり冷やそう。

「じゃあ、私は穏と今から手にいれた物を整理するから・・・張遼、お前も手伝ってくれ。」

「おっしゃ！任したり！」

「雪蓮・・・くれぐれも、飲み過ぎないでね！セツナ、しっかりと監視してやってくれ。」

「了解だ。」

冥琳は、隅の方で仕事をしている穏を見つけて、天幕の一つに引っ張っていった。

一体穏は何の仕事をしていたんだ？・・・考えるだけ無駄か。

部下の四人には、自由を許し、とりあえず水だけを持ってこさせた。すぐに錬成して桶一杯の氷を作り、最後の投げナイフで砕いていく。

「おおー、争ってる争ってる。さうて、どっちが先にはいるかなあ
」

横では、ちびちびとお酒を飲みながら、雪蓮が城門に殺到する劉旗

と曹旗を眺めていた。

あれだけいわれて、また飲んでるし・・・まったく。

「それくらいにしとけ・・・後で冥琳にしかられても知らないぞ？」

「こんな楽しい見世物を、酒なしで見てるって？あり得ない、あり得ない・・・それに、叱られるときはセツナも一緒だからね」

「俺は逃げるけどな・・・って、おい！おかわりは止めておけつて！」

何本目かは知らないが、空になった大徳利を放り投げ、次の大徳利に手を伸ばそうとする。

空の徳利が投げられた方向を見てみると、すでに三つの徳利が転がっていた。

これ以上飲ますと、本気で冥琳に怒られる！

すぐさま徳利をひったくったが、雪蓮はブーブーと講義してくる。

「えゝ・・・だってこれ、まだ二杯目よ？」

「嘘をつくな。二杯目でも二本目でもないし、四本目だろ？しかも・・・大徳利で。」

「私にとってはまだ二杯目なんだってば」

一体どんな計算をすればそうなるのか・・・

軽く頭が痛くなってきた。とりあえずこの酒は、傷に浸けるのに使わせてもらおう。

細かく割れた氷を、適当にあつた布にくるみ、腫れている左腕に巻き付ける。桶には酒を入れ、捻挫している右手首を冷やしにかかる。

「穏も冥琳も全部俺に押しつけて・・・軍師っていう人種は、どこかずる賢いところがあるな。」

「一筋縄でいかない人間だからこそ、軍師なんてやっているの・・・その点なら、セツナも軍師になれるかも知れないわね?」

「・・・じゃあ、雪蓮も軍師になれるかも知れないな?」

「ひどいわねえ。私ほど素直で純朴で心優しい子はいないのに・・・」

「・・・」

自分で言っちゃってるよ、この人・・・大丈夫かな。

シッコむのも忘れるほど呆れていると、額にデコピンが飛んできた。

「・・・シッコんでよ」

「いっつっ・・・無理?」

「何で疑問系なのよ。ぶっ・・・」

「そう言つて、可愛く拗ねたふりをしながら、五本目に手を出さない！」

「あ、ばれたか……」

手を伸ばそうとしていた雪蓮を止め、また徳利をひつたくり、今度は談笑している部下達の方に投げる。

普通は遠慮しながら、静かに飲むのだが……こいつらと来たら、受け取つてすぐさまガバガバと回し飲みを始めた。

……図太いんだな。なんか……俺がいなくなつても、安泰だな。

「最近、ようやく雪蓮の考えとか行動の仕方が分かつたきたからな。」

「あら。じゃあちよつと聞いてみようかな？ セツナは、私のこと、どう理解してる？」

「そつだな……まず行動の根底にあるのは勘。……勘で動いているところがかなり多い……」

「うっ……」

「結構甘えん坊なところがある。特に冥琳に甘えているだろ？」

「……甘えてないもん」

「言つてる……あとはまあ……なんやかやと言いながらも人のいうことをちゃんと聞いてくれる、素直なところがある……だな。」

後は、冥琳達にも見せない精神的に脆いところがあるのと、知らない内に一人で背負いすぎるってとこだな。」

まあ、今の時点で分かっていることは、これくらいだな。

最後に言ったことは、俺が来て一月が立った頃、袁術との初めての会談の後に起こった事から感じた。

あの涙は・・・誰にも言えず、一人ずつと耐えてきた事を表していた。

「むう・・・そんなこと言われたら、お酒に手が出せないじゃない・・・」

後ろに隠していた六本目を、観念したかのように差し出してきた。

「やっぱり隠していたか・・・全く」

「セツナ・・・ちょっと性格悪くなったわよ。少し前までは、もっと優しかったのに・・・」

「我等が英雄に鍛えられていますから・・・それに、人の頼み事は聞くほうだし？」

「じゃあ、私も頼む・・・お酒飲ませて」

「却下。」

「うわぁーん、ちつきと言っていること違っしー。」

嘘泣きで、ごり押しして飲もうとするが、そんなことは知らんぷり。
無視し続けているが、雪蓮はずっと嘘泣きをしてくる。

この人は本当に王なのかと疑いたくなる仕草に、フツと笑いがこみ上げてくる。

「何を泣いているのだ？さっき報告があつて、曹操と劉備が洛陽に入城した。我々も行くぞ。」

「ちえ・・・で、今後の方針は？」

「ボヤ騒ぎや狼藉を働いた黄巾党の残党のせいで、城内が少し荒れているらしい。洛陽に入城した後、すぐに復興作業を開始しようと思うの。穩に行つてすでに資材の確保は済んでいる。」

「・・・ちつ、獣共がまだ跋扈しているのね。いつか根絶やしにしてやらないと」

火事場後に群がるハイエナか・・・確かに腹が立つ。

掃討の時には、死なないが死ぬほど痛い目に遭わせないと・・・

「まあ、分かつたわ。ずいぶんと手回しの速いことで・・・それじゃ、私たちも行きましょう」

「全軍、洛陽に入城する！乱暴狼藉をした者は斬首だ！孫呉の正規軍の誇り、忘れるでないぞ！」

「応っ！」

曹操と劉備に遅れること数刻、俺達はやっと目的地、洛陽に入城した。

洛陽に入城して、早三日。すでに復興作業は始まり、そこら中からトンカンと木槌の音が聞こえてくる。

入城して、すぐに雪蓮は町の長老格を呼び出し、復興作業に支援することを伝え、すぐさま作業に取りかかった。

現在俺は、治安回復を図っている思春のカバーをするために、人目の届かない路地裏や下町を部下と手分けして見回っている。

戦禍の爪痕が深く残る町を見回りながら、時たま・・・

「でええやあぁっ！」

木箱の陰から残党が俺を殺しにかかってくるが、訳もなくかわし、手を取ってひねり上げる。

そのついでに肩関節を外して、首に手刀を打ち込み、意識を失わせる。持っていた縄で縛り上げ、人目のつきやすい所に放り投げしておく。

今日だけで、すでに三人目。まだまだいそうな気がするが、精力的に回るしかない。

また路地裏に戻り、大きな隙を作りながら、ぶらぶらと散策する。

先日町の様子を見ていたときに雪蓮が珍しく弱音を吐いていたことを思い出す。

「自分のせいじゃないのに、力がないと嘆く・・・全く、優しいんだから。」

そう独り言を呟きながら、今度は後ろから襲ってきた残党を、背負い投げで地面にたたき落とし、鳩尾に一撃入れて意識を落とす。

雪蓮は優しい。それはとつくの昔に分かっている。しかし、あそこまで民のことを考える王がいるであろうか？

考えられる限り、いない。だから、孫呉は一枚岩として機能できるほどの結束力を生むのだろう。

縛って放り投げた所で、縄が無くなったことに気づく。

「・・・一旦縄と飯取りがたら、もどるか。」

朝早くから見回っているため、まだ何も食べていない。

路地裏から大通りに出て、炊き出しをしている仮説天幕の方に歩き出す。

・・・そう言えば、そろそろあれが出てくる頃だろう。

人目がないか確認してエージェント・ノートを取り出し、保存しておいたデータを展開する。

正史では、洛陽で復興活動をしていた孫堅軍が、井戸からあるものを見つける。

ワァァアツ〜！！

と、データを見てみると、天幕がある方向から騒ぎ声が聞こえてきた。

何があったのかと、俺はダッシュで騒ぎの方向に向かった。

着いた場所は、朝方に見回っていた路地裏の井戸の一つ。そこから、天に届かんとばかりの光が立ち上っていた。

これが・・・あの例の物が。

歴史通りなら、これは孫呉にとって非常に重大なことである。人混みをかき分けて、雪蓮達の元に駆けつける。

「あ、セツナ。すごいよね〜、一体何がっ」

「そんな御託はいいから、さっさと取りにいけって。明命、頼めるか？」

「ええっ！？あ、あの・・・大丈夫なんでしょうか？」

「体に害はない。だから、安心して行ってこい。」

「は、はぁ・・・では、行きますー！」

命綱を体に巻き付け、井戸をすいすいと降りていく。

「セツナ、何があるか知っているの？」

「俺に聞くより、現物を見た方が速いだろう・・・ほら、出てきたぞ」

思いの外速く、明命が出てきた。手には小さな巾着袋のような物。

うつすらと光っている巾着袋を明命から受け取り、中身を確認していく。

「小さい・・・印鑑？違う、これ・・・玉爾!？」

玉爾。それは始皇帝が皇帝たる証として李斯に制作を命じたまさに本物の皇帝の証である。

白い大理石を素材として、龍の彫刻をあしらった底には、「受命于天 既寿永昌」（天命を得て、永遠に栄える）と刻まれている。

これを失った者は国を失い、得た者は国を得ると言われるくらいの帝位のしるしである。

「しかし・・・どうしてこんな井戸の中に？」

「分からんが・・・おそらく、董卓軍撤退の混乱の中、宮廷より持ち出されたのだろうな・・・持ちだした人間も、黄巾党達が乱入してきたことで逃げ切れないと悟り、この井戸に捨てたか隠した・・・大方そんなところだろう。」

「天佑ね。これは……」

「ああ。この天佑、存分に利用させてもらおう……明命！」

「はいっ！」

「幾人かの兵を洛陽の民に偽装させ、さりげなく情報を流せ……孫策が、天より玉爾を授かったとな。」

「了解でありますっ！」

すぐさま明命が兵を選抜するために、動き出した。

「さて……この噂が広まれば、雪蓮の元に人や物が集まってくるだろう……雪蓮、ここからは徳のある王として、演技をしてもらおうわ。」

「うええ……めんどくさいなあ、もう……」

「天下統一を目指すと行ったのはお前のはずだ、雪蓮。利用できる物は利用する……だから、これくらいのことでも面倒臭がるな。」

「はいはい……分かっていますよ。ちょっと本音が出ただけ」

「……頼むわよ？」

「了解」

こうして、玉爾を手に入れた雪蓮は、洛陽復興という慈善作業を開始する。

董卓を追い払った諸侯は、意味のないことをする・・・とばかりに雪蓮をせせら笑っていた。

しかし、雪蓮が玉爾を手にいれたという噂が広まるにつれ、俺達の周りには多くの人と物が集まるようになった。

また雪蓮の威厳を慕い、様々な人間達が援助を申し出てくる。

それら一つ一つを天佑と捉え、雪蓮は徳高き王として、援助を申し出てくれた人たちと接していた。

その振る舞いに感銘を受け、さらに多くの人々が雪蓮を慕って集まってくるという好循環の中、俺達は洛陽の復興に力を注いでいった。

そんな中、俺は一抹の不安を感じていた。

雪蓮達が援助を申し出てくれた人たちと接している時に、俺は嘉徳殿の中庭を探索していた。

そこでは、すでに錬成されたと見られる錬成陣が描かれていた。しかもかなり大がかりな物だ。

そして、微かに感じる違和感・・・空気中に残留した魔力である。

「・・・一体ここで何が錬成されたんだ。」

ここまで大がかりな物になると・・・賢者の石やネクタルが考えられる。

しかし、それらは人の命を代償にして作られる物だ。

「まあ、いいか・・・おそらく違う物だろう。」

足で錬成陣をならし、その痕跡を消す。

その場を後にするが、やはり一抹の不安は拭いきれなかった・・・。

第四話 対立、対面 【完結編】（後書き）

どうでしたか？

今回最後の方はやっつけで書いてしまいましたし、後半からはかなりグダグダになってしまいました。戦闘シーンを二つも入れたせいで、字数制限ギリギリまで行ってしまいました。もっと上手くまとめられるように頑張ります。

では、今度こそ三週間〜一ヶ月後に会いましょう。
それでは。

閑話2 惹かれ合う心（前書き）

作者「やっと座談会場が直った・・・みなさん、二週間ぶりですね」

セツナ「雪蓮・・・」

雪蓮「セツナ・・・」

作者「そこっ！勝手に桃色空間を作らない！」

パシッ、パシッ！

セツナ「痛っ！何すんだよ！」

雪蓮「そうよ！私たちの邪魔をしないで！」

作者「・・・本編で悲運な結末にしてやろうか？」

セツナ・雪蓮「・・・すみませんでした。」

作者「それでいい・・・っと少し脱線しましたが、今回は短編をお送りしたいと思います。このイベントをこなさないと、後々支障が出てきますので・・・」

セツナ「つつか、よく二週間で書き上げたな？どうしてだ？」

作者「ふっ・・・少し本気を出せば、こんなものさ。」

雪蓮「なぐに言ってるのよ！短編+春休みだから早く書けたんでしょ？まつたく・・・本編もこれくらいスピードで書けばいいのに・・・」

作者「リアルな話し・・・止めてください。・・・まあ、今は春休みですから、出来るだけ進めるよう努力します！じゃあ、二人ともいつものよろしく！」

セツナ・雪蓮「それでは、真・恋姫+無双 乙女繚乱 三国志演義 呉書 虎狼天下覇道の巻 閑話 惹かれ合う心。どうぞ閲覧してください！」

作者「たまにはこういう終わり方もいいな」

閑話2 惹かれ合う心

「せやあっ!」

綺麗な後ろ回り蹴りが巻藁に炸裂する。

「はああっ!」

今度は中段突き。中心点に違わず打ち込み、その衝撃で巻藁が少しだけ歪む。

「はっ!」

極めつけに、八極拳の一手・双纏手そつてんしゅを叩き込み、そこで耐えられず巻藁がボキリと音を立てて折れた。

「はあ・・・はあ・・・次っ!」

息を整えながら、横に作って積んであった巻藁を立てて鍛錬を続けようとするが・・・

「・・・ああ、もう!少しは落ち着かんかい!」

ポカッ

後ろで見ていた霞の軽い雷が落ちてきた。

「・・・えっ?」

「えっ、じゃないやろ！朝から、ドンドンうるさい音たててやっ
てからに・・・おちおち昼寝もできへん！」

「?・・・昼寝？」

まだ朝だと思い、空を見上げてみると・・・

すでに太陽は中天を通り過ぎ、西に傾き始めている。つまり正午は
とっくに過ぎてきているのだ。

セツナがこの鍛錬を始めたのは午前10時頃、起きてからすぐ巻藁
を作り始め、出来るだけ多く作っていたので時間の感覚が失われて
いたのだ。

つまり約六時間程度、セツナはこの一連の動作を行っていたのだ。
転がっている巻藁だった物は10や20では効かない。

「・・・悪いな、昼寝の邪魔をしてしまった。」

「それは別にええやけど・・・どしたん？いつにもまして、そわそ
わしとるで？」

セツナは朝からずっとこの調子であり、さきほどの鍛錬もどこか身
が入っていないように感じている霞。

「・・・いくらお前が彷徨ったところで、孫策様はまだ帰ってこな
いぞ?」

昼時の休憩時に、横で一人鍛錬をしていた思春が釘を刺してくる。

「・・・別にそんな訳じゃっ」

慌てて弁解しようとするが、さすが座っていた穩がかぶせるように言葉を重ねた。

「ふふふ、隠してもだめですよ、雪蓮様が出かけてからというもの、セツナさんってば、ずっとその調子ですう」

「・・・そっかあ。大将は今、賊の討伐にいつとるんやんな」

「うっ」

穩にズバツと言いついて、セツナは返す言葉を失う。

そして納得したかのように笑顔になり、霞がセツナをからかうためにすり寄る。

雪蓮は今洛陽周辺の村に巣くっている盗賊を討伐するため、朝早くから出かけていった雪蓮。彼女のが気になって、セツナはずっと気を紛らわすために鍛錬をしていたのだ

ちなみに霞が雪蓮を真名で呼んでいない理由は、信頼できたと判断したとき、みんなの前で改めて名乗り、その時に真名の交換をするということを実琳から言われたらしい。

「だけどな・・・討伐って言ったって、何が起こるか分からないだろ？」

「たかが盗賊のな。心配するようなことは起こらないだろう。」

こちらも座って書簡を読んでいた冥琳がのんきな返事を返してくる。

「そりゃ・・・まあそうだけど。」

一旦落ち着いて、近くにあった平たい瓦礫に腰掛けるが・・・心配になってきたのか、また体がそわそわし始めてきた。

そして、座ってから物の数秒もしないうちに立ち上がり、スクワットをしようとするが・・・

「・・・じたばたするな！ウスのろが！」

ゴチンッ！

今度は思春から拳骨が飛んできた。女性といえども、史実では時代を駆ける名武将、その拳骨は目から星が出るほどに痛い。

大きなたんこぶを押さえながら、悶絶しているセツナに穏が優しく声をかけてくる。

「大丈夫ですよ、明命ちゃんをお供に連れて行っていますし。」

「むしろ私は盗賊の方が心配だな・・・くくくっ」

珍しく冥琳が喉を鳴らして笑っている。その顔を見て、自然と苦笑が漏れた。

まあ、確かに盗賊の方が心配だよ・・・雪蓮の戦闘力ははっきり言って、化け物じみているし・・・

こんなに心配になるんだつたら、明命とお供変わってもらえば良かった……

「貴様は、明命の代わりに警備の仕事があるだろう。」

「思春……考えを読まないでくれるか？」

「せつちゃんは、考えがすぐに顔に出るでなく、分かりやすいわ！」

霞に抱きつかれ、頭をグシグシと乱暴に撫でられる。

何か懐かしい感触に浸りながら、俺は一抹の不安を感じていた……いや、不安という物ではないが胸に引っかかるような物だ。

……なんだつたけ、この感覚？

その感覚の内容を思い出していると、大通りの方から息を切らした兵が冥琳の元に駆寄ってきた。

「失礼します！討伐部隊より、早馬にて連絡です！」

「……ふっ、噂をすれば何とやら、だな。……部隊はなんと言つてきている？」

「はっ！孫策様率いる部隊は、無事に討伐を終え、すでに城に向かっているそうです！」

「そうか。ご苦労であった、下がってよい。」

「はっ」

兵は引き下がり、一瞬の静寂がその場を支配するが……

「……や、そうやって！うひひひっ」

「だから、心配は要らないって、言ったんですよ」

つと、抱きついていていた霞が気色悪い笑いを上げて、さらに頭をなで回してきた。

「……そろそろ離れてくれ。」

「ん？ああ、悪い悪い！」

霞が離れて、やっと一息つけた……と同時に安堵もした。

無事に事を終わったか……

グシャグシャになった髪を軽く整えて、雪蓮を迎える準備を始める。多分みんなは迎えに出るだろう。

「まあ、杞憂で済んで良かったさ……さ、我が総大将が間もなく戻ってこられるようだ。皆で出迎えるとしよう。」

思春は鍛錬を切り上げ、鈴音を腰に掛けた。冥琳も書簡を巻き、文官に預けて立ち上がった。

こうして俺達五人は、雪蓮が戻ってくる城門に向かった。

しかし、それはセツナにとって衝撃的で一生の出来事が起こる嵐の

前の静肅の一時であった。

「孫策様がお戻りです！」

「何とか間に合ったみたいやな。」

俺達が外に出ると、ちょうど雪蓮率いる討伐隊が戻ってきたところだ。

蹄の音を響かせ雪蓮を先頭に、騎馬兵達が門をくぐり、厩の方へ駆けていく。

表情は遠目でありハッキリ見えなかったが、無事な姿を確認できた。本当に俺の杞憂だったみたいだな・・・

・・・ところが。

「・・・まずいな」

と、冥琳が口苦そうに呟く。そしてすぐさま近くにいた兵になにやら指示を出した。

「どうしてだ？怪我でもしていたのか？」

「違う。もっと厄介なものだ・・・あの子は興奮状態に陥ると手が付けられなくなるんだ」

説明を聞いて、俺は数々の光景を思い出す。

街で黄巾党の残党を始末した時。

？水関で華雄の挑発に乗ろうとしていた時。

些細なことを上げていけば、きりがないほど前例がある。

「・・・分からない。どういう事だ？」

「多分、盗賊を殲滅したのだろうな。・・・あの様子だと、興奮が最高潮に達している・・・一旦あぁなってしまうと、しばらくはあの状態が続くのだ。」

「????？」

セツナは、冥琳の何を言っているのか皆目検討も付かなく思春と穩の顔を交互に見比べた。

この場で霞とセツナ以外は、どういう事かみんな分かっている様子だったが、具体的な説明は誰もしてくれなかった。

「セツナさんの心配事が、別の意味で当たっちゃいましたねえ」

「いいじゃないか。今回はセツナを差し出すとしよう。・・・しっかり面倒を見てくれよ？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！だから、さっきから何言ってるんだって！ちゃんと説明をっ！」

「諦めてください 実際に見た方が、一番だと思いますよお」

さつきから何がなにやら全く見当も付かない。霞に至っては頭の上にハテナマークが一杯浮かんでいるようだ。

俺達だけ分かっていないっていう疎外感で、二人はそわそわと気持ちが悪く落ち着かない。

そんな中、霞が俺の方に寄ってきてヒソヒソと耳元でささやいてきた。

(なあ・・・何が起これると思う?)

(うーん・・・たぶん雪蓮が気い失うまで俺と戦い続けるか・・・なんかしらの物に巻き込まれるかな・・・正直何が起これても不思議じゃない。)

(今から起これる事に対処する贄がせつちゃんってわけか・・・)

(贄って言うな!)

「・・・あ、雪蓮様です。」

「!?!」

ひそひそ話を中断して、なぜか姿勢を正して雪蓮を待った。

馬から下りた雪蓮が、無言のまま真っ直ぐこちらに向かって近づいてくる。

「・・・っ!?!」

その身に纏った空気を感じて、俺は思わず息を呑んだ。

感じとしては、何度か感じたことのある雪蓮の闘気だったが、いつもより強く、そして激しく燃えさかっているような闘気だった

ピリピリと俺の肌を刺すように刺激してくる闘気・・・このタイプを感じたのは初めてだった。

そのくせ、こちらを鋭く射るような瞳はとても静かで・・・とても冷たかった

「しえれ・・・ツツ!？」

いきなり、何も言わずに雪蓮の手が俺の前腕を掴んだ。鍛えに鍛え上げた前腕の筋肉を押しつぶすかのようなものすごい力で、細い指が腕に食い込む。

「来て」

たった一言、それだけを告げて雪蓮は腕を掴んだまま、すたすたと歩き出した。

「ま、待て！雪蓮！！いったいどうしっ」

「・・・」

俺の問いに答えず、ただただ俺を引っ張って歩いていく。

そんな俺の横目に薄情なみんなの姿が飛び込んできた。

「雪蓮を頼んだぞ。ああ、それと無事だった家屋を一つ借りたからするならそこにしなさい、雪蓮。借りた家屋の前で兵が待機しているから。」

「仕事のことならご心配なくですう。思春ちゃんと明命ちゃんに引き継がせますからあゝ」

「……いつそのこと死んでこい。うすのろが。」

「死なん程度にがんばりいゝ」

「やつ！だから、何のこと！？つか、思春！それはねえだろ！霞、声援贈るなら助けて！」

みんなをのんきに手を振りながら見送ってきた。……せめて、具体例でも言つてよ！

何とか振りほどこうと藻掻くが思いの外力が強く、結局ずるずると引きずられていくことに……

「わあああゝ！」

セツナの断末魔が響き渡り、その姿は城内に消えていった……

消えた後、残ったメンツはセツナのその後を語っていた。

「……あのうすのろは、一体どれほど死ぬんだろうか？」

「やあ〜だ！思春ちゃんってば、生々しいですう〜」

「・・・私は、そう言う意味で言っているのではないぞ!」

確かに、どとつたらそういう風な解釈が取れるか全く分からなかった。

「・・・で、結局何が起こんの?」

「まあ・・・あれだ。・・・男女との契りというやつだ。」

「・・・ああ〜！せつちゃんも果報者やな〜」

顔を真っ赤にしながらも、今から起こるであろう事が分かったみたいである。

「まあ、セツナは「男」だから、一回もすればヘトヘトになるだろう。」

「そういう冥琳様は、最高どれくらいですか?」

「・・・片手では到底効かないわ。」

こちらも顔を赤らめて、今までの経験を語っていく。

「きゃ〜、大変ですう!」

「ホンマに大変そうやな・・・大将のその癖、いつからなん?」

「そうだな・・・戦場に出始めた頃、つまり幼少の時からだな。」

遠い昔を思い馳せるように目を細め、しみじみと説明していく。

聞いていた霞は、複雑そうな顔をしながら理解し、最後には笑って納得をした。

「そうなんやあ・・・大将も大変やな。」

「でも、今はセツナさんの方が大変ですよ。無事に生還を祈りますか？」

「はははっ、確かに言ってる・・・そうするとしようか。」

「・・・私は、死ぬ方を祈ります。」

「そんなこと言わんと、ちゃんと祈ったんнатて。」

のんきに和気藹々と談笑をする四人。

その場だけは和やかに時間が流れていった・・・

一方その頃、雪蓮に引きずられていったセツナは・・・

「孫策様、こちらです。」

「ありがと、もう下がっていいから。」

「はっ」

急遽借りた無事な家屋の前に立っていた兵に礼を言って、俺達は中に入ってしまった。

内装はそれなりに裕福な家柄であったのか、簡素ながらもしっかりとした家具が揃えられていた。

雪蓮は変わらず無言で、全身から有無を言わさぬオーラを発している。

引きずり込まれた俺はやっと立つことができ、足に付いたほこりを払っていく。

「・・・」

入ってからずっと背を向けていた雪蓮が、初めてこちらに振り返り、俺を正面に見据える。しかし、唇は閉ざされたまま。

「・・・」

いつもとは全く違う様子。雪蓮の瞳はとても力強く鋭いが・・・こんなに暗くはない。

ここまでの闇を雪蓮から感じたことは、一度だけある。

袁術との会談の後、ストレス発散にと、馬を走らせ、打ち合いをした後の会話で見た闇と同種の物だ。

いや、その闇よりさらに黒く、さらに深い闇・・・正直言えば、背中に怖気が走った。

しかし、逃げてはだめだ。家訓に背くことになるし、何より雪蓮を傷つけることになる。

「・・・どうした？どこか、具合でも悪いのか？」

竦みそうになる足をあえて前に出し、それを気づかせないようにと心の中で叱咤しつつ、俺は手甲を付けてない手を差し伸べる。

「・・・」

雪蓮は少し考えてから、両手で俺の手を取り、フルフルと大きく首を振った。

「違うのか？なら、一体・・・」

「熱いの」

「ん？」

「熱いの・・・セツナ、助けて・・・」

繋いだ手に力がこもり、蒼色のクリスタルのような瞳には冷たい炎が宿る。繋がった部分は熱いのに、心が凍てついてしまっただった。

少しずつ二人の距離は縮まっていく。

「・・・ツ・・・」

背中にまたも怖気が走る。今まで感じてきた怖さとはまた別の怖さを感じた。

ここまで深い闇を感じさせる人と出会ったのは、初めてだ。

腹に力を入れ、全身の震えが出ないように気を戦闘時と同じ状態に張る。

「セツ・・・ナっ・・・」

弾かれたように、雪蓮が胸の中に飛び込んできた。離れた手が、背中にすがりつく。

雪蓮の体に触れてまず感じたのは熱。これほどに熱を発しているのは異常である。まるで今雪蓮の体内で炎が燃えさかっているようだ。

これはマズイ・・・何か急性の病気にかかったかも知れない。

「雪蓮！ いったいどうしっ」

心配になり、声を掛けようとした瞬間。

ザシュツ！

「えっ！？」

首筋に激痛が走る。何が何だか分からず間抜けな声を上げてしまう。

「なん・・・だ？」

痛みが走って数瞬、首に噛まれたことに気づくのにそれだけの時間を有した。幸い頸動脈などの命の関わる血管は噛まれなかったが雪蓮の歯は皮膚を容易に貫き、肉の奥深くまで抉っていた。こんな非常時に水浴びしてけば良かったという暢気な考えも出てきたぐらいだ。

「雪蓮・・・」

痛みは慣れている。今以上に痛い思いを何度もしてきて感覚が慣れてしまった。

だが、それ以上に今、恐怖を感じている。

この噛みつきは、本気で噛みつかれているのだ。

仲間がこんなことをするのは別に構わない。時たま銃弾がこめかみをかすることもあるが、全て冗談でやられたことなので気にしなかった。

しかし、今回は本気でやられているのだ。そこに俺は恐怖を感じた。

雪蓮の歯の隙間から、生暖かい血を吹き出し俺の体を伝っていく。

「っ・・・む・・・ッ・・・」

今にも肉を食いちぎろうと雪蓮の呻き声が首元から聞こえていく。

俺は雪蓮の様子が戻るなら、首筋の肉くらいくれてやると思った。

恐怖を気合いでねじ伏せ、痛みを耐えながらその頭を撫でる。

「っ……」

腕の中で、雪蓮の体が小さく震える。嫌がる様子はないので俺は何度も何度も撫でつけた。

桃のように栄える髪が、さらさら揺れる。

いつもと同じ、雪蓮の甘い匂いが鼻孔をくすぐる。

「雪蓮……」

「……セツ、ナ……」

やっと雪蓮が唇を離し、痛みから解放される。張りつめた緊張の糸が少しだけ緩む。

「……っん……」

噛みつくのを止めたかと思うと、今度は首筋についた傷に舌を這わせ、ぺろぺろと舐め始めた。

「……れろっ……ん、ちゅ……ぺろぺろ……」

滲んだ血を、熱い舌が丹念にぬぐい取っていく。まるで怪我をさせたお詫びだともいう風に。

丁寧な、丁寧に慈しむように。

「ぴちゃ・・・れるっ・・・ん、あまい・・・んふう・・・ちゅう、
ぴちゃぴちゃ・・・セツナの味、ね・・・っ、ん・・・ぺろぺろ」

「・・・雪、蓮？」

うつとりと熱っぽく呟いて、雪蓮が淫靡な微笑みを浮かべながら、
俺の体をまさぐり始めた。

上着の裾から、細い指が忍び込んでくる。

「ちよ・・・待つ・・・雪蓮・・・っ・・・！」

「・・・れるお・・・ちゅっ、ぺろぺろ・・・っ、れる」

汗ばんだ肌に直接、雪蓮の手のひらが触れる。

皮膚の上に滑るようにうごめき、快感にも似た痺れが全身に奔った。
鈍く痛んでいた首筋も、すでに痛みを感じなかった。それすらも体
の熱を増すための甘い刺激でしかない。

「っはあっ、はっ・・・セツナ・・・私、もう・・・我慢できない」

情欲を燃やした瞳をこちらに向け、切羽詰まった声でささやいてく
る。

・・・そんな声で囁かれたら、俺だって我慢できねえじゃねえか！

遠征の間、ずっと何もしていなかったので、性欲に歯止めがきかな
い。

「俺もだよ・・・雪蓮。」

「・・・よかった。」

二人は抱き合っただそのままの体勢で、寝台に倒れ込んだ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・収まったか？」

「・・・どうかな？うふふ・・・」

二人は抱き合っただまま、激しい行為の余韻に浸っていた。

雪蓮と視線を合わせると、今更ながら照れたようではにかみながら笑顔を向けてくれた。

「・・・よいしょっと。」

「ああん・・・」

十分に余韻に浸った後、俺は立ち上がり、ズボンだけを穿いておく。

近くにあった杯を勝手に拝借して、上着の中に入れてあった水筒の中身を注いでいく。

「酒とはいかないが・・・はい。」

「ありがと……」

杯を受け取り、寝台の上で居住まいを正す雪蓮。

俺はその横に座り、中身を一気に煽った。雪蓮もそれに倣って一気に煽る。

「……おいしい。これって李の果汁？」

「ああ。残っていた物で良さそうなやつを絞って濾した物だ。」

見回りをして思ったのが、子ども達の笑顔が少ないことだ。

そこで、子どもが好きそうな物……ジュースを作って、無料で配ることを考えた。

無論、機械などはないから手で絞ったりして果汁を集め、密かに錬成したフィルターにかけて即席ながらジュースを作ることになった。

子ども達からの反応はともよく、今では見回りで見かければ声をかけられるほど親しくなった。

案外味は良く、セツナも水筒に入れて、ちよくちよく飲んでいる

「そう……」

「まだあるけど飲むか？」

「……」

「?・・・雪蓮?」

雪蓮は空になった杯を手に持ったまま、俯き加減にじいっと押し黙っている。

俺は腰を屈め、雪蓮の顔を覗き込んだ。

「どうかしたか?」

「・・・セツナは、何も聞かないの?」

「なにが?」

「さっきの・・・わたしの、こと・・・」

さっきのねえ・・・別格気にならないし、俺的にはいい思いしたしな。

「そりゃ、聞きたいさ。けどな、俺は無理に聞き出そうとはしないよ。誰だって、人には言えない事情があるからな・・・」

「えっ・・・」

そう、人は誰だって大なり小なり言えない事情を隠し持っている。

俺は、それを聞きたいとは別に思わない。本人が話していいなら耳を傾けるし、口外しないように約束する。無理に聞き出そうとする奴を見ると虫唾が走るし、マスコミやパパラッチの類には反吐が出る。

「雪蓮が俺に話していいなら、耳を傾けるよ。話したくないなら、話していいって思えるようになるまで俺は待っているから・・・」

「セツナ・・・」

杯を近くにあつた机に置き、そつと俺の手に重ねられる。

先ほどとは違つ、優しい体温。

「聞いてくれる？」

「いいのか？」

「うん・・・わたし、セツナには知っておいて欲しいから・・・」

「・・・わかった」

俺は小さく頷き、雪蓮の手をきゅつと握る。雪蓮も同じように頷くと、ぼつりぼつりと話し始めた。

「・・・原因は、私にも分からないんだ。今思うと、小さい頃から予兆みたいなものがあつた気がするの・・・如実に現れ始めたのはここ数年・・・本格的に戦場に出るようになってからね。今日みたいに激しい戦いに遭遇すると体が火照つて止まらなくなるの。」

「・・・体が火照る？」

「そう。内側から熱が溢れてどうしようもなくなる。とてつもない熱量に、頭が侵され・・・蕩けていく感じ・・・きつと一番近いの

は、性欲。・・・似て非なるもの、だけどね」

雪蓮の話す内容は、俺にとって少なからず理解できるところがあつた。

興奮すれば、手が付けられなくなる輩はいくらでもいる。実際に俺もその気があるし、そう言う奴を何人も見てきた。

「あ、性欲って言っても、誰でも言い訳じゃないの！誰でもいいなら、その辺の兵士を襲うんだけど・・・そうじゃないから厄介で・・・」

「逆に、誰でもいい方が厄介だよ」

「そう?」

「当たり前だ。簡単に体を許すようだったら、俺怒るぞ?」

「そつか。なら、良かったって思うことにする・・・それでね・・・その火照りは、大切な人と身体を重ねれば収まるから、いつもは冥琳が相手をしてくるんだけど・・・」

雪蓮はそこで一旦言葉を止めた。繋いだ手に、力がこもる。

「どうしてかな?今日はセツナのことしか、考えられなかったの・・・だからあんな形で、セツナのこと襲っちゃった」

「・・・そつか。」

俺は空いている方の手を伸ばし、雪蓮の頭を撫でる。今の雪蓮はと

ても愛おしくこうせずにはいらなかった。

「……怒らないの？」

「どうして怒る必要がある？今の話は、俺もちょっと嬉しかったし……」

それはつまり、雪蓮が俺のことを大切な人と認めてくれた事なんだから、嬉しいに決まっている。

「……気持ち、悪くない？」

「そんなこと言っていると、殴るぞ？……本気で」

「……セツナ」

雪蓮が胸の中に飛び込んでくるのを、俺はしっかり受け止める。

今はもう熱くない身体。

しかし心の中は、さっきよりもずっとずっと温かい。

「雪蓮……」

二人は見つめ合い、どちらからともなく自然に唇を重ねた。

「んっ……ちゅ、ん……っ……」

「……っ……なんか、初めてしたみたいだな。」

「ふふっ・・・そうね」

唇が触れるか触れないか、ギリギリの距離。

雪蓮の甘い吐息が、頬をくすぐる。

「・・・ごめんね、セツナ・・・」

「ん？」

「これ・・・」

雪蓮の指がスウッと噛み跡をなぞる。そのくすぐったさに思わず首をすくめた。

「別に今更傷が増えたところでどうってことないよ・・・それよりも」

「ん？・・・何か、ある？」

「俺の方こそごめんな・・・その・・・つまらない意地張っちゃって・・・」

「・・・ああつ、？水関の城壁の約束ね！・・・いいのよ。私こそ意地張っちゃって・・・」

「これで・・・仲直りな？」

「うん・・・」

額を付け、二人は静かに笑い合った。

その笑みはとても穏やかで、とても満足そうな笑みだった。

「それから、こういう事になった時は、出来るだけ、俺を呼ぶ事。いいな？」

「ふふっ、覚えておくわ・・・ちゅっ」

「・・・あっ」

「なあに？まだあるの？」

「もちろん、火照りとかそついうの抜きでも、俺は大丈夫だからな？どんな時でも、相手になるぜ」

「・・・もう・・・莫迦ね」

雪蓮が返事の代わりに、またキスをしてくる。

俺は、今しか感じられないであろう甘い幸福感を離さないかのよう
に、抱きしめる腕に力を込めた・・・

閑話2 惹かれ合う心（後書き）

どうでしたか？

このシーンはいっ見ても心が温まります。

しかし・・・あの後、あんな事が起こると知ると悲しくなって、心が病みます。

結局、±0ですね。

感想、意見などがあればドシドシ書いてください！

それでは

閑話3 猫の歌(前書き)

作者「え、短編ネタで苦しんでいる作者です」

セツナ「今は時間がたつぷりあるのに、苦しむとはどういう事だ？」

明命「まあ、作者もきつと疲れているのです・・・休みボケだと思
います。」

作者「確かに・・・ボケてはいるけど、疲れているって事はないぞ
？ただ・・・思い浮かばないんだよ！」

セツナ「バイト中にあれだけ思いついているのか？」

作者「もうちょっと先に進まないと、出せないものばかりなんだよ
！（血涙）」

明命「うわ、血で涙している人・・・始めて見ました！」

セツナ「まあ・・・頑張ろうぜ！」

明命「そうです！先に進めば、作者の思い通りに出来るのですから
！」

作者「・・・お前ら、今日もなんか優しいな？・・・さて、これく
らいにしてタイトルコールを始めようか？」

セツナ・明命「OK!・・・それでは、真・恋姫十無双 ～乙女繚
乱 三国志演義～ 呉書 虎狼天下霸道の巻 閑話3 猫の歌 ど

どうぞ閲覧してください。」

作者「意見、感想・・・随時待ってまゝです！」

閑話3 猫の歌

雪蓮との一件があつて以来、身体がとても軽い。

穩達からは明るくなったといわれるし、鍛錬では技のキレが以前より増している。

全ていい方向に向かっている。雪蓮との契りがこのような効果をもたらすとは思っていなかった。

ただ、雪蓮との関係がそこまで劇的に変わったわけではない。

ちよつと雑談が出来たり、一緒にいる時間が多くなった程度だ。

俺はそれに心地よさを感じているし、雪蓮もそう思っているはずだ。これ以上変わらなくていいと言われればいいと思っている。

「さて・・・今日も張り切つて、見回りをするか!」

腿に張り手一発。気合いを入れて、見回りに繰り出す。

今までは人が集中していた南城門付近を重点的に回っていたが、今回は損害が激しく復興作業がはかどっていない北側を重点的に回る予定だ。

路上が荒れ、崩壊した建物が多いため半ばスラム化しているので、野盗や火事場泥棒、それにまだ存在している黄巾党の残党がそこから彼処にいる。

今回は明命達と手分けしてそれらを駆逐しようという算段だが、い
かんせん人手が足りない状況である

なぜかというところ最近洛陽付近で盗賊団の動きが活発になり、常時警
戒が必要になってきたからだ。その分警備に兵を割かなければいけ
ないため、洛陽内の見回りにまで手を伸ばせないという状況に陥っ
てしまった。

部下も戦闘を体験させるために警備の方に向かせている。

だから、一人で指定された区域をカバーしなければいけない。

どうカバーするか思索しながら、人通りの少なくなってきた大通り
あたりで路地裏に入り込む。

そして、全身を弛緩させて緩い空気を醸し出しながら、ぶらぶらと
歩き始める。

端から見ればその姿はただのだらけた格好なのでどうぞ襲ってくだ
さいと言っているようだが、この弛緩がもつとも力を発揮できる力
の抜き方をしているので、全然心配は要らない。大抵は音響視力フォニック・アイで
事前に敵を察知が出来るため、まさに理想の見回りの姿である。

南側のように捕縛しては効率が悪いため、今回は死なないが死
ぬほど痛い関節の抜き方を実践して、都市から追い出す方針にした。
ぶらぶらと歩き、襲ってきた無礼者には両肩関節を無理矢理外して
街から追い出しながらある程度時間がたった頃に、明命が目の前を
すっと通りかかった。

「・・・何、やってんだ？」

明命は俺とは逆の区域を見回るはずなんだが・・・

気になって後を追いかけてみると・・・

明命は手に何かを持って、何かを待っているみたいだ。

持っている物を確認するため、物陰に隠れて胸ポケットから多機能
防塵サングラスを取り出し、望遠機能で見てみる。

「・・・煮干し？」

小魚の煮干しで何をしようっていうんだ？

しばらく待っていると・・・明命の前に一匹の猫が現れた。

「お猫様っ！」

と、猫を両手で抱き上げようするが・・・

「シャーッ！」

威嚇して、抱かせようとさせてくれない。

「あう・・・忘れていました。いつもの物ですね。」

手に持っていた煮干しをそっと猫の前に置き、交渉を開始する。

（・・・猫相手に交渉って・・・）

自分の考えに軽くつつこみを入れて、観察を続けていると・・・
猫は、仕方がないわねえ〜っと言うかのように煮干しをくわえて、丸くなる。

「えへへ、ありがとうございます。」

いつもはキリツとしている明命の顔が、華やか笑顔に変わる。

・・・意外に可愛いところがあるじゃないか。

もっと堅物かと思ったが、どうやら違うようだ。

「それでは、失礼しますね」

そっと両手で抱え込むように抱き上げ、日の当たっている段に腰掛ける。

そして、猫の背をモフモフとなで始めると・・・

「はうわ〜、モフモフ気持ちいいです〜」

一瞬にして、顔が蕩けた。まさに秒殺物であった。

おいおい・・・あそこまでいい物なのか？

確かに、セツナも小動物に対しては可愛いという感情を持っている。

だが、あそこまで蕩けるような動物には出会ったことはない。

あれは・・・一種の病気に近いな。

「・・・うなあ」

しばらくなでられていた猫は、不機嫌そうに鳴き声を上げる。

・・・されるがままって、猫にとって嫌なんだろうな。

「あ、すみません。私ばかり」

明命はハツとなり、一旦モフモフを中断して猫の耳のつけ根やアゴの下を搔き始めた。

つけ根には反応しなかったが、アゴの下は気持ちよさそうな顔をして満足そうな鳴き声を上げる。

「あはっ、ここが気持ちいいですね。」

気分を良くした明命はさらにそこを重点的に搔き、猫の機嫌を取っていく。

そしたら、もつと搔いてくれて言わんばかりに、明命にその身をすり寄せた。

「えへへ〜」

明命はご機嫌取りがうまくいったことが嬉しかったようだ。

完全にヤられたし、再び猫に頼ずりを始めた。

「それでは、また私の番ですー。失礼しますね。」

モフモフ。

また猫の身体をモフモフし始めて、顔が蕩け出す。

その姿を、心の中で爆笑しながら観察を続ける。

モフモフ。

モフモフモフモフ。

モフモフモフモフモフ。

「・・・擬音で時間の経過を表すのは良くないぞ？」

擬音にケチを付けない！後、こちらには絶対突っ込まないでください！

「はいはい。」

ずっとモフモフされていた猫は、だんだん鬱陶しくなってきたのか、不機嫌を顔に表れ始めた。

「あうあうあうっ」

しかし明命は、猫の不機嫌には気づかずモフモフを続行している。

猫の毛に顔を埋め、至福の表情で頬ずりを続ける。

もはや、何も見えていない様子である。

しかし……

「……うなあっ！」

あまりにもモフモフしすぎたせいで猫が嫌がり、明命の手を引つ掻いてしまった。

「あいたっ！」

思わず手を離してしまう明命。その隙に明命から離れ、猫は背を向けた。

「あうう……」

煮干し数匹でいつまで触っているつもり？私はそんなに安くないのよ。

とでも、言っている猫は明命に一瞥をくれただけでそのまま行ってしまう。

そして明命は、その猫を物欲しそうな、申し訳なさそうな表情で見送るしかなかった。

そこまで見届けた俺は、とりあえず明命の手を手当てするためとこちらに来た理由を聞くために近づいた。

「手、大丈夫か？」

「はうわ！？どうしてセツナ様が・・・」

「それは俺が聞きたい・・・どうして、明命がここにいるんだ？担当区域は向こう側の方だろ？」

明命はモジモジと後ろ手を組みながら、たどたどしく答え始めた。

「それは・・・ここに来れば、よくお猫様に会えるからです！」

「・・・で、見回りはどうしたんだ？」

「この後、しっかりとやらさせていただきます！」

はぁ・・・これが男だったら、拳骨の一発でも食らわすんだが・・・女の子が、そんな理由でこちらに来たっていうんなら・・・怒れないじゃないか。

「・・・まあ、いい。とりあえず手を消毒するから、出して？」

「あの、これくらい・・・」

遠慮する明命をよそに強引に手を取って、手持ちの消毒液をパパッと振りかける。

それから、手早くテーピングテープをグルグルと巻く。

「これでよし・・・っと。浅い傷だが、放っておくと化膿するからな。動物の爪は雑菌の塊だから、気をつけるに越したことはない。」

「は、はい、ありがとうございます……」

明命はなぜか照れながら、そそくさとその場を去ろうとする。

……まあ、この際、俺のちょっとした趣味でも教えておいてやるか？

「ちょっと待てよ。」

「ひゃ！？はいつ！？」

ちよつと肩に手を置いただけでびっくりしたのか、身体ごと飛び跳ねてこちらを向いた。

「明命つて、猫が好きなのか？」

「えっ……はい、大好きです！」

屈託ない笑顔で元気よく返事を返してくる。

そんな明命に、一種の面白さを感じて、心の中で笑った。

「じゃあ、いいもん見せてやるから誰にも言つなよ？」

「はいつ、絶対に口外しません！」

「よしっ……ニャオ〜ン」

セツナが、猫そっくりの鳴き声をあたりに響かせるように鳴いた。

「・・・セツナ様？一体何を？」

「しっ・・・静かに待ってな。」

少しすると、あたりから鳴き声を伴って、多数の猫がセツナの足下にやってきた。

「おっ、お猫様がこんなに！？」

「おっしよし・・・いい子だな。」

一匹一匹の頭を優しく撫で、ポケットから粉状の物を猫たちに振りまく。

すると、猫たちは狂喜乱舞し、その粉を必死に自分たちの身体につけようと悶え始めた。

「何で猫の鳴き真似をするだけで、寄ってきたんですか？」

「大方ここら一帯の猫の頭と勘違いしているんじゃないか？鳴き真似しただけで、結構出てきた・・・」

猫が足元で唸っている中、その中から一匹を抱き上げ耳やアゴを撫でてやる。

気持ちよさそうに鳴き、もっと撫でて欲しいと言いたそうに身をすり寄せてくる。

「俺は、小動物とかが好きで・・・雪蓮達に言つと可愛い趣味ね、

つてからかわれそうだから、言っていないんだ。ここら一帯の猫は俺に大体懐いている。」

「はうわゝ・・・すごいです。それで、今まいている粉のような物は何ですか？」

「木天蓼^{マタタヒ}って言って、猫が大好きな匂いがする木の枝でそれを粉にしているだけさ。」

ポケットから、木天蓼^{マタタヒ}の枝を出して、明命に手渡す。

「持っているだけで、猫が寄ってくるぞ？」

「本当ですか！？それは嬉しいです！ありがとうございます。」

すぐさま、木天蓼^{マタタヒ}の枝を一匹の猫の前に振りかざして、気を引かせる。

猫は猫パンチを繰り出しながら、その木天蓼を取ろうと必死になる。

「あうゝ、お猫様・・・最高ですうゝ」

「ははっ、ほどほどにとけよ？」

また猫にやられ出した明命をその場に置いて、見回りを再開する。

今はまだまだ平和だな・・・と思いきり馳せながら、悪党達を懲らしめていくのであった・・・

大体の見回りを終え、後は飯を取りに雪蓮達がいる天幕に戻るだけなのだが・・・

ふと、猫を集めた場所が気になって寄ってみると・・・

「はうわ〜・・・」

歡喜の声を上げ、恍惚な表情を浮かべて、猫の海に沈んでいる明命を発見した。

「・・・はあ〜」

頭を抱えて、深い深いため息をつく。

そして、思考させる・・・この状態を一体どうしようかと・・・

少し考えた後、無理矢理にでも猫の海から引きずり出して、明命を天幕まで連れ戻した。

そこで、俺は冥琳に密告して、灸を据えてもらおうようにした。

案の定明命は冥琳、祭さん、思春の三人から、かつて誰も見たことがないような説教を食らって、ただ地面に頭を伏せ、謝っていた。

その姿を見ている内に、再度こう思った。

ああ、この時代はまだまだ平和だな・・・と。

閑話3 猫の歌（後書き）

かなりグダグダになってしまいました。

やはり、短編は難しい・・・

次は袁術からの独立の場面ですが、セツナと霞はある事情から参加しません。セツナ達のシーンを書きたいと思っっていますから、独立のシーンはカットとさせていただきます。ご了承下さい。

それでは皆さん、また三週間〜一ヶ月後に・・・

第五話 初陣、新たな仲間と共に！（前書き）

作者「え〜・・・みなさん、二ヶ月以上放置していてごめんなさい。」

セツナ「・・・速攻！」

ドカツ！バキッ！グシャッ！ドグラメゴツ！

作者「ぎゃああああああっ！」

作者は地獄にログインしました（チーン

亜莎「セ、セツナ様・・・いくら何でもやり過ぎなのでは？」

セツナ「亜莎、あいつにやりすぎはないんだ。むしろ、読者の気持ちの考えたら足りないくらいだ！」

亜莎「しかし、なぜここまで更新が遅れたのでしょうか？」

セツナ「作者曰く、大学が始まって時間が取れるような状況じゃ無
いみたいなことを言っていたが、本当は最初の方でつまずいて、そ
こでかなりの時間を喰ったんだ。しかし、後半はここ三日、超特急
で書き上げたらしい。」

亜莎「そういえば・・・作者の目の下・・・クマができていました
ね〜」

セツナ「劳いの言葉など、あいつは不要だ。もっと追い込まないと・

・・・」

亜莎「それはちょっと・・・話はこれくらいにして、そろそろタイトルコールに行きましょうか？」

セツナ「OK!・・・作者不在だが・・・それでは！」

セツナ・亜莎「真・恋姫十無双 乙女繚乱 三国志演義 呉書
虎狼天下覇道の巻 第五話 初陣、新たな仲間と共に!どうぞ閲覧してください。」

セツナ「感想、意見などは随時待っているぜ！」

地獄からの伝言が届きました

作者「・・・更新速度、頑張ってください。」

第五話 初陣、新たな仲間と共に！

反董卓連合が洛陽に雪崩れ込んでから、早二月が経過した。

反董卓連合に追いつめられ、洛陽を逃げ出した董卓たちは、その後西涼に戻った説や、暗殺された説が飛び交っていて、本当はどうなったのか・・・ってというのは不明のままだ。

また、曹操が洛陽に入城した後、少帝を保護したらしいがその後の動きを見てみると、少帝を政治利用する気はなさそうだった。

袁紹は河北でさらに領土を拡大しようと、あちこちに戦を仕掛けているらしい。

その煽りを喰らったのか、反董卓連合で地味に活躍していた公孫賛が領土を失い、劉備の保護下に入ったという情報もある。

劉備はというと、董卓討伐に功があった・・・ということで、徐州の州牧に任命された。

義勇軍の大將だった劉備が、いつの間にやら州牧になったという、ある種の下克上じみた感慨もあるけれど、どうやら裏で曹操が糸を引いているらしい。

曹操が何を考えているのか、よく分からないが・・・なにやらきな臭い匂いがしてくるのは、俺の勘違いではなさそうだ。

ところで、俺達孫呉はというと・・・

反董卓連合での戦いぶり、その後での洛陽復興に向けての取り組みが大陸各地の庶人に評価され、その声望が一気に高まっていた。

しかし出る杭は打たれるという言葉がある。最近では雪蓮と袁術の関係がかなりギクシヤクし始めてきた・・・

復興作業をほどほどに手伝った洛陽から帰還して早一月がたった。

その間に俺の軍にはさらに4000人が追加されて、すぐさま選別試験を張凱達と行なった。

また最初の4000人も俺が留守の間、しっかりと訓練していたか確認するために体力測定も行い、何かと忙しい日々を過ごした。

測定の結果は、800人ほど脱落者がいたが予想していたより少なかった。なのでなかなか根性がある奴らだと改めて認識した。まあ、脱落者には後々特別訓練を課すことで追いつかせるように頑張らせる。最近の訓練を見ている限り、それなりに動けるようになってきたのでそろそろ実践に向かわせたいのだが・・・いかんせん時期が時期なのでむやみに軍を動かすわけにはいかない。

今動かせば孫呉の独立にむけて準備を頑張っている雪蓮たちに迷惑をかけてしまう。

そんな考えが悶々と頭にこびりついて過ごしていたある日・・・

「はあああッ！」

霞の連撃を真正面に見据えて立ち向かう。

まずは目と体を慣らすために膝抜きと転ばしを駆使して偃月刀の間を縫うように避けていく。

霞はさらに連撃のスピードを上げ、セツナを追い詰めようとする。しかし……

「なんでや！？なんでウチの攻撃が当たらんねん！？」

一つ間違えれば、自らの体を突き刺す偃月刀が体すれすれを通っているのにセツナは動じない。それどころか一歩ずつ前に詰めていく。

右手をかざし、偃月刀にその手を添わせ微妙に、だが巧妙に外していく。

しかし、なぜ手だけで偃月刀が外せるのだろうか？手甲をつけているとはいえ、かするだけで突き指は免れないほどの衝撃が走っているのに平然と前に出て行く。

やがて完全に自分の間合いに入ったセツナは、霞の突きを払いのけボディブローを繰り出す。

「……ふう〜、ありがとうな、霞！」

ボディブローを寸前で止め、構えを解いた。

さっきのは、間合いの長い武器の見切りを強化する鍛錬で、霞も懐

に飛び込まれないようにするための鍛錬でもあった。

「ああ、めっちゃ悔しい！あんなに簡単に潜り込まれるなんて！」

「まあ・・・普通はあんな戦い方をする奴は滅多にいないから、気にしなくてもいいぞ？」

「やけども、なんか自分の力の痛感してムシヤクシヤするんやけど・・・」

「霞は十分強いぞ。俺なんかはさっきみたいなことをしないと真っ正面から斬られて終わりだ。」

腕を軽く振り、右腕に仕込んでいる投げナイフを取り出し、霞に見せてみる。

ナイフの先はなぜかボロボロになっていて、もう使い物にならなくなっていた。

「どしたん、それ？さっきの見切りと何か関係あるん？」

「実は、さっきの受け流しはこれを利用してやっていったんだ。刃先で剣の腹をこするように合わせて、ほんの少し力を加えるだけで簡単に切っ先が変わるんだ。目のいい奴なら、相当鍛錬を積みれば出来るようになるだろう。」

「それ・・・たぶんセツちゃんしかできへんやろ？ウチじゃとてもとても・・・」

「そうだな。俺のような拳のみや間合いの短い剣で戦っているやつはこの時代ではあまり見ないし・・・」

そこから、少しの間霞と間合いの取り方や詰め方について話し合っていたら、雪蓮達が中庭にやってきた。

「あら、こんなところにいたの？」

「さっきまでちょっと鍛錬していたところだ。俺達に用か？」

「ええ、とりあえず現状把握しましょう・・・冥琳、仕込みの方はどう？」

「仕込みはほぼ完了している。決行の日取りも伝えているからそろそろ袁術に一報が届くだろう。」

「・・・ついに動くのか!？」

天下取りの第一歩になる袁術からの独立。それがやっとな事を起こせるところまで漕ぎ着けた。

雪蓮達と出会ってからすでに半年。ここまで準備するのにどれだけ苦労していたかは痛いほど伝わってくる。

地下で着々と力をつけ、すでに一匹の龍と化している孫呉の強さは、袁術達では到底太刀打ちできないものになっているであろう。

「そういつこと。それでこっちの準備はどう？」

「全て完了しているわ・・・といたいところなのだが、そもい

かないようだ。」

「……なんですって?」

ここで予想される最悪な出来事は袁術に独立することを嗅ぎ付けられてしまうことだ。次に悪いのは、飢饉などの天災による軍事行動の制限。軍事は金食い虫なので強行すると民から反感を買ってしまう。まあ、この場合時期を遅らせればいいのだが、一年以上は制限を余儀なくさせてしまうだろう。

そんな最悪な事態に身構えて、話を進めていく。

「実は、荊州の南の方で袁術に従っている豪族の一人が謀反を企んでいるらしい。それを未然に防ぐために私たちに鎮圧命令が出された。」

「……時期が良すぎるわね?こちらの動きが感づかれた様子は?」

「間諜の報告からそれはないと断定できるわ。おそらく偶然的ですよ。」

「ふうん、それで我等が軍師様はどうするつもり?」

「建前上我等が行かなければならない。そこでセツナと張遼にこの一件を任せようと思う。」

「……俺達が?」

確かに自由に動けるのは俺達二人ぐらいしかいないだろう。雪蓮達が動けば後々の行動に支障が出てくる。

幸い俺にとってこの出撃は好都合であった。初陣を控えた部下達になかなかいい形で実戦を体験させてやれそうな相手でありそうであったからだ。

いきなり袁術の軍とぶつけるのは少しこちらに分が悪い。話を聞く限り、袁術の側近である張勳は有能な家臣だ。

袁術があればお子ちゃまなのに、強大な力を維持しているのは偏にそいつのお陰だった。そんな有能な家臣に鍛えられている兵は虎牢関のことを差し引いても屈強であることは間違いない。

だから、最初の敵は少しランクを落とし、勝たせることで自信をつけさせる。人間勝負事に勝つと自信がつく。自信は実力アップの手助けを大きくしてくれる。

しかし、喜ばしいことなのだが、雪蓮達から疎外感を感じてしまった。

全面的に協力するといっているのに、最後はやはり自分たちの手でやり遂げたいということなのだろうか？

そこにまだ俺が孫呉の一員になれていないことを痛感させられる。

「ああ、敵の数は一万弱だ。お前の8000とさらに3000の軍を出すのだから、鎮圧は簡単だろう。」

「相手の大将は殺していいのか？」

「本来ならばダメだが・・・まあ、戦闘中に死んだことにしておけ。」

「なら現場に強くて信頼出来る文官を数名同行させてくれ。後は出来るなら糧食を少し多めに出して欲しい。」

「・・・分かった。いつ出陣できる？」

「今すぐにでもと言いたいが・・・五日後だな。俺の軍にはまだ武器や鎧が届いていない。」

「それでいいからお願いね。私たちもそれに合わせて動くから。」

「・・・了解。」

やはり疎外感を感じる。しかし仲間はずれにされたことに不満を持つてもしょうがない。自分の仕事はきっちりやろう。

ふと雪蓮の顔を見てみると、なぜか俺の方を見ていて申し訳なさそうな顔色をしている。

冥琳も普段と同じように見えるが、いつもの鋭い雰囲気を感じ取れない。

二人とも、心の中で謝っているんだ・・・自分たちのことなのだから、謝る必要なんてないのに・・・

軽く笑って二人を見返し、霞を連れて軍の出陣準備に向かった。

準備をするのはいいのだが、俺には出陣を渋る理由がもう一つあった。

今腰に差してあるシャムシールは遠征から帰ってきてから、まだ一度も抜いていない。

ヒビが入り、折れかかっている状態のまままで新しい剣がまだ手元になかった。

武器を扱っている店を回ったり、鍛冶師にあれこれ聞いたりして探しているのだが、これといった収穫はない。

自分の感覚で、これはっ！っといった剣でなければ、命を預ける事は怖すぎて振れない。

だが、最近になってある情報が部下達から武器探しに苦労している俺のために報告された。

曰く、凄腕の鍛冶師がここ、荊州南陽の街の片隅にひっそりと隠居しているという報告だった。

今日は、そこに向かってなんとか俺の剣を鍛えてもらえないかと頼みにいくつもりだ。

軍の出陣準備を霞に任せて、街を早歩きで目的の場所に向かう。

少しして、着いた場所は農家が佇む区画にひっそりと開いている武器防具店。

建物はとても古く、今にも倒れそうなほどボロかった。

「……ここにいるのか、俺の求める剣を鍛えてくれる鍛冶師がい

るのは」

はっと気合いを一ついれ、引き戸を引いて中に入ってみる。

「……いらっしやい」

真ん中に座っている老人が、重音の効いた声で出迎えてくれた。ハッキリ言っただけビビった。

容姿も、ボケた爺とは思えないほどごつい。右目の眼帯、両腕に数々の火傷痕、足の見えている部分も同様だった。それに何より腕が太く、鍛冶師特有の雰囲気醸し出されていた。

そんな雰囲気、少しの期待を持ちながら、問いかけてみる。

「失礼……あなたがいい腕の鍛冶師だと聞いてやってきました。まずはこれを見てください。」

腰に差してあったシャムシールを番台の上に置く。

「……ふむ」

老人は抜いて、剣の状態を確かめる。軽く振ったり、剣の腹をこづいたりして、剣を感じ取っている。

一分から二分ぐらいたっただろうか……老人はシャムシールをそっと鞘に戻して丁寧に俺の前に置いてくれた。

「確かにいい仕事をしとる……だが、儂から言わせればまだまだ甘い。お主は何をしてこうなった？」

「戦斧を一撃受けたらヒビが入り、そこからさらに攻撃を続けました。」

「思った通りじゃ。この一点から広がるヒビは何かしらの力がここに極端にかかった証拠じゃ。ここから全体に波状してヒビが入っておるから無理をしたことが伺える。」

あれだけでここまで見抜く慧眼に驚きながら、密かに興奮していた。

この老人なら、確実に俺が求める名刀を鍛え上げてくれる。そう信じて疑わなかった。

「そこまで分かっているのなら話は早い。この俺に一本剣を鍛えてくれませんか？」

「生憎じゃが・・・僕はとうの昔に鍛冶師を引退しておる。しかもお主のような一見者にはどれだけ頼まれても打たんと決めておる。諦めて、そのの剣でも選んで買っていけ。」

「・・・分かりました。少し見せていただきます。」

と、狭い店内に空樽に乱雑に入れられている剣を物色し始める。

古代中国、俺の求める刀のような剣は無く、すべて厚手の諸刃剣しかなかった。

その中の一本を手にとって、剣を感じ取るかのように目を閉じる。

(・・・直刃、切れ味はそれなり、重さはシヤムシールより結構重

め)

扱えないと断定して、元の場所に戻し次の剣を捧げ持つ。

(刃は厚め、青竜刀に似た剛刀・・・それにしても重心は刃先に近いな?)

振り心地を確かめたくなくて、周りを見渡し振れるスペースを確保する。

そして軽く上段から振ってみると、前に重心が持つてかれそうになった。足の指でしっかりと地面を掴み、振り切る。

振って分かったことは、これは恐ろしくジャジャ馬な剣で使いこなすのに相当な時間がかかるが、使いこなせるようになれば技量の差があっても、この剣がカバーしてくれるくらいいい剣だった。

「・・・お主、少しは分かるようじゃな？」

「えっ？」

「その剣は持ち主を選ぶが確かな名剣じゃ。何度か売れたのじゃが・・・持ち主が見つからず、結局儂の元に戻ってきておる。・・・その剣から何が感じ取れる？」

「そうですね・・・この剣というか、店にある物全部ですが人を斬るために鍛えたのではなく、持ち主を守るために鍛えたという制作者の思いが感じ取れます。」

「・・・何っ？」

「鍛えられた剣には少なからず制作者の思いが宿ります。この人は武器を人殺しのための物ではなく、守りたい物を守るためにある物だと思っていたことが伝わってきます。」

「お主、そこまで分かるのか!？」

「ええ・・・多少武芸に通じているので何となくですが・・・」

物には魂が宿る。俺はそれを感じ取り、その魂がどういった感情を持って生まれてきたのかが何となくだが読み取れる。

精霊と長い間関わってきたせいなのかもしれないが、こつこつ感応力が芽生えていたのだ。

「おおおお・・・!？」

老人は頭を抱えて地面に伏せ、突然泣き崩れた。

何があったのかと近くに寄り、肩を揺すってどうしたのかと聞く。

「儂はずっと待っておった。齢65・・・お主のような若い者が儂の理念を感じ取ってくれるとは・・・」

「そつ、そうなんですか?」

「鍛冶の世界に入って50年・・・儂はずっと武器は守るためにある物だと思い、その思いを全ての武器に入魂しておった・・・しかし、買い手は皆その思いを感じることもなくただ武器を求めていた・・・そんな感情に嫌気がさしたから、隠居していたのじゃが・・・」

まさか、死ぬ間際に現れるとは……」

そういつて、また泣き崩れる。その様子をしばらく見守っておくことにした。

50年も自分の思いを剣に込め続けた老齢の鍛冶師……その精神と信念に感動し、驚愕する。

自分が望まない客に剣を売り続ける……そのことがどんなに苦痛だったのかは想像するのは容易い。

しかし、いつか分かってくれる客がきつと来ると信じて、鍛え続けていたのが……50年もすれば思いも摩耗してくる。

だから、隠居したのだ……これ以上自分に嘘はつけないと悟り、待ち続けたことに疲れ、鎚を置くことを決めたのだと思う。

やがて老人は泣きやみ、また意志の込めた目でこちらを見据えてくる。

「剣を鍛えて欲しいといったな？……どういった物を鍛えて欲しいのだ？」

「つつ、作ってくれるのですか？」

「お主なら僕の剣を悪いように使わんだらう。それに僕はお主のことが気に入った！」

「あ、ありがとうございます！それではですね……」

セツナはシャムシールを元にした新たな剣を手振り身振りで鍛冶師に伝えていく。

今回はピン詰まりで幅広で薄かった物から刃先を腰上まで細く長くし、薄かった刃を長くして余った鉄の分厚くするという元の世界で使っている刀に似せた物である。

これならば、よりいい精度で技が出せるようになるし、受けてもそう簡単には折れないだろうと思って、折れかけてからずっと思案していた物だ。

「ふむう……なかなか難しいの……片刃でいいのじゃな？」

「はい……そうでないと、意味がありませんから」

「よし……一ヶ月もらおう。」

「い、一ヶ月！？そんなにかかるのですか！？」

「もう長い間火床や鎚を使っておらん。眠ってしまっておるからそれらを目覚めさせるのに二週間。勘を取り戻すのに一週間。それから鍛え始め、一週間。これ以上はどうやっても早く出来ん……粗悪な物が欲しかったら、今から鍛えるのじゃが？」

老人はにやりと笑った片眼だけを俺に向け、問いかけてくる。

粗悪な物は欲しくない。これは至極当然な事だ。

しかし、一ヶ月はさすがに待てない。五日後には荊州南部への出陣も控えている。

今はまだ実力を隠しておきたい状況なので、極力拳を使つては戦いたくない。

しかし、考えてみれば袁術が倒れたら荊州は雪蓮の物になる。

ならば、ここで一つ本当の実力を見せておくのも悪くはない。

一つの牽制にもなるし、刃向かってくる輩もあまり増えることはないと思う。

考えに考えた拳句、出した結論は・・・

「・・・最高の物を、お願いします」

「分かった。きっとお主が望む物を鍛えて見せようぞ！」

「期待しています。それで代金の方なのですが・・・」

「分かつておる。後でお主の方に請求書を送るから、名前だけ教えてくれんかの？」

「・・・セツナ・フォーリングと申します。」

「天の御使い様であつたか！カツカツカツ・・・これはそんなじゃそこらの物は渡せんのだ！」

何とか交渉が終わり、セツナはまたガタガタと扉を開けて、外の空気を思いっきり吸う。

老人も後ろから見送るのか、二本の足でしっかりと立って外に出てきた。

「儂の名前は鉄犀・・・お主のような男に会えて嬉しいぞ。」

「本当にありがとうございます。どうお礼をいっていいやら・・・」

「儂の方こそ礼を言いたい。最高の物を鍛えてお主に授けようぞ。」

「期待して待っていますね！それでは！」

「うむ。」

こうして、一人の職人に感謝しながら、城に戻る。

剣を使えないことは少し痛手だったが、後からの見返りを考えればお釣りが来るほど、些細なことだ。

「俺もあんな風に生きていけたらいいな・・・よし、帰って軍の編成に精を出しますか！」

来た道を高鳴る胸を鎮めるかのように、走り出す。

だが、そんな程度で収まる事はなく胸はさらに高鳴り、セツナを前に突き動かすのであった。

軍の編成や、兵糧の確保に追われている内に全ての準備が整い、きつちり五日後には城から出陣していった。

出陣した軍の内訳は、セツナ率いる8000と霞が指揮する雪蓮達が出してくれた3000の一万一千人だ。

今後ろで見事な隊列を組んで行軍している兵達は真新しい武器防具を装備して、少なからず士気が高揚しているかのように感じ取れた。とりあえず間に合わせだが、予定通りの隊に合わせた武器防具を供給することが出来た。

豪力隊には豪剣と重鎧を、迅速隊にはカタールとクナイ数本を、蒼穹隊には連弓と軽鎧を、鋼盾隊には大盾と迎撃用の長槍を、今回何とか支給することが出来た。

8000もの武器防具をほとんど短時間で作ってくれた職人達に感謝の言葉しか出てこない。

今回はこれだけだが、将来的には二つのメイン武器を支給していきたいと考えている。

霞の軍も、なかなか戦闘を重ねてきたという感じが漂ってくる軍隊であった。

おそらく雪蓮達が、せめてもの罪滅ぼしにでも歴戦の強者で構成された軍を貸してくれたのだろう。

(そんなに気にしなくてもいいのに・・・優しいんだから)

ならば、その優しさに応えるために与えられた仕事はきっちりこなすとしますか！

「セツちゃんっ!!」

平行して進軍していた霞が、単騎で俺の方に馬を寄せてきた。

「どうした？何かあったのか？」

「いや、ただ進軍するうちゆゑのもつまらんから少し話でもしよ
くかなって？」

確かに進軍中、黙々と馬に揺られるのもつまらない。

原則的に作戦行動中の私語は厳禁なのだが、そんな物はもはや形骸
化して来ている。

そういった些細なこともストレスとなつて作戦に支障が出るため、
多少のことは目をつぶっている。

「まあ・・・いいが、兵に示しが付かないから少しだけだぞ？」

「おおきに、セツちゃんはやっぱり優しいな・・・自分の軍を初
めて動かす感想はどうや？」

「軍を動かすのは初めてじゃない。天の世界でも俺は将軍的な位置
にいた人間だからな・・・だけど、これほどの人を一気に動かすの
は初めてだな。正直戸惑っている。」

「どして？」

「俺の命令一つで生きるも死ぬも決まるからだよ。そんな重大な責

任を背負って戸惑わない奴は滅多にいないぞ?・・・霞はどうだ?

「ウチは久しぶりに戦えるからめっちゃワクワクしてんねん!いや、大将のところでだけはけっこう苦労したからな・・・開放感全開やわ」

「・・・すまないことをしたな。」

「別に気にしてへんって。大将の考えは一理あるから、ウチはそれに従うまでや。」

ここ二月、霞は俺以外の監視者から24時間数人物陰から監視されていた。

城から出るにも、俺が付いていくことでやっと許可が下りるほど厳重に監視されていた。

冥琳や祭さんは気軽に話しかけてくれたが、雪蓮を筆頭に他のメンバーは事務的なこと以外は人を介して話していたくらいだ。

霞には精神的に苦労させてしまったし、俺がいないときなどは孤独で寂しい思いをさせてしまったであろう。

しかし、そんなことを全く気にしていない様子でいつも元気にくれた。

「まあ、多分この遠征が終わったら、正式に仲間を迎え入れてくれるだろう。今回はそれが目的で俺達を出陣させたのだろう。」

「ん?何で仲間を迎え入れる事が目的なん?」

「今回俺達だけで出陣させてどういった行動を取るかを見て判断するんだ。軍を無駄に消耗させたり、故意に遠征を長引かせたりするという行動は背反行為として取られて信頼されないんだ。俺達に求められるのは、迅速且つ最小限の被害でこの反乱を鎮圧することだ。」

「ふくん……やけどそれだけやないんやろ？ウチらを遠征に出した理由は？」

「ああ……雪蓮達はついに袁術に反旗を掲げるんだ。それを自分たち身内の手だけで成し遂げたいんだろうな。」

「なるほどな……セツちゃんもどんなに親しくてもよそ者つちゆことやな。」

「……ああ、まだ正式に仲間じゃないのかもしれない。」

信頼の熟成には長い年月が必要である。それは周知の事実だ。

共に笑い、泣き、喜び、生死を共にすることで熟成を促進させてくれるが、そう簡単には気の置けない仲になれることはない。

数度の戦闘と半年の年月では、やはり雪蓮達の仲間と名乗れないのだろうか？

少なくとも俺はすでに霞を含めた呉のみんなを信頼している。あれだけよくしてくれたし、いろんな事を通して内面を見てきた。

その全てを含めて、信頼できる仲間である。一方的な思いであるが

これだけは譲れない気持ちである。

「まあ、ええやんか！この遠征をきっちり終わらせたなら、万事解決や！張り切って行くで〜！」

霞も疎外感を感じさせることなく、元気に進軍をしていく。

その屈託のない明るさに、少しは心が晴れる。

「ああ、まあ長くはなるが付き合ってくれよ？」

「そういえば、兵糧がめっちゃ多いけどなにすんの？ウチらだけじゃあんなに食べれへんで？」

「ああ、それはー」

と話しているところに、先行させていた迅速隊の一人が俺の元に戻ってくる。

「將軍、三里先に集落を発見いたしましたけどどうしますか？」

「わかった。満貫、人数連れて野営と炊き出しの準備。黄烈、大人数で軍飯を手つ取り早く作れ。献立は任せる。・・・このくらいか、後は炊き出しするって宣伝しておいてくれ。」

「はっ！」

伝令は素早く駆け出し、隊長である劉仙の元に風のように向かう。

「さて、しっかりと働きますかな？その百人！半々に別れて野営

と竈の設営だ。後ろから器材持ってきて取りかかれ！」

「はっ！」

満貫もてきばきと指示を出し、百人を連れて集落のある方に先行していく。

「隊長、質問をいいかな？」

「何だ？」

「根菜などを現地から調達しても？」

「集落の長に交渉して良かったら使え。出来るだけ上手い物を食わせてやれよ？」

「言われなくとも・・・その班、後ろから今から指示する物を持ってきて俺についてこい！」

「はっ！」

指示を受けて、直ぐに包丁や鍋を持った物と材料を手際よく運んでいく50人程度の班が黄烈に続いて先行した。

指示を見事に理解し、手際よく動いていくのはよく訓練している証拠だ。

わずか三ヶ月・・・もつこここまで出来るようになったのは驚きであった。

「炊き出しとかして、どうするつもりなん？」

「霞は何もしない将と少しでも炊き出しする将、どちらについて行く？」

「それはする方に・・・そうか！」

「いわば地盤固めのようなものさ。こつやって少しでも雪蓮達の役に立ちたいから考えたんだけど・・・どうだ？」

「異論はない！少しでもウチらが有利になる方になるんやったらええやんか！どんどんやりい！」

「よし！全隊、集落まで駆け足！ついでに飯にするぞ！」

「オオオツ！」

昼時で腹が減っているのか、意気揚々に土煙を上げて駆け足進軍をする。

現金な奴らだな・・・と思いながら、自身も腹が減っているので空雷で先に集落に駆け出した。

着いた集落は一見どこにもある農業で生活している所だった。

だが、あまりにもみずばらしい・・・集落全体が痩せている事が感じ取れた。

セツナはすぐさま集落の長を呼び、痩せている原因を聞き出しにか
かる。

「長、なぜここまで土地が痩せているのですか？」

「……税の取り立てが厳しく、今までは生きていくのがやっとで
した……しかし、今年は日照りが続き、穀物は実らず、わずかに
実った物は全て税として取り上げられました。」

「今日までどうやって食物を？」

「日照りに強い根菜や近くの森の木の实などで飢えをしのいでおり
ましたが……もはや限界です。」

「……ここは誰が統治していますか？」

「袁術様の配下の者です。」

おそらく袁術に賄賂でも送って太守になったのだろう……なった
ことをいいことに税を大幅に上げ、自分たちの富を肥やすことに精
を出したことだろう。

これが腐敗した政治の暗部である。中央集権政治は末端の方から腐
つていき、徐々に中央を浸食していく。

全てが腐ったら最後。そのことに気づかず腐ったまま政治が進めら
れていき、世の中は荒廃し、民は痩せていき、革命や反乱が起こる
まで官僚の懐を肥やしていく体制に変わっていくのだ。

これがいい例だ。早く何とかしないと……

「張凱・・・帳簿は見つかったか？」

「はい。長の家保管されていました。」

「どうして税が高いか、簡単に説明してくれないか？」

「分かりました。ここの土地は昔から荊州で税率がもつとも上がる場所です。理由は南蛮から人が流れてくるからです。」

「移民からたつぷり搾り取るうという訳か・・・それなら、原住民の税はマシなはずだが？」

「いえ、税率は全て一律にかけられています・・・帳簿を見ても五年ほど前まで孫堅様が納めていたときの税率は最低収穫高の4割ですが、袁術の配下が変わってからは最高収穫高の7割という破格な税率をかけています。」

「この五年間それで固定だったのだな？」

「間違いありません」

こんな税をかけていたら、あつという間に民が飢え死にしまうか、一生搾り取られるかの二択しか残っていない。

豊作の時に税を多めに取り、不作の時は出せない分を免除するなど
の援助をしていかないと民はやせ衰えていく。

その先に待っているのは・・・破滅だ。

「税を納められないときはどうなったのですか？」

「その場で鞭打ちなどの拷問をされます」

「そうですか・・・今から集落の者を全員集めてくれますか？」

「・・・何をなさるのですか？」

「少し訓示でもと思って・・・」

「・・・わかりました。少々お待ち下さい」

長は近くにいた若い者を数人捕まえて指示を出していく。三十分位すると長の家の前にわずか50人ほど集落の人が集まってきた。

俺は目立つように家の上に立ち、集まってきた人たちに隅々まで声を聞かせるように声を張りあげた。

「俺は孫策が主、セツナ・フォーリングだ！巷じゃ、南の天の御使いなんて言われている！」

天の御使いと聞くとみんな一様にざわめきだした。

こんな辺境にまで噂が届いていたとは・・・風説の恐ろしさを改めて知った。

「あなた達は今非常に苦しい生活を送っています！しかし、それに耐えるものとわずかです！」

この言葉を言った瞬間、全員がこちらに疑惑の目を向け、そんなこ

とがあるのかと言いたげな顔を向けてくる。

五年もあれば、信じる心を失うのに十分すぎる時間だ。

だが、今からその心を取り戻させる。

「俺たちはこの土地の太守が袁術に対して反旗を掲げると聞き、それを鎮圧するためにここに遠征して参りました。鎮圧した暁に俺達が連れてきた優秀な文官を太守に任命します！」

だが、人々の目は一向に変わることはなかった。実行もしていないうちにこんな絵空事を言っただけでも、誰も信じてはくれない。

しかし言っておくだけ言っておく。俺の信条は常に有言実行だ。

「今日は少量の炊き出ししかできませんが、いつか必ずあなた達を豊かにしてみせます！そのことに恩を感じ、返したいと思ったなら我が主、孫策様の元に集ってもらいたい！炊き出し場所はこの集落の南側で天幕が張つてある場所です。皆さん、平等に配給を受けてもらいたい・・・以上！」

訓示が終わり、少しの間民の動向を見守ってみる。

しばらくはその場を動かなかったが、何人かは相談して決めたのか、炊き出しをしている方に向かっていく。それからそれに倣って皆が動き始めたのだ。

それに満足した俺は家から飛び降り、ひとまず自分の飯を取りに行くために歩き出したところ・・・

頭を下げた長が、前を塞いでいた。

「このたびのお慈悲・・・誠にありがとうございます。村の者はあ
あいう態度を取ってしまいました。私は信じておりませぬ。」

「・・・どうして、そう素直に信じるのですか？」

「懸命な目をして、あそこまで言われたら信じたくもなります・・・
あなたのようなお人はここ数年見ませんでしたから・・・」

「・・・ありがとうございます。さあ、早く炊き出しを召し上がっ
てください。」

「それでは、お言葉に甘えて。」

長も炊き出しの方に向かい、これで一応一安心と思うセツナ。

自分の言葉が人にちゃんと伝わる・・・そのことがとても嬉しいこ
とだと久しく忘れていた。

後はそれを実行するだけだ・・・と決意して、自分も昼食を取りに
行った。

炊き出しもほどほどに、二時間ほどの休憩を取った後進軍を開始し
た。

炊き出しの評価はなかなか好評で一部の人は考えを改め俺の声を信じることにしたらしく、進軍開始間際に握手を求めてきた。

部下達も昼飯を食べた事で少なからず士気が高揚したみたいだ。

気持ちいい気候で眠くなりそうな午後の進軍・・・俺は霞とさつき
の事を話し合っていた。

「さつきの訓示・・・なかなかよかったで。この先集落とか村があつたらさつきみたいにするん？」

「炊き出しは俺達が必要な量まで減ったら止めるけど・・・訓示はしていききたいと思う・・・言っておくだけでも意味はあると思うから・・・霞はどう思う？」

「ウチはああいうことよく分からんけど・・・一生懸命な姿は絶対に誰か見ると思うで、ウチはやっていった方がいいと思うよ！」

「・・・ありがとう、霞。」

ああいう訓示や士気高揚の言葉などはほとんどベルナデイスさんに任せつきりだったため、どういったことを言えばいいかわからない。

ただ自分の思っている言葉を口に出しているだけだ。行動に移さない
いと信じてはもらえない。

しかし、上に立つ人間としてこう言ったことは非常に重要なことは分
かっている。

親父達が英雄だった元の世界、その息子であるだけの新米の俺が何

言っても誰も見向きはしなかった。親父達のカリスマ性に知らず知らず頼っていたのが痛感できた。

そして、初めて実績を上げたとき、やっと話を聞いてくれるようになったことを18の時に身をもって知った。

だから、自分の吐いた言葉を裏切らないように全力で反乱を鎮圧する。

「よし！出来る限りのことはして、民から信頼してもらおうように頑張っていくぞ！」

「おっしゃ！いっちょ気合い入れて行くぞ！」

こういう事を話し合い、近くを通った集落や村へ炊き出しをしたり、賊などがいた場合、出来る限り殲滅していたりして早二日。

ついに目的地の目の前までやってきた。

炊き出しは途中で止めてしまったが訓示は続け、ここに来るまでに雪蓮を支持する声が多数上がってきた。これならば袁術が倒れた後の統治が楽に行えるはずだ。それに江東に人が流れるから、人材も発掘しやすくなる。

俺達は今日中には入らず、迅速隊を斥候に出して敵の情報を得てから行動を決めることにした。

「敵の数は一万弱か・・・これは間違いないんだな？」

「うん、間違いないと思う・・・虚勢張って所で、それより少なか

「つたら敵の方が士気高揚してしまうから逆にやらんよ。問題は地形やな」

「高陵の頂点に城がある。攻めづらく、守りやすい戦場だ。それに土も水を含みやすいから雨が降られたら厄介だ。全体の機動力が半減する。荊州は安定して気候だが、雲行きが何となく怪しい。」

南の方を見てみれば、灰色の入道雲がゆっくりとこちらに向かってきているのが確認できる。雨が降るといふ確証がない以上早めに攻め出したいのだが・・・

「・・・ただいま戻りました。」

「し苦労・・・で、どうだ。」

「周辺に異、いくつかは潰してきたがまだ多数ある・・・敵は迎撃に出る気配なし。」

「わかった。少しの間だが休んでくれ。」

「・・・御意。」

劉仙は影のように動き、足音もなく去っていく。

敵はこちらに気づき、籠城戦を決め込んでいるようだ。ならば、敵軍をどう引きずり出すか？

「敵を引きずり出す案・・・霞は何かあるか？」

「ウチかぁ・・・思いつかんわ。こういうことは全部軍師に任せと

「つたから、こつういづのはぜんぜんだめや。」

「そうか・・・じゃあ、俺の意見だが夕暮れにまず文矢で宣戦布告。朝方まで時間を与え、夜が明けたら声で攻撃を開始。敵が出てきたなら、引き付けて平野のところで一気に攻勢に出る。出てこなかったら罠を潰しながら、攻城戦を展開する。大まかな流れはこんなところだ。・・・どうだ？」

「それでええで。籠城戦は時間をかければええけど、今回はそれは無理やからな。力押しで行くしかない。」

「細かいところは俺が詰めていく。霞は遊軍として地図のここ、城の西にある林で合図があるまで待機していてくれ。」

「わかった。とりあえず夜中のうちに移動しとくわ。」

「手早く城を落として、太守を降ろすぞ！」

「よっしゃ！・・・張遼隊、移動準備せい！日暮れと共に移動すんで！」

「おおっ！」

霞が指揮する3000人が慌ただしく天幕をたたみ始め、出しっぱなしにしてあった調理器具などをしまい始めた。

俺は地図を睨み、劉仙から受け取った偵察記録を見合わせて、隊の戦列を立てていく。

大体決まったところで、休んでいる四隊長を呼び出し、作戦内容を

伝える。

本来なら、もつと煮詰めていきたいのだが、その道に詳しい軍師は同行していない。ならば、今から一緒に戦う仲間と意見を交換し合っ
つて成功率を高めていくしかない。

「張凱以下四人、集まりました！」

「よし、とりあえず作戦が決まったから伝えておくぞ。意見があったら、遠慮無く言え！・・・いいな？」

「・・・はっ！」「」「」

「よし。まず黄烈、薄闇時になったら、俺と一緒に敵の城楼に文矢を三本打ち込む。全体での攻撃は夜が明けたら開始する・・・ここまで
まではいいな？」

「質問だ・・・どういった文を送るんだ？」

もつともなことだ。今から書くつもりでいるがこれを夕暮れまでに書き上げなければいけない。

太陽はだいぶ西の空に傾きつつある・・・あと3時間もすれば真っ赤な夕暮れに染まるだろう。

「今から書くが・・・まあ、降伏勧告だな。脅しに近いものでな？」

「ははっ、もつともだな。」

「それで、攻撃するときの陣形は守備陣形3だ。いいな、守備陣形

3だ。しつかり思い出しておけ！」

「將軍、質問だ。劉仙から畏があると聞いているが、それを知った上でその陣形か？」

俺が考えた陣営は6つ。攻撃3つと守備3つであり、今回取る陣形は守備陣形3・・・堅牢な守備で前に進んでいくという機動力よりの防御陣形である。

鋼盾隊を最前線に出し、その後ろに張り付かせるように迅速隊が進み、後ろから豪力隊、蒼穹隊が弓で援護する形なのだが、今回は豪力隊に弓を支給していないので俺と一緒に畏を潰し終えたら、突撃してもらおうように考えてある。

「その点は大丈夫だ。敵の矢は盾で塞ぎ、畏を見つけ、潰すのが迅速隊の役目だ。蒼穹隊は陣形通りだが、豪力隊には弓がない。そのため、今回は俺の部隊として突撃を敢行してもらおう・・・異存はあるか？」

「質問・・・城壁に張り付いたら？」

「登って上の弓兵を始末して欲しいのだが・・・可能か？」

「短時間で登るのは不可能・・・盾が必要。」

「満貫、鋼盾隊の盾に穴があつたよな？あれに紐を通して、登ることは可能か？」

「時間はかかるが可能だ。」

「わかった。迅速隊は弓兵の始末。鋼盾隊は上がってくる敵を押し返す班と、備蓄をなるべく城壁の外に出す班に分かれてくれ。」

「備蓄を外に出す意味は？・・・おっと、これは失言だな。」

ここで全員が吹き出し、ひとしきり爆笑が辺り一帯に木霊する。

満貫の失言に笑いがこみ上げてくるのはごもつともだ。備蓄を外に出す意味は、敵をいぶり出すためである。

籠城戦の命は備蓄であることは常識中の常識。腹が減っては戦は出来ないとこのだから、なんとしてでも回収しなければならぬ。

だから、外に出てくる。それも軍を伴って出てくるのだから、俺達の思惑通りになる。

「そして、備蓄を回収しに敵が出てきたら俺と張凱がそれに向かって突撃する。少ししたら霞も来るから、短時間で殲滅は可能だ・・・わかったな？」

「異存はありません。」

「・・・御意。」

「わかったぜ！」

「了解！」

皆一様に返事を返して、自分たちの隊に帰って行く。

しかし、俺は肝心なことを思い出し、また四人を呼び戻した。

「みんな、これだけは覚えていてくれ。兵達にも徹底させる・・・命の危険を感じたら、すぐさま逃げろ。戦って死のうとか思っくな。生きて俺の元に帰ってこい・・・いいな？」

「「「「「はっ!」「」「」」」」」

「それと言い忘れていたが、劉仙、何人が選抜して夜中の内に貯蔵庫の場所を調べておいてくれないか？」

「容易い・・・」

「よし・・・では、解散してくれ!」

こうして作戦を煮詰めることができ、まずは一安心。

この作戦が成功するか分からない。しかし、俺達がここで足踏みしているようでは孫呉の一員になれはしない。

ならば、しっかりと成功に導く・・・それが俺の今からの仕事である。

「さて・・・脅迫状でも書きますか？」

空樽を机代わりにして、まだ持ちなれない筆をとって、文を始めた。始める。

夕暮れはゆっくりと近づいてきている。

日が沈みかけ、星と月の光だけが辺り一面を照らし始めた薄闇の中、影が駆ける。

セツナと黄烈、そして劉仙以下数名が罨を巧みに避けながら、城に接近している。

まずは作戦の第一段階。貯蔵庫の位置の特定と、降伏勧告の文を敵に送ることを始める。

「・・・ここから先は、罨がない。」

「よし。各自散開して、城壁を登ってくれ。会敵した場合、殺さず敵の意識だけを刈り取れ。」

「はっ！」

「わかつたら、行け！」

数人は音もなく、城壁に取り付こうと駆けていく。

俺達は街道の方に戻り、文矢の準備を始める。手早く矢に結び、見つかったも遮蔽が取れるような場所・・・街道付近に放置してある詰所に身を潜める。

ここから、城までの距離・・・約700メートル。薄闇が俺達を味方してくれたのか、ここまで近づくことが出来た。

「黄烈、ここからの的に当てられるか？」

「・・・楽勝！今日は風も吹いていないし、何よりのが動かない・・・目を瞑ってでも当てられるね。」

「それは頼もしいことだ・・・狙いはかがり火の近くの建物だ。」

「城楼ね・・・一番発見されやすいか。」

二人は半身を出して、狙いを定める。

後は配置についた合図があれば、思いつき打ち込む。

待つこと10分。城の方からホーホーとフクロウに似た鳴き声が聞こえてきた。

「合図が来た。射るぞ。」

「了解。」

弓を思いつき引き絞り、城楼目掛けて・・・銀の彗星が二本、薄闇に走った。

二本とも、狙いを変わらず城楼の根本に突き刺さった。セツナは間髪入れずにもう一本を放つ。

射てから少しすると、陽炎のような火が何個も城楼に集まり、何かを引っこ抜いていた。

「よし、敵の元に渡ったぞ。俺達は先に陣に戻ろう。」

「おう。・・・しかし、降伏勧告なんて意味あるのか？」

「威嚇という意味では効果はあるだろう。これで敵が出てきてくれたら、かなり楽なんだが・・・」

「敵さんもそこまで阿呆じゃない。期待しないことだな。」

「そうだな・・・さ、戻るぞ。」

二人は音もなく、その場を去った。

きつと今頃、迅速隊が貯蔵庫の位置を探っている頃だろう。

フォニック・アイ
音響視力で聞こえてくるのは、文の内容を見た兵達の慌てた声と軍靴。

決戦は・・・明日だ。

陣に戻った俺達は、日が昇るまでかなり時間があつたので、仮眠を取ることにした。

俺は迅速隊の帰りを待つ事から、部下達を先に仮眠を取らせる。その際、万が一の夜襲のために、歩哨を立てしておく。

月が頂点に達した頃に迅速隊が帰還してきた。結果は良好で、貯蔵庫はほとんど城壁側に集中している事が判明した。

苦勞を勞い、まだ時間があるので仮眠を取らせる。そこでやっと俺も仮眠を取ることが出来た。その際、何人が起こして歩哨と交代させておく。

四時間程度で目が覚め、空の方を見てみると・・・

月もだいぶ西に落ちて、空はすでに青くなり出している・・・夜明けが近い証拠だ。

久しぶりに早起きしたので、朝焼けを見たいという衝動に駆られたが切り捨てる。今は目の前の戦闘に集中しないと・・・

強ばっていた体を解すために、軽くストレッチしてウォームアップがてらそこら辺を走っていると・・・

城が見える位置に生えている木の上で張凱が一人幹に座っていた。

「張凱！」

「・・・はっ!?!?しよ、將軍!?!お、おはようございます」

と慌てた様子で幹から降りようとしますが、すぐに止める。

「そこにいる。今そっちに行くから・・・」

一気にダッシュし、壁登りの要領で木を蹴り、蹴った反動を上手く利用して張凱のいる幹にぶら下がる。そこから腕の力だけで降り切った。

隣に腰を下ろし、一息つく……持っていた水を張凱に渡す。

「飲んでおけ。大方ビビってんだろ？」

「……今から戦闘だと思つと、怖くて……」

張凱の手は微かに震え、顔が青ざめている。明らかにビビっている証拠だ。

「……將軍、なぜ俺を隊長に抜擢したのですか？実戦経験もないし、隊をまとめられる自信ありません。そんな俺をなぜ選んだんですか!？」

「ふむ……確かにお前はまだ若いし、かといって劉仙達のような経験もなければ、能力もまだない。」

「なら、どうして!？」

「俺はお前のまだ何色にも染まっていない潜在能力を期待して隊長に抜擢した。劉仙や黄烈みたいに染まっている才能や、満貫みたいに経験を積んでいる事だけが隊長になる要素じゃない。現にお前はすでに劉仙達に匹敵するほど訓練も積んだ。今じゃ、あいつらと張り合えるくらいにな。」

見てきた限り、張凱は誰よりも熱心に、多く訓練に取り組んでいた。自主練もかなりの量をこなしていたし、四隊長が俺との訓練の時でも一番最後まで立っていた。

根性は誰よりも持っている。戦場ではもっとも必要なスキルと言っても過言ではない。

「俺はお前に万能を求めている訳じゃない。器用に出来る程度でいいんだ。だから……」

ドンツと張凱の胸を軽く叩いて、湯を入れる。

「自分を信じて、戦闘に入れ。臆病な奴から死んでいくのが戦場だ。」

「……はいっ!」

「さ、そろそろみんなが起きる時間だ。頑張っていこうぜ!」

「はいっ!」

張凱の顔にはもう迷いがなかった。いつもの精悍な顔つきに戻ってきた。

こういつのを見ると……昔の俺を思い出すな。

兵をその気にさせる意味では、こういった励ましが一番効果的だ。

こっちに来て、上に立つようになってからわかってきた物の一つである。

意気揚々と陣に戻る張凱を追いかけながら、東の空を見上げる。

太陽はもうすぐ出そうだ……

全員を起こし、ストレッチと軽いウォームアップをやらせて、陣形を整えて進軍を開始した。

しかし寝泊まりしていた森を抜けて、いざ城の前まで進軍してみると……

「……なあ、將軍？」

「……なんだ？」

「あいつらは、バカか？」

なんと城の前で敵兵が陣形を取り、こちらを待ちかまえていたのだ。籠城戦を想定して来ていたセツナ達は、あまりの驚きに啞然とする。

そうしている内に、敵の陣から將軍らしき人物が軍馬に乗って単独で出てきた。

「民には指一本触れさせぬぞ！ここが卑劣で犬畜生にも劣る貴様達の死に場所だ！」

という啖呵を切ってきた。後ろの兵はその言葉に士気を一気に高めていた。

驚きから立ち直ったセツナは、なぜこんな事になったのか心当たりを探ってみる……しかし、全く思い当たらない。

「將軍・・・文はいつたい何と書いたのですか？」

「確か・・・」朝までに降伏しないと、兵および民を全戦力を持って皆殺しにする・・・こちらにはそれだけの力がある」・・・と書いたんだが？」

「それをマジで信じる敵さんも敵さんだが・・・やり過ぎだぜ、大將さんよ？」

「・・・隊長、煽りすぎは逆効果。」

「こうなるとは露程思っていなかったんだよ！・・・まあ、いい。こっちとしては好都合だ。攻城戦をしなくて済むのだから・・・陣形はこのまま。前に出て敵の出方を見るぞ！」

その命令と聞いて四隊長は慌ただしく自分の持ち場に戻った。

敵はまだ動かない。一万弱の人間がこうも塊になって城を守ろうとする姿は、味方からすれば頼もしい物だろう。

しかし、俺達は敵だ。容赦もしないし、殲滅するつもりで戦い通す。手甲をつけ、一つ気合いを入れて、戦声を張り上げる。

「いいか！これがお前達の初陣だ！しかし、臆することはない！これまでやってきた訓練に比べれば、遙かに楽な物だ。苦しく、辛くなったらあの地獄を思い出せ！恐れは要らない、いるのは生き残ろうとする闘争本能と生存本能だけだ！いくぞ、突撃いいいいーっ！」

ウオオオオオー！

総勢8000の強者達が声を張り上げて、敵に突撃を敢行する。

敵もそれに合わせて、前に出てきた。

どうやら、敵は瀬戸際で受け止めて決死の覚悟で迎え撃つつもりらしい。

しかし、その覚悟がどこまで俺達に通用するかな？

そして、最前線の鋼盾隊が敵にぶつかった。

一瞬の均衡があつたが、すぐに敵側が押されて傾いた。

鋼盾隊は前の部隊を除雪車のようにゆっくり押し始めた。

しかも、わずかな隙間に入ってきた敵は全て後ろの迅速隊に徹底的にシャットダウンされている。

まさに力量の差は明白だった。敵の指揮官はなにやらわめいて陣形を変えている。

「將軍！敵は防御陣形を取っている！・・・どうする！？」

鋼盾隊を指揮する満貫が、冷静な声で槍を振るいながら、叫んできた。

「・・・このまま、押し切る！城壁からの攻撃には注意しろ！蒼穹隊、城壁からの攻撃に注意を払いながら鋼盾隊を援護しろ！」

「分かった！」

「了解！」

満貫と黄烈は隊に追加の指示を出し、さらに敵を押し上げ始めた。

この分だと、前線は問題ないな・・・次は後方を潰しにかかる。

「さて、張凱・・・俺達も動くぞ。敵の左翼に出て、霞達と挟撃する！左翼に着いたら、狼煙を上げて突撃しろ！」

「はっ！」

「俺は少しやることがある・・・なあと、心配するな！」

「武運を！！！」

張凱も隊に指示を出して、次の行動に向けて動いていく。

俺も体をほぐして、仕事をしに行く・・・太守の居場所を突き止めることだ。

「知ってそうなのは・・・敵の將軍だな？さて・・・」

今敵将は最後方でわめいている・・・あそこまでどう素早く接近するかが鍵になる。

「・・・迂回して、戦場の熱を隠れのみにしていくのが妥当だな。」

空雷を走らせ、最短距離で迂回ルートに入る。森を突き走り、そのまま敵の注意が向いていない反対側の城壁に辿り着く。

ここで、城壁の上を確認すると数人程度の兵が暇そうに監視をしている。

とりあえず・・・黙らせておくか？

地面にある手頃な石を数個選んで、死なない程度に加減して素早く連投する。

全てが狙い違わず監視兵の頭に当たり、昏睡していく。

「これでよしと・・・さて、次は・・・」

空雷を城門の陰に隠して、敵さんに見つからないように敵の背後に回る。

案の定こちらの警戒をしていないか、上の奴らも、護衛兵も俺に気づいていない。

城壁の影から、一気に走り、足音を立てないように跳んで将の後ろを取る。

「何奴っ!?!?」

全員が弓を構えるがすでに遅し、俺はナイフを敵将の首に突き立てて身動きを取れないようにしていた。

「撃つなら撃て。その代わりこいつの命もないかな?」

弓を構えた者は一瞬躊躇し、すぐに弓を下ろす。意気地のない野郎達だ。

音響視力フォニックス・アイで背後の方を探ってみると、何人かが回り込んで後ろを取ったと思っっているようだが……

「後ろにいる奴！止めておけ……死ぬのはお前達だぞ」

悔しそうな声を上げて、持っていた剣を下げる音が聞こえてきた。

「さて……あんた達の太守の場所、教えてもらおうか？」

「だっ、誰が貴様みたいな奴に！」

「ふん……」

ナイフを少し動かして、首に微かに突き立てる。刺さった部分からタラリと血が滴る。

「ひっ!?!」

「あとちよつとでお前の命はない……死ぬ前に言いな？」

「し、城中央の執務館の中だ。分かったら短刀をつー」

その次の言葉は続かなかった。それより早くセツナが首を貫いていたからだ。

今ここで将をしている奴らは、全てこの太守に賄賂を渡して任命

されていることは周辺の村などから確認済みだ。そんな実力の伴わない奴らが将をやってもその下につく兵達がかわいそうである。だから殺した。

周りの兵達はその行為にビビったのか、俺に斬り込んでこない。もしくはこの將にそれほどの忠義がなかったのか？

何も動かない兵を無視して来た道を戻り、空雷の鞍に付けてあるポケットからかぎ爪のついた縄を取り出す。

それを使って、一気に城壁を登り、城下町を走り抜ける。街の中には兵が見えないので総力戦で出ていることが分かった。

しかし、そんなことよりも早くしないと死傷者が多くなる一方だ。太守さえ何とか討ち取れば、一気に戦意が落ち投降してくれるはずだ。

「ここだな・・・中央の執務館は？」

物陰に隠れて、執務館入口の様子をうかがう。門番は二名・・・音響視力ニック・アイで聞こえる限り、館内には20人程度ぐらい残っているだろう。

室内戦ならそのくらいの数に苦戦はしない。速攻で決断して門番の前に躍り出た。

「何奴っ!？」

多少デジャブを感じながらも、片方の門番に拳一閃。

ドゴオオオンッ！

ボディにもものすごいものを喰らった敵は、またたく間に意識を落とした。

「貴様ああつ！」

残っていた敵がこちらに斬りかかってくる。その剣を引き流して軌道をずらして、首を極めながら後ろに回り込む。

頸動脈を絞められた敵はみるみるうちに顔が紫色に変色し、ジタバタと手足が痙攣する・・・そしてすぐに墜ちた。

手を離し、一気に館内に侵入し太守を探していると・・・案の定、この異常を嗅ぎつけた近衛兵が俺に殺到してくる。

「さうて・・・死なない程度にやるか？」

首をゴキゴキ鳴らし、俺に挑んでくる敵を片っ端から殴り、蹴り上げる。

ほとんどは一撃で意識を失っていたが、何人かは何回も立ち上がり根性を見せてくれたが、その根性もへし折る連打で撃沈させる。

最後の一人は肩関節を極め上げ、太守の居場所を吐かせる。

「・・・太守はどこだ？」

「し、死んでもいわん！殺せ！」

「ふうん・・・」

このやり取りにもデジャブを感じながら、ギリギリと肩関節を絞り上げる。

「ぎゃああああつ!?!」

「知ってるか？肩関節を締め上げると死なないが死ぬほど痛いんだぜ？さて・・・いつまで持つかな？」

敵は必死に耐えているが、肩はミシミシと今にも外れそうになっている。

そして観念したかのように・・・

「・・・ここ、ここから真つすぐ行って、中央に一つしかない部屋にいる。」

「ありがとよ!」

鳩尾に重い一撃を叩き込んで、意識を落とす。

俺は、少しだけ浮き出た汗を拭いとり、つかつかと異様に静かな廊下を歩く。

途中ひ弱そうな文官に何度もあつたが、すべて無視。後の再建に必要な人材で、いま必要なのは太守の首だけだ。

そして、言っていた中央に一つしかない部屋の前まで来た。

バダンッ！

ドアを蹴りつけ、部屋に突入するも誰もいない。机の裏や箆笥などにも気配がない。

目を閉じ、意識を音響視力フォニックス・アイに集中させると、かすかに壁のほつからか細い息遣いが聞こえてくる。

その壁の前に立ち、コンコンと叩いてみると空洞である事を示す軽いノック音が返ってきた。

「・・・」

ガダーンッ！

壁を蹴りつけると、存外脆く壁は前に蹴り倒れた。

壁兼扉をどけてみると、さっきの一撃で気絶している太守が横たわっていた。

とりあえず、そこから引きずり出して張り手を二発かまし、太守の意識を強引に覚醒させる。

「・・・う、うん・・・」

「ようこそ・・・地獄の一丁目へ？」

「う、うわああ！き、貴様は！？」

うるさいので、足の甲に先ほど使ったナイフを躊躇なく突き刺した。

「ひぎゃああああああっ！」

「この痛みから逃れたかったら、俺の質問に答えな？」

太守はみつともなく何度も首を縦に振った。明らかにこの類の尋問には慣れていないようだ。

なら好都合・・・今から聞くことは相当重要なことだから、吐かせやすいほうが楽だ。

「反乱を企てていると聞いてやってきたんだが・・・本当にそうなのか？」

「そ、そうだ！私は、袁術様のやり方にはーっ」

袁術に対しての言葉遣いがあまりにも丁寧だ。嘘を言っていることが丸わかりなので、刺さっているナイフを軽くひねる。

「ぐああああああっ！？」

「本当のところは？」

「え、袁術様に頼まれて！？」

「その目的は？」

「孫策の足止め！？」

「何のために？」

「そ、孫策に自らの立場をわ、わからせるため!？」

やはり、そうか・・・

なぜ、俺たちが動き出そうとした時にこんな遠征しなければならぬ鎮圧を俺たちに命令したのか？

袁術は俺たちの動きをひそかに嗅ぎ取っていたのだ。あれほど、内密に計画したのになぜ漏れたかは知らないが、なんにせよ漏れたのだ。

そこで、少しでも遅らせようと考えて、こういう三文芝居を打ち立てたのだ。公に潰しにからないのは、民に人気のある雪蓮を潰せば、その反感が自分に降りかかってくることを分かっているからだ。

よくこんな手を考えた・・・が、しかし、今頃雪蓮たちは・・・

「残念だな・・・事前に俺たちの動きを嗅ぎ取ったのはほめるが、足止めにはならなかったな？俺たちはここにきても何の支障もない奴らでな。」

「なっ!？」

「ついでにこの地域の民が豊かに暮らせるように、お前の首が必要なんだよ・・・じゃあな!」

奪っていた剣を一闪。あまりにもあっけなく敵の太守は首を切り落とされた。

これを城壁の上から、掲げれば敵の戦意は一気に落ちるはずだ。

しかし……首を持つのはさすがに躊躇する。この時代の武将は皆
凄い……と思つて、髪を持って執務館を出た。

城壁まで一気に走り、上から弓を必死に撃っている兵がこちらに気
づくが手に持っている物を見た瞬間、愕然とした顔に変わった。

それを無視して、敵牙門旗が掲げられている傍に登つて、さつき斬
り落とした首を戦場に向かつて掲げる。

「全員聞け！今孫策が主、セツナ・フォーリングが廬江太守を討ち
取つた！配下の兵はすでに戦う意義を失っている！無駄な戦闘はや
め、速やかに投降せよ！なお、抵抗は大歓迎である。」

山に向かって言えば、そのまま山彦になって帰つてきそうな大声で、
戦場全体に聞き渡らせる。

俺の声に反応して、兵達は戦闘を止めていた……そして、武器を
落とす音が聞こえ、それを合図にしたかのように次々と金属音が響
き渡る。

終わったか……何とか被害を少なく押さえることが出来たな。

後ろの兵も、城門が開いて入ってきた部下達に取り押さえられ、一
力所に集められている。

意外にあっさりとしているな……結構無理なこと言われていたみ
たいだな？

こちらとしては抵抗があってもいいのだが、こつもあつけないとは・・・少々肩すかしだった。

「將軍！」

戦闘を終え、俺を捜していたのか、張凱達が息を切らして走ってきた。

「どうした？」

「いえ・・・この後の指示をもらいに・・・」

「よし、負傷者の手当と死者の確認・・・あとはここの住民に炊き出しをして、誤解を解いてくれ。」

「くくくはっ！」「くくく」

劉仙、黄烈、満貫はすぐさま自分たちの隊に指示を出しに行ったが、張凱だけがその場に居残った。

「あの、將軍・・・」

「ん？」

顔を伺ってみると、少しばかり青ざめているが異常はないみたいだ。大方初めて人を斬って悩んでいるのだろう。

「初めて人を斬った感想は？」

「・・・分かりません。ただ・・・生々しかったと。」

「斬った人の数だけ贖罪し、生きる。それが俺達に出来ることだ。」

「・・・はいっ！」

最敬礼をして、吹っ切れたように自分の隊に戻っていった。

俺も少し戦場跡を見て、隠してある空雷と隠れさせていた文官数名を迎えにいった。

こうして俺達の初陣は、最小限の被害で勝利を飾った・・・

戦場の事後処理に一日を費やし、後は残っていく文官達に任せて俺達は帰路についた。

あれほど酷な降伏勧告を出したのにかかわらず、意外にもすんなりと誤解は解けたようだ。

おそらく民にひとつも手を出さなかったことと、炊き出し、部下達の献身的な説得が実に結んだと思う。

「いやあ、久しぶりに戦って気持ちよかったわあ。もうちょっと齒ごたえのある奴がおれば文句なしやったんやけどな？」

「贅沢言つな。十分にやれただろ？」

「ありがとな。セツちゃんのお陰でのびのびやれたわ。」

「ははっ、そいつは良かった……ん、あれは？」

前方から、三頭の馬がこちらに向かってくるのが確認できた。

早馬であろう……雪蓮達の身に何かあったのだろうか？

全体に止まれの指示を出して、その三頭を待っていると……

「セツナ様でありますか!？」

「明命!?! どうしてここに?」

「それはおいおい……まずは朗報です! 私たちの謀反が成功し、孫呉は晴れて独立しました!」

「……マジかよ!?! やったじゃねえか!」

こっちに来ている間、成功するかと絶えず心配していたが、そんなことは杞憂に終わった。

まるで自分のことのようにセツナは天に拳を突き上げて喜ぶ。

「そこで、雪蓮様に早く帰ってこさせるように私が使いに出されたのです!」

「疲れているのにすまないな。そういうことなら早く帰らないと……」

と、すぐに進軍を再開させようとするが、先に孫呉独立が成功した

ことを部下達に伝える。

部下達も、呉出身が多いため諸手を挙げて歓声を上げた。中には泣いている奴もいるくらいだ。

「騒ぐのはそれくらいにして、さっさと帰るぞ！進軍再開！」

オオッ！

かなり気合いの入った声で、半ば駆け足で進軍を再開した。浮かれた雰囲気になるが別に構わない。ここら一带の賊は行きにほとんど掃除してある。

それから、一日半・・・行きよりも半日早く江東に入り、すぐさま新たな都、建業に案内された。

ここは孫家が代々納めていた場所で、聞く限りによると雪蓮がこの都に入ったときにはそれはもう大歓迎を受けたらしい。

部下達には二日の休息を許可し、俺と霞、明命は雪蓮達に報告するために城に向かった。

玉座の間に通され、そこには玉座の間に座った雪蓮とその周りを囲むかのようにほかのみんなが立っていた。

その中に、見慣れない二人がこちらをジーンっとみて、何やら品定めしているようだ。

しかし・・・改めて玉座に座っている姿をみると、本当に王だったんだという実感がわいてくる。

それくらい人懐っこさがあり、民に溶け込める存在であることも解らせてくれる。

「お疲れ様、セツナ・・・どうだった？」

「まず、おめでとう！雪蓮！やっと独立できたな！」

「ありがとうね・・・これもセツナたちがいたからうまくいったのよ。」

「そんなことないよ。雪蓮たちの思いが成功につながったのさ・・・それで行ってきてわかったことだが・・・」

すべての顛末を簡潔に解りやすく言って、しっかりと伝えていく。

謀反が芝居だったことを聞いたときは、ほとんどの奴が驚いていた・・・しかし冥琳、祭さんは感じていたのかうなずいただけだった。

最後に民の意見を聞かせて、その後のことを示唆する。

「・・・てなわけだ。俺からの報告は以上だ。」

「ありがとう・・・さて、冥琳？これからどうする？」

「まずは袁術が治めていた領土の平定。セツナから聞いた限り、かなりの無茶を強いられている。もっとも最優先でな・・・次に兵力の増強。ここまで領土を大きくすると、必ずどこかが目をつけてくる。いま最も脅威なのは曹操だ。奴らの戦力は強大ですべてが精兵であることは間違いない。攻められたら最悪全滅よ・・・現段階で

「は、そんなところだな。」

「兵力の増強は今後の課題として、領土の平定は確かに重要ね・・・
わかったわ。それから始めましょう。冥琳、穩、亞莎、頼んだわよ
」

「わかっているわ。」

「はいですう」

「が、がんばります！」

二人が返事をしたのはわかるが、後の一人は全く知らない子であった。

亜麻色の髪をお団子にし、鋭い目つきに片眼鏡モノクルをしている子は、袖に隠してあるであろう暗器の音がかすかに聞こえてきたので、武官なのだろう・・・しかし、そこでなぜ冥琳や穩たち軍師と一緒に名を挙げられたのかは皆目見当がつかなかった。

「さて・・・堅苦しい話はここまでにして、新しく入った子の紹介をしましょう。小蓮、亞莎、自己紹介してあげて？」

「はい」

「は、はいっ!？」

二人は前に出てきて、桃色の髪でまだ幼い一人は積極的に俺の前に出て、屈託のない笑顔で顔を覗き込んできた。

「あなたが天の御使い？」

「一応、そういうことになっている。」

「ふん．．．いい男ね 私の名前は尚香。真名は小蓮っていうの。気軽にシャオって呼んでね」

「俺はセツナ・フォーリング．．．新参者だがよろしくな、シャオ」

「ん よろしくしてあげる〜」

握手の代わりに小蓮は俺の腕に抱きついてきた。

「で、もう一人はなんて言う名前かな？」

「．．．はっ!?!?わ、私ですか!?!」

「うん。俺はセツナ・フォーリングって言うんだ。君は？」

「．．．っ!?!?」

「．．．」

「．．．っ!?!?」

「え〜と．．．」

ただ名前を聞いただけなのに、なぜかかなり睨まれている。目つきが鋭いだけに少し怖い。

しかし、なぜか顔を真っ赤にしてこちらを睨んでいる……。

「すまない、セツナ。亜莎は見知らぬ人が怖いらしい。本人曰く人付き合いが下手なんだそうだ。」

ラチが明かないところに蓮華の助け船がやってきた。

そうか……人付き合いが苦手なだけなのか……可愛い個性だな。フツと優しい笑顔をその子の方に向けてみると、すこしだけ目つきが和らいだ……ような気がする。

「わ、私はその……目つきが悪く、人を不快にさせてしまいますので……。」

「そんなこと無いぞ？武官らしいいい目つきをしている。」

「えっ？」

「セツナ、亜莎は武官ではなく私直属の軍師だぞ。それよりも……なぜ武官だと分かったのだ？確かに亜莎は元武官だが……。」

「耳がいいのでな……袖に暗器らしき物を隠しているだろう？」

亜莎と呼ばれる女の子は、長い袖をバツと隠すかのように身体の後ろに持つてくる。

……本当に恥ずかしがり屋なのだな……意外にからかい甲斐があるなあ。

そんなことよりも、名前が教えて欲しいのだが・・・

「・・・あの！私の名前は呂蒙。真名は・・・亜莎、といいます！・・・この名前、あなた様にお預けします！」

「おいおい、いきなりだな？でも・・・そういつの、好きだぜ！よろしくな！」

手を差し出して、握手を求める。亜莎も袖越しながらもちゃんと握手してくれた。

しかし・・・それだけで、耳まで真っ赤にするのはこちらとしても少し恥ずかしい。

「あなたのが気が入ったのでしょ？二人とも、セツナが将来の夫になるかもしれないこと、知っているわよね？」

「うん！」

「はっ、はい！」

「それじゃ、もう一人、新しい仲間を迎え入れましょうか？・・・張遼。」

「ウチ？」

俺の後ろで暇そうに欠伸をしていた霞は、気怠そうに返事を返す。

雪蓮はその様子に腹を立てることなく話を続けていく。

「・・・そなたの活躍、誠に立派であった。今までのことと足して勘案しても、そなたは非常に頑張ってくれた。そこで、前に言った約束・・・今ここでみんなに真名を預けてもらえないだろうか？無論、私たちもそなたに真名を預ける・・・」

急にかしこまった雪蓮の口から、何とも予想できた言葉が飛び出してきた。

元々迎え入れるつもりだったのが丸わかりで、建前は早く仲間に入れたかったのだが、頭の硬い蓮華や思春などから理解を得るために捕虜のような待遇を与えるしかなかった。

だが、謀反防止は成功し、霞も必死に頑張ったので誰も文句は言わないだろう。

「えっ？・・・ええの？ウチのこと、あんなに・・・」

「ごめんなさいね・・・本当はもっと早く迎え入れたかったのだけど・・・なかなか決断できなくて・・・」

「・・・ええよ。大将が悩んでたんは分かるよ。そのくらいこれでチャラにしたる。ウチの真名は・・・」

ふと言葉が止まり、なにやら嗚咽のような物が聞こえてきた。

見てみると、霞はそのままの表情を崩さずに目から大粒の涙がポロポロとこぼれていたのだ。

・・・無茶していたんだ・・・気づけないうちに自分を反省する。

「ぐすつ……えぐつ……ウチの真名は……ひくつ……霞つていうんや……みんな、改めてよろしゅうな！」

目を真つ赤に腫らしながらも、最高の笑顔でみんなに真名を預けた。雪蓮はにっこり、冥琳は肩の荷が下りたかのように深い溜め息をつき、祭さんはカカツと笑っていた。

蓮華は、霞の前に来て、手を差し出す。

「……お前の事はこれからしっかりと見させてもらう……武術も教えて欲しい……私の真名は蓮華だ。この真名、お前にしっかりと預かってもらおう。」

「おっしゃ！しっかりと預かったで！よろしく！」

がっちりと握手を交わし、二人の距離はようやく近づき始めた。

蓮華を皮切りにみんなが霞を囲み、真名を交換し合い始める。

俺はその様子を壁にもたれて終わるのを待っていると、いつの間にか玉座から降りてきた雪蓮が隣に立っていた。

「やっと肩の荷が下りたわ……」

「しかし、大変なのはこれからだぞ。今以上に引き締めていかない
と……」

「そっね……セツナ」

「ん？」

「改めて……おかえり」

「……ただいま、雪蓮。」

二人はひっそりと手を繋ぎ、お互いの無事を確かめ合っていた。

孫呉にとって、悲願であった独立、そして新たな仲間が加わり、新たなスタートラインに立った。

歴史から見れば小さな一歩であるが、俺達からすればとても大きな一歩であった。

第五話 初陣、新たな仲間と共に！（後書き）

二ヶ月以上お待たせして本当にすいません。

前書きで言ったとおり、前半の部分で躓いてしまつて・・・そこから、軽くスランプに陥りました。

本編のことなんですが、次がターニングポイントになるのでこのまま突っ切っていきたいと思います。

六話は前後編分けて書くつもりで、前編はすでに五割方できあがっていますので少しは更新速度を上げたいと思っています。

最後にこんな駄文を読んでくださつて、誠にありがとうございました。

第六話 咆吼！天翔る狼、大陸駆ける虎！【前編】（前書き）

作者「三ヶ月もお待たせして本当にすみません・・・」

セツナ「ホント・・・呆れてもの言えないな。」

雪蓮「調子に乗ってもう一本連載するからよ。」

作者「あのな・・・人には抑えきれない衝動って物があるんだよ？俺はそれを小説に乗せて放出したって訳。」

セツナ「言い訳乙」

雪蓮「それじゃ・・・死んでおこつか？（シャキン）」

作者「ちよつと待てっ！？話せば分かり合えると思うぜ？」

セツナ・雪蓮「・・・駄作者は地獄に堕ちろ！！」

ドスツ、ズバツ、メコログチヨツ！！

作者「ぎゃあああああっ！」

作者が煉獄にログインしました

セツナ「ふう・・・皆さん、作者は一応この作品を完結させる気にいる。それは忘れないで欲しい。」

雪蓮「どんなに更新が遅くても完結は絶対させるから気長に待って

いてね
」

セツナ・雪蓮「それでは真・恋姫十無双 乙女繚乱 三国志演義
く 呉書 虎狼天下覇道の巻 第六話 咆吼！天翔る狼、大陸駆け
る虎！【前編】・・・どうぞ閲覧してください。」

セツナ「もう一つの小説、魔法少女リリカルなのはStriker
s 蒼の重騎士の再誕もよろしくな。」

雪蓮「感想、意見・・・いつでも待ってます。」

第六話 咆吼！天翔る狼、大陸駆ける虎！【前編】

袁術を倒した雪蓮達は、その余勢をかって揚州全域を制圧していった。制圧といっても、セツナ達の根回しもあったお陰で揚州の住民は皆、諸手を挙げて雪蓮を歓迎してくれたから、戦いらしい戦いはほとんどなかったが……

こうして俺達は着々と足場固めに力を注ぎ、俺達は先代孫文台が掲げた天下統一の夢を実現させるため、討って出るチャンスを虎視眈々と狙っていた。

だが、俺達がこうして実力を付けている間、他の諸侯が黙っているわけではない。皆、成長の幅が違えど、同じ時間過ごした分成長している。

この先おそらく、かつて無いほどの激戦が待っていることだろう。しかし、俺達には雪蓮がいる。

英雄王と呼ばれ、大陸全土にその名を讃えられている雪蓮を俺はこれからあらゆる方面で支えていこうと思っている。

そうでもしないと、あの時保護してくれた恩を返せていないと思うから……

俺が建業に入城してからの孫呉は、凄まじく忙しいものだった。

あの後、すぐに冥琳達は文官達と一緒に税率の一斉改正と実力の割に不適な地位を得ている武官、文官の淘汰を始めた。

祭さん達は、まだ若干残っている反抗勢力の殲滅に向かい、揚州、荊州、江東の平定に精を出した。

また浮浪者や移民などに対しては農地、農具を無償で貸し出し、糧食に關しても力を入れ始めた。これはセツナが提案した物である。

こういった袁術が築き上げたものを大胆に改革を施し、凄まじい速度で強国になりつつあった。

そして、忙しい日々が過ぎて二月。あらかた反抗勢力を殲滅し、有能な武官、文官が各方面事に機能し始めてきたことが目に見えてきた。

建業でも皆、忙しく働いている。しかし、その目にはキラキラと活気が宿り、街全体が常に熱を帯びていた。

そんな中、俺は今まで以上に忙しく働いていた。

農地、農具の無償貸し出しを提唱して以来、内政もそこそこ出来ることが知られ万能と思われたのか、軍事に内政とかなりの仕事の日々回させてくる。

将来の將軍候補として、四隊長にも仕事をやらしてはいるが・・・これがかなり参る。

内政関係と軍事の重要事項は俺が見て、他の簡単な仕事は四隊長にやらさしている。四人とも仕事の量に啞然としていたが、最近では何とかこなすようになってきた。

隊も新たに4000人の新人が入り、いつものように選抜試験を行なって、訓練に参加させている。袁術軍の元兵士が多かったのか、それなりの強者が結構な数いた。

ようやく政治が安定し始めて、やっと冥琳から休暇の許可が下りた。ここ二ヶ月休みなしで頑張り、疲労もかなり蓄積している。

二日間の休暇で、一日目は鉄犀さんに頼んでおいた改良型シャムシールを取りに行ったり、四隊長に久々の鍛錬を思う存分つけたりと私事を消化していった。

改良型シャムシールは思った通りのもので、振り心地も元の世界にある刀にグツと近くなった。ひたすら感謝である。

銘もすでに切られていて、「白銀乃孤狼はくぎん乃(の)ころう」と名付けられていた。

命名の理由は、「お主は一人になっても戦い続けるじゃろう・・・それは血に飢えた狼のような・・・それとその手甲にあわせて名付けたのじゃ」つとということらしい。

満足感と感謝の気持ちで一杯になった眠りは、それはもう深い物であった・・・ある人に邪魔されるまでは。

「・・・ツ・・・ツナ！」

どこからか、俺を呼ぶ声をする。

どこだ？寝ぼけているせいか、音響視力が全く使えない。

フォニックス・アイ

普段は人が近くに来れば一瞬で起きるセツナであるが、今日に限って未だに目が冴えなかった。昨日の休養で十分に疲労が抜けきっていないせいだろう。

「・・・セー・・・ツナー・・・」

「んっ・・・うにゅ・・・んくう・・・」

未だ意識が覚醒しきらないのか、普段では絶対聞けない間抜けな声をあげる。

「・・・おき・・・な・・・い」

白い靄がかかった意識を包み込んでくれる心地よい声・・・それに身をゆだねようと、覚醒しかかった意識がまた闇の底に・・・

「・・・んもう！さっさと起きなさい！」

ガバツ！

「どわあああ〜！」

シーツをめくられて、寝台から転がり落とされた。その際寝台端においてある物置の角に思いっきり頭を打ち付け、意識を無理矢理覚醒させられる。

「~~~~~っ!?!?」

割れそうな程痛む頭を押さえながら、シーツをめくった犯人に文句を言おうと振り向くと・・・

「ドーン!？」

めっちゃ笑顔な雪蓮が、セツナをさらに起こしにかかるのと、ボデイプレスをかましてきた。

「だーっ!？危ねえ!」

間一髪空中でキャッチすることに成功した俺は、そのまま雪蓮を寝台に覆い被さるように押しつけた。

「あら、やっと起きた。おはよ、セツナ!」

「おはようの前に一つ言わせてくれ・・・起こすならもっと普通に起こしてくれ。でないと、いつか俺が死んじゃまう。」

「あれくらいで死んだら、武将なんてやっていけないわよ?それよりも・・・朝から元気ね?」

「ん?」

顔を少し赤らめている雪蓮の視線を追ってみると・・・薄い寝間着の上から、自己主張激しいもう一人の自分がいた。

「・・・悪い。これは生理現象だ。」

「私は別に構わないけど・・・セツナが望むのなら・・・」

「話を聞けっ！……ったく、一体こんな朝からどうしたんだ？」

雪蓮の上からどいて、窓を開けて外の空気を肺一杯に満たす。

初夏の柔らかい陽射しがキラキラと眩しく、しかし空気は冷たさを感じるほど澄んでいる。

思考が一気にクリアになったところで、自分のタンスを開け、いつもの服を机の上に出していく。

「ん……お出かけよ？私も今日は非番だからさ」

「王が非番？……後で冥琳に確認を取っておこう。」

「冥琳には内緒 言ったら、セツナも共犯だからね」

「はいはい……」

こんな朝早くからお出かけとはな……気ままな王様の考えていることはよく分からない。

一体どんなことに付き合わされるかを考えながら、シャツを脱いでいく。

「あ……」

上半身裸になった俺を見た雪蓮は、驚いた声を上げてこちらを凝視している。

そういえば、雪蓮がいる前で着替えている事に気づいたが、全然気にならなかった。別に見せて恥ずかしい身体じゃないし・・・

「ん？どうした？俺の体に何かついてるか？」

「セツナの身体・・・遅いのね？」

「ああ、鍛えているからな。」

「それに・・・傷だらけ。」

「・・・」

確かにセツナの身体は、誰がどう見てもボロボロだといいたいほど傷跡があった。

大小の切り傷、多数の弾痕、毛羽立って見えるのは肉が削げるほどの擦過傷で、そういった数々の戦傷が上半身中にあった。

これらは今までの戦闘でついたものであり、元の世界の整形技術なら完璧に消せるのだが、セツナは自ら拒んだ。

理由は、自らの贖罪を忘れないための証・・・贖罪の気持ちを常に思い出させるようにあえて残してあるのだ。

「気にするな。もう何ともないからな・・・」

「分かってるわよ。そんなこと・・・」

そういつている間にズボンも穿き終え、必要なものを全てミルスペ

ツクジャケットに納め、ホルスターを腰に掛け、枕の下に隠してあった銃を収めた。

「よし！それじゃ、行こうか！」

「ええ。ああ、楽しみだわ！」

「それよりどこに行くんだ？俺、まだ朝飯も食べていないんだが・
」

「ああ、朝ご飯なら心配いらないわよ？今日は川で魚釣って食べよう！」

「・・・はあ？」

間抜けな声を出してポカンとしている俺に、雪蓮はにっこり微笑むと、ドアの前に立てかけてあったものを嬉しそうに持ち掲げる。

それは竹で出来た二本の釣り竿。

元の世界では一部の地球懐古趣味を持っている奴しか使わない道具だ。海釣りはかかる魚が少ないし、沖釣りは自分が鉄食性原生種の餌になってしまう。湖などはそもそも数が少なく、安全な場所になるとさらに少なくなる。

「大自然の恵みを堪能するのよ」

俺にとって、大自然という言葉は少しばかり心惹かれるものがあった。

最近ではそんな感情も薄まってきたが、こちらの世界に来た当初は地球の育つ作物を食べることにひたすら感動していた。

遺伝子組み換え技術が発達した俺達の世界では、ほとんどの食物が人造物か、科学作物なので大自然で育つたという物は、惑星全体の一割にも満たないくらい貴重な物である。

そんなことを考えながら、冥琳には見つからないように城を抜け出し、小川への道を雪蓮が駆け、俺はゆつくりと歩いていった。

「セツナー！早く、早くー！」

「そんなに急ぐな。つまずくぞ？」

「だいじょうぶよ！それより早くー！！」

しかし・・・こんなにゆつくりするのは久しぶりだな・・・昨日もゆつくりしたが、今日みたいに時間が止まっていると思うくらいゆつくりするのはこつちに来てから始めてだ。

緑濃い森をゆつくりと歩いて体を休ませる・・・森の空気を体いっぱい染み込ませる。

さらさらと風が葉を揺らす音を聞こえてくる。

風も心地よい涼しさで俺の頬を撫でてくる。

（ああ・・・今この時だけは平和だな・・・）

フォニック・アイ
音響視力を使っても、刺客の気配は全くしてこない。

袁術派の者を一掃した今は、孫呉の領内で雪蓮の命を狙う者は滅多にいないはずだ。

そう思いながら、ゆっくりと歩いているとようやく小川が見えた。

小川の隅ではなにやら困った顔をした雪蓮が俺が来るのを待っていた。

「セツナ……これ、つけて？」

差し出してきたのは釣り針とウニヨウニヨと動いている餌が入っている箱。

「……雪蓮、言い出しっぺが餌をつけられないってどういう事だ？」

「だって、いつも冥琳がやってくれていたんだもの」

「はあ……まったく」

溜め息をこぼしながらも、慣れた手つきで針に餌をつけていく。

雪蓮はそれを不思議そうな目をして見ていた。

「セツナって、釣りしたことあるの？」

「いや、ない。だけど、こういった事はそれなりに慣れているよ。サバ……野宿の時とかにしていたからな。」

「ふうん・・・」

二つの釣り針に餌をつけ終え、ひょいっと川に投げ込む。

片方の釣り竿を雪蓮に渡し、ほどよい岩場を陣取って魚がかかるのを待つ。

その間二人の間に会話はなく、ポオーっと水面の浮きを見ている。

さて・・・どれくらいでかかるかな？

五分・・・十分と待つが魚が餌にかかる気配は全くない。

俺は骨休みとばかりに身体をゆっくりとさせているが、常に活発な雪蓮は落ちつきなく身体を揺すっていた。

「はあく・・・いつになったら釣れるのかしら？」

「まだ始めたばかりだぞ。気長に待て。」

「もう結構時間がたったような気がするんだけどな・・・昔はポンポン釣れたのに・・・」

「調子の良し悪しもあるさ。心を空にして、景色を楽しみながら待つ。」

「そっね・・・」

頷きながらも雪蓮はずっとしかめっ面だ。元々性格が活発でエネルギーギッシュだからこういった待つことは苦手なのだろう。

静かな水面に並んで浮かぶ、二つの浮き。

あの後、さらに長い時間浮きを見つめているが、どうにも一向に動く気配が見えない。

戦闘で小康状態になったときのことでも思い出して欠伸をしながら敵（魚）が動くのを待つ。

魚がこちらの仕掛けた罠にかかるまで息を潜める。

我ながら貧相な考えだな・・・と思っていると・・・

「あー、もう！つまんない！」

ぽいっ！

「あいたっ！」

雪蓮の投げ捨てた釣り竿が俺の頭に直撃する。

しかし投げた当本人は全く気にせず、むっつと拗ねたように頬を膨らませた。

「ねえ！何で釣れないの!？」

「気長に待て・・・それしかない。」

「もう、いい！やめ!！」

・・・張本人が釣れないから止めるって・・・どうよ？

そんなごく当たり前のことを思う俺を尻目に、駄々をこねるかのよう
うにスクツと岩場から降りる。

「セツナ、お腹すいた」

「俺だって腹減ってたんだ・・・釣った魚を朝飯にするっていった奴
はこのどいつだ？」

雪蓮は悪そびれもなくこちらを指さしてきた。

・・・よし、落ち着け。この場合悪いのはどっちだ？

全く釣れないでいる俺なのか？それとも途中で諦める雪蓮か？

・・・ふふふつ、決まっている！途中で諦める雪蓮だ！

「釣れないセツナが悪いのよ？」

「・・・さいですか」

分かってたさ。どうやっても俺が悪くされるのは目に見えていた
さ。

「ずっと座ってて腰も疲れたし、ちょっとその辺を散歩してくるけ
ど・・・駄目？」

小首をかしげ、上目遣いで俺の方を覗き込む雪蓮。駄目って言った
ってやめない癖に、こうして聞いてくるんだから・・・それにそん

な顔をされたら、止めるもんも止められなくなるわ！

「・・・いいよ、行っておいで。その間に釣っておくから・・・」

「やったー だから、セツナは好き」

「お、おだてたって何も釣れないぞ!？」

「はいはい。それじゃ、頑張つてね」

雪蓮はにっこりと微笑むと、素早い動きでさらに山の奥に入っていた。木を昇り、道ならぬ道を進み、岩場を駆け上がる。

その後ろ姿はあつという間に森の中に溶け込んでいった・・・

「・・・あれのどこが「ちょっと」って言うんだ？まったく・・・」

そう愚痴りながら、俺は靴を脱いでズボンを膝上まで捲り上げる。

魚が釣れなかったのは明白。俺達の場所には全く魚影が見えなかったからだ。

水が逆巻き、流れが少々穏やかなところに魚影を確認していたので寄ってくるのを待っていたのだが・・・待ちに失敗した。

そこで投げナイフで刺して捕まえようというまさにサバイバル的な手段を取ることにしたのだ。

意識を自然と一体化させ、魚たちに気取られないよう近づいていく。

久しぶりに本気の制空圏を展開させる。普段の戦いでは薄い意識程度の制空圏を展開させているだけで、ここまで強いものは展開したこと、させる相手はいないほどだ。

あの霞と戦った時でさえ、制空圏はいつも通りだということから自然がいかにか強大かが伺える。

魚は俺に気づかず ゆっくりと間合いの中に入ってくる。

十分に入った瞬間、ナイフを銛を突き出すように投げた。見事に魚に突き刺さりようやく一匹捕まえることが出来た。

これをつけて、何とか四匹捕まえることに成功した。

「ふう・・・これだけあれば何とかなるな。」

捕った魚を先ほどもぎった大きな葉の上に乗せて並べる。

サイズもなかなかのもので、身はしっかりと締まっている。これから食べると思うと自然によだれが出てきそうだ。

「おおー！魚が釣れてるー！」

「あ、雪蓮・・・って、うゝ ああああ〜!？」

雪蓮が帰ってきたと思って振り向いた瞬間、大量の果実が顔の上に降りかかってきた。

結構な量が顔に襲いかかり、少なからず痛い。しかし手は、それらを潰さないように落ちる勢いを殺して地面に優しく落としていた。

「・・・これ、どうしたんだ？」

「んふふ」。自然の恵みを堪能しましよって言ったでしょ？だから一杯取ってきたの！」

「ありがとう。これだけあれば十分だ！」

「セツナこそ魚ありがとうね！早く焼いて食べよう！私、もうお腹ペコペコだよ。」

「そうだな。さっさと火床を作って焼き始めるか？」

テキパキとセツナが近くにある手頃な石で竈を作り上げていく。雪蓮は燃えやすい物をチョイスして、作った竈の中に放り込んでいく。

なんかこうしていると、士官学校の荒野サバイバル訓練を思い出すな。・・・しかも周りに燃えやすい物があるから遙かに楽だ。

周りに見える景色は全て茶色・・・砂だから気が滅入ってくるし、夜の冷え込みと砂塵を我慢しながら寝なければいけない。当然原生種プラスに注意しなければいけないのでおちおちと寝られるものではないなかつた。

まあ、今はそんなこと置いといて・・・後は火をつけるだけか？

ポケットなどを探り軍の常備品、ライターを探していると・・・

「よっと・・・」

剣を抜いた雪蓮が適当な綿毛がついた植物を手に取り・・・

カキンツ、カキンツ！！パチツ！

と、岩に剣をたたき付けその衝撃で飛んだ火花で綿毛に引火させる。

火が消えないうちにそれを竈の中に放り込んで、瞬く間に火をつけた。鮮やかな手つきで火をつけることに少しの感動を覚えた。

「ふふつ、昔から火をおこすことは得意なんだ。」

「ははっ、さつき釣り餌をつけられなかった人とは思えないな？」

ドスッ！

「セツナは一言多い！」

軽く肘で小突かれた。失言失言と・・・

その後、雪蓮の持ってきた竹串を二人で手早く魚に刺していく。この辺り経験のある二人は慣れた手つきで作業していく

出来たそれを地面に突き刺して、後は焼けるのを待つだけだ。

「昔は、こうやってよく食べたのか？」

「そう。私が子どもだった頃、冥琳や蓮華と一緒によく川に遊びに来てね・・・いつも冥琳が魚を釣って、それを焼くのが私の役目だったの」

「・・・なんだか分かるな。その役割が。」

「でしょ〜・・・あ、これも火にかけないと」

取り出したのは竹筒。どうやら何かが入っているようだ。

「この中には研いだお米と水が入れているのよ。こつやって火にかけておけばおいしいご飯が食べられるって訳。」

「準備がいいな。こんなまで用意してくれたのか？」

「実は昨日の夜からずっと釣りがしたくて・・・興奮して眠れなかったからこれを用意して朝まで待っていたわけ。」

興奮して眠れないって・・・雪蓮らしいと言えば雪蓮らしいが。

「魚もご飯もまだまだ時間がかかるから、果実でも食べてお話ししながら待っていきましょうか？」

「そつだな。」

ポーンと投げ渡された李を受け取り、かじる。適度に熟した物だったので甘酸っぱい果汁が口の中を潤してくれる。

セツナの様子をニコニコと見つめる雪蓮。その顔はどこか幸せそうだった。

「セツナは、私たちのこと九ヶ月付き合っただろうって思っている？」

「それは、王として聞いているのか、仲間として聞いているのかど

「つちなんだ？」

ちよつとした冗談を含めて、返答する。

最近気づいたことなのだが、雪蓮は意外に打算的なところがある。俺という存在を持ち上げたのも打算的な物だろう。

王としては必要な、利用できる物は利用する精神にようやく気づいたのだ。

聞き方によっては二通りの答えを用意しないとイケない。雪蓮に限ってそんなことはないと思うが、人はいつ手のひらを返すかは分からないからな。

「もちろん、仲間としてよ。冗談にしては笑えないわね？」

「はは、悪い悪い・・・そうだな、元の世界にいる仲間と変わりないくらい信頼しているよ」

「へえ、嬉しいこと言ってくれるじゃない。」

「みんな俺によくしてくれるからね。居心地がいいし、好きにやらせてもらっているからこれで信頼しないわけにはいかないよ」

「そんなに思ってくれているなら、セツナを保護したかいがあったわ」

返事に満足した雪蓮はニコニコと笑顔で果実を食べ続けた。

そんな横顔をさりげなく見つめる。

屈託のない笑顔を見ていると胸が締め付けられる。

・・・俺はやはり雪蓮に惹かれているのだろうか？これだけのことで初心なガキみたいにドキドキするなんて・・・

愛しているのかと聞かれれば、愛しているとハッキリと言える。昔なら言えなかったが、肌を重ねてからは自分の気持ちがよく固まった。

俺は雪蓮に惹かれている・・・天真爛漫なところも、一人で悩みを抱える弱いところも、雪蓮の全てに惹かれているのだ。

・・・今はまだこの気持ちは蓋をしておこう。先が見えないこの「時世」、相手のことを考えずに気持ちを伝えるのは身勝手すぎる。

いつ散るか分からない命だしな・・・

「じゃあ、質問返し。雪蓮は俺のことをどう思っている？」

「私？私は・・・セツナのことはいい仲間と知っているわ。戦の時は誰よりも勇敢に戦って、なんだかんだ言っても私に付き合ってくれるし、さりげなく気を利かせてくれるしね。」

「・・・そうか。」

「冥琳達と同じくらい大切な仲間よ。セツナが窮地に陥ったら真っ先に助けに行くわよ。」

「それくらい大切か・・・うれしいな。」

「ええ・・・あ、ご飯も魚もいい感じになってきたわよ！！食べよっか？」

「ああ！」

こんがりと焼け、油が滴る魚をかぶりつきながら、ご飯をかき込んでいく。

朝から果実ぐらいしか食べていなかったなのでそのうまさはまさに格別な物だった。

食べ終わってからも二人はその場から離れずずっと喋っていた。ようやく帰ろうと思った頃にはすでに日が中央をかなり越した辺りだった。

「うん、楽しかったあ」

「ああ、いい気分転換になった」

帰り道二人は自然と寄り添い、元来た獣道をゆっくりと歩いていく。

その間、何も言葉を紡がなかった・・・このゆっくりとした時間を噛み締めるように・・・

「・・・また、来ような」

「うん・・・」

「今度は冥琳達を連れてな・・・」

「うん・・・」

そう言つて、雪蓮は腕を絡ませてくる。セツナはそれを拒まず、むしろ雪蓮の腰を抱いた。

二人は今こう思っているはずだ・・・またこうして二人の時間が出ることを・・・

しかし、この先どんなことがあるか分からない・・・だから今を大切にしよう・・・

城に入るまで二人はそのままの状態でゆっくりと獣道を歩いていた。
・
・

次の日、今後の方針を細かく決めるために朝早くから玉座の間で会議が行われることになっていた。

セツナはいつも通りに早起きして、着慣れたミルスペックジャケットを羽織り、新たな相棒「白銀乃孤狼^{はくぎんのころう}」を腰に差し、キリツとした格好で玉座の間に向かう。

玉座の間にはいると、すでに呉の重臣達は全員揃っていてどうやら俺が最後のようだ。雪蓮もすでに威厳を備えて玉座に座っている。

「すまない、遅れた」

「まだ始まっていないから、いいわよ・・・それじゃ、冥琳、始めて?」

「わかった・・・この二ヶ月、我々は内政に力を注いできた。そしてようやく摂取した土地の内政が安定してきた。」

つまり地盤は固まりつつあるって事か・・・このまま放つて置いても機能し始めた文官達がもっと堅固な物に固めてくれるだろう。

ようやく次の段階に移れるようだ。差し当たり・・・

「ここからは軍備について早急に強化していきたいと思うが・・・異論はあるか?」

その場にいた全員が首を振って異論がないことを示す。

「現在我々の戦力は十万を少し超える程度・・・しかも三分の一はまだ実戦経験のない兵卒ばかりだ。実戦経験はこれからさせていくとして、とりあえず数だけは確保しておきたいのだが・・・何かいい案はあるか?」

「無理に徴兵すると税収が減りますしねえ・・・民の反感も買いますし・・・」

「しかも周りは敵だらけ・・・北は曹操と呂布、西は劉表、南には南蛮族が跋扈しているからグズグズしていると他に遅れを取る・・・か」

時間さえあれば速成訓練でとりあえず戦える能力が身に付かせることが出来る・・・しかし今はその時間すら危うい物になっている。

となると、やはり現状で何とかするしかないか・・・強制徴兵はせずに、今まで通り志願兵だけを募るのが一番だな。

そのことを冥琳達軍師に伝えると・・・

「やはり天の御使いでも思いつかんか・・・ならば徴兵に対しては現状維持ということだな」

「足りない物は私たちの策でしっかり補うことで対処しましょう。」

「劉表は問題ないし、南蛮族は動きなし・・・呂布も領地を持つて間もないから動かないとして、曹操だけがどうにもならない・・・つて所かしら？」

「曹操の軍勢は現大陸中で最強と言っても過言じゃないからな・・・同じ10万で戦う場合、向こうはこちらの二割り増しの戦力だと覚悟した方がいいな」

「まあ、今からそんなことを考えても仕方がない。曹操が攻めてこんうちに兵達を鍛えるしかあるまい」

「それしか・・・ないようだな。皆の者、時間が許す限り、兵達を鍛えてやってくれ。皆同じ志を持った同志だ。すぐに使えるようになる」

みんなが意志強く返事をする。その中で蓮華が不安そうな顔をして一人その意見に反論する。

「しかし、その様な悠長なことをしていたら何かあったときに手遅れです！ 静観するのではなくこちらから討って出る気概がなければ」

「蓮華、今は攻める必要はないの。曹操は袁紹にも気をつけないといけないし、劉表も元から腰抜け、呂布は領地を擧取したばかりだからその平定に力を注がないといけないし、南蛮族はこっちに興味なし・・・だから、私たちも攻めてこないなら自分たちの力を蓄えるのが賢いやり方よ。」

「目先のことに捕らわれず、全体を見て一手二手先を考える・・・王に必要な能力だぞ」

「うう・・・わかった。」

雪蓮とセツナに諭されて、蓮華は小さくなって下がった。

「では、今日の朝議はこれで終わりだ。各自仕事に戻ってくれ。」

冥琳の一声で重く、張っていた空気が一気に弛緩するが、他のみんなの顔は引き締まっていた。

祭さん、霞、思春、明命は自分の隊を鍛えるために外へ。シャオも自らを鍛えるためにこちらについていく。

冥琳、穩、亜莎は諸侯の今後の情勢を細かく分析するために冥琳の部屋へ。蓮華も王としての勉強のため、ついていった。

玉座の間に残ったのは俺と雪蓮のみ・・・みんなやる気でみなぎっ

ている。

「セツナは行かないの？」

「うん……今日は部隊全体の休養日だし、ぶっちゃけ午前は暇な方だな？」

書類が山のように溜まっているが昼から頑張れば夜には終わる。

張凱達も今日は休養だ。おそらく今頃各々の時間を過ごしている」とだろう。

「ふん……ねえ、蓮華とはうまくいつているの？」

「うまくいつていると思う。稽古を付けていても最初出会ったときより強くなってきているし、今じゃ親しくしてもらっているよ」

「そう……それなら、安心した」

「何の安心だ？」

「私がいなくなったとき、孫呉を継げる人間は蓮華だけ……シャオがまだ幼い以上、蓮華が呉の王とならなければいけないの。そんな時、あなたと二人くっついていれば、呉の力はさらに増すでしょう？だから、安心したって意味。」

確かにシャオが幼い以上、雪蓮が死んだら蓮華がその全てを引き継がなければならぬ。

しかし、蓮華もまだまだ未熟だ。少し時間がたてば立派に一人前に

なるだろうが、今は戦乱の世。その時間すら取ることが難しい。

何よりこれは雪蓮が死ぬことを前提に話している・・・そこに俺は腹が立った。

セツナは常日頃生きることを前提に話を進めていく。それがどんなに絶望的な状況でもだ。自分の命が本当に必要になったときだけ死ぬ前提で話を進めていくことを心に決めている。

「・・・あんまり不吉なことを言うな、雪蓮」

「不吉じゃないわよ全然。・・・今は戦乱の世。いつそうなくても不思議な事じゃないわ。」

「絶対にそうならないよ。俺が必ず守り通してやるから・・・」

「頼もしいことで・・・でも、ありがとう」

と、柔らかく笑みを浮かべながら玉座の間に降りてきた雪蓮が・・・

「あーあ・・・やっぱり蓮華に譲るの・・・早まったかなあ・・・」

首に腕を回しながら、耳元で小さく呟く。

(そう言えば、黄巾の乱の時にそんなことも言っていたっけ?)

蓮華を正室として迎え第二、第三の妻を娶っていく・・・当初言われたことはこういう事だった。

その時は何も分からなかったが、ここでようやく意味が分かった。

つまり雪蓮は自分の死をどこかで予感しているのかも知れない……だから、蓮華と天の御使いである俺をくっつけようとしているのだ。確かに今や呉では英雄とされている俺と蓮華がくっつけば国全体に活気が生まれる。そこに雪蓮が死んで、蓮華が家督を継いだら尚のこと。

ここまで打算的に動かされていることを知ると、笑いがこみ上げてくる。普段は直感と本能で動いている雪蓮がこんな事を考えているのだ。

やはり王としてもとても優秀だということが伺える。

「……先の事なんて分からないものだ。特に人の気持ちはな。」

「そうね……ねえ、午前中暇なのよね？」

「ああ」

「じゃあさ……ちよっと、付き合ってよ？」

声はいつも通りに明るいが、目を見てみると真剣そのものだった。

何か大事な用があるのだろうかと感じ、快く了承する。

「いいよ……ただ昼までには帰ろっな。」

「分かっているわよ」

雪蓮に手を引かれて俺は玉座の間を出ていき、城外に向かった

そんなやり取りが行われている少し前・・・魏国内では揚州を攻めるために兵を用意していた。

そして一刻後・・・準備できたと報告を受けていた曹操は全軍を伴って揚州に進軍を開始した。

曹操は潰すのなら勢いのある孫策だと考えており、軍備が整っていない今を突いたのだ。

このことはまだ揚州にいる雪蓮達は誰も知らなかった・・・

雪蓮に連れてこられたのは昨日とは違う森の小川だった。

遠出をした昨日とは違い、意外にも城の近くだったから驚いた。

「城の近くにも小川があったのか・・・で、ここになんの用があるんだ？」

「ここにはね・・・母様が眠っているの。」

「・・・孫堅文台か？」

「あら、よく知っているわね？」

「一通りの血縁関係は把握しているさ。」

孫堅文台。雪蓮達の母親にして、偉大な孫呉の王。

この人が孫呉の礎を築き上げ、大陸の南をまとめ上げたのだ。

しかし、そんな覇業も妬むものがある・・・孫堅は劉表の刺客によって闇討ちされたのだ。

あまりにもあっけなく、しかし威厳がある死だったと・・・歴史に残っている。

「袁術の城は元々母様が落とした城・・・母様が死んでからは袁術に奪われちゃったんだけどね」

「それは仕方がないことだ・・・」

そこから雪蓮達の忍耐の日々が始まったという訳か・・・

袁術に孫堅の戦力を掠め取られ、自分たちも袁紹の軍に組み込まれた。

屈辱の他ないと思うが、それに耐えてきた雪蓮達は本当に立派だ。今こうして自分たちの領地を取り戻し独立できたのだから。

「しかし、どうして立派な墓を建てないんだ？それくらいしたって罰は当たらないのに・・・」

「母様が嫌がっていたの・・・死んでまで王という形式に縛られたくないってね」

「そうか・・・だからこんな所に・・・」

「戦ばかりの毎日だったからね・・・死んだ後くらいはのんびりしたかったんじゃないかしら？」

それは分かる気がする・・・死んでまで戦いというのはバトルマニアの証拠だ。

雪蓮は小さく笑いながら持ってきていた布で墓石を磨き始める。

「手伝うよ。」

「ありがと・・・」

墓石の手入れの仕方は分かっているため、川から水をくみ上げては、墓石に水をかけて拭く。

石を磨いた後は周辺の掃除だ。雑草を抜き、重なった落ち葉を払って周辺は掃き始めた。

その頃、曹操が侵攻してきたことを報告に受けた冥琳は慌ただしく人を動かし始めた。

よりによってこの時にと、心の中で呟きながら的確に指示を出していく。

「国境の守備隊は一体何をしていたのだ!？」

「そ、それが! 守備隊から放たれた伝令が、全員捕殺されようやく辿り着いた一人もついで先ほど死亡……」

「……そうか。その者の親族には十分報いてやってくれ。」

後手に回っている……迎撃準備が遅れるとこの本城に一気に攻め込まれる。

曹操相手に籠城は危険すぎる。こちらの備蓄は先の内政で民に放出したばかりなのだ。それに対して向こうは万全の構え……後ろに袁紹がいる程度で消耗戦も出来る。

いや、すでに袁紹を討ってこちらに攻めてきたのか!? そんなはずは……

混乱する思考を頭を振って無理矢理正常に戻す。

「敵はどこまで来ている?」

「すでに本城より五里の所まで来ています! 囲まれるのは時間の問題かと……」

「分かった。では少し下がっていてくれ。」

すでに五里の所か……周りの拠点も制圧されているだろうし、外からの援軍は期待できない。

「・・・穩、すぐに軍議に入ってくれ。私も追ってそちらに向かう。後雪蓮達を誰かに呼びに行かせなさい。」

「分かりました！」

後ろに付いていた穩がすぐさま祭殿達がいる部屋に向かう。私も歩いている途中で急いで迎撃準備をするために伝令を走らせていく。

そしてある一室に目の前に着く。そこに立っていたのはセツナが指揮する隊長陣達だ。

「周瑜様。我々はどうしますか!?!」

「今日、あなた達の部隊は全体休養と聞いている・・・すぐに休養を解いて外に出て戦闘準備をさせなさい。出来る限り早急に。」

「・・・御意!?!」

四人はすぐさま走り出して、隊の兵舎に向かった。

これで一応の用意が出来たので私も軍議に加わるため、踵を返した。
・
・

城内が慌ただしくなった頃、セツナ達は黙々と墓石を綺麗にしていた。

綺麗にしている間、二人に会話はなくただ黙々と作業を繰り返していた。

すっかり綺麗になった墓石は、立派とは言えないまでも、十分に威厳を備えるものだった。

「・・・こんな所だな？」

「ん、そうね・・・やっと綺麗に出来た。」

「だな・・・孫堅さんも喜んでるんじゃないか？」

「怒っているかも・・・時間掛かりすぎだ、この阿呆ってね」

・・・なんかその想像が簡単にできた。雪蓮に豪快さを足したら多分それが孫堅さんなんだろう。

「祭さんや冥琳達からいろいろ聞いているけど、孫堅ってすごい人だったんだな？」

「すごい人よ。江東で旗揚げした途端、江東、江南を制覇して孫家の礎を作ったのだから。」

「英雄だったんだな・・・」

「うん。確かに母様は英雄だった・・・けど、娘から見れば、母親失格だったかなあ・・・まだよちよち歩きしかできない私を、戦場に連れてつたりしていたしねえ・・・そのせいで今も悩んでいることがあるっていうのに・・・よくぞ今まで生き残ってこれたって思うわ・・・」

「そりゃ確かに・・・でもお母さんのこと、好きだったんだろ？」

「そりゃね。私の師匠でもあったし・・・大好きだったわよ」

そう言つて、雪蓮はそつと墓石の前に跪く。

俺はその一步後ろに立って黙禱を捧げる。

「母さん・・・ようやくここまで来れたわ。あなたが広げ、その志半ばで去らなければいけなくなった・・・私たちの故郷。その故郷が今、孫家と、呉の民達の元に戻ってきた・・・」

長かった潜伏時期の出来事が雪蓮の中でいくつもフラッシュバックする。

袁術に母様の土地を取られたとき・・・袁術が大軍を持って押し寄せてきて、それを防げなかった自分のふがいなさに涙を流した。

その後もあいつの下で屈辱に耐えながらも、いつか独立するために虎視眈々と好機を狙っていた。

そこに現れた天の御使い、セツナ・フォーリング・・・ここから雪蓮達に風は吹いた。

黄巾の乱、董卓の反乱・・・全て私たちが功績を立てるためにあるような戦が立て続けに起こった。

戦い抜いた結果、大陸に私の名を知らしめさせる事ができ、袁術も存外楽に追い出すことが出来た。

「見てる？母様・・・今から我等孫呉の悲願が始まるわよ。」

「孫呉の悲願・・・確か天下統一だったな？」

「天下統一が本当の悲願って訳じゃないわ。本心を言うと天下なんてどうでもいい・・・私はね、呉の民達が。そして私の仲間が笑顔で過ごせる時代が来ればいいの。天下だの権力だのそういうのには興味ないわ。」

「笑って過ごせる時代か・・・いつの時代もそれを求めるのは難しい・・・実現しても長くは続きはしない。」

暴徒の反乱・・・諸侯の権力争い・・・いつの時代もそういつたくだらない争いが常に庶人の生活を脅かしているのだ。

「そのための天下統一なのよ・・・天下を統一し、一つの勢力がこの大陸を治めれば、庶人に対して画一的に平和を与えることが出来るでしょ？・・・それが我等孫呉の願い・・・だから私はこれからも戦うの。戦えば、兵だけじゃない。庶人だって傷つく・・・笑顔がなくなる・・・それは分かっている。矛盾しているけど、戦わなければ何も手にいれることは出来ないと思うから・・・」

「人の痛み、哀しみを分かる奴は少ない・・・上に立つ人間になればなおさらだ。だけど、雪蓮はそれが分かっている。分かった上で願いを実現させようとしているんだ。矛盾とかを考える前に自分の考えを実現できればそれでいいじゃないか？」

「・・・そう思ってくれる？」

「思っている。そして支えようと決めている。この時代たかが俺一人の力がどこまで通用するか分からないが、それでも雪蓮を全力でたすけたいって、そう思っている」

雪蓮は脆い・・・それを持ち前の明るさと天性の武で無理矢理支えていることは分かっている。

そこに身体を休める事が出来る木ができたらどんなに楽になるか。

俺はその支え木になろうと思っている。疲れたら俺に任せて休めばいい。

冥琳達もいる・・・一人で抱え込まずにみんなで分け合えば負担も軽くなる。

「・・・あゝあ、やっぱり蓮華に譲ったの、失敗だったかなあ」

「思っただったら、最初からそんなこと言わなければいいのに・・・」

「だってセツナ、いい男なんだもん・・・独占しておけば良かったかなあ」

「意外に嫉妬心も強いからな？」

カラカラと笑いながらも、前にもこういう事があったなあ〜と思いつ返す。

あの時は襲われて未遂だったが、雪蓮の嫉妬深さを知るいい機会になった。

「そうよ、私独占欲強いもん。」

「言えてる……」

二人は沈黙したが、雪蓮は笑いを堪えきれずに吹き出す。それを皮切りにセツナも吹き出し、やがて二人は大声で笑った。

「あははっ……さて、そろそろ帰りましょ。仕事が溜まっているんでしょ？」

「もっと語らなくていいのか？」

「ん、充分よ。」

雪蓮は再び墓石の方に目を向けて母に別れを告げる

「そろそろ行くね、母様……これから忙しくなると思うからなかなか来られないと思うけど……でも、あなたの娘は命の限り戦うから……母様が思い描いた夢。呉の民達が思い描く未来に向かってね……天国から見守ってくれる、母様？」

語りかけている雪蓮の後ろで、再び黙禱を捧げる

(孫堅さん……俺は雪蓮をこの身に変えてでも守る……だから安心して見ていてくれ。向こうの世界で俺の親父にあってらよろしくと伝えておいてくれ)

自分の父もおそらく同じ世界にいるのだろうと信じて、伝言を頼む。

届くとは思っていない。死者に語りかける能力なんて持っていないのだから……

それでもセツナは、届けとばかりに静かに黙祷を続けた。

「華琳、敵本城の包囲が間もなく完了する。」

「そう……後は孫策が出てくるのを待つだけね。」

雪蓮達が墓の前で語り合っている頃、すでに曹操は城を完全に包囲しようとしていた。さすがに森の方までは難しいのか、出入り口を固めてある程度だ。

ぐるりと城を埋め尽くす兵達……その数およそ十万。

相手も美周郎の指示なのか、迅速に兵を展開して迎撃準備を行っている。中でも統制が取れていたのは「刹」の旗を掲げられている部隊。

アレが噂に聞く南の天の御使いなのだろう……どんなものかこの戦いで拝見してあげる。

「お前が言ったとおり、前線に質の悪い兵……その後ろには精鋭を置いた。指揮するのは春蘭と秋蘭。後方に凧達を待機させておいた。」

「いつも通り手際がいいわね、ガルム。」

「・・・今攻撃を開始すれば、こちらの被害は最小限に抑えられるが？」

不満そうに日の光に栄える金髪をかき上げる。

この男、ガルム・シヨフラは華琳に拾われて以来、軍師として付き添っている。

軍略は誰よりも鋭く、強靱なものを考え、戦闘力も春蘭達に引けを取らない。まさに万能である。

「・・・ガルム、正面からぶつかり合って勝った者と、姑息に搦め手で勝った者・・・どっちが強いと思う？」

「わあってるよ。霸道って言うのは正面から突っ切るものなんだから？」

「あなたの世界じゃ勝てば良かったかも知れないけど、私たちはいかに戦ったが重要になるの。それが凄まじいものになれば人は私の元に集まってくる・・・今大陸中で小霸王と呼ばれている孫策と正面からぶつかって勝てば、その名声は計り知れないものになるでしょう。」

「しかし、袁紹もいるし、相当数の被害も出るんじゃない？」

「確かに孫策と正面からぶつかれば大きな被害が出るでしょう・・・しかし、それを補ってあまりあるほどの見返りもあることは間違いない。袁紹に至っては所詮袁紹・・・」

不貞不貞しいまでの自信にガルスは頼もしさを感じていた。

確かに破格の英雄曹操ならこの後に戦うことになる袁紹もさほど苦
労なく倒してしまっただろう。

強力な部下もいる・・・自分の作戦を思い通りに描くことが出来る・
・まさにつってつけの世界だとガルスは感じていた。

そのためにも自分は華琳のため・・・魏のために情報を教えておか
なければいけない。

「南の天の御使い・・・セツナ・フォーリングはなかなか強い。
部隊の指揮能力もある・・・少数だからと甘く見ない方がいい。」

「ええ。もちろん分かっているわ。あなたの好きなようにしなさい。」

「分かった。」

空を見上げて、思い出すのは祖国が壊滅した時。

黒煙が立ち上り、紅蓮の炎が首都を焼き尽くした・・・敵の僅が一
機による参謀機能の破壊によるものだ。

重体を負いながらも何とか生き長らえた・・・そして、この攻撃を
行ったパイロットを調べ上げた結果、セツナの父親、ガルス・フォ
ーリングと言うことが分かった。

以降ガルスは死んでいたため、セツナを仇として狙い続け、身分を

隠し、虎視眈々とチャンスをつかがっていた。戦争の一つも起これば、命が狙えるようになる。

その間、国家錬金術師の資格を取り、元々好きだった次元学を潜伏しながら専門的に研究し始めた・・・そして次元転移装置が形がなつたところで、暴走・・・助手として雇っていたエリナとこの世界に飛ばされた。

こちらに来たときは、最初こそ殺されかけたが今では何とか生きている。

あと少し・・・あと少しで俺の計画が実行できる。

（セツナはこの先いくらでも討てるチャンスはある・・・今は孫策だな）

すでに策は打ってある・・・華琳には悪いが孫策に恨みを持つ許貢の子を刺客として放っている。

孫策がいる場所も使い魔を飛ばして分かっている。刺客が放つたことがばれてもそいつらに暗示をかけてあるから俺に罪が被ることはない。

（俺は何でもする・・・この居心地のいい世界にいるためにならな・・・）

知らず知らずガラムの口端がつり上がり、凶暴に笑っていた・・・

黙禱を捧げ終え、周囲を見渡す。

それは全くの偶然だった。

警護がてら、フォニック・アイ音響視力で周りの状況を調べていたら・・・

風で葉が揺れる音の中に、人工的に葉がこすれる音が聞こえてきた。

不審に思い、その方に意識を向けてみると・・・

木々の間から強い殺気と常人には聞こえない囁きが聞こえてくる。

その場所から、雪蓮の間には何も遮蔽物がない！

とっさに重心を前に転ばし、膝を抜く。

この場所で殺気を感じるのは、暗殺以外考えられない！

シュツッ！

弓が放たれる音が聞こえてくる。距離にして、約三十メートル程度しかない。

はっきり言って、庇えるか微妙な距離でもある。

「雪蓮っ！」

「えっ!?!」

母に別れを告げていた雪蓮を前に押し倒し、身を挺して凶矢から守る。

ドスッ！

「ぐっ！」

矢が俺の太ももに刺さる。そのままだったら、雪蓮の体に当たっていた。

雪蓮を護れたことに、安堵を漏らしたのも束の間、素早く上半身を起こし、腰のホルスターからカローンP21CQBを抜き打ちする。

本来、投げナイフでも届く距離だが、体勢が悪い。あんまり銃は使いたくなかったのだが・・・

当たったかどうかは分からないが、距離的には当てるのは容易い。

「いけっ、雪蓮っ！」

「っ！分かったわ。きっちり始末してくるからね！」

目線をかわしただけで、意図をきっちり読み取ってくれた。

すぐに横に退き、雪蓮は立ち上がってすぐにダッシュで刺客の居たと思われる場所に向かった。

取り残された俺は、座って太ももに刺さっている矢を力ずくで抜く。

鮮血が舞い、足に激痛が走るが慣れているので構わない。だが・・・この体を蝕むような鈍痛はいったい何なんだ？加えて、徐々に熱におかされていくような・・・

「・・・毒か。やれやれ・・・」

この鈍痛は覚えのある痛みだが、毒の種類が思い出せない。

しかし、自覚症状として、神経痛、筋肉弛緩、発熱、吐血が出てくるはずだ。

「しかし・・・ここで、終わるなんてな。」

リドライバークューブで元の世界に帰れば、まだ助かる。

しかし、それはあまりも卑怯で、女々しい行為だ。ましてや、「毒で死にそうだから、帰る」なんて格好悪すぎて雪蓮達に死んでも言えない

U・L・T・I・M・A・T・Eには、毒に対するの抵抗力が常人の数倍以上あるが、それでも生きている時間を延す程度の効果しか無く、致死量を接種すれば即死もする。

こみ上げてくる吐き気を懸命に堪えながら、雪蓮の帰りを待つ。

庇ったときに弱音は吐けば、雪蓮は今ここに傍にいてくれただろう。

今でこそ王として時折残忍なところを見せるが、本来雪蓮は優しいのだ。

それをぶちこわすようなことは言えないし、ましてや弱音を吐くことは俺自身のプライドにも関わる。

傍にいて、討てる刺客を討ち漏らしたと他国に知られば、格好の笑いものになる。

刺客を放てば、こうなる。ということ了他国に示さなければ、舐められるのはこっちだ。

「さて、どうやって説明しようかな？」

あと30分もたたないうちに自分が死ぬというのに、セツナは至極冷静でいた。

元より、自分の命は無いものだと思っている。あれほど瀕死の目に遭っていれば、自然と考えがそう変わっていた。

助かったら、助かったで、ラッキーとぐらいにしか思っていないのだ。

「セツナっ!」

「・・・蓮華か？」

徐々に鈍痛がひどくなっていく体に鞭を打って、立ち上がる。声色からして相当急いでいることがわかった。

「そんなに急いでどうしたんだ？」

「魏が攻めてきたのよ！？だから、姉様を呼びに来ただけど・・・」

キヨロキヨロと辺りを見回す蓮華。その一方で、セツナはどこのどいつがこんなバカなことをしてきたのか？と思っていたのだが、これで合点がついた

状況からして、曹操しか考えられない。

しかし、覇道を唱える曹操なら、こんな姑息な手段を選択しないはずだが・・・

考えるが分からない。微熱が思考能力を奪っていく。

それにすでに最後の手は打ってある。

それを冥琳に言えば、俺の考えた手をさらに精緻に直し、実行してくれるだろう。

「それで、セツナ？雪蓮姉様はどこ？」

刺客を始末しにいった雪蓮はまだ帰ってこない。魏が攻めてきた一大事に王がいなければ戦は成り立たない。向こうに王が出ているなら尚のこと。

国の一大事に戦に出ない王など孫呉が誇る王ではない。故に蓮華は雪蓮を探しにきたのだ。

「あら、私ならここにいるわよ？」

ガサガサと草木を踏み割って獣道から出てきたのは蓮華の探し人、孫呉の王である雪蓮だった。

その手には、三つの首が持たれていた。三つの首は揃って、眉間に穴が開いていた。

見えない敵に見事なまでのピンポイントショットをかました自分に、少しばかりの戦慄を感じてしまった。

「姉様っ・・・それはっ!？」

「ああ、これは私を狙った来た刺客。大丈夫よ。きっちり始末してきたから。」

これがあれば、襲われた証拠として十分だ。こちらの士気を上げてくれる材料になるだろう。

「刺客っ!？大丈夫なのですか!？」

「大丈夫、大丈夫！セツナが庇ってくれたおかげで傷一つ負わなかったわ。」

蓮華の心配を吹き飛ばすかのようにあははと笑う雪蓮。

「そうですか・・・って、セツナは大丈夫なの？怪我は？」

「そうね。私も確認はしていなかったけど・・・」

二人は俺の体をまさぐり、傷を確認していく。

「っ！足を怪我しているじゃない！？大丈夫なの！？」

「大丈夫だって。もう止血もしてあるから！」

実際の所、今にも吐血しそうなのだが、飲み込む。二人の前で毒におかされているという余計な心配は掛けられない。

「それよりも、大軍が来ているんだろ？他のみんなは出陣準備が出来ているなら、急いで戻った方がいい。」

「……ええ、そうね。……だけど、セツナ」

雪蓮の目が急に真剣になる。呉に差し迫った魏の脅威を嗅ぎ取ったからなのか！？あるいは、超人的な勘で俺の体の異変に気がついたのか！？

「……忘れ物があるわよ。それを取ってから陣に向かしましょう。蓮華、先に行っててくれる？」

「しかし、姉様！？」

この非常時に何を言っているんだと、言わんばかりの蓮華を優しく雪蓮が諭す。

「案内役がいないと、セツナが帰ってこれないでしょ？すぐに追いつくから！」

にっこりと微笑みかける雪蓮を信じたのか、蓮華は強く頷く。

「……分かりました。すぐに来てくださいね。」

踵を返し、颯爽と森の中を掛けて行く蓮華。

その姿は、今までとは違い、頼りになる背中を見せていた。

「……で、あとどのくらい持つの？」

蓮華が見えなくなった瞬間、単刀直入で聞いてきた。

「……何のことだ？」

平静を装いながら、返事を返すがいかんせん返事に覇気がない。

「とぼけないで！……毒におかされているのでしょ！？」

真摯な瞳で訴えてくる雪蓮。そのクリスタルのような瞳を見ていると、嘘をついていることに罪悪感を覚える。

しかし、心配を掛けるわけにはいかない。わき上がった罪悪感を気合いでねじ伏せる。

「あのな、矢が当たったぐらいでっ。」

不意に大きな血塊が喉にせり上がってきた。あまりにも不意すぎて、堪えきれず吐血する。

「ゲハア、ゲホツ、ゴホツ、ゴホツ！」

大量の血が地面に吐かれる。最悪だ。気づかれちゃった……

「やっぱり！暗殺するときは、確実にしとめるために毒が塗られていることが多いのよ！」

雪蓮は、しゃがみ込んだ俺の背中をさすりながら、叱咤してくる。

「はぁ・・・はぁ・・・見られちゃったか。」

「どうして・・・何であなたが・・・」

雪蓮の瞳が潤み始める。それは、大切な仲間が死ぬこと知って潤んだのか、有能な武将が死ぬから潤んだのかは俺には分からない。

「・・・正直に言うよ。もって、後一刻半（約十五分）ぐらいだ。」

「そんな！なんてことなの・・・」

自分でも驚くくらい正確な時間がわかった。死に対してはかなり敏感なところもあるからだろう。

兵士は、他人の死を看取ることがとても多い。階級が上がれば上がるほど、看取ることが多くなる。

そのため、あとのくらいで死ぬか正確にわかるスキルが備わってくる。

「だが・・・今から始まる戦いが終わるくらいまで身体をだましまし使える方法が一つだけ残されている。」

懐を探り、滅多に手をつつまない小ポケットからリングを取り出す

それは、祖父の代から受け継がれているセブンリング・オブ・ライティックスのひとつ、シャイニングセイバーである。

リングの真ん中に埋め込まれているダイヤモンドには、高位の精霊が宿っており、精霊が認めた所有者に様々な力を授けるといふ。

それを、左中指にはめ呪文を唱え始める。

「我、セブンリング・オブ・ライティックスの所有者として契る。死にゆく体に一時の命を与えたまえ・・・」

とたんに体が蒼の光に包まれていく。

光自体は数秒程度で収まったが、セツナ自身未だに蒼く発光している。

「・・・何したの？」

「まあ、仙術的なもので一時的に寿命を延したのさ・・・曹操との戦いが終わるくらいまでしか持たないが、いつも通りに動けるようになった。」

効果を知っている者がいれば一時的ではなく、永遠に生きることにも可能にできると思うだろう。

しかし、あくまで力を授けるので、実際の干渉力はそれほどものではない。無敵になるとか、永遠の命をもらおうといった無茶な願いは叶えられないのだ。

今回セツナが受けた毒は、すでに致死量を超えている。毒を除去す

るのも不可能である。

故に、一時的でも孫呉の役に立つ方向を選んだわけである。

体に力が戻ってくる。何事もなかったように立ち上がり、歩き出そうとするが……

「待って、寿命を延したっていつても、結局は死ぬんでしょ!？」

「ああ……」

「……どうして、そんなに冷静にいられるの!？」

堰を切ったかのように雪蓮が叫んだ。

「死ぬのが怖くないの!？何で、自分の命を軽く見ているの!？」

地面に涙が星の雫のように流れる。

顔を見ていると涙で頬を濡らした雪蓮がこちらをしつかりと見ている。

「……雪蓮、ここで泣くのはおかしい。」

「何でよ!？」

「本来、俺はこの世界に存在しない人間だ。……いない人間に対して泣くのはっ」

言葉がそこでとぎれる。雪蓮が胸に飛び込み、抱きしめて来たから

だ。

心臓が早鐘を打ち、生気のない顔に朱が走った。

「今ここにあなたがいるから、私は泣くの！存在しないなんて言わないで！」

「・・・」

胸の方から雪蓮の嗚咽が聞こえてくる。

嗚咽を聞いたたびに胸が苦しくなる。

まいったなあ・・・自分の命はないものだって思っていたのに・・・
今死ぬのは、本当にもったいなすぎる。

しかし、こればかりはどうにもならない。

一時的に寿命を延したとしても、結果的には死んでしまうのだ。

ふと、疑問が脳裏に走る。こんなところで死んでもいいのか？

死んでいいはずがない。やっと雪蓮と心を通わせることができたのに、その矢先俺が消えてしまうなんて、どう考えてもおかしい。

沸々と感情がわき上がってくるが、どうやっても結果が変わらない事に構っていても仕方がないというあまりにも冷静な自分がいて、すぐに冷めていった。

「……さつき、命を軽く見ているのかって、聞いたよな？」

「……ええ。」

「答えは……軽くは見ていない。自分の命は大切だと思っている。だが……」

雪蓮の肩を抱く。目をまっすぐ見据える。

小刻みに震える肩と雪蓮の濡れた顔にあふれんばかりの愛情が湧き上がった。

「俺の命は、俺一人のものじゃないんだ。俺が殺した奴らの命でもある。だから、生きることとそいつらの命は報われる。もしくは死ぬことによって俺自身の罪が報われると思っっているんだ。」

滅多に見せない暖かみのある目をセツナが見せる。

「さあ、涙を拭いて……みんなが待っているぞ。」

「おかしいよ……そんなの……」

まだ涙する雪蓮に、セツナが活を入れる。

「孫伯府っ!!」

「っ!!」

「自国の一大事に王がたかが一武将のために涙するのは見当違いも甚だしい！王ならば、時に非常に徹するときもあるだろう。今がそ

の時だ。王は常に公平無私、厳格であることが求められる！そして、俺の見てきた孫呉の王は、常に先陣に立ち、兵達の先頭を走っていた！その勇敢さがあつたからこそ、民衆は孫家を支持し、力を貸してくれる！今ここで泣いていたら、その全てが崩れる！俺の屍と悲しみを超えて、完全無欠の王となれっ！雪蓮っ！」

面食らった顔をこちらに向ける雪蓮。しかし、すぐにいつも通りの締まった顔に戻った。

「・・・ごめんなさい。そうよね、国の一大事に王がこんな事をしてちゃいけないわね。どうかしてたわ、私。」

涙をぬぐい、前を歩き始める雪蓮。

その姿はいつもより強いオーラをまとった王の姿となっていた。

「さあ、私たちの国に手を出した曹操をギッタギタにしてやるわよ！」

雪蓮は不敵な笑みを浮かべて宣言する。

その笑みはいつも通りのものだ。

やっぱり泣いている雪蓮はらしくない。こっちの方が似合っている。

「ああ、丁寧に、骨の髄までお迎えしてやるぜ！」

二人は笑いながら、出陣準備をしているみんなの所に向かった。

しかし、二人は悟っていた。

残された時間はあまりにも少ないことを……

速度が遅いものの、やっと城の前まで着いた。

すでに陣をひいて、皆が王の到着を待っていた。

「やっと着いたか……」

「少し、ゆつくりだったからね。さっ、行きましょう。」

二人は本陣に向かい、皆と顔を合わせる。

「雪蓮、遅かったじゃないか!?!?……それはどうしたんだ!?!?」

冥琳が雪蓮の手に持っていた三つの首をみて驚く。しかし驚き方としてはいつものことだな……と言っているような感じだった。

「ちょっとね。ああ、刺客はしっかりと始末してきたから……セツナの忘れ物が見つからなくて……」

二人は視線を合わせる。

ほんの一瞬だが、冥琳の顔が引きつった。

「……で、忘れ物は見つかったか?」

「ええ、バツチリよ。」

「そうか・・・では状況を説明しよう。」

皆が一斉に冥琳の方に視線を向ける。いや・・・祭さんだけが俺の方に・・・手のあたりをじっと見ている。

今は左中指にリングをはめているだけだ。怪しまれるようなことはないんだが・・・

祭さんは視線を俺から外し、皆と同様冥琳の方に向けた。

「すでに曹操は、部隊を展開している。先陣は夏侯の二人だ。この二人の後ろにはまだ数部隊控えているという状態だ。」

「切り崩すにはなかなか手強いな・・・」

この二人を抜けるのは生半可なことでは出来ない。おそらく、相当な死闘となるであろう

「そこで我々は、雪蓮と黄蓋殿を前曲に置き、穴を穿つ。中曲で明命、思春、霞の部隊がその穴を維持し敵の前線を攪乱、混乱させる。後曲のセツナがその混乱について全力を持って穴を広げる。蓮華様、小連様は遊軍として本陣に待機し、残りのものは援護する形で前進する・・・この作戦でどうだ？」

「・・・冥琳にしては、珍しい力押しね？どうしてなの？」

たしかに、これほど力押しの作戦を冥琳が考えるのは珍しいことだ。

「相手は大陸最強と名高い曹操の軍勢だ。攪乱や陽動には乗ってこないだろう。なら、私たちも力押しで行くという選択肢しか残っていないのさ。」

「……確かにのお。」

「じゃあ、その作戦で決定ね。全員、自分の持ち場に戻ってちょうだい。」

皆が急いで自分の軍の所に戻っていく。

さて……俺も、自分の所に戻るか……どういう陣形がいいかな。

「待て、セツナ。」

行こうとしたその時、冥琳が呼び止めてきた。

振り向いてみると、まだ、雪蓮、祭さん、冥琳が残っていた。

王+孫呉の重臣がこの一大事に俺に何の用だろう？

「……いつまで持つのだ？」

「……何のことだ？」

「とぼけるな……毒、なのじゃろ？」

やはり、この二人の慧眼はすごいものだな。

誤魔化しはきかないようだな。

「この戦いが終わるくらいは持つよ？それよりなんでわかったんだ？」

「私は、雪蓮の目がかすかに赤いこと、セツナの足についている血で判断した。気丈な雪蓮が泣くほどのことだから、おそらく死に関わる何かがあったと感づいた。後は雪蓮の目から意志を読み取ったのが決定的だったな。」

さすがは断金の仲、意思疎通がアイコンタクトだけでできるとは……
それほど二人の仲が深いということを改めて実感した。

「僕は、足についている血といつもつけている手甲が戦闘前だといふのに、つけていないこと。決定的だったのはいつも心身充実しておるセツナが今は身が弱り、心の方が高まっているということだな。」

「マジかよ……たったそれだけで分かっってしまうなんて……」

「伊達に年はとっておらんということだ。」

「長年人を見てきているからな……それくらいは分かる。」

亀の甲より年の功って事かな。

しかし……俺の知っている年長者でここまで眼力がある人は一ダースにも満たない。

古代は今のようには情報がすぐに手にはいるわけではないから自然に眼力が備わってくるって事だな。

「・・・その身体で、戦場に出るのか？」

「ああ、最後の時まで戦場にいるよ・・・俺が仲間のためなら、命を惜しまないって知っているだろ？」

冥琳はちらりと、雪連の方を見て確認を取った。すでに納得している雪蓮はこくりと頷き、出陣を許可する。

「分かった。・・・お前といた九ヶ月、慌ただしかったが、楽しかったぞ。」

「不器用だが、全てのことに関心を尽くす姿勢・・・僕は好きだったぞ。・・・惜しい男を亡くしたな。」

しんみりとした雰囲気はその場を覆った。冥琳と祭さんは頭を垂れ、俺との別れを惜んでいる。

「・・・意外に・・・信頼されていたのか・・・ここにきて、知るなんてな。」

本当にもつたいたない。出来るなら、このまま生きていられたら・・・
・・・という考えがよぎる。

だが、そんな甘い考えはすぐさま打ち消し、余力が残っているか、自分の身体を総点検する。

・・・末端神経に毒が回ってきたか。ほんの少しずつだが熱が無くなっていくのが分かる。

開戦するまでには、この手足はもう死人のように冷たくなっているだろう。

「さあ、二人とも！そんな暗い顔をしていたら、他のみんなに知られるわよ？切り替えて、曹操達を手厚く歓迎しましょう！」

そんな空気を打ち破ったのは、やっぱり雪蓮だった。

無理に明るい声を出し、少しでも俺が死ぬことを忘れさせようとしている。

「・・・そうだな。我等呉に喧嘩を売ったことを、後悔させてやるう・・・死ぬほどにな？」

「そうじゃな！久しぶりに本気で戦うかの！」

「ふふふっ、それじゃ、私たちも持ち場に帰りましょうか？行きましょ、祭、セツナ！」

「応っ！」

「分かった。」

「冥琳、後は頼んだわよ？」

「分かっているわよ。」

セツナ、雪蓮、祭の三人が本陣から離れ、そこから祭は前曲の自分の軍の所に小走りで走っていった。

二人も、もうすぐ別れる。

「・・・雪蓮。」

「何？」

いつもの返事といつもの凜々しい顔・・・俺はその顔を焼き付けようと瞬きをするのを惜しんで見入った。

ポケットから包帯を取り出して、雪蓮に手渡す

「すまない。剣を手に縛ってくれないか？」

「どうして？」

「抜けないようにするためだ・・・もう握る力が無くなってきているんだ。」

毒は徐々に・・・本当にゆっくりだが、俺の体を蝕んでいる。

雪蓮は表情こそ変えないが、明らかに悲しんでいる。

しかし、すぐに切り替えいつもの雪蓮に戻った。

「ええ。それくらいならお安いご用よ。」

雪蓮は、きつく、しかし鬱血しないように優しく手に剣を縛っていく

る。

その間、二人の間に言葉はない。

少しでも長く傍にいたい……二人の心にそんな気持ちは存在して
いなかった。

彼らは、仲間である前に王であり、戦人なのだ。

そういった気持ちを戦闘前に持ち込むほど、ヤワな人種ではないの
だ。

「はい……終わったわよ。」

「悪いな……ありがとう。」

振って、感触を確かめてみる。

いつもと感触は違うが、おおむね振れる。

「さあ、雪蓮……行ってこい！俺に……最高の雄姿を見せてく
れ！」

「ええ！見ていなさい、セツナ！一生に一度の……最高の雄姿を
見せてあげる！」

雪蓮はその言葉に勇気づけられ、笑顔をほころばせた。

セツナも、釣られて笑顔になる。

二人は同時に、背を向け、自分たちのいるべき場所に向かう。

雪蓮は曹操に舌戦を仕掛けるため。セツナは自分の軍を率いるため。二人の顔にはすでに笑顔は消え、完全に無表情の戦うときの顔になっていた……

私は今自分の行動を悔いながら、単身で大軍の前に向かっていく。

このときほど自分が王であることを悩んだことはない。

出来ることなら、今すぐにも引き返してセツナの元にいたい。

しかし、それは許されることではなく、ましてやセツナも喜ばない。

あいつは強い王である私を見たいと言っていたし、兵達や将もそれを望んでいる。

そのことは自分でも正しいと分かっている。

だが、この気持ちはどこにぶつけなければならないのか！

たかが一年にも満たない月日、心を通わせただけで満たされるはずがない。

それを終わらせた曹操に・・・高い高い代償を払わせてやる

最後に剣を縛った時のセツナの手は、もう冷たかった・・・

もう・・・どうしても覆らない。死の事実はもうそこまで来ているのだ。

私は・・・攻めてきた曹操を許さないっ！

曹操、あなたは私の一番大切な人を傷つけた。どれだけ謝っても絶対に許さない！

雪蓮の足が一步一步大地を踏むたびに空気が熱を運び、重くなっていく。

それほどまでに雪蓮の怒りと憎悪が強いのだ。

悪鬼羅刹にも似たオーラを纏いながら、雪蓮ただ一人大軍の前に立ち止まる。

そして、南海霸王を抜き、曹操に向かって咆えた。

「呉の将兵よっ！ 我が朋友よっ！」

彼女の声は、晴天の下高らかに響き渡る。

「我らは父祖の代より受け継いできたこの地を袁術の手より取り戻した。だが、その地を欲し、無法にも大軍をもって押し寄せてきた。そして、卑怯にもわが身を消し去らんと刺客を放ってきたのだっ！」

刺客の首を敵の方に向かって投げた。弧を描き、首は敵陣の前に転がり落ちた。

「しかしっ！我は天によって守られたっ！天は、我をその身を挺して庇い、毒におかされたっ！」

目線を曹操がいるであろう方向に向け、今まで感じたことのない殺気を放つ。前にいる兵はそれだけで怯え、震え始める。

今にでも曹操の元へ駆け出し、その首をかつ切りたい衝動を必死に押さえる。私の・・・大切な人を奪った張本人を地獄よりひどい仕打ちに合わせたい！

「曹操は愚かにも、天を傷つけ、そしてあまつさえ本当の天に帰そうとしている。これが許されることかっ！否、断じて否であるっ！」

空が暗く曇り始め、稲妻が走り始める。

雪蓮の憎悪に感化されたのか、空までもがこのような演出をしてくれる。

「しかし、我らの天はもはやその身を滅ぶのを待つしかない。ならば、何で弔えるっ！この戦いに勝利し、大陸を統一し、そして民の笑顔が咲く世にすることこそが最上の弔い！」

そう・・・みんなの笑顔は、セツナがもつとも望んでいたこと。民

の温かい笑顔こそがセツナに対する最上の甲いになると思った。

兵の顔に強い意志がみなぎってくるのが分かった。士気も徐々に上がり始めている。

「天の魂魄は、皆の盾となり、矛となり、力となりて、我らに勝利をもたらしてくれるであろうっ！」

雪蓮は一つ間をおいて、南海霸王を天に振りかざす。

「勇猛なる呉の将兵よっ！卑怯者の魏を恐れるなっ！天は我らを選んだっ！」

「我が誇る勇者たちよっ！天に向かって叫べっ！心の奥底より叫べっ！己の誇りを胸に叫べっ！無謀にもこの地を欲する愚かで卑怯な魏の兵など蹴散らせっ！我らが土地を護れっ！愛しい仲間を護れっ！愛しい民を護れっ！」

「今ここに孫伯府、生涯最大の大号令を発す。我等の前に立ちはだかる敵をことごとく蹴散らし、勝利を重ね、大陸を統一するのだっ！手始めに卑劣な曹操を蹴散らせ！」

合わせたかのように雷鳴が鳴り響く。それによって、味方の士気は一気に上がり、敵には恐怖と動揺が走った。

「全軍拔刀っ！」

一斉に鐃鳴りが走り、全軍が一斉に構える。

「今より、我らの天下道が始まるっ！全軍、修羅となりて、敵を粉

「砕せよっ！突撃いいいいっ！」

どわあああゝ！

雄叫びが地を揺らし、一人一人鬼の形相と化して、敵に突撃をしていった……

「どういう事だ！誰が孫策を暗殺せよと命じたのだ！」

刺客を放っていたことを初めて知った曹操は激昂しながら臣下をにらみ付ける。

曹操にとって今一番の楽しみで一番大切な一戦を汚されたのだ……これで激昂せずにいられない。

「わ、我等がその様なことをするはずがありません！」

「ならば何故だ！何故向こうの御使いが毒を受ける！なぜこのようなことが起こる！」

「か、華琳様……！！！」

「事情が判明しました！許貢の残党で形成された一団が孫策の暗殺を行ったようです！」

暗殺したと聞いてすぐに荀？、郭嘉が調査に走り前線でいない者を

探し出したのだ。

許貢の残党は進軍途中で隊列を外し、城近くの森に向かったのだ。おそらく出てくる瞬間を狙えば孫策を討てるとでも考えたのだろう。

念には念をと剣や鏃に毒を塗って万全を期した。これらは全てガラムが指示したことであった。

「末端まで兵を統制できなかったか・・・俺の責任だな。」

許貢達が死んだことはこちらにとって好都合・・・ならば、後はばれないようにするだけだ。

すました顔で自分の不甲斐なさを嘆く。これは全てはばれないよう演技である。

「今はそんなことを言っている場合ではない！桂花、すぐに呉へ甲問の使者を出せ！稟、西方に調査遠征している曹仁、曹洪、荀攸を呼び戻すよう伝令を放て！春蘭、秋蘭、我等は一度退く。大義の失ったこの戦場・・・今戦つても何の意味も持たない！下衆に汚されたこの戦い・・・せめて、無事に収容せよ！」

「ちよつと待て！？今の状態で撤退すれば、尋常ならざる被害を受けることになるんだぞ！？袁紹がいる今、無駄な消耗はっ！？」

現代の知識が備わったガラムはもちろんこの行動に抗議を立てるが、その抗議は首元に絶を突きつけられて止められた。

「今ここで戦うことは誰も望んでいない！ましては私はこんな義も意味もない戦いはしたくない！これ以上反論するのならば、そなた

の首を跳ねるぞ!!」

「・・・わかった。季衣、琉々、華琳の護衛に付け。俺は軍の収容に向かう。」

渋々ながらも抗議を取り下げ、一刻も早く撤退準備を進める。敵はすでに突撃を開始し、もたもたしていたらこちらの命も危ない。

曹操は許？、典韋を共にし、本陣を撤退させた。その馬上で今回の出来事を嘆いていた。

「天よ・・・我が霸道にこんなにも困難な試練を与えようのか・・・」

おそらくこの撤退で大きな打撃を受ける・・・それを知った袁紹はどんなにバカでも好機として捉え、河北から大軍を持ってこちらに攻めてくるでしょう。

疲弊したこちらは防戦するだけで手一杯・・・確実に戦乱は長引く。

そのために遠征に出している三人を戻すのだ・・・西方には興味があつたけどこちらの事情が事情なだけ断念せざるを得ない。

馬上で一人齒軋りをしながら、許都に撤退するため馬を走らせるのであつた・・・

「進め！進め！進め！進め！」

遊軍として本陣を守るはずの蓮華はいの一番に突撃を敢行した。

敵はその鬼のような形相に怯え、浮き足立っている。蓮華を容赦なくそれを斬り伏せていく。

「曹操の兵どもを血祭りに上げる！！天の御使いの血を・・・セツナの血を！奴らの命で償わせよ！」

最初に出会ったときは胡散臭い者としか思わなかった。だけど、戦う姿を見て見解は一気に変わった。

それから、時間があればセツナに稽古を付けてもらったり、一緒にお茶をしたりと楽しい日々の中、私はセツナに惹かれていった。

何事にも一生懸命な姿は誰よりも眩しく、誰に対してもぶっきらぼうながらも優しい接し方にもはや自分の気持ちを疑うことはなかった。

「殺し尽くせ！腐った魂を持つ下衆どもを！その血を呉の大地に吸い込ませるのだ！」

その大切な人を奪った曹操を絶対に許さない。ましてや毒殺という卑劣な手を使って殺したのだから地獄にたたき落としてやりたい

「贖え！奴らの体内に流れる外道の血で！我等が天の御使いの命を贖わせるのだ！」

剣をかざして、兵達を指揮する・・・私は曹操を必ず討ち取ってみ

せる。

それがセツナへの弔いになると思うから……

「我が老躯より先に行くか……天は何とも残酷な事よ……先ある命を散らし、この老いぼれを生かすというのか……」

天を見上げて、セツナが死ぬことを嘆く……空を見上げながら思出すのはセツナとの日々。

酒に誘えば文句を言いながらも付き合ってくれた。弓を教えた際に自分のことを師と呼んでくれた。自分が作った料理を嬉しそうに食べてくれた。肌を重ねたときは慈しむように優しく、たまに荒々しくもあつたが自分に情愛を注いでくれた。

何より思い出されるのは戦闘時の顔。凛々しくもありながら、仲間を守ろうと泥臭く戦う姿に儂は……惹かれておつたかも知れぬ。

「黄蓋様！早く！奴らを皆殺しにして、その血の全てを御使い様に捧げましょう！！我等の英雄を……御使い様の命を奪った卑劣な輩に死を！」

兵達から急かされて思いを馳せるのをやめる……そして、驚かさ
れた。

儂の隊の者は皆セツナの死を悼んでおる……それほどまでに人望

があつたことを改めて知らされた。

思えばあやつは人を惹きつける魅力があつた。誰とでも分け隔てなく接し、共に笑い、共に悲しむことができる。

ぶつきらぼうだが誰にでも優しかった・・・これで人望がないはずがない。

「応つ！黄蓋隊に告げる！一兵たりとも逃がすな！皆々殺し尽くせ！」

「良いか！敵兵の耳を削げ！鼻をもげ！目玉をくりぬき、喉を貫け！敵の骸を踏みにじり、呉の怒りを天に示すのじゃ！」

「我等が英雄を曹操に！怒りを！哀しみを！憎しみを！見せつけるのじゃ！」

祭の目から一筋の涙が零れる・・・それは止まることなく流れ続ける。

それに気をかけず、弓を番えては打ち続ける。

儂はもう涙は枯れておる・・・これは、汗じゃ。

自分にそう言い聞かせながら、祭は眼前の敵を打ち砕いていった・・・

霞は目の前の敵を己の怒りのままに薙ぎ払っていた。

「許さへん・・・許さへん許さへん許さへん許さへんっ!!」

目の前にいた四人の首を一気に斬り落とす。その太刀筋はいつもの流麗な太刀筋ではなく、ただ力任せに薙ぎ払う雑な太刀筋だ。

いわば天下無双の呂布のようだ。それほどまでに霞は怒っていた。

力と力の真つ向勝負を挑んできたセツナ。そのあと自分を大将の下に仕えさせてくれるように計らってくれた。その際の条件、監視も引き受けてくれて、ウチのことをできるだけ一人にしないようにしてくれた。

自分が仲間と認めた者には最大限の努力を惜しまない漢。それがセツナ・フォーリングだった。

ひとりぼっちな呉の中でただ一人自分を受け入れてくれた大切な仲間。

呉の中で最大の戦友を刺客という卑劣な行為で殺した曹操を今ここでブツた斬りたいという衝動が霞の身体を動かしていた。

「ええか!? 曹操の部下に情けなんてもんはクソ食らえや!! 逃げるもんは斬れ!! 命乞いするものも斬れ!! ウチの大切な・・・仲間を殺した曹操をいてこましたるで!!」

さらに五人の首が一気に飛ぶ。霞の隊の勢いもそれにノせられてか、敵を過剰に斬りつける。

しかし、冷静な副将軍が暴走する霞を必死になだめようとする。

「張遼將軍！！熱くなりすぎです！！このように前に出すぎては！？」

言葉はそこで途切れた。青竜刀が首元に突きつけられて、霞は涙を流しながら睨みをきかせていた。

「これで熱くならん奴がどこにおる！？ウチを止めるんやったら、殺しても止めてみせな！！」

「しかしっ！？」

「セツナの死を悼む奴はウチについてこい！！徹底的に曹操をばてくりこますぞ！！」

すぐさま全員が霞について行き、手当たり次第に曹操の兵を殺していく。

霞も自慢の青竜刀を、涙を流しながら振り回す。しかしその一撃一撃はただ敵を殺すためではなく、セツナの死を心の底から悲しむ・・・
・そんな一撃だった・・・

「ふっ・・・逝ってしまうのか、フォーリング？」

さしたる感傷もなく、思春は眼前の敵を斬り捨てていく。

思えば、最初に出会った時額に短刀を突きつけられるという屈辱から始まった。

自分は誰よりも上と思っていないが、どこの馬の骨とも分からない奴には負けない自信があった。

その自信をセツナが粉々に打ち砕いたのだ。

以来邪険に扱ってきたが、自分には出来ないことを奴はしてきた。

蓮華様を笑顔にすることだった。自分と話しているときも笑顔を浮かべるが、フォーリングと話しているときと比べたら雲泥の差だった。

それに少なからず奴の武を認めているところもあった・・・奴という人格はどうしても認められないが。

「まあいい・・・最後に大仕事を残してくれたのだ。甘寧隊、王の命を狙った獣を一匹たりとも逃すな！投降する者は殺せ！逃げる者も殺せ！その血を大地に吸い込ませ、孫呉に二度と刃向かえないように！！！」

部隊の者も必死に敵を殺していく。敵はただ無秩序に逃げるばかり。

そんな輩に我が王の命を狙われたと思うと腹が立ち、敵をさらに斬り捨てていくのであった・・・

「將軍っ！」

近くにいた張凱が詰め寄ってくる。他の兵も俺を注目している。

俺たちは後曲に属しているため、突撃までにまだ時間がある。

「もうすぐ死ぬって、本当ですか!？」

切羽詰まった顔で聞いてくる。その顔を見ただけで胸に熱いものがこみ上げてくる。

「・・・ああ、もう長くはない。今回の指揮で最後になるだろう・・・」

「そんな・・・」

兵達は、青ざめ、絶句した顔を向けてくる。中にはすでに涙を流しているものもいた。

そう・・・最後になるのだ。すでに四肢に力が入らなくなってきているし、頭も微熱におかされ始めた。

「最後にお前達に俺の生き様と極意を遺していく・・・よく聞いてくれ。」

「全員、將軍に注目っ!」

総勢一万二千の兵達がたかが、俺の言葉を聞こうとしている。

不意に涙が出かかるが堪える。今はまだ涙を流すときではない。

「いいか、俺はお前達に何が何でも生き延びると言ってきた。戦って生き延びてもいい、無様に逃げて生き延びてもいい。だがな、生き延びることに迷いは禁物だ。迷いは生き延びることに後悔を生むものだ。迷った瞬間心が砕かれる。」

言葉の途中で泣いているものが続出した。大声で泣いている者、すすり泣くようになく者、一言も聞き逃さないと顔を向けている者、その目から静かに涙が流れている者、それぞれが俺のために泣いてくれている。

「泣くな！泣くのは、この戦いが終わってからにしろ！」

「しかし……」

「俺の前では泣くことを禁止する。いいな！」

「っ！全員、涙を拭けっ！」

自らも涙していた張凱も袖で涙を拭きながら、号令を掛ける。

皆一様に涙を拭き、再び俺の方に注目する。

「よし、続けるぞ！迷った瞬間心が砕かれる。ならば、迷うな！ただ前だけを見て、生き続ける！いいなっ！」

「はっ！」

返事が活気よく返ってきた。

……これでこの世界に俺の生き様が刻まれた。後はこいつらが継

いでいくだろう。

「張凱、俺無き軍はお前が指揮しろ。満貫、劉仙、黄烈、意義はないな？」

「俺は年を取りすぎた・・・若い者に任せるのがいいだろう。」

「・・・前に出るのはいらない・・・異議なし・・・」

「一番適任だろ？」

「だ、そうだ？引き受けてくれるか？」

張凱はキョトンと意外そうな顔をしていたが・・・

「將軍の代わりにはなれませんが、自分なりに精一杯にがんばります。」

決意のこもった返事を返してくれた。

「この戦い以降、指示は周喻殿に仰げ、いいな！」

「はっ！」

そろそろ突撃の時間だ。前の方が騒がしくなってきた。

「そろそろか・・・よし、全員配置に着け！突撃陣形四。」

慌ただしく、兵達が動き始める。

「豪力隊は豪槍、蒼穹隊は連弓、他の隊は各々の装備を持って！」

一斉に武器の入れ替えが始まる。元々持ち運びを重視して設計してあるため、入れ替えにはそう時間はかからない。

「豪力隊は、敵陣を穿つように突撃、迅速隊はその隙間を埋める。蒼穹隊は左右への援護射撃。鋼盾隊はその穴を押し広げる！」

「はっ！」

「いくぞ！セツナ・フォーリング、最後の戦いに参る！いざ、突撃
iiiiiiiっ！」

オオオオオオオツ！

いの一番に先頭に立ち、駆け出す。この姿を皆に覚えてもらいたい。

敵はすでに撤退し始めているが構わない。体が動き続ける限り、倒していく。

それが・・・この世界で最後に出来る事だ・・・。

ドシュツ！

逃げる敵を背後から斬りつける。あっけなく体を両断され、上半身だけ宙に舞った。

セツナは、他の敵には目をくれず、ただひたすら前に向かっていく。道中、邪魔な敵だけを切り捨てているのだ。

本来、ここまで性急に事を運ぶセツナではない。急がせる理由はやはり、体に毒が回ってきているからだ。

斬線も見えず、技も何も出てこない。ただ斬り、突き、なぎ払っているだけだ。

前にいた敵を、首から斬る。

これもあっけなく首を飛び、胴体は力なく前に倒れていく。

（早く、しなければ！）

ジリジリと焦りが募り、さらに剣を振るう。

この道中で、雪蓮が結んでくれた布もゆるんできた。邪魔になっていたし、これでは衝撃がうまく逃がせない。

躊躇無く、布を捨て剣を握り直す。わずかしが残っていない握力を絞り出して……

不意に前が開けた。その先には……

（見えた！あれが本当の殿だ！）

今までの敵は無秩序に逃げていたのに対して、こちらは秩序よく整列して後退している。

そして、見慣れた黒髪で隻眼のイノシシ武将の姿も殿にいることを確認した。

「ここから先は、魏武の大剣、夏侯元讓が一步も通さん！通りたければ、我を倒してみろ！」

すでに剣を抜いて、待ちかまえている。

考えられることは一つ。撤退のための時間稼ぎだ。

今から、軍を先行させ追撃させてもいいが、振り返ちに遭う可能性もある。

「全軍！この場で魏の兵を徹底的に掃討しろ。追撃することは許さん！」

「はっ！」

全軍が動きを止め、その場で徹底的に敵を殺し始めた。

俺が死ぬこともあって、その様子はまさに地獄であった。

「盲夏侯か。ならば抜けさせてもらおうぞ！」

抜ける気はさらさら無いが、単細胞を挑発するにはちょうどいいだろう。

「私をその名で呼ぶな！白銀の修羅！」

「修羅じゃねえ！セツナ・フォーリング、いざ参る！」

夏侯惇に向かっていく刹那、視界の端に雪蓮を見たような気がするが、気に留めない。

上からかぶせるように、渾身の力を込めて斬撃を見舞う。

しかし、今までの疲労と毒によって、あまり力が入らない。

（もって、15分！それまでに仕留めきれるか！？）

それでも、持てる力をすべて込め、斬撃を続ける。

ガキインッ！

あまりにもあっけなく、受け止められる。

「なんだ？この太刀筋は？あまりにもあっけないぞ！はあああっ
！」

夏侯惇の大剣が、空気を引きちぎりながら袈裟懸け気味に仕掛けてきた。

俺は、それを余裕を持って受け止めようとするも・・・

パキインッ！

大剣は止めたものの、剣が手から弾かれてしまった。元々限界だった握力にさらに負荷がかかってしまったためである。

改良型シャムシール「白銀乃弧狼」は宙に弧を描いて、地面に突き刺さった。

「將軍！」

近くにいた張凱が拾い、俺に渡そうと近づいてくる。

「来るな！」

「っ!？」

その一言で、張凱は速やかに馬を急停止させる。

「夏侯惇の間合いに入れば、まずお前が死ぬことになる!ここから先は、拳で切り抜けてみせるよ。」

「そんな無茶な！」

「その余裕、今切り取ってみせるわ！」

渾身の突きが、俺の顔面目がけて飛んでくる。

武器が無くなり、体も満足に動けない。使える手札は、相手のリズムを利用することだけ……

(九割九分九厘勝機がなくなっても俺は残った一厘にすべてを賭ける!!)

切っ先が頬を斬り裂きながら、頭を振って突きを何とか交わす。

頭を振った小さな反動をフルに利用して、足元に隠してある投げナイフを左手に持つ。

そのままリバースグリップで持ち、力んで突いたのかいまだ余韻が抜けない夏侯惇の懐に飛び込む。

唯一空いている腕の隙間を縫うように腕を滑り込ませ、右肩の付け根あたりに思いつき突き刺した。

「ぐっ!？」

呻き声を上げるも、退かない夏侯惇に追い打ちをかけるかのように右拳をいませが刺さったナイフに叩きつける。

「おおおっ!」

叩きつけた瞬間、右拳がグシャツと破壊されるような音がした。

それもそうだ。硬い柄を力任せに叩いたのだから・・・しかし、その見返りも大きかった。

「ぐあああああっ!？」

痛みに耐えかねた夏侯惇が思わず後ろに引いて態勢を立て直す。刺さった肩の付け根はナイフの柄が三分の一ほどずっぽり入っているほど深く刺さっていた。

こちらから攻撃できない以上カウンターを狙っていくしかない。相手の突きの余韻を利用することで力の入らない状態をカバーするところが出来た

左腕からナイフを取り出して、リバースグリップで構える。右は骨折、左は先ほど無茶に夏侯惇の剣を受けたせいで捻挫しているが、アドレナリンのおかげで痛みを感じない。

これで・・・五分！！

「貴様あつ！！なぜ真つ向から斬り結ばん！？武人としての誇りはないのか！？」

武人の誇りね・・・多少は持っているが生き残るためにいらぬのなら、簡単に捨ててやるさ。

「生憎、生きるためなら何でもするたちでね・・・それに時間もないし？」

「時間がない・・・そうか、貴様が天か！？」

「そのように判断するのは・・・そっちの勝手だが？」

お互い言葉を切り、再度間合いを取って構える。

セツナは夏侯惇の右肩の傷に狙いを定めた。あの深い傷を狙っていけば、致命傷にならなくてもかすっただけで激痛が走り体力が自然に落ちて動きが鈍ってくるだろう。

二人の間の空気が徐々に歪んでいく・・・そして次の瞬間、ふたりは一気に相手目掛けて突っ込んだ。

だが、急に横から飛来した一本の矢に二人の勢いは削がれた。

「姉者！華琳様達は無事に撤退できた！我等も撤退しよう。」

「なにい！？それはいったいどういうっ！」

「ここで留まっていたら孫策達が来る。それに姉者も怪我をしている・・・そんな状態で戦うのは危険だ！」

「・・・くう~~~~っ！！」

納得しないながらも、先ほど来た女性・・・姉者と言っていたところからおそらく夏侯淵と思われる女性の言うことを聞いて撤退しようとする。

そんなことを素直にさせる通りは戦場にはない。

「簡単に・・・撤退させるわけないだろ？」

夏侯姉妹の前に立ちふさがり、撤退をさせないようにする。

対峙した瞬間、思考と視界にノイズが走る・・・

(っ！？毒が回り始めている！？)

無理もない。毒が回らないように加護を受けているとはいえ、動けば動くほど毒は体を蝕んでいく。

残された時間が加速的に減っていく。そのことを否応が成しに痛感させられる。

熱で浮かされる思考とぼやけてきた視界を集中力を高めて無理矢理正常に戻す。

「くっ、やはり簡単には退かせてくれないか・・・」

「秋蘭、こいつが孫策が行っていた天だ。」

「何？」

「そんなことはどうでもいい。お前達を曹操の所に返すと後々厄介だからな、今ここで討たせてもらうっ！」

「ふん！いくら私が負傷しているからと言ってそんなことが・・・」

「姉者・・・侮らない方がいい。」

セツナは集中力を極限まで高め、覇気を限界以上に展開させる。

目はさらに無色・・・いや、なぜか金色に変わり始める。何かグセツナの中で意志を持っているかのように目を染めていく。

「くっ、何という闘気だ!？」

「死にかけだというのに・・・闘気が狼のように見える」

セツナの後ろには本当に狼が乗り移ったかのように闘気が形成されている。

仲間のために一人になっても戦い続ける漢・・・そのために孤高に戦い続けてきたと言わんばかりに敵をにらみ付けるセツナ

そんな姿に気圧されないように夏侯姉妹も構える。

夏侯惇が前に、夏侯淵が後ろで弓を構えてこちらを狙い定める。

またも両者の空間が鬨気で歪んでいく・・・そして夏侯淵が牽制に弓を撃った瞬間、二人の間合いが一気に詰まった。

このまま切り結ぼうとした瞬間、見慣れた桃色の髪がセツナの目の前を塞いだ。

「セツナッ!?!」

「雪蓮!?!」

「夏侯姉妹! 今日だけは見逃してあげる。さっさと尻尾を巻いて退きなさい!!--」

「待てっ、雪蓮!?! 今逃したら!?!」

「もう十分敵に損害を与えたわ。これ以上は私たちが消耗しかねないわ・・・さあ、惨めに退きなさい!!--」

「何をおおッ!?! 今ここで叩ききってくれるわ!!--」

「姉者!?! ここは素直に退いておこう! この屈辱は近い未来に晴らせばいいじゃないか!!--」

今にも斬りかかろうとする夏侯惇を必死に押さえる夏侯淵。それを油断なく構える俺達。

しかし、セツナは見るからに体力を消耗して立っているのも辛そう
だ。

(持って・・・後10分程度か・・・)

このまま退いてくれるのが俺にとって最上なのだが、斬り結ぶこと
になれば10分でこの二人を倒すことは至難を極める。

ならば、防御を捨ててどちらかを道連れにするくらいの攻撃をする
しかない。

「・・・くっ、孫策!! いつかこの屈辱を晴らしてやろう!!」

二人はようやく退いていく・・・なんとかなったか。

「追撃はかけない! これを持って、この戦闘を我等の勝利とする!
皆の者、天高く勝ち鬨を上げよおー!!」

ウオオオオオオー!!

地響きが起こるほどの歓声が大陸を震撼させるがごとく響き渡る。

そんな中、セツナは一人、空雷に乗り直し自分の剣を持っているは
ずの張凱を探していた。

「張凱、剣を返してくれ。」

「あ、すみません・・・どうぞ」

「ありがとう」

剣を鞘に収め、本陣にゆっくりと戻っていく。

空を見上げて、目に焼き付ける……これが最後に見る空……愛した女がいる空……

死に装束も出来た……軍人は戦って散っていくのが本望。そうでなければ軍服を着て息を引き取る。

普通ならそんなことはこだわらないが、形式を重んじる古代中国ならそれもいいかもしれない。

ユラユラと馬に揺られるセツナの口端からツウ……と赤い筋が走る。

それを合図にセツナが馬の背にゆっくりと倒れ込んだ……揺られるたびに地面に赤い斑点が生まれていく。

加護が弱まりつつある事が分かる。完全に加護がなくなったら、振り出しに戻りわずかな時間しか生きていられなくなる。

「セツナッ!？」

皆と一緒に勝ち鬨を上げていた雪蓮がいち早く気づいて、素早く伝令を全ての武將に本陣に戻るように指示する。

そして自らも本陣に向かう……一人の勇敢な武將を看取るために・

第六話 咆吼！天翔る狼、大陸駆ける虎！【前編】（後書き）

もうね・・・三ヶ月もお待たせしてすいませんの言葉しか出てきません。

あれやこれや悩んでいるうちに時間だけが過ぎてしまいました。

とりあえずこの六話が終わると、第一部として一応の区切りがつきます。

六話が終わったら番外編を4、5話くらい入れてから第二部に行きたいと考えています。

第二部では他の天の御使いがついに動き出しますので楽しみにしていして下さい。

それでは後編はなるべく早く上げるようにします。

それでは

第六話 咆吼！天翔る狼、大陸駆ける虎！【後編】（前書き）

作者「一ヶ月をちよつと過ぎたけど、何とか更新できたぜ！！」

セツナ「いやはや・・・今回はがんばった。やればできるじゃないか！」

蓮華「そうね。中盤からちよつと苦しみだしたけど書き上がったことをほめてあげるわ。」

作者「いや〜今回は本当に難産だった。当初予定していたものを書くかどうかでも設定と矛盾が生じるから書き直して・・・その繰り返しだったからな。」

セツナ「二王制とかよく考えたな。新キャラとか他の御使い達もしゃべっているし？」

作者「二王制は雪蓮がそのまま王になるとどうしても蓮華の出番が少なくなるから考えたもの。それに蓮華の髪を切るシーンをなくしたくないがために作ったようなものでまあおまけ程度だな。」

蓮華「しかし、どうして魏に新キャラを増やしたのだ？」

作者「霞がないし、戦力的に上にいて欲しいから加えた。」

蓮華「そういうこと・・・私たちに苦戦しろとも言っているの？」

作者「へっ？」

セツナ「戦力を増やすことは俺たちは激戦に巻き込まれることを意味している。なぜ増やした？」

作者「いや、だってそっちの方が燃えるっ!?!」

蓮華「そんな理由で・・・(シャキン)」

セツナ「敵を・・・(ザッ)」

セツナ・蓮華「増やすなあゝ!?!」

ザシユ、ドゴツ、グゴロブチャ!?!」

作者「な・・・ん・・・で?」

チーン

作者が地獄にログインしました。

蓮華「さて、そろそろタイトルコールをしましょうか？」

セツナ「そうだな・・・それでは!?!」

セツナ・蓮華「真・恋姫十無双　く乙女繚乱　三国志演義　呉書
虎狼天下霸道の巻　第六話　咆吼!天翔る狼、大陸駆ける虎!」
後編】　どうぞ閲覧してください。」

蓮華「意見、感想などはいつでも待っています。」

セツナ「作者のやる気にもつながるのでどしどし書いてくれよな!」

第六話 咆吼！天翔る狼、大陸駆ける虎！【後編】

私は走った・・・ただ一人の男を看取るために・・・

優しく武術を教えてくれたたった一人の男の師匠・・・

私は走った・・・戦場では勇敢に出でて、敵を粉碎していった男を看取るために・・・

その姿に自分も含め、兵は勇気をもらった。私では出来ない事をあの男は常にしていたのだ。

私は走った・・・誰よりも愛していると自覚できる男を看取るために・・・

誰にでも優しく、どんなことにでも文句を言いながらも付き合ってくれる・・・私はそんな男に惹かれ、愛した。

勝利に沸く兵達をかき分け、ようやく本陣に辿り着く。

そこで見た光景は、姉様に抱かれ、口から血は吐いたセツナが横たわっていた。

私はその光景を見て、絶望に染まった・・・

「・・・セツナ、全員揃ったわよ」

「そうか・・・」

生気のない顔にうつすらと笑みを浮かべて、虚空を見つめる。

毒の状態は振り出しに戻り、すでに命は風前の灯火であった。

全身は虫が這いずるような神経痛と筋肉弛緩、すでに吐血している。
・・・これでは現代の医療でも施しようがない。

もう助からない・・・セツナはそれを悟って笑っているのだ。

「さて・・・ゴホツ、ゴホツ・・・はあ・・・時間がない、手短に行くぞ。」

そういつて言うことの聞かない身体を無理矢理立たす。非常に苦勞したが何とか立つことが出来た。

腰に差してある剣を抜こうとするがとてつもなく重い・・・体感重量として一キロを超える程度・・・それがこんなにも重いとは・・・

残る力・・・もう何にもないが振り絞って鞘から引き抜き、天に向かって掲げる。

「みんなと・・・仲間だったっていう証が欲しい。各々の武器を俺の剣に掲げ合わせて欲しい・・・」

全員何も言わずに頷いて、各々の武器を掲げ合わせてくれた。

南海霸王、南海聖破、月華美人、白虎九尾、紫燕、鈴音、魂切、多
幻双弓、人解、飛龍偃月刀が白銀乃弧狼に合わせられる。全ての武
器が太陽に反射して輝いている。

「我等不滅の仲にして、かけがえのない友・・・我が魂消えようと
も、この繋がりは血よりも濃く、長江よりも深い物であり、永遠に
消えることはない！」

指輪が淡く光り、白銀乃弧狼を通して、全員の武器に光が伝播する。

「天よ！我が魂を糧にし、我が友にこれからの勝利と平和を授けた
まえー！！」

そう言いきるとセツナは力尽きたように膝を着き、横たわってしま
う。

剣から伝わった光は、やがて染み込むように各々の武器に消えてい
った。

「セツナっ！？」

「へへっ・・・もうお迎えが近いようだな？」

蓮華の呼びかけに力なく微笑み返す。

悔いはない・・・最後まで雪蓮達の役に立てたのだから。

これから死ぬというのにセツナは至極冷静だった・・・心はまるで
一面に張った水のように静かだった。

「冥琳・・・ゴホツ・・・これを」

懐からエージェント・ノートを取り出して冥琳に手渡す。

「・・・その中にこの時代でも作れる攻城兵器と大量生産に向く武器・・・ゴホツ、ゲホツ・・・屯田制やその他諸々の事が・・・記録してある。使い方は、この前教えたとおりだ・・・後俺の部隊の指揮を頼む。」

「ああ、有効に使わせてもらおう・・・部隊の指揮も任せておけ。」

「こんな時でも・・・表情を崩さないんだな？」

「軍師だからな・・・墓を建てたら、花束でも供えてやろう。」

「言ってる・・・」

いつもの冷静な顔で話す冥琳に笑いながら悪態をつく。

顔はいつも通りでも目だけは悲しんでいる・・・冥琳も心の中で泣いているのだ。

人前では絶対に取り乱さない・・・軍師としての本分を見事なまでに体現しているのだ。

「祭さん・・・部隊の訓練・・・お願いします。身体壊さない・・・程度にきつくして・・・いいですから。」

「任せておけ・・・お主が望んだ部隊に仕上げてやろう。」

祭さんも涙を流していない・・・少し前、酒の席で涙などとうに枯れたとこぼしていたことを思い出す。

大切な人の死を見過ぎて・・・泣き疲れたのだろう。

「蓮華、すまない・・・最後まで武術を教えられなくて・・・ゴホッ、ゴホッ」

「セツナッ!？」

蓮華は傍に膝を着いて、さらに血を吐いた俺の手を握ってくれた。

その温もりが冷えた手に何とも心地よかったか・・・ふと感覚のなくなった手に熱い水滴が落ちてくるのを感じた。

目をその元となっている場所に向けると、蓮華が大粒の涙を流していた。

「・・・王となる者が簡単に涙を流すな・・・これでも俺・・・嬉しいんだぜ?」

「何で?・・・もう死ぬというのに何で嬉しいの!？」

「・・・みんなに・・・ゴボッ・・・看取られるからさ。俺が信じた仲間に看取られることが・・・何よりも嬉しいんだ。」

「っ!？」

耐えきれなくなったのか、立ち上がり彼方の方に走っていく。

「待ちなさい、蓮華!？」

「いや、いい・・・行かせてやれ。」

まだ人の死に目に会うことが慣れていないのだろう。

しかしこの先、いつ誰が死ぬか分からないのにこんな事ではダメなのだが・・・今はいい。

今だけは泣いてもいい・・・これから先の成長の糧となるなら泣きたいだけ泣けばいい。

「霞、思春・・・蓮華の事を頼む・・・明命、猫たちを・・・頼んだ・・・」

「任しとき・・・」

「貴様に言われなくても」

「はいつ!?!」

霞は哀しそうに笑い返してくれた。元々俺がいなくなった時に蓮華の指南役を頼んであったのだ。

最初は人に教えるのは柄じゃないと渋ったが、蓮華の可能性を話したら目をキラキラさせながら承諾してくれた。

・ 思春に至ってはいつものむっつり顔・・・ホント、変わらないな・・・

大きな目に涙を浮かべた明命……いつも元気いっぱいな顔が台無しだ。

俺が猫好きと知ってから、時たま明命と一緒に街の猫たちと遊んでいた。その時の明命は本当に生き生きして、輝いていた。

「穩、亜莎、シャオ……ゲホツ……呉を内側から支えてやってくれ。」

「セツナさんが目指した呉に必ずして見せます……」

「自分が出る限りの事を精一杯頑張ります……」

「シャオがいれば、大丈夫だよ……」

穩は今にも泣きそうな顔でしっかりと俺の意志に答えてくれる。

そんな穩を安心させたくて、頭を撫でようとしたが腕が鉛のように重たく上がらない。これほど自分の体が動かないことに腹立たしいと思ったことはなかった。

頭を撫でる代わりに精一杯の笑顔を穩に向ける。それでも穩は哀しんだままだったが、ほんの少しだけ笑顔になった。

付き合いの短い亜莎だが、目に涙を浮かべて俺を看取っている。

この二ヶ月間ほとんど話す機会がなく、親交を深める時間もなかったが、亜莎の頑張っている姿は俺にとって眩しい物だった。

亜莎を見れば、自分も頑張らないという気持ちになり、いつも以上

に政務に調練、鍛錬に力を注いだ。

シャオは、暇さえあれば俺の都合をお構いなしに部屋に遊びに来た。無邪気に擦り寄ってくる姿に俺は妹を可愛がるような感情が生まれ、あえて邪険に扱わずベツタリさせていた。

気丈な顔で俺を看取ってくれるシャオは、やはり孫呉の血が流れているのだろう。

そんなことをしみじみ思っていたら目の前の景色が霞みだしてきた。それにさっきまで聞こえていた勝ち鬨が小さく聞こえる。

目が霞んできやがった・・・耳も聞こえなくなってきた。

時間がない・・・最後まで言わせてくれ！！

俺を抱いている雪蓮の顔があるだろうと思う方に顔を向けて雪蓮の顔を目に焼き付ける。

ぼやけて見えるものの、ハッキリと雪蓮の表情が伺えた・・・見事なまでの王の顔。

部下の死を嘆き、その死を糧にしている・・・それでこそ、孫呉の王だ。

「雪蓮・・・こんな俺を・・・ゴホッ、ゲホッ、ゴホッ・・・拾ってくれてありがとう。」

「セツナ・・・これからのことは私たちに任せて。きつと・・・セ

ツナの望んだ平和を実現させてみせるから。」

「ああ・・・空から見ているぜ。」

「どうやら、もう時間切れのようだ。」

目のかすみはさらに強まり、瞼を閉じると果てしない闇に吸い込まれそうな感覚に陥る。

後悔はない・・・こうやって、仲間に見取られて死ねるのだから・・・

だが、死ぬ間際なのか後悔はないと思っていた心の奥深くから何か
が吹き出してきた。

「・・・やっぱり、まだ死にたくなかった・・・」

「えっ・・・？」

これを意識した瞬間、目尻から涙が流れ始めた・・・しかもそれは
単発的な物ではなく、持続的にセツナの頬を伝っていた。

「雪蓮と・・・グスッ・・・ゴホッ・・・少しでも長く・・・ヒグ
ッ・・・過ごしたかった・・・」

「っ!？」

「愛を・・・グスッ、ヒグッ・・・確かめ合いたかった!」

この言葉を聞いた雪蓮は今まで保っていた王の顔を崩して、一人の

女の顔になった。

それは最愛の人を今この瞬間逝かせたくない・・・少しでも傍にいて欲しい。

そんな思いが溢れるかのように大粒の涙がセツナの頬を濡らした。

「私もつ・・・愛・・・めたか・・・だか・・・ないで・・・なっ！？」

雪蓮が何かを叫んでいるがもう耳が聞こえない。目の前が真っ白になっっていく。

ああ・・・やはり未練があったか。

考えてみたら、自分のことを全く考えてなかった。いつも自分のことより仲間のことを優先していたからな・・・

真っ白になる瞬間、桃色の何かが俺の目の前に映り、次に赤色の何かが俺を覗き込んでいた。

その光景を最後に意識は闇の底に落ちていった・・・

気がついた俺は死んだことを実感しながら、どうせ地獄に行くだろうと辺りを見渡してみると一面真っ白な雲で覆われていた。

それになんか浮いている感覚だ。誰かが両隣から上に引っ張るような・・・

横を見ると、羽根飾りの付いた兜とその背中には羽、白銀の騎士甲冑を着込んだ女性が俺の腕を掴んで飛んでいた。

「・・・ああ、ヴァルキリーか？」

神話でよく出てくる有名な戦乙女で、フレイヤの僕。勇敢な勇者や屈強な戦死達を選んで、オーディンの館ヴァルハラに連れて行きエインヘリヤルとして再度命を与えられた戦士達の給仕をすると言われている。

そんなヴァルキルーが俺を連れて飛んでいる・・・恐らく俺はエインヘリヤルとして選ばれたのだろう。

しかし、すぐにその考えは打ち消される。ヴァルキリーは目的地についたのか俺を地面に置いて他の場所に飛び立っていく。

相変わらず辺りは雲に覆われていたが、よく見てみると橋が天高く延びているのが分かる・・・しかももう一方の端が見えないくらい広い物だ。

「この橋はビヴロストって言うのよ。上に行けば選ばれた戦士と神々が住むアズガルド、下に行けばお前達が住んでいる地上、さらに下に行けばニヴル Heim とタルタロス・・・通称地獄にいける。」

上の方から声がかかけられ、その方に顔を向ける。そこにはよく見知った人がいた。

桃色の髪に豊かな胸、何より超絶的なオーラを纏って水晶のように澄んでいる目でこちらを見てくる。

「雪蓮？」

「それはあたしの娘さ。あたしは孫堅。娘が真名を許しているなら私も名乗ろう・・・真名は霸蓮という。」

「あなたが・・・雪蓮の母親ですか・・・ははっ、通りで似ている。」

ボスツと雲の上に横になる。自分が死んだことを改めて実感し、そして思い返す。

あの後は一切どうなったんだろう・・・神話に書いてある限り、こちらと下では時間の流れが違うみたいだから、結果が知れるだろう。

冥琳はちゃんと俺の策を理解してくれただろうか・・・雪蓮や蓮華はちゃんと立ち直れただろうか・・・張凱達は立派に成長したのだろうか・・・心配が心配を呼び、身体を揺すり始めると・・・

「あんたはまだ死んじやいないよ。意識だけがこっちに来させられたのさ・・・私は頼み事と頼まれた事をするためにここに来たのさ。」

「・・・死んでいない？」

「結末を言っちゃうと、あんたは華佗に助けられて九死に一生を得るって訳。」

「そうですね・・・そうか、まだ続くんのだ。」

「またも何かの引力が働いて助かってしまった。」

「これが噂のご都合主義か？そんなのがあったら俺はもっといろんな事が出来ているさ。」

「くだらない考えをしている俺を霸蓮さんが俺の顔をジロジロと角度を変えてみてる。」

「・・・こんなもやしっ子に雪蓮は惹かれたのかい？蓮華や小蓮ならともかく、雪蓮がねえ・・・もっとゴツイ男を選ぶかと思っただよ。」

「もやしっ子という言葉にむっと来る。」

「セツナはごつくはないものの常識から考えると鍛え込んでいるのでかなりがっしりとしている。」

「でもまあ・・・いい目をしている。意志を秘めた目をしている奴は基本いい顔をしているね・・・纏う気もちがう。雪蓮がホレたのもうなずける。」

「えっ？」

「いきなり褒められて面を喰らう。霸蓮さんは優しい目つきで俺のことを見ている。」

「最初のアレは娘のことを心配してどんな男に惹かれたかという母親」

の仕草なのだろう。

「祭や冥琳は元気かい？祭は心配ないけど、冥琳は書物ばかり読んでいたからね・・・もやしっ子にやっていないかい？」

「はっ・・・えっ・・・あっ、みんな元気にしていますよ？」

「そうかい・・・あたしはまだ下を見れるほど偉くはないからね。最近ようやくお呼びが掛かって仕事をしているところさ・・・あなたの父親の所だね。」

「はあ・・・」

そういわれてもピンとこない。何せ天界の話なのだ。地上の物にどうこう愚痴られたところで気の抜けた返事しか出来ない。

俺の様子に気分を害した様子もなく覇連もまた俺の隣に座ってきた。それは女性特有の上品な座り方ではなく、男のようながさつな座り方だった。

「・・・雪蓮には悪いことをしたと思っている。幼いときから戦場に連れ出して、文字通り戦を叩き込んだ・・・子どもらしい遊びをさせなかったし、母親らしいことも一つも出来なかった。今じゃそれを後悔していてねえ・・・」

「・・・」

母親らしいこと・・・おそらく甘えることや泣きつくことを徹底的に許さなかったのだろう。

戦場で甘えや泣きは禁物。見せた者から消えていくことは戦いに携わった者なら明白な理であることはわかる。

霸蓮さんの時代は平定のまっただ中で常日頃戦場だったのだろう。そこに雪蓮が生まれ、戦乱に打ち勝つ強い子に育てるために戦場で育てたのだと俺は思う。

改めて雪蓮の幼少期の壮絶さを思い知った。

「・・・雪蓮は私のこと、恨んでいるかい？」

墓の前で雪蓮の言っていたことを思い出す。

雪蓮は母親のことを大好きだと言っていた。今生きていられるのは師匠である母のお陰だと言っていたし、大好きでなければ墓の掃除なんかしないはずだ。

そのことをそっくりそのまま霸蓮さんに伝える。

「全く恨んでいませんでしたよ。あなたのことを師匠であり、大好きだと言っていました」

「そうかい・・・それなら安心したよ。」

ははっと顔を上げて一つ空に向かって笑う。吹っ切れた顔で再度立ち上がり一二歩雲の端に歩いて振り返る。

「あなたの覚悟は下から聞いたよ。雪蓮を身に変えても守るんだって？」

「はい！」

「雪蓮は私から見ても脆かった。その脆さを誰にも見せないように必死に虚勢を張っている。そんな肩肘張った姿勢を取り続けていたら、いつか疲れてボキッと折れちまう。」

「見ていて分かります・・・俺もそうでした」

人並み以上に頑張ろうと背伸びして背伸びして・・・いつも肩肘を張っていた10代。

それでも疲れなかったのは偏に友の存在だった。元の世界の友が強引に街に連れ出してはあっちこっちに連れ回して俺を楽しませてくれた。

今の俺を形成しているのはそれら仲間が精神的支柱になってくれているお陰だ。

雪蓮にもあるが、細い・・・寄りかかってしまえば折れてしまうほど細い物しかない。

ならば俺が大きな支えになってやる。雪蓮が倒れそうになったら隣でしっかりと支えてやる。

「俺は雪蓮と共にこの乱世を駆け抜けていきます。二人でお互いを支え合っていていき、どちらも欠けることなく霸蓮さんの悲願を成就させたいと思います。」

霸蓮さんの悲願・・・全ての民が平等で笑顔になれる時代。

それは俺が元の世界でも一度は願った物だった。しかし現代は物が豊かになったため、人の心は寂しい物になっていった。

さらにネットという不特定多数の逃げ道が心の寂しさをさらに加速させた。

様々な政治家の思惑、それに反発するテロリスト、見て見ぬふりをする一般市民 e t c , e t c . . .

そういつた影がある状態で心の底から笑顔になっている人間はごく少数だろう。ほとんどの人間が上っ面の笑顔でその場を取り繕っている。

だから、諦めた。影は消しても消してもまた戻ってくる。そのイタチごっこに疲れ、諦めたのだ。

なら雪蓮達の世界はどうだろう。元の世界よりはまだ救いようがある。戦禍を消していけば民に笑顔が戻る。

一人の豪傑が頑張れば、どうにでもなる時代だ。なら俺だって出来るはずだ。

今の俺の拳はそのためにある。

「あたしの願いなんてどうでもいいさ・・・呉のみんなが無事に乱世を生き抜いてくれればそれで十分さ。」

そう言って、霸蓮さんは足下に置いてあった光の玉を持ち上げる。

光の玉は不思議な光を放っていて、赤に光れば青に変わり、せわし

なく色を変え続けて光っている。

「あなたの父親からの届け物だよ。曰くこれは真理らしい。」

「真理？」

「物事にはある程度行き着くと壁にぶち当たる。特に顕著に壁にぶつかるのは武術さ。だけど壁をぶち破るとある境地に辿り着く……それが真理ってわけさ。」

武術では全ての技能を極限まで磨き上げた先に見える境地。

真理に辿り着けば、何人も寄せ付けない強さを得ると言うが大抵そこに辿り着く前に諦めるか、壁にぶち当たってぶち破れずに藻掻き苦しむかだ。

「いつも言っていたよ。あなたは才能がなくて、とにかく努力でそれを補ってきた……だけどいつかそれでも強敵に勝てなくなるときがある。だから真理を渡して無理矢理才能をこじ開ける……つてね」

「才能を……こじ開ける？」

「聞くよりやった方が早いだろ？ほらっ!!」

霸蓮さんはほとんど前置きもなしに光の玉を俺に投げつけてきた。反応できずに光の玉は俺の胸辺りに当たった。

痛みはなく、むしろ徐々に光の玉は俺の身体に入り込んでいく。少しすれば完全に入り込んで身体の中に溶けていった。

「今はまだ使えないよ。ちょっとすれば使えるようになるからそれまでの我慢だ。」

「どうやって使っんですか？」

「聞いた限り、何かを開放するような感じで念じれば使えるとき。最初は見切りが悪くなったり動きにキレが出る程度だけど、時間が進んで身体に馴染んだら相手の動きが読めたり戦いの流れを思うように変えたり出来るようになるんだって・・・まあ、そんなことより一番重要なのは才能が新たに開花するって事。」

「じゃあ、俺に才能が？」

「そう。今回の真理は武術。つまり今あんたが頑張っている犀牙流徒手格闘に対して向いている程度の才能が目覚めたって訳。」

いつも求めて止まなかった才能・・・それが俺の中に入ってきた。

そのことを理解すると喜ぶと同時に自分を戒めた。

才能が目覚めたくらいでつけ上がるな。自分はまだまだ弱い存在なのだ。

ここから新たなスタートだ。

「ああ、最後に一つ。副作用があるから気をつけろってね。なんでも無理矢理入れた物だからバグって物が起こるらしいよ。」

「分かりました。何から何よりありがとうございます。」

「・・・雪蓮に伝言を頼めるかい？」

「もちろんです。」

「そうかい・・・なら、こう伝えておいてくれ。時間が掛かっているけどよくここまで頑張った。あなたは私が誇れる娘よ・・・てね。」

照れくさいのかそっぽを向いてしまう。しかしその耳は真っ赤になっていることがわかる。

なんだかんだ言って優しいお母さんなのだな・・・と思うと不思議と笑みが出てくる。

「ビュロストを滑り落ちていけば、下の世界に帰れるよ。ほら！！ さっさと行きな！！！」

「はい！！行つてきます。霸蓮さん・・・爺ちゃん、父さん！！！」

橋に飛び乗って勢いよく滑っていく。下はまるで見えないが不安はなかった。

「雪蓮をよろしく頼んだよー！！！」

遠くから霸蓮さんの声が聞こえてくる。

結構なスピードで滑っていく。下も全く見えないまま意識・・・目の前が真っ暗になった。

「ふう・・・まったく、雪蓮もいい男に見初められたものだね。」

セツナが行った後、その後をしばらく見続けて感慨に耽る。

あれほど澄んだいい目をした奴は久しぶりに見た。意志に燃え、揺るぎなくその意志を持ち続けようという目。

わたしのいた時代でもそんな奴は祭や冥琳以外に見たことはなかった。

「俺の孫をそういつてくれるとは相当気に入ったようだな。」

「自分の育て方は間違っていたかな・・・と思っていたけど、あれで良かったようだな。」

上の方から男性が二人ほど降りてくる。その頭には天使の輪があり背中には羽が生えている。

「気づかれましたよ？何故出てこなかったのですか？」

「今のあいつは俺達が言葉をかける程弱くない。もう十分男さ。」

「僕よりもずっと、自分を確立させている」

この二人はセツナの祖父と父親。エドウィン・フォーリングとガルス・フォーリングであり、二人は現在天使の階級で言うと中級三隊

のパワーズに属している。

二人は天使長であるアークエンジェルからかなりの裁量権を許可してもらっているため、めぼしい人材がいれば自分の部下として迎え入れている。今回孫堅がここに来れたのもそのお陰である。

「それでどうして今になって才能を授けたのですか？本来なら好き勝手に真理を授けてはいけないはずなのに？」

「・・・あいつにはとにかく才能がなかった。目に見える才能と言えは剣での突きくらいだった。だからガルスはとにかく基礎を徹底的にやらした後に技を教えるつもりだったが・・・その前に死んじまったからな・・・まあなんとかあったからいいけど。あいつは相当努力をしてあそこまで強くなった。だけど、この先努力だけでは打ち破れない敵が出てくることは目に見えている。」

「そのためにも今回真理を授けたんだ。この先の辛く険しい運命に立ち向かうために・・・」

「・・・二人して子煩悩ですね？」

エドウィンとガルスはお互いの顔を見合わせ、そして大声で笑い始めた。

それに釣られて覇蓮も大声で笑った。

「どこの親も同じような物だ。どんなに厳しくしても自分の子は可愛い。」

「くくくっ・・・つかぬ事をお聞きしますが、真理の副作用とは？」

「真理の副作用か・・・普通ならば真理に辿り着く道中で出会う壁なんだが・・・今回はそう言った行程を踏まずに真理に辿り着いてしまった。つまりそのしわ寄せが副作用って訳さ。」

「多分、親父と僕が長年持っていた病気が発症するだろうな・・・」

「俺達は運良く発症しなかったが、アレは遺伝性だ。成長したまま受け継がれていく最悪な物だな。」

「・・・つらいですね。」

霸蓮は目を伏せる。すでに上官二人の存在はプロファイル済みだ。それをふまえた上で目を伏せた。

「なぐに、持ち前の根性で打ち勝っていくさ。打ち勝たないとあいつという存在は崩壊してしまうからな。」

「打ち勝てず病気に負ければ・・・それはセツナという殺戮兵器を誕生させることになる・・・そうになったら、僕たちの手で何とかするしかないしね。」

「ウチの娘達を傷つけるなら・・・仕方ありませんね。」

三人はセツナがいるであろう下界を見るかのように下を見た。

雲が広がって全く下が見えないが、それでも不安な思いを消せずに下を見続けるのであった。

うつそうとした意識が徐々に鮮明に戻っていく。

重い瞼をゆっくりと開ける・・・そこには見慣れた自分の部屋の天井が広がり、眩しいほどの光が目飛び込んできた。

目を覚ました俺はまず自分の身体を総点検した。

神経系に異常はない・・・右手骨折、左人差し指、中指、薬指が突き指と手首の捻挫・・・全身に軽い倦怠感・・・少し頭がボーッとする。

以上のことを持って自分の身体は無事だと言うことが分かった。

(・・・また生き延びちまったか)

自分の悪運の強さに霹靂しながら身体を起こす。少し重かったが何とか起きあがれた。

「・・・気がついたか？」

声が出た方向に目を向けてみると窓際で祭さんが珍しく書物を読んでいた。

テーブルの上には判の押してある書類が乱雑に散らばっていた。どうやらここで仕事していたようだ。

「・・・祭さんが書物を読んでいるって、らしくないね」

「起きて第一声がそれとは・・・怒るぞ？」

「ははっ・・・」

書物を巻き取って、俺の寝台に腰掛けずいつと顔を寄せ、見つめられる。

その仕草に多少の恥ずかしさを覚えながら、目をそらすことをグッと堪える。

「ふむ、まだ顔が悪いな・・・華佗を呼んできてやるっ」

そういつて祭さんは、部屋から出て行った。

来るまで壁に持たれて楽になろうと身体を動かさそうとしたら臍の方から重さを感じた。

・・・蓮華が俺の臍を枕に眠っていたのだ。穏やかな寝息を立てて気持ちよさそうに寝ている。

「・・・うん・・・」

俺が少し動いてせいか、可愛い呻き声を上げて顔を俺の方に向けた。まだまだ子どもの寝顔だ・・・蓮華はまだ大人になりきれていないのだ。

そんなところに可愛さを感じながら、蓮華の桃色の髪を梳いていく。

「セツナ、華佗を連れてきたぞ。」

「よお、もう大丈夫みたいだな。」

「あんたが・・・神医・華佗か？」

聞いていたが直に会ったのは始めてだ。どうやらこのイケメンの男が華佗らしい・・・そういえば、意識を失う寸前にあの赤い髪の方が俺を覗き込んでいたのを覚えている。

華佗は俺を触診して経過を調べている。

「・・・まだちょっと、気の流れが淀んでいるな。気血を整える鍼を打つからジツとしていてくれ。」

懐から鍼を取り出し、見事な手つきで鍼を打ち込んでいく。

「祭さん・・・俺は何日寝ていた？」

「二日じゃ・・・儂らは手が空いている者や仕事が少ない者でお主の看病をしておったのじゃ。蓮華様に至ってはほとんど寝ずにお主の世話を焼いておった。」

「その二日間の状況を教えてくれるかな？」

至る所に鍼を打たれているが全く痛みを感じない。むしろだんだん身体が軽くなっていくような・・・

「・・・この二日間でかなりのことが動いたからのお・・・どこから話していいのやら・・・」

と悩んでいたが、しばらくしてポツリポツリと話し始めた。

「セツナ、しっかりして!？」

帰ってきた蓮華はある医者連れて戻ってきた。

「おい、大丈夫か!？」

「ちよつと、一体あんたは誰なのよ!？」

すでに意識を失っているセツナを強く抱いてその医者に触らせまいとする雪蓮。

しかし医者は雪蓮からセツナを奪い取るかのように地面に寝かせ、一瞬視診した後懐から鍼を出し、眉間に一刺しする。

「ねえ!？聞いているの!？」

「危ないところだった・・・俺は華佗。まだまだ修行中の身だが、患者を病魔から救うために大陸を回ってる流れの医者だ。」

「・・・聞いたことがある。あの五斗米道ゴトドウエイドを受け継ぎ、各地で病気を抱える者を治している風来の医者。その名も神医・華佗」

「よく知っているな・・・しかし、危なかった・・・後数瞬遅れて

いたら完全に死んでいた。」

「っ!？」

全員が息を呑んでその事実には驚く。

そんな様子を気にも留めずに華佗はセツナの服を脱がしていく。

「・・・毒はかなり強力な物だ。今から身体に存在する免疫を強めるために鍼を打つ。みんな、少し下がってくれ。」

すすつと、みんなが周りから一步下がって華佗の様子をジッと見つめる。

華佗はすすつと目を細め、自身にしか見えないセツナの病魔をにらみ付ける。

(・・・ここまで強大な病魔を相手にするのは今まで数えるほどしかないな。)

それほどセツナの病状は深刻な物だ。一刻も早く治療しないと先ほどの応急処置で打った鍼も無駄になる。

「ただ俺はやらなければならない!! はあああああ~~~~~っ
!!」

持っていた鍼に気を集め、鍼は仄かに光を放つ。

「我が身、我が鍼となり! 一鍼同体! 全力全快っ! 必察必治癒……病魔覆滅っ!」

「げ・ん・き・に・なれえええええつ!!」

その鍼がセツナの胸に刺される。だがその身体に変化はなく、誰も
がジツとその様子に首をかしげていた。

しかし、次の瞬間・・・

「ゲハアツ!？」

セツナが先ほどとは比べものにならないほどの血を・・・いや、血
と言うにはドス黒い物を勢いよく吐き出した。

「よっっ!!--」

「よし、じゃないわよ!?!さっきより悪くなってるじゃない!?!」

「いや、先ほどの吐血は強まった免疫が毒を排除しようとする物だ。
吐き出した血に触るなよ?今から本格的な治療をするからどこか寝
台があるところに案内してくれ!」

「で、でもっ!?!」

先ほどの吐血で不安を覚えた雪蓮はどうも華佗にセツナを任せるこ
とを躊躇している。

そんな不安がつてる雪蓮の肩を冥琳が優しく叩く。

「ここは華佗の言うとおりにしましょう。我等が英雄を失いたくな
ければ・・・」

「・・・華佗、セツナを絶対生かすのよ!？」

「任せておけ!!！」

すぐさまセツナは近くで待機していた張凱達に運ばれて、城の中に入っていく。

全員がその後をずっと見続けている。誰もが不安なのだ。

一度は死の淵から落ちたものを救うことはどれだけ困難なものか想像することは難しくない。

セツナを華佗に任せて、雪蓮はみんなを自分の方に傾注させる。

そこでようやくみんな釘付けになっていた顔を雪蓮の方に向ける。

「・・・ねえ、みんな・・・私、王を辞めるわ」

「っ!?!？」

「雪蓮、何を言っているのだ!?!王を辞めるなど・・・」

辞めると聞いた瞬間その場にいた全員が驚きの表情を浮かべる。

そんな中、雪蓮は苦笑を浮かべ王の戯言を撤回させようという冥琳を手で制した。

「ああ、そういう意味じゃないの・・・前にね、セツナから聞いたの。」

雪蓮がずいぶんと前の記憶を思い返しながら、王を辞めるといふ経緯をみんなに話した。

ある日、雪蓮がいつも通りさぼって木の上で酒を飲んでいると、偶然通りかかったセツナが呆れた様子で注意してきた。

「そんなところで酒飲んでると、刺客に狙われるぞ？」

「刺客の燻り出しも兼ねてここで飲んでるの。周辺は近衛兵で守られているし、第一白昼堂々仕掛けてくる度胸のある奴なんていないわよ。」

そういつて雪蓮はぐいつと杯を煽った。

「そういうことは影武者にでもやらせておけよ……」

「影武者？何それ？」

「ああ、そうか……この時代はそんな者は置かなかったな……」

セツナは丁寧に影武者のことは雪蓮に説明していった。

説明を興味津々で聞き、なにやらふんふんと考えているようだ。

「……でも、そんなもの必要ないわ。ほかの諸侯に軟弱って思われたくないから。」

「この時代じゃ、それが当たり前か……」

予想していたのか、やれやれと首を振ってその場を立ち去ろうとする

「・・・頭の片隅にでも残しておくわ、その案。」

「えっ!？」

雪蓮の気遣いが聞こえてきたような気がするが、当の雪蓮は木の上で酒をかつ食らっていた。

「・・・まあいいや。それより早く調練に行かないと・・・」

セツナは本来の用事を思い出して、部下達が待つ城外に走っていった。

完全にセツナが去った後、雪蓮はずっと影武者のことを考えていた。

「影武者ね・・・もっと堂々としているものにならないかしら？」

それから、日が沈むまで影武者についてあれこれ思索していたのだ。つた・・・

「・・・って言う話があつて、今まで温めていた案を言っただけ。」

「その話が王を辞めると言うことに何の関係があるのだ!？」

「正確に言うと半分王を辞めるって言いたかったの。私が考えた案・・・それは王を二人にするって事。これならどちらかがいなくなつた時に国が後継者争いをせずに残った方を即位させればゴタゴタは起こらないでしょ?それに王としての経験も積めるから一石二鳥、何も問題はないわ。」

得意げに説明する雪蓮だが、誰一人話について行けない・・・あの知将、冥琳でさえ半分ぐらいしか理解できていない。

なあ、これに似たシステムとしてテトラルキアという専制君主制が存在するがこの君主制は293年から313年に行われた物であり、この後漢時代ではまだ発案されていない。

つまりこの雪蓮の考えは、歴史的にも初めてで先駆者となる物だった。

「・・・つまり、王を二人にして敵を欺こうという物か？」

「ざつくばらんに言うたそういうことになるわね。これを機に家督も蓮華に譲るし、王に即位してもらおうわ。」

「ええっ!?!」

「無論私も引き続き王を続けるし、蓮華の即位は内々でやって他国には私が王って事を改めて喧伝するの。さらに間諜の目を欺くためにも玉座に私が座って蓮華がその隣に立つ・・・私が軍事を担当、蓮華はまずは内政を担当してもらって、慣れてきたら徐々に軍事のこともやってもらおうわ・・・これが私の考えていた案だけど、どうかしら?」

「ふむ・・・」

冥琳は手を顎に当ててうつむいてしまう。恐らく今彼女の中では凄まじい速度で利損計算が行われているのだろう。

これは国の根幹を大きく揺るがす物なのだ。無理もない。

確かに王を二人にすれば、どちらかが死亡した場合素早く残った一人が全権継承すれば普通の手段とは比べものにならない速さで内堀を固めることが出来る。

また片方を本国に置いておけば自由に遠征できる。つまり後ろの心配がなくなり、攻め込まれないかと多めに戦力を置いていくこともなくなるのだ。

さらに二人で政をしていけば的確な内政が取れる。そういったメリツトが魅力な二王制なのだ。

しかし、メリツトがあればデメリットもある。

二人の意見が違えば、幹部を集めて意見を集う・・・これ自体ありふれた物だがひどく民主的で決定に時間が掛かってしまう。

そうしている間に国が衰退していった例は数多くある。ましてやここは古代中国、迅速に事を運ばなければやられるのはこっちだ。

また王に取り付こうとする輩で派閥を作ってしまい、二極化してしまっ場合もある。

そうなってしまうえば、裏で暗く汚い政争が始まり、終いには内乱に発展してしまうという恐ろしい例もあるほどだ。

しかし、雪蓮はそんなことになるとは微塵も思っていなかった。

まずもう一人の王としてあげたのは自らの妹、蓮華だ。

蓮華はまだ未熟だが内政面でのきめ細かさは雪蓮に勝る物がある。戦についてはまだまだ経験が足りないので少々苛烈なところがあるが、自信も未熟と分かっているので少し諭せば納得してくれる。

そしてもう一つ、完全分業しているので意見の対立はないはずだ。自分が戦について。蓮華が内政を行っていけばより呉は強国に駆け上がるはず。無論戦のことは私の意見を尊重してもらって、内政のことは蓮華の意見を尊重する。反対するにも決定権がないため、助言程度のこと最大限の譲渡だろう。

さらに言えば、呉の将は皆家族で一枚岩だ。片方の王が乱心でも起こしたらすぐさま正しい方を判断して止めてくれる。

そういったことからこの二王制は利益を満載したまさに竜驤虎躍りゆうせいこりゅうの名案である。

785

「・・・確かに蓮華様の経験を積むには持ってこいの案だろう・・・しかし、内部の混乱はどうする？いきなり蓮華様に家督を譲れば事情を知らない文官は動揺するし、雪蓮に対する尊厳も揺るぐぞ!？」

「そこら辺をうまく調整するのが我らが軍師、冥琳でしょ？」

いつものようににっこりと笑ってお願いする雪蓮。

もはやこうなっただけの子はここで動かないことを知っているの
で冥琳はため息をついて・・・

「はぁ・・・わかったわ。文官と各地方の代表にはうまく伝えておくわ。雪蓮の案を採用しましょう。」

「ありがと・・・じゃあ、それを証明するために蓮華、これ。」

雪蓮は南海霸王を腰から抜いて蓮華に渡す。

南海霸王は孫家の象徴、それを渡すと言うことは蓮華が雪蓮に変わって、呉を引っ張っていくことを暗示している。

「姉様・・・？」

「あなたが持ちなさい。どうせ戦乱が終わったら家督を譲るつもりだったし、それが早まっただけのこと。これを機に成長なさい。」

「・・・」

蓮華は数瞬迷ったが、力強く南海霸王を掴んだ。

「謹んでお受けいたします。孫仲謀、我が姉には至らないものの孫呉の悲願に向かって邁進していきます！！」

声高々に宣言し、鞘から南海霸王を抜き左手で一まとめに束ねた髪に当てる。

ザクッ！！

象徴的な桃色の長髪をぱつさりと切り落とし、自らの決意を体現させた。

その様子に雪蓮は満足げにうなずき、他の面々もその姿に微笑みを浮かべていた。思春に至っては「あんなに立派に・・・思春は嬉し

ゆづりございます。」と涙を浮かべてその姿に感動していた。

だが、急に雪蓮が思い出したかのように手を叩き、みんなに告げる。

「あっ、それからセツナのことだけど蓮華に譲るの、やっぱりなし
つてことでいいわね？」

『……えっ？』

「私も少しは肩の荷物が降りたし、これからはもっと自由にさせて
もらうわ。それとこれからはみんな平等に休みを取ること。セツナ
の休日と重なった時はなるべく一緒に過ごすこと。もちろん冥琳や
思春も含めて。」

「……姉様？」

ようやく我に返った蓮華がうつろな声で雪蓮に問いかける。

「それはつまり、セツナのことに關してすべて白紙に戻すと言っ
とですか？」

「そういうこと。ここからはみんなで誰が一番にセツナを射止めら
れるか競争よ！ー！」

「……望むところです。これを機に姉様に勝って見せます！ー！」

全員やる気のようなだ。思春は我関せずと決め込んでいるが、そこは
どうにでもなるだろう。

気持ちがスウィーツとした。こんなに気持ちが晴れ渡ったのはいつ以

来だろう。

後はセツナ次第・・・まあわたしの勘からして助かるだろう。

セツナを射止めることに燃えているみんなを尻目に一人城に戻っていった。

「・・・とまあ、こんなところじゃな？」

祭さんの話を聞いて絶句した。まさかあれだけの会話でそこまで考えていたとは・・・

二王制・・・俺の頭じゃ絶対に考えられないし、他の国じゃまとも
に機能しない。

いわば呉のために考え尽くされた奇跡の制度だ。

これを雪蓮一人で考えたとなると・・・言葉が出てこない。自分の
ボキヤブラリーの無さに泣けてくる。

それよりも・・・まさか今になってすべて白紙に戻るとは・・・

「これからは七日に一日、主な将には休みが入る。その休みは人そ
れぞれで不規則じゃ。当然お主にもそれが適用される。」

「つまり・・・俺の休みは基本的に誰かと一緒ってこと？」

「まあ端的に言えばそうなるの。」

「……さらば、これからの俺の休み。この世界で俺に孤独という物は今消えてなくなった。」

「……よし、だいぶよくなったぞ！」

そこで鍼を打っていた華佗が治療が完了したことを告げた。

実際に体が軽いのだが気持ち重い……とほほ。

悲しんで蓮華の髪を再度梳いていく。話にあったとおり長かった桃色の髪はぱっさりと切られて。セミロングくらいの長さになった。た。

「……うん……あれっ、私いつの間にか？」

ようやく目を覚ました蓮華は目を擦りながら、あたりを見渡した。

その目に俺が映ると、寝ぼけているのかなにやらにっこりと笑いかけてきた。

年相応の笑顔に体の底から愛しさがあふれ、髪をさらに梳いていく。

「おはよ。蓮華」

「……セツナッ!？」

一気に目が覚めたのか驚き、いきなり抱きついてきた。

「ヒグツ・・・グスツ・・・エグツ・・・無事でよかった！！私セツナが目覚めないからずつと心配でっ!?!?」

「すまない。心配かけた・・・」

「グスツ・・・本当によかった。」

俺の胸で今までの不安をはき出すかのように泣き続ける蓮華。

ああ・・・ようやくこつちに帰ってきたという実感がわいたよ。

「さて・・・邪魔者は消えるとするかな、華佗よ?」

「そうだな。ええつと・・・」

「セツナだ。そう呼んでくれ。」

「わかった。セツナ、詳しいことは後で説明するからな。」

祭さんと華佗は立ち上がり、部屋を出て行こうとする。しかし、祭さんは去り際に捨て台詞ともれない言葉を残していった。

「今日のところは蓮華様に譲るが、俺もお主を狙っておるからの。休みが重なった時は覚悟しておけよ?」

「はいはい・・・」

「それでなくともお主との時間は無限大に取れる・・・鍛錬という口実がある限りな。」

・・・これから祭さんに見てもらおうのはやめよう。絶対に鍛錬にならなくなる。

それを思うと蓮華、霞あたりも危なくなってくる。いっしょに鍛錬するのも考え物だな。

年上らしい大人の余裕をたっぷり見せつけながら、祭さんは部屋のドアを閉めた。

二人っきりの空間にしばらく蓮華のすすり泣きだけが響く。

蓮華の背中を落ち着くまで優しく撫でてやる。

「・・・ありがとう。もう落ち着いたわ。」

ここでようやく離れて、二人は向き合った。

「・・・私、セツナが死ぬっていつて、どうしても認められなかった。あれほど強い男がどうしてこんなに簡単に死ななければいけないのか・・・それで無我夢中で医療陣地に走って華佗がいるって聞いたから連れてきたの。」

ああ・・・そういえば、最近凄腕の医者がここらに流れているって噂があったな。それは華佗のことだったのか。

戦が起こるから自分の出番・・・なんとまあ、現代の医者に爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ。

「ありがとう、蓮華。お前が華佗を呼んでくれなかったら俺は死ん

でいた・・・まあ、今は少しばかり恥ずかしいがな？」

照れるように鼻を頭を掻く。指は多少痛むものの左はすぐに直りそ
うだ。

「えっ？」

「みんなに遺言とも取れる言葉を残してしまっただ・・・あの時
はマジで死ぬと思っていたから今になると恥ずかしさがこみ上げて
くる。」

「・・・いいじゃない。そういうのも味わっておくべきよ。みんな
を心配させたんだから？」

「・・・そうだな。罰だと思って今回は甘んじて受けよう。」

「それよりも・・・」

蓮華の顔がすつと目の前に迫った。雪蓮やシャオと似ているが、雪
蓮のように天真爛漫な顔でも、シャオの子供特有の無邪気な顔とは
違い、大人びいて見えるがどこかあどけなさが残る蓮華の顔はまた
違った意味でグツと来る。

その碧眼に吸い込まれるかのように見つめる。

「今は私たち、二人きりよね？」

「ああ、それがどうした？」

「みんなでセツナを射止めるか競争だって聞いたわね？」

「？ああ、それがっ」

どうしたとは続けられなかった。蓮華の顔がさらに近くに寄ったからだ。

鼻と鼻がくっつくほどの近さ……蓮華自身の甘い香りがすると同時に疑問が浮き上がった。

おかしい……普段の蓮華ならさつきみたいなことを言われても自分からはあまり動かないはずだ。なのにこんな積極的アプローチを仕掛けてくるのは……

ふと腰の方に目をやると雪蓮の持っていた南海霸王が差してあった。そこでようやく合点がついた。

なるほど……王になるからには姉でも遠慮はいらない。欲しい物は力尽くで奪うって訳ね。

だから、真剣^{マツ}で立ち向かえ乙女ってか？

慣れないことをして、顔が真っ赤になっている蓮華は目を潤ませながら俺にとって衝撃的なことを言ってきた

「私は……セツナのことを、好きっ!!」

チュツ。

唇に柔らかく甘い感触、頭が真っ白になりキスをされたのに気づくまで数瞬を要した。

キスはまだ続いていた。10秒・・・20秒・・・30秒ぐらいたつてようやく蓮華は離れてくれた。

「セツナを想う気持ちは誰にも負けない。たとえ姉様でも勝ち取ってみせる！」

真っ赤な顔で自分に思いを寄せていることを宣言してきた。

ええ〜と、俺はそれにどう答えれば？

実際に死に際に雪蓮には告白と受け取ってもおかしくない言葉を残している。

蓮華はそのことを知らない・・・さて、どうすれば？

答えに窮している俺に、救いの助け船は・・・

「もう終わったかの？」

きましたよ！？そう都合よく来るわけがないと思っていたから、驚愕した。

「セツナが意識を取り戻したことを言ってきたら、みんなついてきおった。」

「あーっ！！お姉ちゃんズル〜い！！！」

「蓮華様、抜け駆けはだめですよ〜」

「おはようございます!! セツナ様!!」

「・・・チツ、生きていたか。」

皆がぞろぞろと部屋に入り蓮華を非難したりや普通に挨拶をしてきた・・・約一名本気で俺の死を望んでいたやつがいたが・・・

「シャ、小蓮、穩!? こ、これは違うの!?!」

「何が違つて言つたのよ!?! さっきあんなに長いことチューしてたじゃない!? セツナの妃は私なんだからね!!」

「なつ・・・見ていたの!?!」

「それはもう・・・熱々でしたねえ」

「と・に・か・く、お姉ちゃんはセツナから離れて!! もう十分でしょ!?!」

「え、ちよつと!?!」

シャオに引つ張られて、蓮華が寝台の上から転げ落ちるようになどかされた。その上でシャオが俺に飛びつこうとしてきたが・・・

「セツちゃん!?!」

「きゃあつ!?!」

後ろからタツクルのように抱きついてきた霞に邪魔され、寝台の遙か手前で落とされた。

なんというか・・・その姿はひどく滑稽だった。

「いや、生きててホントによかった！あははっ、やっぱりセツナは簡単には死なんな？」

頭をグシャグシャと乱雑になで回してセツナが生きていることを心の底からうれしがっている。

そんな霞の感情はセツナにとってくすぐったく、抱きつかれた腕を離してようやく人心地がついた。

「また生き延びちまったが、もう大丈夫だ。心配かけたな。」

「本当に無事でよかったです。あの後いろいろと大変だったのですからね。」

「ああ、祭さんから聞いたよ・・・それで雪蓮は？」

「雪蓮様は今地方の豪族たちと会談しています。あの一戦以来評判はうなぎ登りで困っちゃますねえ。冥琳様はその補佐で亞莎ちゃんも勉強のために冥琳様のそばにいます。」

「そう、か・・・ふふっ」

「?どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。」

普通仲間が意識を取り戻したと聞いたら仕事をほっぽり出して真っ

先に駆けつけてきそうな雪蓮がそんなことはせずに豪族と会談？

一番似合わない行動に笑いがこみ上げてきた。おおかた冥琳に相当釘を刺されて泣きながら会談に臨んでいるのだろう。

まあいいさ。恐らく今後の俺たちにとって必要な物だ。こつという苦労も雪蓮には味わってもらわないと・・・

「セツナ、術後経過について詳しく話していいか？」

華佗が待ちに待ったかのように、目を輝かせて話しかけてきた。

確かに気になる。自分ではわからないところで体がどうなっているかはおそらく今は華佗しかわからないだろう。

「ああ、頼む。」

「おう！セツナは右の拳が砕けていて、左手は人差し指、中指、薬指、手首が捻挫している。後は少々の打ち身程度で済んだ。他に異常はなかったぞ。」

まあそこら辺は意識を戻したときの自己点検でわかっていたから安心した。

これで違っていたら兵士としての俺の技能が相当鈍っていることになっっていたがな・・・

「あと毒がかなり強力な物だったから、明日まで絶対安静したあと、当分の間は激しい運動は禁止して、俺が調合した薬を服用してもらうことになるがいいか？」

「な……に……!?」

激しい運動ができない!! 鍛錬ができない!?

俺のデスクワークでのストレス発散……じゃなくて!? 日々の研鑽が必要なのにそんな当分禁止だなんて……

「……当分ってどれくらいだ?」

「まあ、セツナの回復力からして一月我慢すれば運動できるようになるさ!」

「……走ったり、素振りしたりすることは?」

「素振りはだめだが、走るくらいならいいだろう。ただし事前に俺にいうこと。しばらくはここに留まるからみんなも何か体に異変を感じたら遠慮なく言ってきてくれ!」

それは心強い。拳の怪我は癖になりやすいから、時々見てもらおう。

しかし……本格的な鍛錬がだめになるのは痛いな……

セツナは常日頃の積み重ねこそが強くなる唯一の道と師匠たちに説かれている。

武道に近道なし……武に関わる者なら誰でも知っていること。

セツナ自身もそれが一番正しいと思っており、だからこそ日々精進を重ねている。

加えてセツナは二足のわらじならず、三足も四足も履いて自らの才能の無さを補っている。さらに才能に打ち勝とうと人の何十倍もの努力をしている。

積み重ねを維持できないのは自らの強さを壊すことに等しいのだ。その強さを戻すには努力した倍以上の時間がかかる。

それが怖くて、セツナは華佗に抗議したのだ。

しかし華佗は優秀な医者だ。言うことは聞いておいた方がいい。

自分の体は自分が一番知っていると言うがそれは迷信だとセツナは思っている。

医者は本人より遙かに精密に患者の体を知り尽くしている。

その知り尽くしている医者がだめだというのだから、本当にだめなのだろう。

「・・・わかった。しばらくは走るだけにしよう。薬も飲む」

「よし、じゃあ俺は薬を調合してくるから待っていてくれ!」

意気揚々と華佗が部屋を出て行った。

この後はしばらくみんなでわいわいと談笑した。

その中でいくつか興味深いことが話題にあがった。

まず劉備が益州入りしたということ。本来なら曹操の目が光って入れて入れないのだが敗走中だったこともありその隙を突いて一気に入ったという。

そのついでといつては何だがなぜか呂布を配下に従えたようだ。まあ、強敵に変わらず、しばらくは同盟を組んでいるので敵対する必要もない。

向こう側の御使い、エリナの動向が気になるところだが諜報能力は向こうの方が上だ。こちらがちよろちよろ動いたところで勘ぐられて警戒を強められて終わりだ。

次に曹操が西方に伝令を送ったこと。これは今のところ何を意味するかはわからない。

後をつけさせてどういったものかを見極めさせているところらしい。

そして袁紹が曹操の敗走を絶好の好機として進軍を開始した。

どれだけ馬鹿であっても一国の主、好機はしっかりと捉えている。

そして、巷ではおもしろい噂が飛び交っている。

その内容は「曹操は覇道を踏み外した。王を語る資格なし」だそう
だ。

これはおおかた冥琳がわざと流言させたものだろう。確証もないが、嘘と言いつれないので人はやはり信じてしまう。

当然これを知った曹操はこちらに再度侵攻してくるだろうが、でき

ない。

袁紹が動いている今、もう一度こちらに侵攻してくれば背後を突かれてしまう。

それを勘案しての流言だ。効果は言うまでもないだろう。

さらにもう一つおもしろい噂が飛び交っている。

内容も聞いた瞬間苦笑が漏れた。

「孫呉は天をも味方につけ、孫策は武神をその身に取り付かせた。」

これも恐らく冥琳の仕業だ。雪蓮のイメージアップと国の利益のために俺の死を利用したのだ。

実際に豪族が雪蓮に会いに来ている。効果は笑いしか出てこない。

しかし死まで利用することに苦笑を覚える。確かに英雄の死は軍の士気を左右するものだが……

そんなこんなで楽しいときが過ぎていった。しかし俺はそこに寂しさを感じた。

みんなの輪の中に雪蓮がない……いつもいるはずの雪蓮がいないだけでこんなに寂しくなるとは……

話し込んだら時間はすでに夕方を過ぎて夜に差し掛かっていたので祭さんの一声で解散となった。

蓮華だけがまだ看病すると駄々をこねていたが全員の反対で渋々自分の部屋に帰っていった。

寝床につき、しゃべり疲れてウトウトとしていたらキィ・・・とドアの開く音が聞こえ目が冴える。

入ってきた人物は俺を起こさないように忍び足で寝台に近寄りそつと腰掛けて俺の髪をそつと撫でた。

「・・・ふう、疲れたわ、セツナ」

「お仕事ご苦労様、雪蓮」

「やっぱり起きていたのね。」

まだ重い体を苦労して起こす。月明かりのみがこの部屋を照らし、雪蓮の姿をよりいっそうきれいな姿に映えさせている。

「もう・・・冥琳がしばらくはまだ王をしてもらっぞってうるさいのよ・・・だからあんな堅苦しい会談なんてもうこりこり。」

「まだまだ続くぞ。噂が広まれば広まるほど孫呉に寄ってくる人は増えるものだ。」

「蓮華に任せたとところで冥琳は絶対同席させるだろうし、亞莎もまだまだ経験が足りないしな。」

「愚痴るな。自分で決めたことだろうが。」

「これじゃ、二王制にした意味がないな。役割分担をして余った

時間をセツナと過ごそうと思っていたのに・・・」

「そんなに甘くないぞ。それに俺もたぶん仕事が増える。」

「ぶ〜」

かわいく頬をふくらませて拗ねる雪蓮。

そんな王を見て、深いため息をついた。

「・・・まあ、七日に一回休みが入るんだろ？休みが重なったら何だって付き合うからさ。」

「・・・よし！！常に私と重ならせるように休みを組もう。」

「公正さが欠ける休みの分配ってどうよ？」

「だって、私・・・王だもん」

「はあ〜・・・」

もう深いため息しか出てこない。

雪蓮とまともにしゃべっていたら疲れるだけだ。寝よう。

体を横にして目を閉じて、意識を闇の底に落とそうとするが・・・

「「うらあ〜、勝手に眠るな〜！！」」

瞼を無理矢理引っ張って、寝させないようにしてくる。

正直眠たいのだが、このおてんば姫はそんなことは関係ないようだ。

「……ふう、しょうがない。私も寝よ」と……」

ボスツと雪蓮も俺の隣で横になつてきた。

いったい何考えているかわからない……

「……セツナが生きててよかった。」

そして、いきなり神妙な声で俺の無事を言ってくるのだ。本当に何を考えているのかわからない。

「わたしね……あそこでセツナが死んでいたら……多分狂つていたわ。」

「……どうして？」

「そりゃ、最愛の人が死んだんだもの。普通だったら後を追つているところだわ。王だから一晩泣いてそれで前を向いていかないといけない。どこか無理をしなくちゃいけない。だからっ」

「戦場では死に場所を求めるように戦い狂つてか？」

「うん……」

確かに……恋人とか失つた奴は大概その場で泣き崩れて使い物にならなくなるか、その悲しみを胸にしまって死に場所を求めるかのように戦い続ける。

しかし、俺や雪蓮はそれが許されない。悲しみさえも糧に変えていかなければいけないのだ。

それが人の上に立つ人間に課せられた責務の一つなのだ。

「まあ、わからんでもないが・・・雪蓮はそんなことにはならないと思うぜ？」

「何で？」

「それは雪蓮が純粋な存在だからだよ。純粋な奴ほど大切な仲間の死を真摯に受け入れて、死んでいった仲間が自分に対して何を望んでいるかを感じ取ることができるんだ。まあ多少無理するかもしれないが、それは残った仲間がこりほぐしてくれるものだ。心配はいらない。」

「なぐんか、悟ってるわね？」

「・・・悟ってるか・・・」

悟っていると思われるのはやはり俺は雪蓮とどこか似ているところがあるからだと思う。

確かに二人は似ている。片方は軍の指揮官として、片方は王として規模は違えど人を上に立っている。

また性格も少しばかり似ている。常に感情的だが冷静な判断も下せる雪蓮、普段は冷静だが戦闘である一定のラインを超えると感情を爆発させるセツナ。真逆な性格故に似ている。

周りに仲間が多いことも似ているし、人を惹き付けるカリスマ性も似ている。

だから自然と自分ならこうしたただろうと考えて、相手に当てはめてみると意外に行動が一致している。

「悟ってなんかねえーよ。人より苦勞して痛い思いしてつらい思いしてきたらこうなっちまうよ?」

「あら、それは私に言っているのかしら?」

「自分に対してもだ。」

「そう・・・」

雪蓮は目をつぶりそっと俺の隣に寄り添ってきた。暖かな体温が俺を包み込み、みるみるうちに眠気が襲ってきた。

「セツナ・・・」

「・・・ん?」

「あの時の言葉、聞かなかったことにしてあげる。自分の気持ち genuinely 整理がついて決心したとき、その子にあの言葉を聞かせてあげて・・・」

「・・・わかった。」

耳元で囁かれた言葉は声色が甘くても、ひどく現実的なものだった。

何しろ今までのものをすべて元に戻すのだ。つまり皆が平等にスタートラインに立つたために二人の関係を元に戻すと言うことだ

少しの寂しさを感じたが、雪蓮らしさも伺えた。

やるからには正々堂々と、真っ正面からぶつかり合う。

いや、なんともまあ・・・脱帽だ。

「それじゃ・・・お休み」

頬に軽くキスをされて、雪蓮は本格的に寝入った。

よほど疲れていたのだろう。すぐにスウスウと規則正しい寝息をたたせて熟睡している。

眠気に加えて、雪蓮の寝息に誘われてあらがうことなく俺も眠りに落ちていった。

余談だが、二人はそのまま寝たため、朝一番に駆けつけた蓮華に叩き起こされ、みんなから猛抗議を受けたのはまた別の話・・・

一方、許昌ではいろんなことに追われて疲れ切っていた曹操がその疲れを見せずに玉座に座り、集めた家臣を見回した。

「・・・桂花、今どういう状況か説明して？」

「はい・・・河北から侵攻してきた袁紹は陽武にて東西数十里に渡つて陣を敷いてきました。それに対して我々は官渡に砦を築き、背水の陣にて袁紹の侵攻を死守するつもりです。」

「私たちが先に仕掛けるという手はなかったの？」

「今袁紹に仕掛ければ、最近入蜀した劉備と孫策に後ろを突かれてしまいます。そうなつては元も子ありませんので、華琳様はここ許昌にいてもらつてくださつた方がしばらくは相手もこちらの動きを見るでしょう・・・」

「・・・迎撃するからには勝機があるんでしょうね？」

「それはもう・・・何しろ袁紹はバカ・・・考えもせずこの策を消極的策と勘違いしてやたらめつたらと砦を攻略しようと攻撃してくるでしょう。そうなると兵站も伸びるので、頃合いになつたら神速の速さで敵の兵站を分断。浮き足だつたところを一気に叩くというものです。」

「・・・そうね。桂花、その策で行きましょう。」

「はっ。すでに先遣隊として春蘭、秋蘭、風の三人に官渡に向かつてもらっています。抜かりはないかと・・・」

「そう・・・」

袁紹がすぐそこまで迫っている。普段ならこちらから打つて出るのだがいかんせん兵力が足りない。それに先の戦で士気も落ちている。

また新兵を集めようにも思いように集まらない。その原因の一つとしてある噂が街で飛び交っているからだ。

「稟、街での噂の処理はどうなった？」

「はい。噂を真に受けて何人かの重臣が華琳様暗殺を画策していましたが、それらはすべてガルム様が事前に察知して、公開処刑いたしました。これによって、謀反を考える者は減り、噂もやがて消えていく見通しです。」

「ガルム、誠に大儀であった。」

「これぐらいどうってことはない。それより募兵のことなんだが・・・」

ここでガルムがいくつかの提案をしていく。

華琳はそれらの効果を吟味しながら、最終的に魏にとって最上の利益をもたらすものを選択する。

「なら、この案を採用しましょう。これに関してはガルム、そなたにすべてを一任します。」

「わかった。」

「皆の者、ここが我らにとって一番の正念場である。ここを乗り越えれば待っているのは我らが統一した大陸だ。粉骨碎身の意気で各々の役割を全うせよ！！」

『はっ！』

この言葉を最後に集まった家臣はそれぞれの仕事に向かう。

曹操も一つため息をついて自分の執務室に戻る。部屋で待っていたのは膨大な量の書類・・・それもほとんどが急を要する書類だ。

席についてまた一つため息。そして意を決して書類の山に挑もうとするが、横から湯気の立つ白茶が差し入れられた。

「・・・気が利いたことをしてくれるわね、ガルム？」

「少し休め。華琳はもう二日も寝てないじゃないか？」

いつ部屋に入ったのかわからないが、ガルムが白茶を入れてくれたのだ。

この二日間、迫り来る緊急事態に対応するために華琳は全く寝ていないのだ。それほどまでに魏にとって事態は緊迫したものであり、華琳自身で対応しなければいけないものも多かった。

ここで内部反乱が起きていたら、魏は崩壊の危機に陥っていたがガルムが事前に察知してくれたおかげで最悪の事態は避けられた。

しかし依然として民が持っている華琳のイメージは悪い。先の戦で流された噂が大きな痛手になっている。

さらにもう一つ流された噂で孫呉に対するイメージがこちらにとってよくは思わないものだ。

「そうね。だからなに？私が見なきゃいけない案件は多いの。それも今すぐ見なきゃいけないものがね。」

「今華琳が倒れたら元も子もない。とにかく横になって休むんだ！」

「だから、横にならなくても大丈夫だっ！？」

無理矢理書類に向かおうとする手をガルムは取って、顔をこちらに向かせる。

ものすごい形相でガルムを睨むが、深い目の色を見続けていると次第に睨むのをやめ、深くいすに座り直した。

「・・・少し休んだ方がいいかしら？」

「そつだ。これはみんな思っていることだ。お前はがんばりすぎた。地に落ちた名声を必死に取り戻そうと、他の諸侯への牽制も、内部の糾弾も、全部華琳一人でやってきたじゃないか。明らかに無理しすぎだ。桂花が華琳を許昌に据えるように策をうったのも、少しでも休ませるのが目的なんだ。少しは部下の意見も聞いてやれ。」

「そこまで私のことを考えてくれるなんて・・・後で何か褒美でもあげないとね。」

白茶を一口すすり、寝台の方に向かう。

「書類は俺が見ておいてやる。本当に重要なやつだけを華琳に任せるところから、それでいいだろ？」

「ええ、それでお願い・・・ねえ、ガルム？」

「なんだ？」

華琳の代わりに椅子に座り、手早く書類に判を押していく。

中には目も当てられないほどの愚案が紛れ込んでいたがきっちり分別して判を押していく。

「乗り切れるかしら、この困難？」

「どうした？いつになく弱気だな？」

「私は今まで自分がやっていることはすべて正しいと思ってこの乱世を歩んできたわ。だけど、今回のことは相当凹んだわ・・・まさに覇道を踏み外した。庶人がこういうことを言ってもおかしくないわ。」

人は言うだけでは誰もついてこない。言うことはすべてやり遂げなければこちらの言い分を信じてはくれない。

だが、華琳は有言実行、言ったことはすべてやり遂げ、庶民に自分の凄さを示してきた。だからこそ、ここまで大きな勢力を得ることができ、多くの民から羨望の目で見られたのだ。

だからこそ、曹操は破格の英雄、乱世の奸雄と呼ばれる。

その英雄が今危機に立たされている。本当の意味で世間に問われているのだ。英雄たる資格はあるのか、と。

「乗り切れる。ここまでうまくやってきたんだ。今回も簡単に乗り

越えるさ。上のお前がすっかりしていないと、みんな不安がるぞ、特に春蘭辺りがな？」

「そう・・・そうよね。」

「疲れているからそんな弱気なことを考えるんだ。今はすっかり休め。」

「そう・・・ね。」

ようやく目を閉じて、穏やかな寝息を立て始める。

それを聞いてようやく安心したのか、一層気合いを入れて書類を片付け始めた。

（・・・華琳、今は休め。何があっても俺が守り通してやるから・・・）

実際に自分の魔法と錬金術、各種機密兵装を使えばどうってことはない。

そして、これは自分の積年の悲願に向かって必要なピースでもあるのだ。

そろそろ仕込んであったものを動かし始める時が迫ってきたか・・・

「・・・セツナ・フォーリング、せいぜいあと短い命を堪能するがいい。」

すでに呉内にいる使い魔によって、セツナの生存を確認してある。

毒で殺せなかったのは残念だったが、それくらい予定範囲内だ。

失敗したなら、自らの手で殺めようじゃないか。

クククツと喉の底から笑いを漏らし、凶悪な笑みを浮かべながら書類を片付けていくガルスであった・・・

そして、もう一つの勢力。劉備一行は天命の地、益州にやってきた。

この道中、劉璋配下の黄忠、嚴顔、魏延が立ちはだかってきたが劉備の情と徳に惹かれるものを感じたのかすぐに投降してくれた。

戦闘らしきものはなく、ここまで無血でやってきたのだ。これはこれで相当すごい。

「うわー、綺麗〜!!」

「この戦乱の中、これだけ平和で光り輝いている土地があるなんて

・・・

「ここは古来高祖劉邦が後の項羽との決戦に備えて力を蓄えた土地でもあります。私たちもここで飛躍の時を待ち、力を蓄えましょう

!」

諸葛亮がない胸を張って、劉備に進言する。

しかし、桃香の不安そうな顔は晴れることはない。

「でも……ここを治める劉璋さんに会わないといけないよね？」

実際に今益州は劉璋が統治している。ここでよそ者の劉備たちが来ても門前払いもいいところだ。

「大丈夫さ、桃香。あたしが直々に交渉してきてやるから！！」

赤い髪に頬にバラの刺青、きわどい服装で馬に乗っているエリナが一步前に出る。

「……そうですね。エリナさんの交渉力なら劉璋さんも納得してくれる交渉をしてくれるでしょう。お願いします。」

「あーいよ！あたしは先行ってるから桃香たちはゆっくり来な！！」

馬に蹴りを入れて、一気に加速していく。

瞬く間に消えていったエリナの後塵をみんなが心配そうに見つめる。

「大丈夫なのかな、エリナお姉ちゃん？」

「エリナのしたたかさなら大丈夫であろう。案外この交渉もあっけなく終わっていたりしてない？」

「確かにエリナは口先がうまいからな。」

心配する張飛を趙雲と馬超がからからと笑って張飛を諭す。

さらに付け加えるのであれば、エリナは現代の女性にしてはなかなか腕が立つ。

馬岱と張り合わせてみても互角以上の戦いを見せるので、何ら心配はない。

「それもそうだな。我らはエリナの言うとおりゆっくり進むとするか。」

関羽が促して、みんな言葉通りゆっくり進み始めた。

道中民たちに笑顔を振りまきながら、握手を交わしていく。

劉備の名声は董卓の乱以降着実に積み重ねてきた。

最近になって呂布を従えたことからその名声はさらに堅固なものとなり、確実に民の耳に届いている。

曹操や雪蓮が警戒したものの、恐らくこの天佑があとになって強大な敵になりうるであろうと知っていたからであろう。

加えて有能の将の多さ。関羽、張飛、趙雲、馬超を筆頭に、現時点で黄忠、嚴顔、魏延、馬岱。軍師に伏竜・鳳雛こと諸葛亮と鳳統がいる。

そして今では古代中国で膨大な情報網を構築した千里眼と飛耳長目の天の御使い、エリナ・イルフィムも劉備一行に欠かせない存在となっている。

この優秀な将を束ねる桃香のカリスマ性はまさに計り知れないところがある。

民の信頼を勝ち取りながら進軍すること二時間、ようやく劉璋のいる成都にたどり着いた。

「さて・・・成都に着いたが？」

「エリナさん・・・大丈夫でしょうか？」

「・・・あつ、みんな、あれ見て！！城壁の上！！！」

劉備が指さした方向をみんなが見てみると・・・

すでに劉の牙門旗は降ろされており、代わりに劉備たちのことを表す深緑の劉旗が掲げられていた。

「おお、い、みんな！交渉は成功だ！これから益州はあたしたちのものだよ！！！」

城門が開かれ、エリナが馬に乗ってみんなのところに叫びながら駆けつけてきた。

「すごいわね、エリナさん。いったいどうやって劉璋様を納得させたのですか？」

「なんか、いろいろ条件出していったら喜んで隠居するとか言っ譲ってくれたぞ？」

「いろいろの条件とは？」

「聞きたいかい？」

にやりと不敵に笑って、趙雲に問いかける姿はどこか冷徹に見えるものの艶やかな姿だ。

「・・・いや、いい。私ではとうてい理解できなさそうな条件を突きつけたのだろう。」

「それが賢い選択さ。」

肩をすくめて、説明を断る趙雲。このエリナという人物は見方をも騙すしたたかさを持っている。

今回も条件の中に普通ではわからない落とし穴でも仕掛けてあるのであろう。

「では、私たちも入城しましょう！すぐに内政に取りかかって、この乱世に打ち勝つ強国にいち早く仕上げましょう！」

みんな新天地で意気揚々と城に入っていく。そんな中最後尾にいるエリナは一人物思いにふける。

（みんながあたしを信頼して、よくしてくれる・・・元の世界ではなかったことだね）

諜報部員として生きてきた元の世界ではその性質上誰も信じられなかった。

情報を得るために自らの体さえ使う・・・そんな凄惨な日々が続い

ていた。

16歳になった時、セツナの父、ガルス・フォーリングに親の不正な横領がばれ、栄華な生活から一転してどん底に陥った。

生きるために人を殺し、味方を騙し、男と寝たり・・・外見も恥もかなぐり捨てて生きてきた。

そしてようやくセツナの目の前で、ついに仇のガルスを殺すことができた。しかし激高したセツナに今度はこちらを殺されかけた。

何とか生き残ったものの、この体は傷だらけになり闇でも疎まれる存在となった。

それでも生き続けてガルムと会い、匿ってくれることを条件に研究を手伝うことになって、今度は古代中国と来た。

自分は闇から闇に生きてきた女・・・いわば汚れた存在。

それなのに、こんな自分をよくしてくれる。くすぐったさを感じるが、居心地は悪くない。

（所詮セツナを殺す駒かと思っていたが・・・セツナを殺したら足を洗って、みんなでおもしろおかしく生きていくのもいいね・・・）

そんなことを考えながら、入城していった。

ここからは少し時を進めてみよう・・・

このあと曹操は予想されたとおり袁紹とぶつかり、兵力の足りない曹操は官渡に砦を築いて迎撃するしか方法がなかった。

孫策はこれを高みの見物を決め込め、国内の内政を充実。二王制はうまく機能し孫権は経験を積むことになった。

劉備たちも内政を充実。そして南蛮遠征を行い、南蛮王・孟獲を配下に入れることに成功した。

曹操と袁紹がぶつかって約一ヶ月半、曹操が袁紹陣営の伸びきった兵站を徹底的に突き、兵糧を略奪。やけになつて全兵力を投入してきた決死の突撃も各地で遊軍と化した曹操軍に包囲され壊滅し袁紹は命かながら逃亡。実質上袁家は滅びることとなった。

辛勝した曹操は河北四州を西方遠征で実績のある曹洪、曹仁、荀攸に任せる。何とか平定させるものの、治安に課題を残す統治となった。

この頃孫策が地盤固めに周りの諸侯を残らず駆逐。南蛮もある程度平定することができた。

劉備たちも関中まで平定完了。いつでも長安を狙えるようになり、曹操は二面作戦を強いられることとなった。

ここでついに三国が立ち揃った。北でもっとも大きな勢力を誇るが戦禍の傷が深い魏。南で勢いに乗り強大になりつつある呉。西で小さいながらも着実に勢力を伸ばしている蜀。

- そして・・・三國による戦国時代が幕を開けるのであった・・・

第六話 咆吼！天翔る狼、大陸駆ける虎！【後編】（後書き）

ふう・・・大学の休みで何とか書き上げました。

これで第一部三国県立までのストーリーが終わりました。

ここで4、5話くらい閑話を入れて、オリジナルの第二部天下太平に移りたいと思います。

一部では全く顔を出さなかった他の御使い達がついに動き出します。そこまで気力が持つように踏ん張りながら書いていきます。それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2707i/>

真・恋姫†無双 ~乙女繚乱 三国志演義~ 呉書 虎狼天下覇道の巻

2010年12月6日13時40分発行